
ハーレムな隣人

瀬戸 孝輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーレムな隣人

【Nコード】

N5658B

【作者名】

瀬戸 孝輝

【あらすじ】

私には親友が居る。友情が普遍だとか絆は誰にも切れない等と声高に主張する事は無いが、それでも私はこの男とこれからも友情を交わしていきたいと思っている。だがしかし、友情を以ってしても、この男を許せない事もあって……

プロローグ

正直、親友と呼ぶには色々と己の感情が許せなくなる友人が居る。そいつと友人となったのは中学入学時であるので、かれこれ五年間強青春時代を共にしている事になる。確かに、自他共に認める程、私達は仲が良いと思う。だがしかし、男として私は奴が許せない。そう。

奴こと、稲川悟史は我が高校のアイドル達を一手に抱える、『稲川ハーレム』の主なのである。

「なあ、りゆう。放課後、買い物に付き合ってくれないか？」

昼食時のハーレムっぷりを目の当たりにし、毎日恒例の事だと理解はしているが、納得は出来ない我が胸の内を知りもしないだろう悟史が私の席へとやって来る。

どうやら今は美少女達から解放されているようで、ハーレム住人の方達は奴の周辺には確認されない。

「……………何が買いたいんだ？」

先程の光景を思い出し、少々目の前のこいつを殴りたくなったが、そこは培ってきた忍耐力で必死に拳を収める。これで、誰々ちゃんのプレゼントを買いに行きたいんだけど、とかぬかした時には

血達磨ちたのめにしてやろうとは思ってはいるが。

「えつとよ、最近ジーンズが破れちまってさ。で、新しいの買おうと思うんだけど、」

ほら、お前ってセンスあるからさ。一緒に見繕みつくろって欲しいんだ」

「分かった。……今日は助っ人稼業もないから付き合える」

本当は「ハーレムの住人に見繕みつくろって貰え」と言いたい所だが、他ならぬ親友の頼みである。

突っ慳貪に突き帰すのも自分のポリシには合わない。

一応、予定が無い事を確認した上で了解の意を示した。

「助かるよ。いやあ、今度愛ちゃんと出かける時に着ていくもんが無くて、焦ってたんだよ

じゃ、また放課後な」

と自分の教室へと帰っていく。

矢張り、血達磨にしておけば良かったか。

教室を出て行った親友の背中を見ながら、思わず溜息を吐く。

その後、クラスメートが口々に「友人の鑑だな」とか「良く出来た人間だよ」とか「師匠！」

とか「良く耐えた！感動した！」とか言いながら、私の肩を叩いていく。

皆も殴りたいのを我慢していたらしい。

うむ、殴っておくべきだったか。

何事もなく授業は終了し、珍しい事にハーレムの住人にも幸いにし
て思わず、

私は悟史と共に近くの量販店へと出向き、御所望の品を購入した。

そして、その帰り道。

「りゅう。前」

それは何処かで見た風景。

もう何度と無く、この男と一緒に居ると遭遇した状況。

二度とこんな場面には遭いたくないと思っていた厄介な一場面。

どうしてコイツと居ると厄介事に巻き込まれるんだらうと、小一時
間ばかり

悟史を振り回してぶん回して殴り倒してスタンピングの嵐をお見舞
いしたい所を必死で抑えて

このデジャビュとも取れる展開を予測し、最良の方向へと導く。

「悟史。あの娘はお前が確保しろ」

「お前は どうするんだ？ 流石にあの人数は」

「忘れたか？ 私を誰だと思っている。さて、行くぞ」

「ああ！」

可憐な美少女に纏わり付く男共五人。

中心に据えられている彼女が嫌がる素振りを見せなければ素通りす
るべきだが、

生憎彼女は嫌がって周囲に助けを求めている。

それを見過ごせる程、厭世している訳でもなく、腐ってもいない。

私は声を掛ける事すらせず、困んでいる彼らの一人に飛び蹴りをか
ましておく。

「キョウヘイ！ てめえなにしゃがる」

「てめえぶつころすぞ」

知性を感じさせない言葉遣いに使い古された脅し文句。

彼らの関心の矛先が私に向けられた瞬間に、中心の少女を引っ張り救い出す。

どうやら、同じ高校の生徒だったらしい。

まだハーレムに加えられていない美少女が存在したか、と変な事に感心しつつ、

その子を後にいる悟史に預からせる。

「てめえ、勝手に何しやがる」

「何かしゃべろよ、てめえ！」

正直、「てめえ」という単語に聞き飽きていた所。

相手が拳を振り上げてくれて、本当に助かったと思う。

彼らには可哀想だが、ここ最近溜まっていた鬱憤うつぶんを晴らしておくチャンスでもあった。

突き出された拳を掴み、捻り潰す。

痛みに絶叫した男の鳩尾を爪先で突いて黙らせる。

仲間の姿に唾然としている隙に、一人二人と顎を強打しておく。

我に返った残り一人が逃亡しようと思せた後頭部に上段蹴りをかまして終了。

何てことはない。

ものの数十秒で片付いてしまう。

とりあえず、警察のご厄介にはなりたくないのです、後の二人を引き連れて私達はその場を後にした。

そして、逃げ果せて来た商店街近くの公園。
目の前の光景に思わず頭を抱えたくなる。
そう。彼女の目は助けてくれた悟史の顔を凝視している。

「あの、稲川先輩！」

「何かな？ えーと」

「原杏子です！」

「うん、杏子ちゃんね。俺のことは悟史って呼んでくれて構わないよ。で、何かな？」

「何かな？、じゃ無いだろ、と突っ込みたくなる。

「お前は何度もこうい言う方とこういう表情に出会ってるだろ、と突っ込みたくなる。

「絡まれている所を助けてもらって、しかも助けてくれた人は憧れの先輩でしたって

「売れなさそうな小説を地で行く展開がここで綿々と行われている。

「助けて下さって有難う御座いました！ そちらに居る先輩も有難う御座いました」

「礼なら助けようと最初に言った悟史にしてくれ」

「はい！ 悟史先輩有難う御座いました！」

「うん。でも無事で良かったよ」

ゲームや小説なら途中で飛ばしても誰も文句を言わないだろうが、生憎目の前の遣り取りは現実であり、展開を飛ばす事も出来ない。私はその後も行われる、背筋が痒くなる様な二人の遣り取りを適当に聞き流しつつ、

明日からのこの二人の関係を思い描くのであった。

そして翌日以降の話。

漏れなく、彼女もハーレムの住人となる。

これで、ハーレム住人は悟史を除き、七人となった。

こうして『稲川ハーレム』は今日も美少女人口と男達の嫉妬を増やしていくのである。

神が居るならば、一つお願いがある。

この親友を心行くまで殴り倒してもいいでしょうか、と。

Phase 1： 災厄は未だ来ず

春休みは地獄であった。

特に春休み中に吸血鬼に襲われ吸血鬼になってしまったという

地獄の様に恥ずかしい幻想の類に悩まされた訳ではなく、

只単に春休み中毎日の様に巻き込まれたハーレム連中とのイベントが地獄然としていただけだが。

正直な所、ハーレムの主である稲川悟史が私を誘ってくれるのは有難いが、

ハーレム連中とは関係の無いイベントに誘って欲しかったのが本音だ。

事ある毎に悟史に引っ付きもつつきするのは近くで見ている気分の良いものではない。

まあ、その対策として、毎回馴染みの奴にも同行してもらってはいるのだが。

その煉獄れんごくさながらな春休みも終了し、今日から新学期と相成る。

高校最後の学年とあって、色々と忙しくなる事は目に見えている。

それ故に今年一年一日一日を十全に充実して過ごさねばならない。

等と適度にテンションを上げつつ、高校へと出発する。

願わくば、ハーレム男とは去年同様、違うクラスにならん事を。

少しでもハーレムの余波が来ない、そんな立ち位置を我に与え給え。

「神は死んだ」

「元氣出して、りゅう君」

「ふふふふ。これはあれか。神は死に絶え、代わりに箱に残った絶望が我が身に降りかかり

人であるこの精神と肉体では耐えられるはずも無いが、だがしかしその窮地にこそ

我々は超人となりえる又とない機会であり、これにより我らは更なる高みへと」

「おーい、戻って来ーい」

壊れたテレビ対策の斜めチョップを頭部に喰らう事で現世に復帰した。

どうやらあまりの衝撃に脳が現実を拒否していたらしい。

まだまだ精神修行が足りないらしい。喝。

「礼を言う、朝霧」

「イエイエ、どう致しまして」

チョップの格好のまま、律儀に応答する少女。

黒髪ボブカットで、中肉中背をスレンド側に軌道修正した彼女。

悟史同様、中学時代からの馴染みであるこの女子、名を朝霧映子という。

春休みの地獄絵図な戦場を共に駆け抜けた勇士フライザでもある。

「まあ、りゅう君がそうなるのも無理は無いとは思っけどさあ。

ボクと一緒に居るんだから、何とか乗り切れると思うよ?」

「む。その言い方から察するに、もしかして朝霧も同じクラスか」

「もしかしなくてもそうだよ！」

折角、クラス分けのプリント配られてるんだから自分と悟史君の名前だけ確認するんじゃないかと

せめてボクの名前確認するくらいしても罰は当たらないと思うよ
！」

びしっと人差し指を私に向けて主張する朝霧。

誰にでも公平に、それこそあの悟史に対しても、びしりと主張する朝霧は

男女問わず人気が高く、こういう彼女だからこそ私も安心して戦場に連れて行けるのである。

とは言え、彼女をハーレムの戦場に連行するのには、他にも重要な理由があるのだが。

「……確かに。朝霧と、それに後藤の名前も列挙されているな」

「本当だあ」

「馴染みの名前ぐらい確認しろと言った奴の台詞とは思えんな」

「あはは。まあそれはそれ、あれはあれ、だよ。

それに『馴染みの名前を確認しろ』とはボクは言っていないよ。あくまでも『ボクの』を確認しろって言ったんだ」

どうだ、参ったか、と得意げにのたまった朝霧は得意げに胸を張るが、

その胸はあまり胸を張れるものではないよな、と方向性が違う事を考えていた。

スレンダという言葉は何とも都合の良い褒め言葉である。

「何その目。侮辱されてるような気がする」

「滅相も無い。さて今年一年世話になる教室へと参ろうか」

女性は時に鋭すぎる。

3年1組の教室。

噂によれば、この教室には昔自殺しようとしてカッタで腕の動脈を切断しようとしたものの、

刃が反対になっていている事に気付かず敢え無く失敗し、次に首吊りを決行したがロープが長すぎて

失敗したという女子生徒の無念さが集合体になって今も浮遊しているという。

人生は思い通りに行かないという典型的な一例だ。

しかし、その女子生徒。その後の話を知らないのだが、今も元気にドジをしているのだろうか。

そんな詮無い事に思いを馳せていると、肉食の小型動物のような仕草でこちらにやってくる人影発見。

「師匠！お早う御座います。今朝も映子と夫婦同伴でもう何だか俺としましてはこいつら早く籍でも入れてしまつてとつと子供の一人や二人作つてしまつてその内の一人の名前を俺に付けさせてくれたらなあなんて妄想してしまいましたてそうそう名前はケインなんてどうです？」

「欧米か！」

「……朝霧。突っ込む所はそこではない」

「そうそう。映子は突っ込まれるほ痛い痛い痛い痛い痛い
あああ」

下ネタを公然と撒き散らす猥褻物陳列罪な男をとりあえず潰わいせつしてお
く。

純正な男子校ならいざ知らず、共学のしかも新学期初日の朝一番に
こついう事をする奴は後にも先にもこいつただけだろうと思う。
名を後藤昭一郎。

やはりこいつも中学時代からの馴染みであり、何時からか私の事を
師匠と呼ぶ様になった阿呆だ。

私と朝霧がペアでいる時に何かと夫婦にしたがる彼ではあるが、
私が思うにこれは多分嫉妬の類ではないかと思う。

小学生が好きな子に悪戯する事でしかアピール出来ない様に、こい
つはこいつで色々と

葛藤した上での態度なんだろう。もっとストレートに感情を表現し
てもらいたい所である。

「後藤。まだ悟史は来てないな？」

「え？ ああ。まだっすよ。どうせ今日もハーレミングで忙しいで
しょうに」

ハーレミングとは何ぞや。

何処と無く憎憎しげに返答する後藤だったが、私達に挨拶するとい
うミッションを完遂した所で

次なるミッションへと教室を飛び出していった。

高校三年になっても俄然保ち続けているあのバイタリティを少し分
けて欲しい。

未だ、災厄は登場していないのにどうしてこつちも疲労しているのだ
ろうか。
朝霧と下らない話をしながら、私は災厄の到着に際して準備を整え
ていた。

Phase 1： 災厄は未だ来ず（後書き）

可能ならば感想を下さいます。

また、何か不備が御座いましたらご一報を。

Phase 2： 災厄掠る

高校最後の学年初日の集合時間まであと十分。

次々と生徒が教室に飛び込み、束の間の休日を挟んだ再会を楽しんだり、

これから一年間同じ教室で時を過ごす喜びを分かち合ったり、はたまたクラス替えや

進級程度の些細な環境の変化には反応しない通常運行であったりと反応は様々だ。

かく言う私は登校時に合流した朝霧映子と身の無い会話をして時を過ごしている訳だが、

実の所二人共がこの会話に意味を持たしていない事は承知の上である。

時に雄弁は己の恐怖に対する対処療法であり、

正に今の我らの雄弁さはレーダに映らぬ不可視のガンダムデスサイズズの攻撃を恐れる戦艦の乗組員が如しである。

雄弁さが益々以って勢いを増そうかという時、不意に廊下が騒がしくなる。

「ねえ、りゅう君。何やら廊下が騒がしくなっている様に聞こえるのですが」

「……信じたくは無いが、徐々に徐々にその騒音の集合が接近している様に感じられる。」

天に召します我らが神よ。願わくば

「神に祈りたくなるのも分かるけど、さっき『神は死んだ』って言ったばかりだし。結構不謹慎？」

「あくまでもさっきの発言は形而下での話であって、形而上学的には神は存在しない等とは言っていない。否、存在を確認出来ないという意味であるといった方がより正確を記しているかもしれず、神の教えがもたらせられる事と神の存在が分かる事とは一種の不確定性原理の構造を模しており」

「戻ってこーい！」

「……礼を言っ」

「イエイエ」

つい半刻前にも繰り返された遣り取りを再び行わなければならない程、私の精神は切迫しているらしい。

まだ本体が到着していないのに、どうして余波だけで衰弱しなければならぬのか。

溜息一つ吐いて、教室のドアを見遣れば、ちょっとした集団が教室に入ろうとしている。

「朝霧。私の目は節穴だろうか。ハーレムの住人の内、同学年であろう三人もこの教室に入り込もうとしているのだが」

「りゅう大佐、報告させて頂きます！ どうやら我々が掴んだ情報に寄りますと、あの三人も

私達のクラスの一員だと言う事です！」

「No kidding!」

「欧米か！」

考え得る限り最悪な事態に慌てふためく私達。

既にどちらがツッコミで、どちらがボケなのかすら分からないカオスな状況。

何処と無く、我らを見る周囲の目が好意的で同情の色を帯びているのは、

この緊急事態を三年生全員が把握しているからであろう。

そんな事を露とも知らないハーレム四人組が私達の前へとやってくる。

それに伴い、周囲の視線も同情、嫉妬、羨望とカオス染みて来る。

「おいつす、りゅう。朝から騒がしいな」

「……無知は劣悪にして幸いなる哉」

「なんだ？ ま、いいや。一年間宜しくな」

「何時も何時も、クラスが違えど宜しくしていたと思うんだが」

「そうだけどさ。ここ何年か、クラス一緒になった事無かったじゃんか。

俺としては久し振りで嬉しい訳さ。態々お前に頼みに他のクラスへ呐喊するって事もないし」

にぱつと笑顔で返す悟史。

恐らくはこういう態度が美少女を引き付けて止まないのだろう。

そんな奴の顔を見せられてまで反論する気も無く、そうだな、と同意の意を示し、序でとばかりに後に控えし美人トリオに挨拶しておく。

それぞれが各々の雰囲気にあつた挨拶を返して、悟史と共に席へと移って行く。

ちなみに、始業式という事で、生徒は自由に席に座っており、私の周囲は既に埋まっていたのである。

もしも席が埋まっていなかったとしたら、至近距離であるイチヤイチャ振りを披露されていただろう。自分の周囲の席が埋まっていた本分に助かった。現に、あのハーレム空間に魂を食い千切られた者がものの数分で発生している。怖ろしや、ハーレム空間（forbidden zone）。

異空間が拡大し、犠牲者が増えていくのを観察していると、己の携帯電話が振動している事に気付く。

「鳴ってるよ？」

「承知。……緊急の用事か？」

ディスプレイに表示されている名前はこの時間に掛かって来るには聊か珍しく、

緊急事態なのかと思っていたのだが、返って来た声色からはそのような緊迫感はまだ感じられず、

逆にその相手の言葉にこちらが驚かされる事になる。

「えーと、誰だったのかな？」

「兄貴。大した事無い話だったが」

「それにしては何だか吃驚した顔だったけど」

「教師が来たぞ。席に座れ」

「あー今誤魔化したでしょ！　つてあれ、あの先生誰？」

この学校の教師としては、見慣れない男が入ってくる。

これは予感にしか過ぎないが、始業式開始までにこれだけ色々な事があると、

今年一年波乱万丈な生活が待っているのではないかと勘繰ってしま
う。

私としては平穏な生活を望んでいるのだが。

「席に座れー。まず先生の自己紹介をしたい所だが、始業式が先だ。各自、体育館に行ってくれ。以上だ。早くしろよ」

Phase 2 : 災厄掠る（後書き）

可能ならば、感想下さい。

また、ハーレム住人のご希望があれば、もしかしたら希望に沿う住人が出てくるかもしれません。

感想共々宜しくお願い致します。ではでは

Phase 3 : 災厄の残り火

体育館に所狭しと並んだ生徒達を前に朗々と語る校長。

古今東西に存在する校長を押し込めた集合の平均値とは言わないまでも、

『校長』という言葉で連想される校長像はカツラと長口上ながくちじょうじではないか。

御多分に洩れず、我が高校の校長も長口上ではあるものの、

その頭を飾るのはカツラ等ではなく、寧ろ校長像を逸脱したアフロである。

あのアフロを如何にして維持し続けているのか、そういう話であれば、生徒も喜んで聞き入ると思う。

とは言え、アフロの維持等、始業式に相応しい内容だと到底受け入れられないのであって、

ステレオタイプな演説を延々と強制的に聞かされているのである。

「青春が」とか、「勉学は」とか、「君達は」とか、「元気ですか」とか時間が経つにつれ、

校長の弁は立ち、誰も止められなくなっている状態が既に十五分程真面目に聞いている者等、少数の人間しか居ないであろうと周りを見渡すと、何故か目にハンカチを当てて聞き入っている馬鹿発見。後藤だ。

「感動するような話か？」

「ゴメンよう、今迄こんな無駄に青春送っててごめんよう、母さん」

どうやら自省の念がうず高く彼を取り巻き、耐え切れずに涙を流しているみたいだ。

自分の世界に閉じ籠って、只管ひたすらに悔い改めているのか。

さらに広範囲に目を向けると、同じ様にハンカチを手に目尻を拭いているのがちらほらと。

彼らの共通点が今一掴めないが、しかし何処かしら同じ匂いがしそうな雰囲気醸し出している。

それと気になるのは、どうして皆黄色いハンカチを手に行っているのか。

ハンカチは必須なのか？　そしてその色に意味はあるのか？

「多分、あれ映画部の連中だよなぁ？」

私の観察対象が分かったのだろう、後ろから朝霧がすすつと近寄ってきて話しかけてくる。

確かに、後藤は映画部と剣道部の掛け持ちだったが、あの黄色いハンカチを持参している連中全員が映画部だとは。あれは何かの合図なのか、それとも校長からのサクラの依頼か。

「多分さ、『幸せの黄色いハンカチ』だから黄色なんだと思うよ？

それと、ハンカチ持参するのは、ほら、最近『ハンカチ王子』って呼ばれてる選手がいたでしょ？

ああ、それと悟史君がハンカチで落とした子もいるしさ。それにあやか肖ろつと」

「成程。確かに去年陥落した子がいたな」

思い出したくも無いが、思い出してしまう自分の記憶が恨めしい。去年の秋口、悟史と偶々屋上に上がるうかと階段を昇っている時にふらふらと下りて来る生徒が居た。後から聞いた話では、彼女は偶々貧血状態に陥っていたらしく、足元が覚束無かった。当然、そんな状態ではまともに歩行するのは難しい。予想通り、彼女は足を纏もっれさせて階段を転がり落ちてしまうが、途中で悟史がクッションに

なり　と言つても、受け止めたのは私で、悟史はクッションになつたお陰で代わりに転がり落ちていったが　事無きを得た。段の角にでも当たつたのか、悟史も彼女も掠り傷を作っていたが、悟史は自分の事等気にせず　自分の傷に気が付いてなかっただけなのだが　彼女の傷に自分のハンカチを当てていた。自分の事よりも他人を気遣う悟史の行動に感銘を受けた彼女は、間もなくハーレム住人となつたという訳である。

彼女は何処かドジな所があつた、可愛らしい女性であつたが、一年上の上級生であり、今はもうこの高校には居ない。近くの国立大学に通っている筈である。

「童貞一つ守れない男に何が守れると言うのか！」

「校長！！！！」

校長の話は何処までも脱線しているようだった。

結局、校長は体育担当教師に羽交い絞めにされながら退場する事となつた。

最後の「第二、第三の校長が！」という台詞は校長の執念を表す良い言葉だつたと思う。

とは言え、本当に第二、第三の校長が投入されると、阿鼻叫喚のジエノサイドが展開されるだろう。

そつなる前に校長には繭の様に眠りについてもらうか、大人しくして貰いたい。

序でに、映画部の連中は連行される校長を号泣しながら見送つていた。

誰も校長を解放しようとしなない辺り、胡散臭さを感じる。

その後、始業式は新任教師の紹介へと移り、何事も無く終了した。始業式での紹介によると、我らの担任はアイザワユウイチという名前で、担当教科は物理らしい。

この教師の名前が呼ばれた時、男子生徒の何割かが反応したのだが、果てさて何なのだろうか。

教室に帰る道中、涙で目を腫らした後藤に尋ねると

「元祖ハーレム男の名前ですよ、師匠。まあ、只単に名前が一緒なだけですけど」

との回答があつた。一高校の男子高校生何割かを反応させる程の元祖ハーレム男。

それだけ全国に名前が散らばっているとすれば、気軽に恋愛をすることもままなら無いだろう。そのアイザワユウイチとやらに哀悼の意を示しておく。

さて、我らがハーレム男はというと、始業式中は空間を操作する事無く、犠牲者を増やす事は無かったが、教室帰還中にハーレム住人を勢揃いさせてしまい、帰還中の生徒群に多大なる犠牲を与えたらしい。私と後藤、そして朝霧はこうなる事を予測して、早々に教室に戻ってきていた。賢明である。

「今日この後さ、どっか行かないか」

と後藤。目の腫れは大分治まってきている。

「そうしたいが、後藤。明日の新入生用部活説明会の準備は出来ているのか？」

新入生の部活勧誘は明後日から本格的に始まる。

明日はその下準備として、まず新入生全員に部活・同好会を一通り紹介しようという試みである。それぞれの部活が思い思いの方法で部活紹介を行い、中には大掛かりな仕掛けを持ち込む部活もある。後藤は映画部と剣道部の部長を兼任している為、準備に忙殺されていると思っただが。

「それならもう大丈夫。無事完了してるっす」

と力強いコメント。寧ろ、と私の方を見て言葉を続ける。

「師匠の方こそ、準備してるんですか？ 人材派遣部」

「否。そもそも私は部の運営には関わってない。それにあの部は無くなった」

「え？」

「あれ。昭君知らないの？ 人材派遣部って今年度から人材派遣委員会になったんだよ？」

「ええええええええ」

「生徒会直属の委員会へ昇格。私も生徒会の委員という事になってしまった」

「師匠、まじっすか……」

そもそも『人材派遣部』の発足経緯からしても如何わしい部活ではある。

私がこの部活と関わりを持ってしまったのは、矢張りあのハーレム

太郎が原因である。

高校一年次に生徒会長に見初められたハーレム太郎が所属していた部があった。その部、サッカー部は弱小で、一人でも怪我をすると試合が出来ないという台所事情を抱えていた。その頃の私はと言うと、色々な部活に顔を出しては辞めるという行為を頻繁に行っていた為、どうやら生徒会に目を付けられていたらしかった。

そして、春の公式戦とやらが開催され、その公式戦途中で右サイドの選手が故障。もう試合続行不可能かと監督も、観客席で傍観していた私もそう思っていた時。私は生徒会長に直々に呼び出され、こう脅された。

『貴方が様々な部活で行ってきた事はあまり褒められた事ではありませんわね。』

部活の最優秀な選手と試合をして打ち負かせて行くなんて何処の道場破り被れかしら？

しかも、打ち負かせたら、はい、サヨウナラ。宝の持ち腐れですわね。

くすくす。それにね、私としては公にしたいくは無いのだけでも、貴方、陰でこそそそ仕返しに来た連中を捻り潰してますわよねえ？
ねえ？

……さあ、私に協力して下さいますう？』

高慢ちきな御嬢様生徒会長を捻り潰してやりたかったけども、

ここで下手に立ち回って、兄に迷惑を掛けるわけには行かないと、

私は生徒会長に協力した。

そして、何故か手渡されるサッカー部のユニフォーム。

にこやかに微笑んで

『ではこれから、貴方は人材派遣部の名誉部員とします。』

今日の部活動は、このサッカー部の助っ人。見事、悟史を助けた

のなら、今迄の行為はチャラにしてあげますわ』

私は人材派遣部の部員とされてしまった。結局の所、悟史を助けた
いが為に、生徒会長が権限をフルに使って、人材派遣部なるモノを
でっち上げた部。悟史のハーレム力にひきづられた者が権力を持つ
と碌な事にならない事をこの時学んだものだ。

余談だが、その年の春の公式戦は驚異の勝ち上がりを見せた。悟史
はこの地区での得点王として、その名を轟かせた。

発足の理由がそんな一人の人間の我侷だったものの、このシステム
を後の生徒会長までもが気に入り、さらに今年度はこれを委員会に
してしまっている。これでいいのか、この高校。

「そうつすかあ……益々大変になるんじゃないっすか、師匠」

「そつでもない。後輩も力を付けているからな、最近私が助太刀
する事も少なくなった」

「へえ。じゃ、今日は遊びに行きますか。映子はどうする？」

「ボクも部活無いし、準備も無いから付き合っよ」

「じゃあ、俺らも一緒に行くわ！」

我ら三人に戦慄が走る。この声は、紛う事無きハーレム太郎の！
振り向けば、にぱつと悟史が笑顔を向けて、満面の笑みを向けて立
ち塞がっている。

しかも、こちらの言い分を聞かずに、また後で、と言って席へと戻
っていった。

また、知らない内に犠牲者が増えていたりするが、それを気にする

余裕すら我々には無い。

その後の担任の自己紹介やら、注意事項やらは我々の頭を素通りしていった。

気が付けば放課後で

気が付けばファミレスで、食べさせ合いを間近で強制的に鑑賞させられたり、

気が付けばカラオケで、ベタベタなデュエットを強制的に聞かされたり、

気が付けば我々三人は振り回されていた。

そして、ハーレム空間から解放された我々は各々の床に付くなり、気を失うのである。

高校三年の初日はこうして幕を閉じるのであった。

Phase 4 : 災厄はいたる所に

精神修行と一口に言っても、その修行方法は多岐に渡り、修験道を例に取れば、不眠不動や断食、木食がそれにあたる。

とは言え、修験道の場合は、苦行であればあるほど、験徳は積み重ね、分け入った峰々から靈力を己に蓄える事が出来るとされている為、時に己の命をも投げ打つ、

所謂『即身成仏』 捨身や土中入定 等、行過ぎる感はある。

しかし、そう言った過剰な面はあるものの、精神修行は確かに必要なのではないかと思う。

修験道の様に山岳仏教を信仰すべきだと言う訳ではなく、只そういう経験がもしかしたら行過ぎた本能的欲求を抑える際に有用かも知れない、絶望に立たされた瀬戸際にあっても揺ぎ無い己を保持し続けられるかも知れない、と思っっているのだ。

そして、いざ修行するにはそれなりの覚悟が必要だ。

修行は得てして苦行であり、日常の心構えでは肉体的にも精神的にも損傷を負う危険がある。危険が『ある』という事を心構えとして、前以て持っているのと持っていないのでは、危険の度合いが雲泥の差であることは言うまでもない。

では、かく言う私は心構えが出来ているのかと問われれば、多少惑いながらも『応』と言える。それは私が育った環境上、あるいはそもそもその性格上、そういう機能を有しているからであって、一般的ではないだろうが。

従って、私は何時でも精神修行の荒行に備えられている訳で

「そう。これは精神修行の一環なんだ」

「何か言ったか、りゆう？ あ、うん、有難う、由宇ちゃん……あ、あーん」

「ooooooooo」

目の前で繰り広げられる、糖度メータが振り切れて一周してくる程度の甘な馬鹿恋人未満同士の所業と、私の横に座る美少女から発せられる、赤子が見れば発作を起こしてしまいそうな嫉妬高純度な瘴気の板挟みに耐えているのである。並の人間では失禁するのは確実ではなからうか。

対角線上に居る娘が、私の横に居る娘を横目で見ながら、悟史といちゃついでいて、どう見ても机という障害に手を拱こまねいている娘を挑発しているこの状況。そろそろ隣の娘が爆発しそうだなど、傍観者視点な自分が漠然と思っていると、案の定机を飛び越えてバカッブル行為を阻止しにかかった。

ぎゃあぎゃあと姦しい美少女のキャットファイトとそれを何とかして宥めようとしている悟史を傍観しつつ、何故こんな事態に私が巻き込まれなければならないのかと真剣に悩む私であった。

事の次第は悟史の『お願い』であり、我が高校の行事にあった。

始業式から既に一週間が経ったその日、修学旅行の詳細な説明がHRの時間を使って行われた。

我が高校の修学旅行は5月の頭に行われる。三年生はこの修学旅行中間試験、そして六月に行われる体育祭を終えて、本格的に受験モードへと移行する。修羅場に向う前に発破をかけようとの学校側の配慮だろう。

行き先は海外旅行も視野に入れられていたが、今回は北海道に決められたそうだ。生徒達は圧倒的に海外、しかもハワイを推していた筈だが、北海道に決められたと言う事は裏で何らかの意図が働いたのか、と勘繰るのはあまりにも懐疑的だろうか。私としては、北海

道の方が自分の趣味に合っているので嬉しい。

そして、修学旅行と言えば、班行動を行うのはお約束である。お約束は外されないからこそ、お約束であるので、我がクラスも班決めをしていたのだが、ここで問題が発生する。そう、男子の大部分が三年アイドルトリオの誰かと組みたい、この機会に仲良くなりたいたいと獣染みた欲求を迸らせていたのだ。私はその騒動に巻き込まれない様に、さつさと後藤と西原さいはらと東 後ろ二人は彼女持ち のアイドルに興味を持たない面子でユニットを組んで、教室の後でのんびりとセブンブリッチに興じていた。

すったもんだの末、結局この騒動に嫌気の差した担任の一喝により、悟史とアイドル三人のグループに仮決めされたが、本決定は後日というのが日が暮れた教室での結論であった。その翌日の事。

本日の授業も全て消化されて、本日の委員会活動も無しとお達しが来た為、私は早々に退却しようと思者さながらの敏捷さで教室を出ようすると、悟史が私の制服を掴んで引き止めた。

「りゅう、話があるんだけど」

「此处で話せる事か？ 部活は？」

「正直に言うともあまり此处では話したくないな。だから、外で話したい。あと、部活の方は、今日はサボり。話の方が優先って事で」

精力的に部活に参加する悟史にしては珍しい。普段、ハーレムの主として認識され、部活人間としてはあまり認識されてはいないのだが、ハーレム体質に目をつむれば、非常に真面目なサッカー青年だったりする。ハーレム太郎だが。

そんな奴が深刻な顔で、しかも部活よりも優先してくる話。私はそれに興味を持った。勿論、素直に親友として心配であるのも事実で

あった。何だかんだで、ハーレム体質を考慮しなければ、かけがいの無い親友と言ってもいいのである。ハーレム野郎だが。

私は承諾し、駅前のジャンクフード店で話し合う事になった。その道中、部活よりも優先した話は話題には出なかった。その代り、私に話が出来るといっているので気が楽になったのだろう、割と機嫌は良かった様であった。

ジャンクフードの店に着くなり、悟史は話を切り出してきた。

「頼む！ 俺の班に来てくれ！」

「……すまん。上手く聞き取れなかったんだが」

「何度でも言う！ 頼む！ 修学旅行の班、一緒になってくれ！」

「断る」

「そこを何とか！ お前が一緒じゃないと拙い、色々拙いと思うんだ」

「何が拙いと言うんだ？ あの娘達は皆お前に好意を持っている。そして、お前も特に拒否する気も無いのだろう？ ならば、それで万々歳ではないか。付け加えるとすれば、あの娘達と一緒に春休みに何度も出掛けていた事の方が拙いと思うが」

「春休みはお前と映子が一緒に居てくれたら！ だから、皆ある程度慎みある行動してたんだと思うんだ！ これでお前も映子も居ないとなると、何が起こるか分かったもんじゃない！」

「起こっても拙い事はなかるう？」

「ある！」

「何故？」

「いや、えーと……」

途端に曖昧になる。

実の所、私は悟史がこういう態度になる理由を、このハーレム太郎がハーレムの住人とある一定以上の仲になるのを恐れている理由を知っている。否、『知っている』というのは正確ではないが、十中八九『こうであるう』と直感的に理解している。だが、敢えてここで言う事も無かるう。苦虫を潰したような顔をしている悟史に私は止めを刺しにかかる。

「悪いが、今回ばかりは却下だ」

「マジかよー」

「偶には自分の力だけで抑えてみたらどうだ？ それともお前はそんなに弱い男だったか」

「ち、違えよ」

悟史を少々焚きつけておく。この男が『弱い男』に反応する事を知つての事。

「ならば、今回は私は傍観に徹する。映子も同様だろう。頑張れよ」

「ああ、分かったよ」

「……では、私はこれ」

「あ、悟史くん！ それに『執事』さんも！」

最悪のタイミングだった。せめて、悟史だけでもここに残して、私は早々に退散しなくてはと腰を浮かすのと同時に、悟史の手が私の腕をがちりとホールドした。その速さと必死さは、スルーパスに反応して飛び出すFWのユニフォームを、必死で掴んで食い止めようとするとDFに匹敵していた。しかも一流のDF。私が驚愕して悟史の顔を見れば、悟史は口を歪めて一言。

「今日は付き合って貰うよ」

二人のキャットファイトを未だに止められない悟史を眺めて思う。

あと一人このキャットファイトに加わるのは必然であり、その時こいつはこうやって慌てふためくだけなんだろうかと。

修学旅行まであと2週間強。北海道では災厄ハレムに巻き込まれない事を今から祈っておこうか。

Phase 4 : 災厄はいたる所に（後書き）

可能ならば感想下さい。
宜しくお願い致します！。

Phase 5 : 閑話休題

悟史のハーレムに巻き込まれ、彼女達が奏でる不協和音を傍で観賞キョットファイトし、クラスの連中の『悟史殺害計画』に少々加担し、委員会の仕事にそこそこ精を出すといった日常生活を淡々と送っていると、修学旅行出発まであと一週間と迫っている事に気が付いた。

今日も今日とて、ハーレムの織成す喧騒と多少刺激のある授業に時間を潰され、既に放課後を迎えていた。人材派遣委員会に割り当てられた部屋で一人ノンビリと過ごしていると、スピーカーから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「人材派遣委員会委員長、即刻生徒会長室に来て下さい。繰り返しません、以上です」

「普通繰り返すだろう、常識的に考えて……」

思わず、突っ込んでしまう。私の溜息がやけに大きく、部屋に響いた。

『生徒会長室』というのは、実際公式な部屋ではない。

本来は『生徒会室』だったものを、あの二代前の高慢ちきな生徒会長の発した鶴の一声で『生徒会長室』へと私的に変更してしまったらしい。今更だが、あの生徒会長を選出した生徒の頭をじっくりとそれこそ穴が開く程に、否寧ろ切り開いて見てみたいものである。あんな女が権力を持ってしまったら、どういう事態が起こるのか程度予測して欲しかった。

それでは、失われた『生徒会室』は何処へ消えたのかというと、実

は職員室内部に設置してある。公的な会議には教師サイドの意見も必要であり、より教師の生の声が聞こえるのは職員室ではないか。従って、会議は職員室、若しくはそれに準ずる場で行われなければならぬ云々。完全に詭弁で、論理に筋が立ってないのだが、当時の教師はこれで納得してしまつたらしい。情けない。

そんな訳で名称こそ『生徒会室』な、実質『生徒会長室』に私は出向いてきたのであるが。正直な所、あまり独りでこの部屋に入りたくない。とは言え、生徒会長に呼び出されているので、断る訳にもいかない。意を決して、溜息をこつそり吐きつつ扉を叩いた。

「人材派遣委員会委員長、入ります」

「……早く入つて。ドアを閉めて。鍵も」

「御意」

ドアを薄く開け、体をそこに滑り込ませ、すぐさま施錠する。もっと堂々と入室してもいいのだが、癖でこつこつという入り方になってしまう。

施錠を確認して、生徒会長の定位置である豪奢な席に目を向ける。そこに座る、組んだ手に顎を乗せている華奢な女子。カラスの濡れ羽然とした艶のある長髪と釣り目がちな顔。我らの高校に君臨する『氷の女』こと、生徒会長様である。

「もっと近くに來なさい。それじゃ話がし辛いわ」

私の立ち位置が気に食わなかつたようで、そう命令してくる。渋々ながら二、三步前に進むが、それでももっと前へと指摘される。結局、生徒会長専用机まであと一步の距離まで移動させられる。

『氷の女』の異名は就任後直に付けられた。一見すれば可愛い小柄の女の子であり、選挙の時も愛想を振り撒いて、選挙参謀が前生徒副会長だった事もあり、高校のマスコットとしての傀儡政権か、とも言われていた。ところがどっこい、会長に当選し、その就任演説で不正を働いていたその前副会長をばつさりと斬り捨て、規律違反の際の罰則の強化を宣言した。さらには、幽霊部員ばかりの部や同好会を『資金の無駄』といって取り潰したり、それに対する批判をぴしやりと撥ね付けたりと強硬姿勢を貫いている。反面、本当に必要だと思われる設備に対しての投資は積極的であるので、生徒にも教師にも受け入れられているのだろう。

その冷徹にして冷静な、可愛らしい出で立ちとのギャップも皮肉つて『氷の女』と呼ばれているのだ。

私の立ち位置に満足した生徒会長様は席を立ち、私の隣へとやってくる。

私もそれ程背が高くは無いが、彼女は私の胸の高さしか身長が無い。小柄な生徒会長様は上目遣いで私を一瞥して。

「会いたかったわ、りゅうちゃん！ 嗚呼、りゅうちゃんの匂い…」

「何がしたいんだ会長殿」

思い切り私に抱き付いて来た。しかも私の体臭を思う存分吸引して、精神が別の世界へと飛び立ってしまったている。弛緩しきった幸福そうな顔が非常に気持ちが悪い。ヒトの体臭を嗅いで、トリップする

ような奴の思考など分かりたくも無い。

「りゅうちゃん、りゅうちゃん、りゅうちゃんりゅうちゃん」

これが『氷の女』と称されている生徒会長様の本性かと思うと、頭を抱えたくもなる。

以前、私が家業の手伝いをしている時に、偶々客として、このアホ女を接客用の丁寧な態度で接したことがあった。私もまさか己と同じ高校で、しかも同学年だとは思わず、どちらかと言うと幼い子をあやす様に接していたのだが、数日後に高校の廊下でばったりと再会してしまい、いたく気に入られ、何かと懐かれてしまった。彼女曰く、私の匂いが昔可愛がって飼っていた大型犬の匂いに似ているらしく、抱き付いて匂いを嗅ぐと幸せに気分になるとか。人目が在る所では決して甘えない癖に、一度人の目ひとまひが無い、二人きりになつてしまうと、途端に甘えてくる。しかし、生徒会長になつてからは委員会の仕事の関係上二人きりになる機会もあったものの、甘える事が無くなっていたので安心していただけのだが……否、それよりも、私は犬の代わりではないと声高に主張するべきか。

「いい加減にしてくれ、四条生徒会長」

「嫌よ。最近我慢してたんだから、少しくらいいいでしょ?」

「却下だ」

「んー幸せー」

「話を聞きなさい」

「却下あ。りゅうちゃんが私の事、ちゃんと『美代』って名前です呼

んでくれなきゃ、話は聞きませんー」

「はあ。最近君はお姉さん達に似てきたと思う。そういう自分勝手の所が特に」

と私が言えば、彼女は抱き付いていた体をばつと離して、こちらを睨んだ。釣り目の部分は多少迫力があるが、顔全体としての迫力は皆無に等しい。生徒会長をこなしている時のオーラが抜けているせいだろうか。

ちなみに彼女の二人の姉、初音と亜実つぐみは前々生徒会長、前生徒会長である。つまり四条家は三代続けて生徒会長職の座に君臨している事になる。流石に美代に妹は居ないので、四代続けてと言う訳にはいかないが。

四条美代は姉二人があまり好きではない。特に長女の初音は家庭においても高慢な性格を控えようとせず、学校に居た時よりもっと態度が尊大らしい。その皺寄せが三女の美代に降りかかっていたと言うのだから、好きにはなれないのだろう。初音に似ていると言うのは、美代にとっては屈辱に近い言葉なのである。

「むう。そんな事言わないでよあ。私は絶対初姉みたくにはなりたくないんだがー!」

「了解だ。なら、さつさと委員会委員長としての私に話をして欲しい」

私の言葉に、もうせつかちなんだから、と不貞腐れつつも、自分の椅子に戻っていく辺り、彼女が分わかを弁わきまえている事を窺うかがわせる。彼女は組んだ手を顔の前に持つてくる、どこぞの司令の様な格好で話始めた。

「私を拒絶するつもりか！」

「……………ネタはいい」

「ごめんねえ。この格好で一回言ってみたかったんだよ！ でね、今回の修学旅行の事んだけど、行き先がどうして国内になったのかはりゅうちゃん分かる？」

「ある程度の想像はつく。恐らくは想定範囲内だろう」

「ならいいや。大体りゅうちゃんの憶測って外れないから。でさ、こつからが本題。生徒会長として、人材派遣委員会委員長である貴方にお願ひがあります。内容は」

「……………あいつの護衛か」

ハーレムの住人を思い出す。生徒会長が、要は学校の代表としてのお願ひの種類なんて高が知れている上に、護衛を付けなければならぬ生徒なんてそうそう居て堪るもんじゃない。

「流石りゅうちゃん、察しがいいね。……………で、引き受けて貰えるかな？」

「密着マークは出来ない。今回は悟史達とは離れて行動する予定なんだ。それでも私が見張れる範囲で良いと言うのなら引き受けよう」

「それで良いと思う。ガチガチに張り付いたら逆にオカシイしね。ま、いざとなったら王子様に助けて貰えるかもね！ それが一番面白いかな！」

にはは、と笑う四条。確かにそれがベストではあるが、果たしてどこまで悟史が頑張れるだろうか。少々不安ではあるものの、王子様は王子様らしく颯爽としていて貰いたいところだ。

「と言う訳で、りゅうちゃん。話も終わったから、抱き付いて良い？」

「用事がある。さらばだ」

「少しぐらい良いでしょおおー！」

背中に引っ付いてくる美代を引きづり、剥がしてから『生徒会長室』を脱出する。

何も知らずにただ純粹に旅行を楽しみたかったが、どうやら私には許されないようである。

修学旅行まであと一週間。

Phase 5 : 閑話休題（後書き）

何時の間にかに総読者数1500人を超えていました。皆様、こんな駄文にお付き合い頂き有難う御座います。これからもご贖に。

Phase 6 : 災厄北へ 1st day 前

広大な大地。

見渡す限りに広がる大自然。

そして、見上げれば澄み渡った大空が。

パンフレットに載っている謳い文句と、目の前の光景を比較してしまつのは仕方が無いと思う。『五月晴れ』とも言われる五月なのにとか、北海道には梅雨が無いのにとか周辺からは不平不満が聞こえてくるが、相手は自然現象である。矮小たる存在な人間如きにはどうする事も出来ない。そもそも不平不満の前者は、旧暦五月の梅雨の合間の晴れの意味であるので、多少的が外れた意見だと思う。

つまり、端的に言ってしまうえば、北海道到着早々我々は大雨に見舞われている。

それはもう、タイヤを引つ繰り返したような大雨。

まだ午前中であるにも関わらず、空に掛かる分厚い暗雲が大地を仄暗く見せている。

文字通り、これからの旅行に「暗雲」が立ち込める事が無ければいいのだが。

騒ぐ同級生達を尻目に、まだ本格的に踏めずに居る北海道の大地を眺めていた。

「で、師匠。今日は何します?」

大雨の御蔭で、修学旅行のスケジュールは大幅に変更せざるを得ないよう、先程から教師陣と修学旅行担当の委員連中が、突かれた

蜂の巣の働き蜂さながらに慌てふためいていた。兎に角、旅行を計画している側がそんな状態なので、ただ受動的に旅行を楽しむだけの生徒達は暇を持て余していた。かく言う私も特に為すことも無く、生徒の喧騒から離れた場所で独り、鞆から取り出した本を読み耽っていた。

後藤はそんな私を発見して、声を掛けてきたらしい。

「何をしても何も、修学旅行はある程度スケジュール管理されている筈だが」

「そうなんですけどね。どうもこの大雨じゃ予定通りって訳にもいかないようで、今日はホテルに缶詰になりそうなんですよ。折角の旅行だと言っのに台無しですわな」

「私は養生出来るなら、それに越した事は無い」

「うわ、何か年寄りっぽい発言。師匠、そんなんじゃ駄目ですよ。もっとアグレッシブにというか、活動的にならないと。稲川に全部美味しい所持ってかれちまいますぜ？もしかしたら映子や生徒会長までも、あいつの毒牙に！駄目だこれ以上、あのハーレム男の好き勝手には」

「五月蠅い」

勝手に独りで盛り上がり、悟史に私怨を積らせている後藤の言を遮る。こういう話は聞いていても愉快にはなれない。逆にこれ関連の話だけで盛り上がる人もいるようだが、私は生憎そういう類の人間ではない。

私はパンッと読み掛けの本を閉じ、多少後藤を諭す事にする。自分でも柄ではないとは思っているが、旅先で気分が高揚しているせい

だとも思っておこう。

「後藤。いいか？ お前やクラスの連中が嫉妬の念に駆られるのも最もだとは思うが、悟史を貶めるような言い方は論外だ。万が一、悟史が力づくで彼女達を手籠めにし、ああいう状態を維持しているのなら、軽蔑の対象にはなるだろう。だが、実際彼女達は自分の意志で悟史の傍に居ようとしている。それは悟史の方が他の誰よりも魅力があるという事に他ならない。だからな、後藤。幾ら嫉妬しようが、殺意を募らせようが私の知った事ではないが、愚痴を言う暇があるのなら、自分の魅力を磨く努力をする方が建設的ではないか？」

「……ああ」

「恋慕する相手にだけ伝われば良いとか、若しくは相手の事だけでも深く理解しようという覚悟や努力も必要かもしれないがな。お前の場合は……例えば、朝霧の好みや趣味をもっと理解しよう」と

「い、いやいやいやいや、なにいつてんだ、師匠」

どうやら隠しきれているとも思っているらしかった。実に微笑ましい事である。

「うわ、何か嫌な笑顔」

「人の顔に文句を付けるな」

暫く、後藤とホテル直行後の予定を協議していると　とは見え、後藤が一方的に捲くし立てていただけで、何も決まってはいないのだが　漸く空港から移動すると言う事が伝えられた。空港でこれだけの大人数が待機している事自体、営業妨害になるのではないかと心配するのだが、心配した所でどうしようもない話ではある。それぞれのクラス毎に割り当てられたマイクロバスへと、雨の被害に極力合わない様小走りで乗り込む。どうやら、私と後藤はこのクラスの最後尾だったらしい。クラスメートがきつちりと座席に座っているのを見渡し、そしてふと疑問が生じる。何故、クラスメート達はこんなに迅速に、しかも整然と着席しているのだろうか。その理由を解消してくれる人物がバスの最後尾からしゃなりしゃなりと現われた。

「遅いですわ、後藤さんに『執事』さん。さつさとこの座席表に従って座って下さいね」

クラス委員長、北条寺麗華。

委員長という概念の实在、委員長のアイデアは三つ網に眼鏡、そして面倒見の良さだと、以前後藤が激しく語っていたが、その理想像イメージに真つ向から立ち向かう様な容貌を持つのがこの北条寺である。名前こそ日本人ではあるものの、明らかに日本人とは違う金系の如き金髪、高校生、否大学生でもあるまじき豊満な体、そしてあるやり手の大企業の役員の娘というお嬢様ステータスを持ち、さらに性格もよろしいという『ミス・パーフェクト』。

どうやら彼女が持ち前のリーダーシップを發揮し、座席表を事前に用意、皆を着席させたと見て良い様だが……

「何故、私だけ補助席なんだ？」

「あら、『執事』である貴方には丁度宜しいのではなくて？」

この女、私にだけやたらと厳しい。そして、悟史には殊更に甘い。言うまでも無く、『稲川ハーレム』の住人である。

「そして何故最後尾の5人掛けの席に四人しか座っていない？ その余りに私が座ればよかろう？」

「その席は生憎私達と悟史君だけで一杯なんです。他の人が入り込める隙間は無いわよ？」

「……なら最初から悟史と二人掛けで座ればよかろう？」

「でもそれじゃ、他の二人に公平じゃありませんから」

何を言っても無駄らしい。私は心底どうでも良くなったので、補助席で了解する事にした。

補助席の座り心地が悪かったのは言うまでも無い。

バスの道中、私の直後の席から悟史の悲鳴とハーレム住人の嬌声が聞こえていたそうだが、私は読書に没頭していたので気にはならなかった。寧ろ、気にしていたらグロツキになるのは確かだったであろうから、これは適切な判断だと言える。時たま読書から意識が離れて、バスの外の光景に目を奪われる事があったり、隣の女子におやつを頂いたり、逆隣の男の『マル秘作戦実行計画書』の手直しをしていたが、意図的以後の雑音はカットしていたので、私の精神は至って健康である。ちなみに後ろの騒音を私に報告した後藤と朝霧の表情はげっそりとしていた。

バスがホテルに到着してもなお、大雨は止む事を知らなかった。益々雨足は強くなっていき、道路を伝う水の流れも濁流クラスにまで発展している。今日一杯、雨は止みそうに無い。

Phase 6 : 災厄北へ 1st day 前 (後書き)

多少中途半端さが残りますが、ここまでで一区切りを。
感想等々お待ちしております。

追伸：enzo様、多謝。

部屋割表がクラス連中に渡されてから数分。

私は彫像の様に固まるしか無かった。

雨が地面を叩きつける音がやけにはつきりと聞こえる。

茫然自失とはこの事だろうか。

知らなかった。

否、このまま知らない方が幸せだったのかも知れない。

私は何時から苛めにあっていたのだろうか

「りゅう君、しっかりして。只のプリントミスだと思っよ」

「師匠。そうっすよ。只のプリントミスですって。

それに、あのハーレムと相部屋にならなかっただけマシじゃないですか」

「……では代わりに野宿でもするか？」

「いやあ、それは勘弁。流石にこの雨の中はなあ」

「あ、そうだ。ボクで良かったら一緒の部屋に」

「廊下は使わせてくれるだろうか」

「人の話を聞いてよっ！」

朝霧の戯言は綺麗さっぱり聞き流す。

幾ら部屋が無かるうと、友達とは言え、女子の部屋に泊まる程礼節

を弁えていない筈が無い。あらぬ噂や醜聞を撒き散らされて、朝霧が困惑するのは忍びない。どれだけ気丈に振舞った所で、女性である事は変わらないのだから。それならば、潔く雨中にでも廊下にも眠る覚悟は出来ている。

己の名前が書かれていない部屋割表を片手に、玉碎覚悟で北条寺の所へと出向く。奴は既に委員長としての職務を終え、悟史の右腕に纏わりついていた。豊かな胸を押し付けるようにして。

「北条寺。済まないが話がある」

「何かしら、執事さん？」

「あ、りゅう。助けてくれよ！」

私の問い掛けに首だけをこちらに向ける北条寺。それと自身の体に三人の美女を飾り付けているハーレムツリーハーレムツリーが一体。何か樹が喋った様な気がするが、眼中に入れない事にしよう。まだ初日の午後なんだから頑張れと心中で密かに応援。

「部屋割表についてだが」

「ええ。何か不備でもあったかしら？」

「おいこら、りゅう！ わざとらしく視線を背けるな！ こっち向け……って、お願いだから、その、胸を当てないでくれませんかね、由宇さんや」

羨ましい様な羨ましくない様な微妙な環境に置かれている樹ハーレムツリーが騒々しいのだが、きっぱりと無視しておく。

「私の名前が見当たらないのだが、これは不備か？」

「いえ、不備ではありませんわ」

「頼むから、助けてくれ！ なあ！ おい！ ……つて、首絞めな
いでよ、由紀ちゃん！ 誰も『まな板』なんて言つてな……い……」

何やら殺人事件の臭いが立ち込めてきたが、それでも私は初志貫徹、
徹頭徹尾にして君子危うきに近寄らず。女性の身体的特徴を揶揄す
るような言葉を、その対象に使用すれば危険であるという良き例だ
と思われる。

「つまり畢竟嫌ひっつきがらせか？」

「ひっつきよう？ ……生憎、卑怯でも嫌がらせでもないですわ」

「……………」

「『結局』の意味だ」

「after allね。ナルホド。貴方の名前が無いのは、私の
意志では無く、生徒会長からの御達しに寄るものですわ。……ああ、
言い忘れました。生徒会長からの伝言で、『貴方はここに残る事』
だそうよ」

「……………」

「……了解。可能な限り、そういう大事な事は先に知らせて欲しい」

「今後は気を付けるわよ」

「……」

「最後に一つ。悟史が三途の川を遠泳中だ」

「あらあら」

チアノーゼ状態の悟史が其処には居た。口から泡を出してはいるが、三人も人手が居るのだから何とか救出出来るだろうと、私はその場を後にした。

大勢の生徒達がホテルの中へ、そして自分達の部屋へと移動していく中、私は独り玄関ロビーに佇んでいた。生徒がひしめき合い、狭い様に感じたロビーは実の所、かなりの空間を誇っていて、こうして独りで居ると広大な空間を独り占めしている様な、少し贅沢な気持ち味が味わえる。今少しこの贅沢さを味わっておこうと、座り込んでいたソファに深く沈みこむ。補助席で疲れた腰が癒される様であった。

そのささやかな私の幸福を壊しそうな視線が頭に突き刺さっていた。しかも至近距離で、だ。敢えて視線は無視していたのだが、どうやら相手方は我慢の限界らしく、直接的な行動に打って出た。私の頭を両手で掴み、無理矢理上を向かしたのである。

「何故、私の泊まる場所が無い？」

「りゅうちゃん。少しは驚いてくれるとかリアクションが無いと困るんだけど」

非・生徒会長モードな四条美代が私の顔を覗き込んでいた。私がり

アクションを取らなかつた事がご不満な様子で、少し釣り上がった釣り目と膨れっ面が印象的である。私が安易に感情を揺らさない事を十分承知しているのだから、期待しないで欲しいのだけれども。それよりも早々に質問に答えて貰いたい。今夜、雨の中で過ごすか、廊下で寂しく過ごすのか、それとも単なるドツキリなので、憂鬱さ加減が決まるのだから。

「質問に回答してくれ」

「えーとね、その、申し訳無いんだけど」

「前置きは良い」

「じゃあ、ズバツと言いますと、私と同室」

日本語が分からなくなった。すわ、言語障害か。

何が楽しいのか、ニコニコと満面の笑みを浮かべている四条。先程の『申し訳無い』という言葉を発した、舌の根の乾かぬうちに全然『申し訳無い』さそうではないのはどういう見か。

今の発言は何かのバグが四条の中で発生した上での弊害だと仮定して、最初から順に話を聞いていこう。

「申し訳無いが、前置きから話してくれないか」

「どっちなのよ。じゃ、最初から言つとね。えーとね、その、申し訳無い」

「そこは繰り返さなくても良いのではないか？」

「注文が多いよ、もうっ！ んで、順を追って話すと、元々は別々

に泊まる筈だったんだけどね、この間委員会の方に依頼した様に少し込み入った状態になって、なるべくりゅうちゃんとは密に連絡を取りたかったのよ。その事を　　といっても多少歪曲してだけどりゅうちゃんとこの担任さんに話を通したらさ、委員会役員として別個部屋を用意すればいいって」

「担任あれに話したのか……厄介な」

「と言う訳で、委員会役員である私とりゅうちゃんは別室、二人きり二人きりい」

何ということか。

つまりは四条と二人きりというのは学校側が認めていると言う事か否、COOLになれ、私。何も委員会役員は私と四条だけではないはず。そう、同学年には他の委員会委員長がいるではないか。

学校側公認と言う事で半ば放棄しつつあった思考を奮い立たし、絶賛妄想中の四条に問い掛ける。

「四条。他の委員会はどうした？」

「ふたり……うん？　他の委員会と言っても、今回関係している委員会って人材派遣くらいでしょ？」

「否。風紀実行委員会委員長たいらの平、防衛委員会委員長たいらの源はどうした？」

「え？」

そんな名前初めて聞きました、という表情をする四条。風紀実行委員も防衛委員会も学園の安全を護る大事な役職だと思っのだが、そ

の頂点に立つ生徒会長様はすっかり忘れられている様子。

「そ、そんな。流石に三人相手じゃ辛いよ。りゅうちゃんだけでも」

「お前は何を言っている」

「それに私の体はりゅうちゃんだけの、痛っ！」

とりあえず、額にデコピンを食らわせ、阿呆の口を黙らせる。

一体、何を考えているのだ、最近の女子高生は。もう少し、節操を持った方が良いと思われるのだが、どうだろう。それとも、私の考え方は前時代なのだろうか。

「冗談だよう。平君や源君も勿論忘れてなんかないけど、今回の事は校外の任務だし、それに一応秘密裏に、出来れば何事も無く旅行が終わればいいんだから」

それは正論だ。依頼された内容はそういう種類のものであるのだから、可能な限り内容を知る人間は少ない方が良く。彼女は真剣な口調で続ける。

「それにね、不測の事態が起きても直にりゅうちゃんが動ける様、情報が集まってくる私の傍に居るのがいいの。皆で行動している時は流石に傍には居れないけど、待機中は出来るだけね。だから、我慢して下さい、人材派遣委員会委員長」

真剣な表情で、そして最後だけ垣間見せた生徒会長としての四条美代。公的な任務の為であり、上司からのお願いであり、私のわだかまりはこの際大事の前の小事として流しておかねばならない。だから私はこう応える、

「了解した」

と。

その事に気が付いたのは、夕飯後のトランプゲーム『大貧民』に興じていた時だった。

荷物をそれぞれの部屋に置いて来た私達は一旦ホテルの大広間に集合させられ、これからの旅行スケジュールの変更を聞かされた。要点だけを言ってしまうえば、今日組まれていたスケジュールは全てキャンセルされ、明日出向く先に『網走監獄』が加わり、その分の自由行動が多少削られるとの事だった。今日分のスケジュールさえ削れば良いのに、何故わざわざ自由行動を削ってまで『監獄』を眺めなければならぬのか。多少疑問を持ったが、大した理由では無いと見越し、受け流す事にした。私の視野の片隅で、『氷の女』四条美代、『風紀の前鬼』平、並びに『防衛の後鬼』源がにやつと嗤ったのは気のせいだろう。

解散後、私は後藤達と共にホテル内を散策し、暇を潰していた。特に代わり映えのしないB級ホテルだが、無為に時間を過ごすよりは、そうして非常階段の場所を確認したり、死角を発見したりする事の方が幾らかは有益だった。しかし、自分の事ながら、もう少し『高校生らしい』、或いは『青春謳歌してます』という様な思考は出来ないものと呆れてしまう。

散策の途中、ブルブルと震えている子犬、ではなく悟史を発見したり、鬼すら裸足で逃走しそうな形相をした美女計三人程と遭遇したり、我がクラスの担任が朝霧と内緒話をしている所を目撃したり、慌てて弁解する朝霧を見て、後藤が『蕩ける馬鹿』然となったり、西原と東が彼女に連行ガールフレンドされて行ったりと、短い時間にイベントが集約していた。どれも傍観者として居られた事を神に感謝したい。

夕飯までの残り時間を、途中で合流し、『マル秘計画』について綿密に打ち合わせをするクラスメイト達を眺めて過ごしていた。私は『マル秘計画』には、一切加担していないというポーズでもある。

とは言え、誰もこちらを見ていない事と、第三者がこの光景を見ていない事から、無駄なことであるのだけれども。少し虚しくなった。当然ながら、悟史はここには居なかった。

その後、何事も無く夕飯が終了。とは言え、何も無かったと言える範囲は私の周辺であって、決して遠くに見えた悟史らしき物体等はその範疇に無い。煤けた姿を見るに、ブルブル震えて隠れていた事は単なる時間稼ぎにしかならなかったのだろう。見ていて少し目頭が熱くなった。合掌。

そして、腹ごなしとして、後藤達とトランプに興じていたのだが……

「それ出せるわ。Aのペアッ」と

西原がクラブとハートのAペアを場に出す。東と後藤は揃って、カードが出せないとジャスチャを示したので、私は暫し自分のカード残り三枚を見て

「二のペア。勝利」

「って今悩む必要ねーぞ！」

「性質悪いわ。りゅう」

「師匠ー！ そろそろ大富豪から落ちてくれませんかっ！ とい
うか、俺からカード搾取するの止めませんかっ！」

「「それはお前が悪い」「」

「同時に言うなーっ！」

何度目か忘れたが、記憶する限りの間大富豪の座に座り続けている私。手札の引きがそこそこよいという点と後藤の的確なアシスト

自覚は無いのだろうが　　のお陰で連勝街道を突き進んでいる。

今回のフェイズでも後藤は大貧民だったようで、散らばったランプを集め、繰りながら、ブツクサと小言を言っていた。西原と東はそんな後藤を見てからかっていた。私といえば、このまったりとした、騒動の無い平穏な空間を存分に満喫していた。友人と駄弁り、遊戯に興じる。日常生活では決して味わえなかった平穏がここにはあった。正に桃源郷^{アサアロン}。素晴らしき哉、修学旅行。

平穏に満喫していた私は、自分としては有るまじき事に、先の事を見据える余裕を持っていなかった。否、そういった余裕はあつたにせよ、心のどこかでその事を考慮するのを放棄していたのかもしれない。

それぞれにトランプを配布し終わった後藤が、ふと思い出した様に私に尋ねたのが素晴らしき平穏とのお別れだった。

「そういや、師匠。師匠って結局野宿する事になったんですか」

「そうそう。お前、本当に野宿するつもりかよ？」

「別に俺らの所に泊まったって何の問題もないんだろ？　なら、りゆうは俺らの部屋に泊まればいいんだわ。つーか、元々そういう意味での班だろうよ」

「…………その通りなんだが」

非常に言い辛い。本当に今更だが、今更ながら私はあの四条美代^{あほ}と同室で夜を過ごさなければならぬのか。あれ程、真剣な表情で真剣な口調で説得された為、あっさりと受け入れてしまったのだが、拙い事態なんではないだろうか。

「何か顔が青いつすよ？」

「おいおい、何か怪しいな、りゅう。お前、荷物何処にやったんだ？」

「……委員会用の部屋だ」

「委員会用の部屋？ 西原、そんなんあつたっけ？」

「いや、知らんわ」

「嘘じゃないのか？」

非常に拙い。後藤達に嘘を言う必要は無いのだが、しかし誤解を受けそうな予感がする。

「おい、俺らに嘘なんて付かなくて良いっての。朝霧の所に行こうが、他の女の所に行こうが、気にしねーよ。とは言え、俺の千沙子には手を出すなよ」

「惚気るなよ、東。あ、後、都子にも手を出すなよ」

「……惚気るな。私は嘘を言ってる訳ではない。会長にでも聞けば分かる」

「って事は師匠。生徒会長と同衾って事ですか」

コイツ、時々核心を突く。しかも、こちらが護りたい核心を。

我が高校の生徒会長様の正体を知らない東と西原は驚愕と、何故か

こちらを心配するような表情を浮かべている。後藤に至っては、生徒会長の本質を知らない癖に驚愕もせず、苦虫を何匹も噛み潰したような渋い顔をしている。

「マジ？ お前、それって外で寝た方が『凍死』しないで済むんじゃないのか」

「それって『氷の女』だから？ まあ、あの生徒会長なら有り得るかもな。寧ろ、寝てたら『何寝てるんですか』とか言って突き飛ばされそうだよ」

「『えーマジ寝てんの？ キモイ。寝るのが許されるのは副会長までだよ！ キヤハハハ』みたいな感じだよ」

「キャラ違うじゃんか」

ゲラゲラと笑う二人。忠告しておきたいが、そんな事アイツの前で言ったらシバかれる事請負だ、私が。しかし、これが一般生徒の生徒会長に対する率直な意見なのだから、もうちよつと好感度上昇の為に対策を立てた方が良くと思うのは老婆心だろうか。すすつと後藤が近付き、小声で話しかけてくる。

「師匠、映子はその事知ってるんですか」

「知らない筈。その必要も無いだろう？」

「いや、でも、まあ……」

何が言いたいのか、ハッキリしない男である。

その時、ズボンのポケットで振動を感じた。携帯を開いて表示を確

認する。

「でもさ、りゅうが居ないとすると、稲川の奴ヤバいんじゃないか？」

「それ、有り得るわ。明日の朝、アイツにあつたら真っ白に枯れ尽きてたりしてな」

「……その悟史から緊急信号が来た」

「マジか！ それ行かない方が面白いんじゃない？」

「一応、友人としては見過ごせないからな」

「あー、本当にゆうって御人好しと言うか出来すぎた友人だと思うよ」

馬の足には蹴られたくは無いが、と言い残し、私は悟史の部屋へと赴く事にした。本土決戦に向う戦士を送るが如く東西コンビはタオルを左右に振っていたが、後藤だけは呆れた目で私を眺めていた。

Phase 8 : 災厄北へ - 1st night 前 - (後書き)

短いです。

もう一話明日掲載するのでご容赦を。

Phase 9 : 災厄北へ - 1st night 後 -

「準竜師。既に全ての人員が予定位置につきました!」

「準竜師。今や我々は貴方の号令を待つのみです!」

「準竜師! 我ら五一二一部隊に号令を!」

「準竜師!」

「準竜師!」

「……とっかん 呐喊」

「時は来た! ニイタカヤマニノボレ!」

驚異のスピードで廊下を駆け抜けていく忍が二人。私にトランシーバを渡し、何故か号令を掛けさせて、彼らは星になった。それ以前に、私の事を『準竜師』と呼ぶのは止めて欲しい。『りゅう』の部分しか該当していない上に、私はあの様な、色々な意味で幅の利いた顔をしていない。そもそも、自分達の事を『五一二一部隊』と自称するのはどうだろう。精々、部隊の中に、中村と滝川と遠坂と来須と速水と岩田なる苗字を持つ者が居て、序でに靴下愛好家がいるだけ……否、十分に五一二一部隊と名乗ってもいいのかもしれない。

『引くな! 我らに残された道はただ一つ! 前進あるのみ!』

『滝川千翼長! 敵の弾幕が多過ぎます! このままではフォックストロット部隊は!』

『くっ！ F部隊はそのまま突っ込め！ そして死中に活を見出すのだ！』

『……F部隊・来須百翼長、了解した』

『く、来須うううう！ か、哀しいけどこれ戦争なのよね』

『ええい！ 何故だ！ 何故我らが今宵乗り込むとばれたのだ！』

『す、素晴らしい！ 岩田がくねくねしながら前進してる！』

『行け！ 岩田！ そのまま奴らの前線を突破しろ！ あ、前方に靴下が！ まずい、それは罠だ！ そんな罠に釣られるなあ！』

『アーツ！』

『い、岩田ああああ！！』

トランシーバから齎もたらされるクラスメートの怒号と悲鳴。

彼らは気付いていないが、バスにて私に『マル秘計画』の見直しを依頼した際、横に座って私におやつを渡していた女子は風紀実行委員会の実行部隊の子であった。私は勿論それを知った上で、計画書を見直していたが、彼らは一向に気付く様子は無かった。私が委員会の盲点を付くであろうルートを示す度に、横から「そういう考え方もあるんだ」と感心した様子で覗き見をしていたのだが。もう少し、作戦を練る際は機密性と周囲に対する警戒が必要だと思う。

暫くの間、部隊は持ち応え、そして前線へと進めた様だが、止めを刺す刺客こと『防衛の後鬼』が背後から強襲したらしく、トランシーバの沈黙と白色雑音ホワイトノイズが彼らの最期を教えてくれた。

トランシーバを放棄しようとした時に、最後の通信が入った。

『やっほー、りゅう君。ご協力感謝するっす』

「私は何も関与していないし、協力した覚えも無いが」

『んーそういう事ならそれでもいいっすよ。でもでも、今回の借りはいつかお返しするんで』

「だから私は何もしてないぞ」

『またまたー旦那。そうですね、今度抹茶アイス奢るっすよ』

「……」

どうやら相手さんは私の嗜好品を的確に捉えているらしい。

一瞬返答に詰まり、付け入る隙を与えてしまった。

『迷ったねー迷ったねー旦那。じゃ、そういう事で、ちやおー』

ぶつっと回線が切られる。交渉に関しては、あちらの方が何枚も上手であった。

トランシーバを廊下の隅に置き捨てて、すっかり遅くなってしまったが、目的地であるハーレム部屋に歩を進めることにしよう。知らず溜息が出てしまう。

そこかしこにクラスメートの残骸があったが、気にしては負けだと言っただけを向いて進んでいく。しかし、一体何に負けるといふのだろ

うか、という疑問はシコリとして残っている。

緊急事態と連絡を受け取ってから、既に十数分を経過しているのだが悟史は無事だろうか。無事でなくとも、別段どうと言う訳でも無いのが本音ではあるが。そんな複雑な心中を蹴散らさんばかりに、強めにドアをノックする。この扉の向こうに待つのは果たして酒池肉林の世界か、はたまた粘性の高いソープドラマの展開なのか。

「悟史、達者か」

『りゅう〜今行くからちよつと待て〜』

ドアの向こうからくもった悟史の声が届く。まだ精神も気力もゲージの底を着いていない様だ。悟史の声だけではなく、女の姦しい声とどたばたとした物がぶつかる音が聞こえていたが、数秒して悟史がドアから身を乗り出してきた。しかも即行ドアを閉めるという不審な行動。後手に閉めたドアからギヤアギヤアと叫ぶ声とドアを叩く音が響いている辺り、無理矢理抜け出てきたのだろう。

「……………いいのか？ 後の連中」

「まあね……………かなり疲れたかな」

乾いた笑いをあげる悟史。確かに心なしかやつれた印象を受ける。暫くドアを押さえていると、観念したのか先程までの喧騒が嘘の様に静まり返っていた。

「りゅう。ちよつとロビーまで付き合っつてよ」

「了解」

悟史の背中が少し煤けて見えた。

「自分でもさ、良く分かんないんだよね。どうして彼女達が俺なんかに構うのか。俺はたださ、自分のしたい様にして、ただ自分が楽しければいいって。そんな自己中な事ばっかしてるのに。彼女達に優しくしようとかそんな事微塵も思っただけだぜ？ 確かに美人だなーとか綺麗だなーとか思うけどよ、だからってどうしようもなくて訳じゃないし……あーもう、自分でも何言っただかわかんねー」

ガシガシと頭を掻きながら悟史。フケが出ないので洗髪はしっかり行われている、等と話の本筋に関係無い事が頭に浮かんだ。

「と言ってもさ、別に今の関係が嫌だとか言っただけじゃなくて、だからと言って誰かと彼氏彼女になるつもりもなくて。周りから見ると滅茶苦茶嫌な野郎に見えそうだな、俺」

少なくとも自覚はあったのか、と感心する。そこまで鈍感な男では無いとは信じてはいたが、信頼が裏切られなくて少し安堵する。

「……で、悟史はどうしたい？」

「どうしたいか。今のままで良いとは思ってないけど」

持っていた缶珈琲を口に含む。薄い、如何にも缶珈琲らしい味わいが口の中に広がった。

空港に引き続き、私らしくもないが少しだけ彼の背を押す事にしよう。それが如何作用するのは、私如きには想像も及ばないが。

「きつい言い方をすれば、私は単なる傍観者であって当事者ではないから、関係ない話ではあるが」

「それは確かにきついわ、りゅう」

「今の悟史達の関係は傍で見ている人間からして見れば、目障りと言える。それは承知してるか？」

「……ああ。俺だって馬鹿じゃないさ」

「それは僥倖。とは言え、だからどうこうしろって訳じゃない。只、このまま放置していけば、益々中途半端に深い関係を持つ女が増えていくのは目に見えている」

口には出さないが、悟史は『自分が楽しければいい』とは言うものの、それは周囲の人間が楽しんでいるという前提の下での行動原理だ。従って、自己中心的というよりは寧ろ他者優先的である事に、悟史自身は気付いていない。その無意識の優しさに惹かれて、捕らえられている状態が今のハーレム状態なのだとは勝手に解釈している。

「俺そこまで節操無いかな？」

「悟史。親友として尋ねるが、また傷付くのが怖いかな？」

悟史の顔色が変わる。

「ヤマアラシじゃないんだ。人間だろう？ 近付いたって早々傷付かん」

「……簡単に言ってくれね」

「他人事だからな。きつい事を言えば」

缶を片手で捻り潰して、屑籠へと放り投げる。放物線を描いて綺麗に籠の中へと収まった。

これ以上揺さぶっても精神衛生上良くないかも知れない。私は立ち上がり。自室へと戻る。目の前に置かれている缶を凝視して立ち上がろうとしない悟史に、一言だけ残しておく。

「あと四日は旅行だ。陰鬱な調子で過ごさない方が良い」

「分かってる。あと少ししたら、いつもの調子に戻るよ」

残された悟史は独り、渡された缶飲料を飲みつつ、溜息を吐く。

「他人事じゃねーんだけどな」

誰の耳にも届かず、その声は静かに空間へと融けていった。

扉を開けて、厄介事から目を背けていた事に気付かされた。

「りゆうちゃん！ バスタオル一枚だよ！ 興奮する？」

さて、どうやって今晚をやり過ごそうか。

Phase 9 : 災厄北へ - 1st night 後 - (後書き)

次回更新は来週になります。申し訳御座いません。
取材旅行へ行つて来ます(え)

紛う事無き晴天。

昨夜夜半まで降り頻った雨は夢の如く掻き消え、目の前には雲ひとつ無い。

「各クラス、早くバスに乗ってねー！ 今日の一つ廻る所が増えてるから時間無いのよー！」

「おら、さっさと乗れ！ 時間が無いんだ、さっさとしろ！」

「クラスによつては人数が少ないかもしれないけど、気にせずからねー！」

バスへの乗車を促す教師陣の声が辺りに響いている。声にせつつかれる様にして我らはバスに乗る事になる。最後の方に聞こえた内容は昨日の事件とは関係が無い事を祈りたいが、残念ながら自分のクラスの人数が半減しているのを鑑みるに、無関係どころか核心そのものらしい。彼らの処遇は聞かされていないが、冥福を祈っておこう。

生徒の列に並び、バスのステップに左足を掛けた時に、後から声を掛けられる。珍しくも修学旅行に同伴している保健医の聖教諭だった。

「あのりゅう委員長さん？ ちょ、ちょっと聞きたい事があるんだけど、い、いいかな？」

「……如何為さいましたか、聖先生？」

一介の生徒相手に拳動不振になる教師は如何なものだろう。どうもこの教師は私を獅子か何かと勘違いしているのではないかと。生憎だが、私はカニバリズムなる高尚な悪癖は無いし、女性を食す程にプレイボーイでもない。表立って事を起こした事など、近年は致していない筈だが。ステップから離れて話を聞く事にする。

「せ、生徒会長さんが何処にいるのか、知らないかしら？　り、りゆうさんも昨日は委員会専用部屋にいたのでしょうか？」

落ち着かない様子で眼鏡を弄りながら尋ねてくる。少々逡巡し、思いを巡らしている様子を醸し出し、私は答える事にした。その際、目が合い、小さく「ひえう！」と怯えた声を出されたのは甚だ心外ではある。

「恐らく未だ部屋に居られるのかも知れません。私は早朝から館内の警備をしていたものでして、申し訳無いのですが、会長とは今朝方顔を合わせていません」

「そ、そうなの。ご苦労様」

「いえ。しかしそうになると、会長は……否、これは申す事でもないか」

如何にも訳有りです、という風に小さく言葉を繋げておく。私の知る限り、こういう言い方をすれば、職務に忠実で、生徒に理解のあるお節焼きさんと評判なこの教諭の事だ。喰い付いて来るだろう、と予測。

「ど、どうしたのかしら。些細な事でも話してくれると嬉しいんだ

けど」

案の定、餌に釣られた。入食い状態とも言えるかも知れない。私は伏目がちに、躊躇う様に振舞う。

「……ですが、これは非常に個人的な話ですので」

「そうねえ。でも、ここだけの話にしておくから。もし、その所為で生徒会長さんが大変な事になったら、大変でしょう？　なるべく、そういう目には遭わせたくないし」

「……仰る通りです。ここは先生を信頼してお話し致しましょう」

「あ、有難う」

目を合わせる度に、怯え、どもる聖教諭。少し威圧すれば、泣き出すのではなからうか。

私は如何にも深刻そうに、偽りの『真実』をとうとうと騙り出す。

「先生は会長が非常に厳格な方だと言う事はご存知でしょう？　会長は非常に規律を大事に為さり、それを遵守しようと日々取り組んでおられます。その姿勢は誰も崩す事が出来ない程、頑ななまでにそして、その規律は他人に対するものだけではなく、当然のように自分に対しても、いえ自分に対してだからこそより一層厳しい規律を持っておられます」

「そ、そうなの」

「ええ。まるで神を夫とし、貞操を守り抜く修道女の様です。そして、規律を破られた際には、厳しい戒めが待っているそうです。私

は幸運にも、その戒めに遭った事も自身に対して戒めている会長を
拝見した事は御座いせんが」

「な、なんだか息が詰まりそうね。保健医としてはすごく心配なの
だけれど」

良い反応だ。正に私が企んでいた通りに、聖教諭は話を聞いている。

イゲザクトリ
「正鵠。過剰な規律による緊縛は歪みを引き及ぼします。先生は保
健医でいらつしゃいますから、ご存知だとは思いますが、これは一
種の強迫観念、強迫行為と見受けられます。自分を戒めておくとい
う行為が安堵を得ているのでしよう。意識的にも無意識的にも、そ
こに囚われているのかも知れません」

「よ、良く知ってるわね。私よりも心理学詳しそうね」

「……ご冗談を。独学の上、齧り掛けです」

因みに、先生のどもりは神経症レベルの吃音きつおんとも言います、と心
中で付け加えておく。吃音は無意識下での恐怖等が表面に出てきて
いると見られ、つまり私に恐怖感を持っていることになる。
本題から逸れた話を元に戻そう。

「詰まる所、生徒会長は束縛に対して安堵を感じております。とこ
ろで修学旅行と言えば、学外での大規模なイベントであり、また昨
日の雨でイレギュラが発生しましたので生徒会の負担もかなり大き
くなっております。従って、生徒会長には多大な軋轢がかかっ
るとも言えます。……先生、そういう場合、人間はどういう行為に
走りますか。否、自分の安息の場所を無意識にでも知っている人間
がとる行為は？」

「も、勿論、そこに逃げ込むのよね？　という事は、四条さんは自分を戒めている？」

「この場合、戒めるといふよりも、『縛り付けられている』という概念に意味があります。つまり……」

思わず、口の端が上がってしまいそうになる。意識的にこれを下げ、加えて眉を下げ、深刻な表情を作り上げる。さあ、仕上げに取り掛かる。

「会長は自分自身を縛り付けているものと思われず、物理的な意味で」

「そ、そう。それは確かに個人的な話よね……」

引き攣った顔で応える聖女史。

すると、ホテルの玄関ホールからこちらに駆けて来る教師が一人。

「聖先生！　四条の奴が見つかりました！　やっぱり生徒会の部屋に居たんですが……」

「如何なされたんですか？」

「そのお……長い布を自分自身に巻き付けててですね、木乃伊^{ミイラ}みたいになってんですよ。一応、人材派遣委員長にヤラレタなんて言ってますがね、ってお前此処に居たのか」

「先程から聖先生とお話しておりました。……そうですか、私にされたらと仰られてるんですか」

「ああ。性質の悪い丁稚上げだとは思うんだがなあ。お前がこんな事するとは思えんし」

日頃の行いが功を奏している。立場を磐石にする為に、聖教諭に小声で付け加えておく。

「無意識にでも行つたのでしよう。その為に私という犯人役が必要だったのかもしれませんが。聖先生、後はお願いしても宜しいですか」

「え、ええ。こちらで何とかしておきます」

「それでは先生方。私はバスに乗っておきます。私個人の所為で日程を遅らせる訳にもいきませんから」

「ああ。四条は他の馬鹿連中と共に送っておくから心配すんな」

「宜しくお願い致します」

踵を返し、バスへと乗り込む。妙に空いている我がクラスのバスの一席に座り込む。席は思いの外柔らかく、座り心地は大変に良かった。

結局、私が何をしたのか。

バスタオル一枚のみを体に巻き付け、迫ってくる四条はかなり執拗に私に絡んできた。私は完全に無視を決め込んでいたのだが、一向に注意を向けない私に頭の螺子がさらに緩んだ四条はバスタオルを脱いだ。それはもう、恥も外聞も無く脱いだ。しかも裸のまま、私

に抱きつくという凶行。

家庭の事情により、女性の体は見慣れているとは言え、裸のまま上目遣いで擦り寄せられた経験は無い。流石に拙いと軽くテンプレを揺さ振る事で、暴走特急このバカの意識を刈り取った。その後、なるべく大事な部分を拝まない様、細心の注意を込めて下着を着させたが、私としては未だ意趣返しが出来ていない。そこで、部屋中のシーツを剥ぎ取り、連結させて、四条にキック巻き付けていった。暫くすると木乃伊な四条が完成したので、これをベットに放置。一応、風邪を引かない様、部屋の温度調整はしておいたので大丈夫だろう。

さらに、聖女史を使って、この行為を『四条自身が行った』とする事で、私の意趣返しは完結する。これで、旅行の残り四日間は無事に過ごせるであろう。

私といえば、昨夜は本当に館内の警備をしていた為、一睡もしていない。椅子の座り心地、降り注いでくる朝日が気持ち良く、私は眠りへと堕ちて行った。意識はしていなかったが、眠ったお陰で後方のハーレム狂騒曲が聞こえなかったのは僥倖だ。

待たれた方は、お待たせ致しました。
ハーレムのハの字も出てこない今回ですが……ご容赦下さい。

網走監獄には現役の囚人がいた。

『俺達は悪魔の囁くままに行動したまでだ！ 決して本心から見たかった訳では……いや、見たかったと言う事は否定しない！ だって、女子高生とか好きだからー！』やら『据えZEN食わなきゃ漢の恥じゃないかYO！』やら『覗きの素晴らしさがお前らには分らんのか！ 何時だってそうだ！ 偉い人には分らんのですよっ！』等々、作戦に対する反省等微塵も感じさせない、一種清々しいまでの怨嗟が個人用監房の中から聞こえている。

その監房の前を行ったり来たりする『前鬼』『後鬼』の姿が勇ましい。警棒を片手に構え、それを片手で叩きながら歩く姿はアポカリプスの敏腕看守のようだ。彼らは時折、騒がしくなる囚人のドアを警棒で叩きながら

「小便はすませたか？」

「神様にお祈りは？」

「「部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」」

と死神の如く脅しまわっている。既に高校生レベルの脅し方では無い気がする。

「お、りゅう委員長。お疲れ様です」

「なんや、兄さんも来とったんかいな。せや、兄さんも一緒にこいつらの罰則に参加するかい？ 中々、看守って仕事おもしろいでえ。」

病み付きになりそうやわ」

「素敵ですね」

「素敵やわ」

丁寧な口調の源と似非関西弁な平。何処と無く、彼らの態度から私に対して一目置いている様に見受けられる。最近殊更に思うが、周囲が私の事を酷く勘違いしているのではないかと思うのだけれども、どうなのだろう。

「源、平も程々にな」

「そんなん、百も承知ですがな」

「そうですよ」

同意はしているものの、その傍らで棒を思い切りドアに叩き付けている姿には説得力の欠片も無い。

「りゅう委員長。少しお話したい事があるのですが、宜しいですか」

「……構わない」

「では、あちらに。平、後は頼んだ」

「頼まれたわ」

警棒を平に渡した源は、私を監房棟の外へと連れ出した。棟の外は清々しい青空に包まれ、内とのギャップが大きすぎる。正に天国と

地獄の光景と言える。

周りに人が居ない事を確認し、源が語り始めた。

「まず。昨日の大捕物にご協力頂き、我が防衛委員としても、平ら風紀委員としても貴方には非常に感謝しております。風紀の玉城たまきに貴方が計画書を見せてくれなかったら、女湯の平和は齎されなかったでしょう」

「玉城にも言ったが、私は何も感謝されるような事はしていない。寧ろ、計画に加担していた側に肩を入れていたといつていいだろう。批判こそされ、感謝される覚えは無いが」

あの御菓子女たまきと言い、源と言い、私の事をバイアスを掛けて過大評価していると思う。偶々、我がクラスメートな覗き連中が私に相談を持ちかけ、偶々私の隣に玉城が居たという偶然の重なりには過ぎないと言うのに。

「まあ、貴方がそういうのならそういう事にしておきましょう。ですが後日、玉城の方から何か御礼が贈られるかもしれません、それは黙って受け取って下さい」

これも昨日玉城から謂われた通り。

幾ら私が冷徹といわれようが、感謝の意を真正面から反故に出来る人間ではない。仕方無しに

「無下には出来ない。了解した」

と応えておく。

私の答えに満足したのだろう、源は二三度大きく頭を縦に揺らしたが、すぐさま真剣な面持ちを私に向け、次の話ですが、と話題を

転換した。果たして、何の話題であろうか、と記憶の中をさらっと確認したが該当する記憶は見当たらない。

「貴方には関係の薄い話で申し訳ないのですが、多少お付き合い下さい。私は主に『防衛』を担当しております故、『攻撃』の方法も良く知らなければなりません。ですが、恥ずかしながらそちらの方は素人同様でして、頭が上手く廻らないのです」

「己を知り、敵を知らば、百戦危うからず……か」

「正にその通りなんです。ですから、攻めのエキスパートであろう貴方に少し教えて頂きたい事があるんですけど」

「否。攻撃専門家なら平がいるだろう？」

「専門家の机上の攻め方が甘かったからこそ、貴方の協力が切り札になったんですよ。平の読みでは決してあのルートを使う事無く、外部経由のルートを第一に考えておりました。ですが、貴方の作戦はその上を行っている。つまり、こちらの専門家よりも貴方の方が一枚以上上だという事になります」

随分と買い被られている。あまり持ち上げられると、背中が無性に痒くなるので止めてほしい。

「偶然、視点が異なったただけだろう。それに私は守備が得意な人間なんだが」

「それなら猶の事、守備側の人間として話を聞いて貰いたいのですが」

「……続きを」

ここで謙遜合戦をしても一向に話が進まないの、話の舵をこちらで取る事にする。

あまり込み入った話が聞きたくないというのもあるが、まだ網走監獄を総べて見ていないので、早々に退散したいというのが本音でもある。

「昨夜、会長が何者かに襲われました」

流石に心拍数が上がる。今の心境を漫画にして見れば、心臓が飛出てしまっているリアクションが相応しい。若しくは、眼球も共に飛び出さんばかりの反応でも可だ。

生徒会長を神の子と神託者と崇め奉り、我が命は生徒会長共にあると公言して憚はばからない生徒会長シンパの源の事だ。若し私が犯人だと明らかになった場合には、全力を以って私を排除しにかかることだろう。勿論、同シンパである平も同時に相手しなければならぬだろうし、数十人単位で存在されると噂される信者全員とも対峙する羽目になる。それは絶対に回避しなければならぬ事態だ。

しかし、と私は考える。何の為に源は私を人気の無い日陰に連れ込み、私に何の話を聞こうというのだろうか。それとも、話を聞くのではなく、私が犯人と疑ってかかり、自白なり自供なりを引き出すうとしているのだろうか。正直な所、疑心暗鬼がライندگانス状態である。

「……襲撃されたとは聞いていない。ただ非常に奇特な格好で発見されたと耳にしたが」

牽制して様子を探る。

まるで将棋の対局の様な雰囲気だ。

「奇特……ですか。私は聖女と見間違っ気高き姿、ギリシャ彫刻に匹敵せんばかりの美しき格好をなされていたと報告を受けました。確かに平凡凡庸たる私達から見たら、その美しさは『奇』であり、また特別視されるものでしょう。そういう意味で奇特というのは的を射ていますね」

抱腹絶倒だ。

私独りだけであつたら、顔は歪み、腹筋は攣り、芋虫の様に地面を転がっていたらろう。

シーツの連結がギリシャ調の服装だと？

グルグルに巻かれた姿が聖女でギリシャ彫刻だと？

木乃伊状になつた四糸を、あまりにも伝聞とかけ離れた姿を脳裡に浮かべる。

ギャグも大概にして欲しい。私を笑い死させるつもりなのか。

「……くっくっく」

「む？　どうかされましたか」

「否、気にせずに。では、何故源は生徒会長が襲われたと訝しがっているのだ？」

漏れた笑いを慌ててフォローする。未だ感づかれてはいない。

「知つての通り、生徒会長は謙虚な方です」

褒めちぎる源。

私の腹筋を壊す事が目的なのだろうか。震えを堪えている為、腹部に痛みが走ってきている。

あの御嬢様の何処を以って、謙虚と評するのか。上の姉二人と比較すれば、確かに謙虚かもしれないが。しかし、四条の本質を知らない人間からしてみれば、謙虚という見方も不可能ではないか。

「恐らく、我々の警備に不備があり、その隙をつかれて生徒会長は襲われたんでしょう。そう、我々の責任です。しかし、しかしです。生徒会長は少しもその事に触れはせず、襲われたとも仰らなかつた。我々の失態を無かつた事にして下さつたんです。並みの生徒会長ならば、たかが学校の役職とは言え、地位が高い会長が襲われたんだ、我々を頭ごなしに怒鳴りつけても不思議は無いです。ですが、あの方は違う。怒鳴ることなく、我々の身の安全を一番に考えてくれたのです！」

悪いが全くの見当違いだろう。

見当違いを指摘するのは一先ず置いておいて、四条が『襲われた』と言っていない事が気にかかる。教師に発見された当初は、私に『やられた』と言っていた様だが。

「……私に襲われたと言っていた気がするのだが」

「ええ、あれこそ我々を庇つての言だと思えます。身内の貴方に襲われたのであれば、我々警備のものに非はありません。それに、貴方が生徒会長に対して牙をむくとは誰も思いませんよ。だからこそ、今回の襲撃は何も無かつた、只の生徒会長の妄言で終わる事になるでしょう。そう、生徒会長は一身に犠牲を引き受けてくれたのです！」

源が生徒会長崇拜モードにクラスチェンジしてしまった。

このまま放置していると、『現世のイエス』だとも騒ぎかねない。そういつ括りだと、私はジューダスになるのだろうか。誰にも銀貨

網走監獄の観光を終え、私達は阿寒湖を経由し、釧路へと南下して行った。二日目は釧路のホテルで夜を迎える事になっていた。源と平と共に警備ルートの強化を検討し、彼らの部屋で仮眠を取る。敢えて、四条の元に行く必要は無いと判断。お陰で、警備のシフトに入れられてしまったが、無事に夜を過ごせたのは幸いである。

その後、一日釧路で観光した翌日には、札幌へと空路で渡る。余談だが、稲川ハーレムのベタベタ振りが地方TV局のアンテナに引っ掛かり、『ハーレムの実態』として地方のお茶の間を楽しませた。札幌で悟史一味を見掛けたが、心なしか悟史の頬がこけている様に見えた。

そして、何事も無く、最終日・函館へと我々は移動する。晴天続きの空に、厚い鉛色の雲が覆い被るうとしていた。

Phase 11 : 災厄北へ - Interlude 2 - (後書き)

Interludeの章終了。
舞台は函館へと移ります。

ところで、皆様ネタは幾つ分かったでしょうか。
少々マイナですから、分からないかもしれないかもしれませんが……

函館の観光は他の観光場所と同様、各班の単独行動が可能であった。私達も御多分に洩れ^もず、勝手気ままに函館の街を散策していた。朝食をホテルで摂ったにもかかわらず、折角漁港に來たという事で海鮮丼を食したり、メモリアルシップ摩周丸内の観察をしたりと、函館を満喫しつつ午前中を過ごした。その際、摩周丸の甲板で東西コンビが某映画のワンシーンを再現しようと試みた結果、甲板から海へとダイブ寸前だった事は青春のページとして私の記憶に刻まれている。

朝食を軽めに摂った後、東西コンビの彼女達を含む一団と合流。一路、五稜郭へと歩を進めた。

その道中の事。

「旦那って西原君や東君と同じ班だったんっすね、ちょっとびっくりす」

クリクリとした瞳を向ける玉城。ポツキーを口に啞えたまま、器用に喋っている事の方が私としては驚愕に値する。

「何故^{なにゆえ}そう思うっ？」

「うーん、や、まあ何となく思ったんすよ。ほら、りゅう君って言えば、ハーレムの御目付役とか執事役とか言われてるじゃないっすか。執事役ってのは多分、北条寺さんと由宇ちゃんが言ってるからだろうけど」

そう言っ^てポツキーを上下に揺らす。

何の意味もない行動だろうが、その口元で揺れ動くポツキーをつい

つい眼で追ってしまふ。

「だからさ、修学旅行も稲川君に付き合っつて、ハーレムの管理をしているのかなつて。ほら、稲川君、一番最初に班決めした時はあんなに騒いでたけど、その後は何にも言わなかつたじゃないつすか。こりゃー、またりゅう君が貧乏くじ引いたのかもねつて皆で言つてたんすよ」

そんな事をクラス連中に思われていたのか。

クラス連中もハーレムの動向には気を使つてしていると見るべきか。結果としては外しているのだが、目の付け所は鋭いという感想を持つ。それよりも、クラスの皆とは言うものの、女子連中だけだと思つが、がそう思つている時点で、『何となく』『悟史と同じ班だと思つ』では無い様な気がする。ある程度の確信を持つたクラスのコンセンサスではないか。突付くとまたぞろ面倒臭い事になるだろうと、沈黙を守る事にする。

余談だが、ポツキーの運動は上下から回旋運動へと移行している。クルクルと回るポツキーの先は見えていても飽きが来ない。

「まあ、あたしとしては、こうなつたんで大歓迎つすけどね」

「私は少人数行動の方が好ましいが」

「まーまー。大人数の方が何かと楽しいつすよ。ところで旦那、ポツキー欲しいつすか?」

「否、そういう訳ではない」

「ん? でも、さつきからじーっとみてるじゃないつすか。……ああ、そういう事つすか。しょうがないなあ、ほいっ」

勝手に納得し、こちらにポッキーを差し出してくる玉城。差し出してくるといつても、自分の啜えているポッキーを顎突き出すことで　しかも閉眼で　こちらに渡そうとしてくる。一体、どうしろというのだろうか。否、正しくは何を望んでいるのかは理解してはいるのだが、そのような破廉恥な事出来る訳が無い。

「ほらほら」

近寄ってくるな。

顔を寄せてくるな。

しかも、照れながら実行するな。

焦って飛び退きたいのをぐっと堪え、表面上冷静を装って玉城にデコピンをしておく。

「あうちっ！　何すんのさ、りゅう君。折角、ポッキーの食べさせつこが出来る所なのに」

「TPOを弁たまえろ、風紀委員。他の連中が凝視している事に気付けない！　通行人の好奇心な視線にもっと敏感になれ！」

「……あ」

玉城がポッキーをこちらに向けてきた時から、クラスメートの視線がこちらにチクチクと突き刺さってきていた。しかも、軽蔑や嘲りといった冷たい視線では無く、興味深げにこちらを見守る生暖かい視線であった所が私としては悩ましい。ただ、物事には例外があった、後藤だけが修学旅行初日の夜に見せた、あの呆れた視線を送っていた。

見られている事に恥ずかしくなったのだろう、玉城は赤面しながら

も、誤魔化すような笑みで視線を送っている友人連中に言い訳を言い始めた。言い訳が早口になっている事は、状況を肯定している事と誤解され易い為、必死の説得は無意味に終わるだろうと推測。私はと言えば、特にコメントする必要も無いと判断したのでさっさと五稜郭の方に足を向ける。すかさず、東と西原が

「隅に置けねえな、りゅう」

「ああ、玉城とそういう仲だったとは、知らなかったわ。道端でいちやつくバカツプルレベルまで進行してらっしゃるとは、俺らもまだまだ甘いなあ」

「そうだよなあ。流石に恥ずかしくてあんな事したことねえよ」

「全く全く」

等と絡んできたのだが、これを一蹴しておいた。全く、何でもかんでも恋愛沙汰に結び付けるのは短絡的な思考と言わざるを得ない。それとも、青春真っ盛りな高校生思考とでも名付けておいた方が適切なのか。

結局、五稜郭に着くまで散々からかわれ、良い迷惑だった。とは言え、ハーレムの事とは無縁に、こうしてクラスメート達と盛り上がった事は、私の『高校生生活』がクラスメート標準の『高校生生活』を送れている様で、自分の立場を忘れて楽しんでいた事は間違いが無い。

そして、それ故に
私は失敗を犯した。

日は厚い雲に覆われ、最高の散歩日和とは言い難いものの、暖かな空気は五稜郭跡地の散策にもって来いと謂えた。はしゃぎ回る連中を尻目に、私は周りの景色に目を向けていた。過去、ここで戦闘が実際に起きたのだとすれば、一介の兵士は何を思い、何を護る事を胸に秘めて、迫り来る相手に銃を、剣を向けていたのだろう。他人の胸の内、しかも時代背景が全く異なる兵士達の胸中等、私如きが窺い知れる筈も無いが、思考は留まる事を知らなかった。だがしかし、思考は止められた、一本の電話によって。

「どうした、悟史？」

『……………』

「……………」

『……………んた……………んだよ！』

箆こもった声と至近距離から聞こえる物が擦れる音。

間違い無く、問答無用で悟史の声であるが、何と叫んでいるのかは聞こえない。

私は何とか聴き取ろうと受話音量を最大まで上げ、耳を押し付けた。

『何か言ったらどうなんだよ！ 如何して！ うおっ！』

物に当たる音がする。微かに鳥の声と女の、そう……………女の悲鳴。

瞬間、様々なケースを脳内で構築し、其々における対処法を考慮し、

そして最悪ケースにならない事を祈る。

そして、それは儚く
祈りは無残に踏み潰される。

『逃げる！ 麗華ちゃん！』

悟史の声が私を焦燥へと駆り立て
同時に私の全ての感情を凍結させ、無感情にさせる。

緊急事態。最悪ケース。

通常策では程遠い。良策では生温い。適策では未だ足りない。私が
執行すべきは最善にして最適の策。思考しろ。思考しろ。思考速度
は無策から最速探索へ。熟考しろ。熟考しろ。護衛対象の動向を予
測し、未だ見ぬ殲滅対象を仮定し、最良の結果を齎す過程を構築し
後進する。幾重にも分かれるケースは排除せず、そのまま後進させ、
現在地点に帰還させ、逆に前進させる。検討しろ。検討しろ。己の
ミスは護衛対象の危険に等しい。その重責を刻み込め。
携帯をイヤフォン・マイクへと接続切替、負荷は排除、最小限装備
を装着。執行準備完了。

今以て、悟史の居場所は分からず。携帯から届く悟史の会話を頼り
に割り出すしか方法は無い。未だ行動を取れない事が歯痒くも、悟
史の声に傾聴する。

『いつから先は……』

『……畜生！……』

『野郎!……』

そして

『……手前らみたいな奴はここで仲良く埋まったりやいいんだ!』

鳥の声と『埋まる』という言葉と、頻繁に聞こえる何かにぶつかる音、それも石材と金属の音。

函館において、高校生が足を運ぶ場所の内、海に近い、墓地でしかもかなり密集している場所。そう、該当するとすれば、『外人墓地』が最適か。

私はその場を離脱、全速力で大通りへと駆けて行く。背後で後藤達がか叫んでいたが、立ち止まって応える時間も惜しい。耳元では悟史の苦しげな息遣いが聞こえているのだから。私は彼らの声を振り切り、タクシーを呼び、乗り込む。すると、私と共に乗り込んでくる輩やからがいた。玉城だ。降ろしている時間は無い。

「くっ……外人墓地方面へ! 全速でお願いします!」

「運転手さん、お願い! 急いで!」

「り、了解」

タクシーは急発進する。

「玉城。何故付いて来た!」

「りゅう君。あたし達に説明もする暇も無い程に緊急事態なんでし

よ？ だったら、少しでも協力するっす。あたしだって風紀委員っすし、いざとなれば」

「風紀委員はあくまで学校内での役職だ。今回の事態には」

「人材派遣だって同じっすよ！ 会長から依頼されてるらしいけど、やっぱりりゅう君だって単なる高校生でしょ！ 学外とか学内とか関係無い！」

「……………」

言い返す事は容易い。だが、それは玉城に依頼内容を教える事になる。

反論を考えている余裕は余り無いのだが、余りカスの頭脳で搾り出そうとする。そこに悟史の声飛び込んで来た。息も絶え絶えに、搾り出すような声だった。

『りゅう。……………ごめん』

「何故謝る」

『ゲホッ……………やっぱり俺弱いわ。麗華ちゃんが……………狙われたけど……………時間稼ぎがせ、ゲホゲホッ……………一杯だった』

「それで十分だ。彼女は？ お前は？」

『逃げてると……………思う。……………俺は一人がかりで、ボコボコに……………ゲホッ、やられただけ』

「十全だ」

『りゆう』

「なんだ」

『頼むっ！ ゲホツ……麗華ちゃん達を』

「私を誰だと思っている」

『ハハツ……そうでした。俺はこの墓地で待ってるから』

「ああ、休んでろ」

通信を終える。

横で真剣に耳を傾けている玉城。大筋の話は理解されてしまったのかも知れない。だが、それだけならまだ到達していない。ならば、良いという事にしておこう。

「玉城。お願いがある」

「何すか？」

「このままタクシーに乗って、外人墓地まで行き、悟史の手当てをして欲しい。……運転手さん、幸坂との交差で一旦降ろして下さい」

「はい、良いですよ」

「りゆう、りゆう君！ 一人で助けるつもりですか！？ そんな相手さんが何人いるかも分からないのに！」

玉城と私はそれ程親しかった訳ではない。だから、私と一緒に居る時間も、悟史と比較してしまえば、月とすつぽん、それ以上に差が開いており、当然お互いにお互いの事を良く知っている訳では無い。だから、だからこそ、ここでコイツに教え込んでおこう。

制服の内側に常に在る、薄い漆黒の手袋を嵌めながら、滅多に見せない貌かおを見せ付けて

「私オレを誰だと思っている」

Phase 12 : 災厄北へ - last day 前 - (後書き)

……Phase 12 脱稿です。

後半から何だかシリアスですが、お付き合い下さい。

次回には終わる事でしょう……多分。

感想、誤字脱字等御座いましたら、ご一報下さい。宜しくお願い致します。

柵に身を預け、ぼうっとしていている男が独り。制服には草と泥が付き、これまで地面に倒れ伏していた事を物語っている。整った顔には、殴られた形跡と血を流した痕跡が同居しており、折角の美形を台無しにしている。

そんな満身創痍な青年に少女が近寄り、声を掛けた。

「大丈夫ですか？ 稲川君」

声に反応して、閉じていた目蓋をゆっくりと開ける。

ポニーテールの少女 玉城千里 の姿を見て、ふっと微笑を浮かべた。

「む？ 何か変っすかね」

「何でもないよ。でもね、りゅうが他の人を寄越すなんて……ふう、滅多に無いからさ。一から十まで何でも自分で背負おうとするし……実際背負える奴だから。随分、あいつに信用されてるんだね、玉城っつて」

「そうつすかねえ、それなら嬉しいかな。っと、少し傷の方を見せて下さいな」

薄汚れた制服を捲くり、傷の具合を確かめる。

幸いにして、肋骨骨折等という重傷には至らず、湿布で間に合う程度の軽症であった。とは言え、内臓に多少のダメージが無いと言え、嘘になるだろう。

「うん、重傷じゃなくてよかったっすね。一三日痛むでしょうが、湿布貼っとけば治るっす」

「そりゃ安心したよ。さっきまでは結構痛かったからね」

「慣れてなきや、そうかもね」

そう言っつて、稲川の制服に付いた泥を払い、買っておいた飲料水を渡す。

眼前に広がる大海原から吹き付けてくる海風が二人を撫でる。暫し、二人の間には沈黙がおりていた。

「そう言えば、稲川君ってりゅう君と昔馴染みなんだよね？」

「あ？ ああ。中学からのだけだな。実は幼馴染がいるとかいないとかって話も聞いたことがあるけど、少なくともうちの学校では、俺が一番古い馴染みだと思う。で、それがどうした？」

「特に如何したっていうんじゃ無いっすけど……りゅう君って自分の事を『オレ』って言ってましたっけ？ あたしがタクシから降りるちょっと前に、そう言っつたような気がするんすけど」

「りゅうが『オレ』ねえ……あー、そりゃヤバいな」

そう呟き、顰め面で頭を掻き毟る稲川。
それを不思議そうに眺める玉城。

「ヤバインデスカー？」

「なんだ、その似非外国人。えーと、俺も実際にりゅうの口から」

オレ』と聞いたのは一回だけだ。人伝にもう一回だけあるかな。後者は中学2年の時で、詳細は良く知らない。前者は中学一年の時です」

ペットボトルを傾け、喉を水で潤す。一拍おいて、稲川は話を続ける。

「……色々あって、その時には十五人を文字通り『病院送り』にしたんだ」

外国墓地から逃げ出した当初は、それこそ稲川の安否が気になって仕方が無かった三人組ではあったが、大通りに出る直前に前から現れた一見して先程襲撃してきた男達の仲間と分かる男がこちらに駆けて来て、さらに後からも追い駆けてくるのが見え、従って、稲川は男達に『負けた』事になるが、この緊急事態にそれを気付けたというのは酷だろう。目の前の路地に飛び込むのが精一杯になっていた。無論、自分達が何処を走っているか等を気にする余裕は無い。只只管に我武者羅に自分達の前にある路を走るだけ。

「……ね……ここ何処？」

「知らない、っけど、麗華分かるっ？」

「分かる訳っ、無いっ、わよっ？」

息も絶え絶えに言葉を交わす。

道が分からないのも無理は無い。只でさえ、旅行先という不慣れな

場所であり、尚且つ今は方向を確認している筈も無く、地図を開く暇も無かった。これで現在位置を分かないのは当然の事。

「……教会」

「見りや分かる！」

「自分で尋ねておいて、自分で答えるのも珍しいわよね……って和んでる場合？」

「そして、追っ手」

「「へえ……って冷静過ぎるわっ！」」

教会の目前で対峙する女子高生と背広の怪しげな男達というシュールな光景。

女子高生達の前方には二人、後方には一人男が控えている。人数の上では三対三ではあるが、男達の体格を見るに敵わない事は歴然としている。

「正に絶体絶命、麗しき女子達^{おなこ}は果たして無事生還出来るのか」

「……ナレーションどうも」

「話している所悪いがよ、さつさとそこのお嬢様を渡してくれないか？ 渡してくれたら、お前達二人は見逃してやるけどよ。ほらさつさと」

「五月蠅い。話の腰を折るな。それに私達が麗華^{なかま}をみすみす渡す訳が無かるう？」

「……まあいい。一緒に連れて行けば良いだけの話だ」

強気に答える由紀。しかし、男達が有利である事は覆しようも無い。麗華達を連行する運搬手段さえ整えば、何時でも連行可能なのだから。

今迄口を閉じていた前方の男その二が何かを見つけて、口角を上げる。サングラスで目を見る事は出来ないが、見れば厭らしく目許も歪んでいる事だろう。

「ほら、お迎えが来たぜ。心の準備はいいか」

「……由宇、由紀。さっさと二人は逃げて。標的は私一人でしょう？ なら、二人はさっさと逃げて、警察とか先生に連絡して下さいまし。今更ですけど」

「馬鹿言わない。もう今更。三人一緒に突破するのが最善」

「そうだよ、麗華。何としても、ここを突破しなきゃ……と言って、も、どうする？」

「連れ込もうと接触する時が一番良い。一気に突破」

「そうね……先に謝っておくわ、二人とも。巻き込んでゴメンなさいね」

「後でたっぷり奢って貰うから構わない」

「私も」

小声での遣り取りの間に、連行用の車は徐々に近づいてくる。そうして、黒塗りの大型ヴァンは後方の男の近くで停車した。

「りゅうつてさ、昔から何でも出来る奴でさ。俺らからして見れば、尊敬の対象であると同時に、畏怖の対象でもあったんだ。分かると思うけど、自分達の能力で計り知れない者つてのは結局得体の知れない者つて訳で、中学生のガキ共は無視する事で自分達を守った」

「って事はりゅう君独りぼっちだったんですか」

「クラスに限らず、俺らの学年全員が中間試験終了後くらいにはそういう状態になっていたなあ、ただ一人、映子を除いて」

「ははあ……何となくオチが読めてきましたよ」

「それじゃ、途中の話は全てカットして最後の所だけ。一悶着だけでなく、二つも三つも悶着があつて、ある中三の先輩連中が人質として映子を連れ去つたんだ。その頃には、俺も自分の馬鹿さ加減に気付いて、りゅうの奴と仲直りしたんだがな。で、りゅうがその先輩連中に呼び出される前にさ、言つたんだよ」

稲川は脳裡に過ぎ去りしあの日を思い出す。

机の上に乱暴に置かれた書置きを目の前にして、感情を一切合財捨て去つた能面の如き友人の姿。常日頃から何処か超越した印象を受けていたが、これ程までに感情を封じ込めた姿は未だ見た事は無く、それが彼をさらに異端たらしめていた。

夕日が差し込む教室で、その場に居合わせた稲川達に一言告げる。

『……救急車の手配を』

協力を申し出る稲川やその友人達に向けた表情は何処までも冷静で、告げる言葉は何処までも激昂していた。

『これは私の問題だ。私が幕を引くのが道理。それにしても……私オレを呼び出せば良かったものを……朝霧をダシにした事を後悔させてやるっ』

「今でもあの声は忘れられないなあ。何と云うか、トラウマ染みているかな」

「そんなに怖かったんすか？」

「ああ。一緒にいた仲間の中でチビッた奴とかいたし。で、俺らが十分くらいして屋上に行った時には、屋上は呻うめき声のオンパレード。呼び出した十五人全員が何処かしらを骨折。主犯格だった先輩は鎖骨、大腿骨と後肋骨数本持ってかれてたかな」

「……え？ えと、その時りゅう君中一っすよね？」

「年齢を詐称してなかったらそうなんだけどな。とは言え、りゅうも五体満足無傷ですって事は無くて、五針くらい縫ってたけど。何でも、先輩連中が使ってた角材が掠ったとかで」

「そ、そうっすか。で、映子ちゃんはどうしたんですか？」

「無事。制服が少し破かれた程度で済んだよ。だからさ、俺が言い

たいのは「

ぴっと人差し指を立てて、玉城に諭すように言う。

「アイツを怒らせたら、相手さんは無事に済む訳が無いって事」

Phase 13 : 災厄北へ - last day 中 - (後書き)

随分間隔が空いてしまいました……すみません。

今夜か明日にこの後編を投稿する予定です。宜しくお願い致します。

Phase 14 : 災厄北へ - last day 後 -

男達が己の成功を確信した時、
そして麗華達が己の窮地を益々感じた時、
それは起こった。

「「「「はあっ!?!」「「「「「

ヴァンに近付いた男は、勢い良く開かれたドアに吹き飛ばされる。
この場に居合わせた者全員に浮かんだであろう疑問は、ヴァンから
降り、吹き飛んだ男を踏み潰した人物の登場によって、綺麗に忘れ
去られる事になる。

そう、ヴァンから降りて来たのは他ならぬ人材派遣委員会委員長だ
った。

「執事!」

「執事さん!」

「ひつじ……」

ヴァンに近付いた男を吹き飛ばし、倒れた所を踏み潰し、行動を封
じておく。一連の動きを終えた私に待っていたのは、ハーレム住人
からの熱烈な歓迎ではなく、歓迎したくない呼称による歓迎であっ
た。内一人はその呼称すら言えずにいる。

己の推定よりも事態の進行は、大分良好だと思って良い様だ。誰一

人欠ける事無く、悟史以外の怪我人も居ない。後はこの三人を安全な所まで送り届ければ、当面の危機は回避されたと言っても良い。しかし、救出役が私一人である以上、『安全に送り届ける』のは男連中の排除と同時並行には行くまい。ならば

「さつさと後の道を走って行け。突き当りを左に行けば、外人墓地だ。悟史が居る。疾く行け」

「貴方はどうするのよ？」

「そこのお客様を持って成さなければならぬだろう？」

「麗華」

話をしている最中に近寄ってきた男達を避ける様に、北条寺と多村由宇を引く張る榊由紀。現状を理解し、迅速に行動出来る彼女の様な人物は非常に有難い。そのまま、榊が二人を路地へと引く張って行くのを確認し、私は一つ胸を撫で下ろしたい気分になった。

だが、まだ全てが済んだ訳ではない。私がここで彼らを抑えなければ、安心して学園に帰れそうも無い。

「さて……少し話でもしませんか、沢田組の皆さん」

「貴様っ！ 何故それをつ！」

「熱くなるな、馬鹿野郎。小僧、貴様如何して我らが沢田組だと知っっている？」

騒ぐ男と冷静に応える男。その態度、風体からも後者の男の方が役職が上である事を覗かせる。話に乗ってくれるとは思いもしなかつ

たが。

「そう素直に答えるとも？」

「兄貴！ コイツさっさと潰して、あのアマを連れてきましょうよっ！」

「黙れっ、馬鹿野郎！ この小僧がわしらの車から出てきた時点で、こっちの損害の方がでかい事は分かってるんだ。それぐらい自分の頭で考えろっ！」

「え、いや、良く分からないんですが……」

「引き際は肝心だ、小悪党」

「て、手前え」

『兄貴』と呼ばれた男は自分達の状況が良く見えているようだ。私が運搬用ヴァンから登場した時点で、運搬役が舞台から脱落している事、又最悪ケースを考慮するならば、ヴァンの車種やナンバ、下手をすれば運搬役までもが官憲の手の内に入っている事になる。被害をなるべく最小に留めて置く為には、この場合一も二も無く証拠を隠蔽して逃亡しなければならぬ。

ただ逃亡する際に、後顧の憂いを断つ、否今後の展開に備える為にも出来る事はある。それは如何にして相手が自分達の手を読んできたのか、そして相手が一体何処の筋の者なのかという事の確認である。『兄貴』の問はそういう考えが発露したものだと思える。

「悪いが教える事は出来ない。企業秘密故」

「ガキの癖につ」

「……そうだな。多少強引にでも聞かなければ、我々の気も晴れない」

「兄貴っ！」

「ああ。さっきの小僧と同じく潰れてもらおう」

その言葉に、私の何処かで歓喜の叫びが上がった。

今度の相手は少しは愉しめそうだと。

「私も嬉しいよ。何せ」

コキリ、と指が鳴る。筋肉が、骨が稼動する事を心待ちにしている。

「友人が潰されて、私の気も晴れていないのだから」

目の前の光景は非常に目の毒だ。何せ美男美女が抱き付き合っているのだから。

その光景を遠巻きに眺めながら、写真にしたら一枚何円で売れるかな、と割合真剣に思案する玉城。同時にそろそろ自分の目の前でイチヤイチャするのは止めて欲しいのも事実ではあった。

「確かに我が身を挺して身の安全を守ったのは事実っすけど、それは稲川君だけじゃなくてりゅう君だってそうっすよねえ。かと言って、りゅう君に抱き付かれても、それはそれで面白くないっす……」

「玉城さん、何か言った？」

「否何でもないっすよ、稲川君。つとあれ、電話？」

慌しくポケットの中で震える携帯電話。

その慌しさに急かされる様に玉城は電話に対応する。

「はいさ、玉ちゃんっす」

『その呼称は本気で広めたいのか？ ならば一役買っが』

「いやいやいや、冗談っすよ！ って、りゅう君！ 終わったんすか、こんな短時間で？」

『ああ。無事完了した。そちらはどうだ？』

「まあ、何とつつすかねえ。こちらとしては目に毒というか、居心地が悪い空気が流れてるっす。皆無事な事は間違いないっす」

ふっ、と息の漏れる音がする。珍しくりゅうが微笑を漏らしたのだろっす。

『それは安心した。そちらは任せた、風紀実行委員』

「は、はい」

切られる会話。

既に通信の途絶えた携帯電話を見て、りゅうの身の安全を尋ねていなかった事を思い出す。無機質な携帯を眺めても、それは応えてく

れる事は無かった。

三人目との通信を終え、ほっと気を緩める。

全ての後処理も目処が立ち、無事に学校へと帰還出来る事は保障された。目の前に倒れ伏す沢田組組員達が官憲に引き渡されれば、私の任務も一段落となる。

保険として服に仕込んでおいた紐を取り出し、上腕部を縛る。『兄貴』と呼ばれていた男が使用したナイフが上腕に比較的深く刺さつてしまい、先程からかなりの出血が確認出来た。とは言え、他の部位には特に目立った損傷も無く、この程度の裂傷で済んだのは幸運だろう。

遠くの方からサイレンの音が聞こえてきた。これにて一件落着きしよう。

後日談。

治療の為に当日はホテルに帰還することが儘ならず、結局ホテルに着いたのは生徒がホテルを出発する時間ギリギリになってしまった。しかも間の悪い事に誰かが私の行動を『悪漢からハーレムを救出した』等という英雄譚に仕立て上げてしまったせいで、ホテルに到着するや否や、熱烈な 特に男達からの 歓迎を受けてしまった。

「おめえーーーーーすげえよーーーー！ 格好良過ぎるよっ！」

「……………否、偶々だ」

「準竜師！ 一生付いていきますっ！」

「それは止めてくれ」

「いえっ！ 拒否されようと何とでもっ！」

「……好きにしる」

「しーーーーしょーーーー！ 水臭いですよっ！ 何であの時言っ
てくれなかったんですか！」

「あの時は時間が無かった。説明しなかった点については謝る」

「抱いて！ 抱いてくれ！」

「人生考え直せ」

と、玄関前はカオス状態になっていた。

その熱気は学校に帰る空の旅でも冷め切らず、遂には解散の時まで騒がしかったのには閉口した。最後の最後まで、一部の男達からの『抱いて』コールが冷め切らなかったのも、一応粛清もしておいたが。

やっと解放され、修学旅行の終わりを痛感した頃には既に日は暮れていた。このまま帰宅してしまう前に、私は報告の為に生徒会長室を訪ねた。本質は真面目な生徒会長である四条。解散の時にも姿が見えなかった辺り、既に生徒会長室に引き籠もっていたのだろう。軽くノックし返事があったのを確かめ、私は中に入った。そして、いきなり抱き付かれた。

「四条。私も旅行で疲れているんだ。早々に帰宅したい。早く報告を終わらせたいのだが」

「……」

「四条。悪いが」

「……聞いてなかった」

「何をだ」

「……電話で怪我の事」

「特に報告する事もなかるう？ 北条寺が怪我したならともか」

「心配したんだからっ！」

上げた顔は酷い泣き顔だった。心無し、抱き付いている腕の力も上がっている。

私は非常に驚いていた。今迄任務を伝える時も、任務の成果を伝えられる時も、四条はその時だけは生徒会長の仮面をしっかりと身に着け、そして内容にのみ集中を注いでいた。そう、私がどれだけ苦労しようと、そんな事にはお構い無しだった四条が、任務の内容とは関係の無い私の身を案ずるとは。

「生徒会長。私は無事ですので、報告を先に済ませたいのですが」

「そういう事を聞きたいんじゃない！ どうして私にあの時言ってくれなかったのっ！」

「……………OK。どうやら今日は報告出来る様な状態じゃないな。後日、報告する」

「りゅうちゃん！」

四糸を引き剥がし、生徒会長室を後にする。後から色々と言が突き刺さってきたが、振り返る気力も無く私は一目散に家を目指した。

騒がしい修学旅行だった。

ただ、私は思う。

皆が無事であって良かった、と。

Phase 14 : 災厄北へ - last day 後 - (後書き)

..... Orz

予告通りに投稿する事が出来ませんでした。すみません。

途中の演出をどうしようか、困った結果の遅延でした.....お察し下
れよ.....

Phase 15 : 災厄の逆襲？ 前

特にこれといって変わり映えのしない日。

何の変哲も無い五月下旬の平日。

中間審査を終え、体育祭へと至る束の間の平穏。

私は珍しく、私的な用事で雑事から逃れる様に学校を後にした。

「あれ、師匠知らない？」

「さあ？ ボクも良く分からないんだけど。何だか用事があるとかで、SHR終わったら消えちゃったんだよ」

「そうか。折角、師匠にこの間の礼をしようと思ったんだがなあ」

「この間って……ああ、アレね」

放課後の教室。

帰宅の用意をしている朝霧とりゅうの姿を探している後藤の何気ない会話。

「アレは結構というか、随分りゅう君に負担かけたよねえ。駄目だよ、あんな風に自分の落ち度をりゅう君の力で何とかしてもらおうなんて」

「面目無いとは思ってる。でもよ、あん時は切羽詰ってさ。師匠に頼る他無かったんだ、なあ？」

後藤が教室に残っている男連中に同意を求めると、全員が全員、首を縦に振り、同意の意を示した。それを見て呆れた様に、朝霧は溜息を吐いた。

「あのさあ、ボクらもう高三なんだよ？ 自分の勉強ぐらい自分で面倒見きれなくてどうすんのさ？ 何時までも、今回みたいになりゅう君が助けしてくれる訳じゃないんだよ？」

「……分かってる」

「分かってるならもう言わないよ」

話の中心にあるのは先日の中間考査前での出来事。

修学旅行から帰ってきた高三生を待っていたのは、範囲が絶望的に広い中間考査であった。元々、一学期の中間考査は範囲が狭いというのが通例であるが、高三の中間試験に限っては今迄の高校で修得した範囲全てという、一部の生徒を除き、拷問に近い試験であった。一組の男連中も例外ではなく、どちらかと言うと拷問を最も過酷に感じる生徒達と言っても過言ではなかった。何せ、暇さえあれば、ハーレムに対する羨望とその中心人物に対する殺意を募らせ、殺人計画を練りに練り上げていたのだから。同時に、失敗には終わったが、修学旅行における作戦も練り上げていたのだから、勉強に充てる時間等存在しなかった、というのが彼らの弁である。

では、切羽詰った彼らが取った方法とは何であろうか。そこに、りゅうが絡んでくるのである。何故ならば、常に試験では学年で五本指に入るからだ。一組の男連中は恥も外聞も無く、一斉に彼に対して土下座をし、放課後に勉強を教えて貰うように頼み込んだ。当然の様に当初は拒否の姿勢を崩さなかったが、流石にそれだけの大人数が土下座をして頼み込んでいるのを無下には出来ず、渋々ながら了承した。

そこから一週間、中間考査が開始されるまで、放課後にはりゅうの授業が行われていた。特殊な教え方をしている訳ではなかったが、ポイントを押さえた教え方と生徒側の授業に対する態度の違いが頂を奏したのである。授業内容はスムーズに彼らの頭の中へと注ぎ込まれていった。それに比例する様に、授業を聞きに来る生徒の数が多くなつていったのは驚きである。終いには、教師陣、更にはアフロな校長まで登場した時には、鉄面皮な教師役もしか顰め面を隠さずにいられた。なかった。

結果として、一組の男連中は赤点を免れる所か、成績優秀者も登場する始末。一組の平均点が他の組と比較して断トツに高かったのは、教師一同目を丸くした。ところで教師役の当の本人は、学年順位五位といつも通りの好成绩を取っていた。

「ところで、師匠の用事つて何だろうな」

「うーん、気になるよねえ」

「……今更だけど、後付けてみないか？」

「そんなのりゅう君に悪いよっ！」

「と言いつつ、慌てて荷物を積み込んでいるのは何故？」

「……あはは。じゃ、行こうかつ！」

「行く気満々じゃねえか！」

こうして、二人はりゅうの後を追い駆ける事になる。

「……ひつじ発見」

「え、どこどこ？ 執事さんどこ？」

「りゅうが何処に居るって？」

「りゅう先輩ですか？」

学園近くにある商店街。

偶々出張アイスクリーム屋の屋台を見つけ、アイスクリームを頼張っていたハーレム一向は公園のベンチに座っているりゅうの姿を見つける。ちなみに今日のハーレム人員は悟史、多村由宇、榊由紀、そして原杏子の四人である。他のハーレム住人は部活等で今日は参加していない。又、悟史のサッカー部も本日は休部である事も記しておく。

「ベンチで昼寝かあ。良いご身分というかリストラされた不憫な身分みたいというか」

「でも、りゅう先輩って普段そんな事されます？」

「否、りゅうに限って、外で昼寝なんてしない筈だけど」

「多分、人待ってる」

「それあるねえ。じゃあ執事さん、誰待ってるんだろ」

なるべくりゅうの位置から見られない位置に移動して、ベンチに座

る彼を観察する。

すると、榎がりゆうに接近する人物を目敏く発見した。

「……多分、あの人。美人」

「うひゃ、美人さん！ 髪綺麗！ 背高い！」

「凄いです！ あれぞ大和撫子みたいで！」

「うーん、確かに。りゆうも何だかんだ言って隅に置けないじゃねえか」

他三人が純粹に登場した人物の美貌に驚嘆している中、悟史だけは何処か憂いを帯びた表情をさせていた。他三人がこの顔を見ていなかったのは幸いか、それとも不運というべきか。件の女性は彼らの予想通り、りゆうの待ち人であった様で、りゆうと二三言葉を交わした後、二人で駅方面へと歩いていった。

「どうする？ 後付けてみようか？」

「どうしましょう？ 私はちょっと興味あるんですけど」

「本当はこういう事はやりたくないんだけどなあ。まあ、何時も何時もからかわれているお返しという事でやってやりますか」

「よし！ じゃ、れっつごー！」

「ちょっと待つ」

テンションが高くなっている多村に水を注す榎。

そのタイミングの悪さに眉を顰めつつ、どうしてと中断した理由を尋ねる。

「あの人、多分剣士。私と同じ雰囲気を纏ってる気がする」

「うーむ、確かにそんな気がしなくもないけど。で、それが？」

「なら、無闇に距離を詰めない方が良く。ある程度、距離を置かないと」

「そうだな。それにりゅうの奴も相当鋭いからなあ。結構距離をあけないとな」

「それに……」

「それに？」

記憶を探る様に、米神に手を当てて思い出す仕草をする榊。

「私、あの人知っている気がする」

「えーっ？」

「よし、それじゃそれは追々思い出して欲しい。今はりゅう達を見失わない様に行こう」

「行きましょうー！」

こうして、また異なる一団がりゅうを追跡する事になった。

Phase 15 : 災厄の逆襲？ 前（後書き）

中々時間が取れない今日この頃ですが、
時間の合間合間を使って書き上げましたPhase 15。
原杏子って誰ですか？という質問はプロローグを見てからお願いします。

Phase 16 : 災厄の逆襲？ 中

久しぶりの再会。

何時もながら唐突な呼び出しはコイツの専売特許とも言える。私をアゴで扱き使う数少ない人間であり、またある意味気の置けない仲間でもある。

「でさ、そいつがまた臭いんだよ。もうさ、ドブ以下の匂いがぶんぶんするんだ」

「ほう。お前がそう評するとは珍しい」

「だろ？ ホント酷いんだって。でまあ、話は変わるとして」

眉目秀麗、見目麗しい大和撫子な外見を大きく裏切るマシンガントーク高速言語。さらには多少下品にも聞こえるその口調。黙って微笑んでいるか、若しくは会話さえ聞こえなければ、様々な方面の人々から需要があるのだろうが、如何せんこの口と顔のギャップはいただけない。

「っていうことでさ、私としても断り辛かったのは断り辛かったんだけど、そこはそこ。漢女おとめの中の漢女おとめと自称している私ですから、きっぱり断ってやったのさ。私は既に付き合ってる人が居ますーってよ！ びばっ、私！」

「流石と言っておこう」

「でしょ、でしょっ？ ところがさー、またその男がさ。そーそー、そいつもまた臭いってんだ。何か香水だか何だか付けてんだか知らないけどさ、漢おとめだったらそんなの付けるなっつての。腐った肉に香辛

料振り掛けてるんじゃないんだから」

「実は中身は腐ってるのかも知れないな」

「かー！ 上手い事言うねえ、たっちゃん！ 確かに中身は腐ってるかも知れないよ、ははっ！ で、で。未練がましく言う訳よ。じやー付き合ってる奴を連れて来いーって。で、私が難色示しているとやっぱり嘘じゃないかって近寄ってくる訳よ。で、終に私に触つて来たもんだからさ、思わず投げ飛ばして、肩の関節外しちゃったわ。びばっ、私！」

「お前らしいよ」

「だしよだしよ？ やっぱりたっちゃんは私を解ってるわー」

それぞれの近況を語り合い とは言うものの、一方的にコイツが話しているのだが 目的の場所へと歩を進めていく。まだ日は地平線から程ある位置に居た。

電柱とは電線を空中に掛け渡す為に間隔を置いて配置されている柱の事であり、また電信柱とも言うが、それらは決して人が身を隠す為に出来ている物ではない。誰もがそれを理解し、誰もがその行為を馬鹿げた行為だと把握しているのだが、世の中には常に例外が在る。例外なき法則は無い。

一般常識から外れた者達が確かにそこには居た。

「……………」

「じよ、上品な笑顔ですねえ。真似出来ないですよ」

「うーん、やっぱりこれは怪しい関係？」

「時期尚早。もう少し見極めるべき」

「だね……って、悟史君どうしたの？ 難しい顔して」

「そう？ そんな難しい顔してたか」

何処そのコントかギャグ漫画にしか登場しないであろう光景が其処には広がっていた。電柱に身を隠そうとしている、トータムボールの如く観察位置の高さを変えて二人の動向を見守るハーレム一団。カルテット道行く人は彼らを視界にすら入れない。

「や、気にしなくて大丈夫。ちょっとした考え事だから」

「それなら良いけど」

「……標的移動中。急がないと見失う」

「ほら、行こう。態々ココまで来てるんだから、見失ったら面白くないでしょ」

「悟史君がそういうなら……」

トータムボール状態を解除し、追跡を再開する一団。傍から見ると、何処までも間抜けである。

その珍妙な集団の後方20メートルという至近距離に別の追跡隊が存在していた。言わずもがな、後藤と朝霧のクラスメイト二人組^{コンビ}である。

「ねえ。あれって警察に通報するべきだよな」

「見も知らぬ変質者なら健全なる一般市民としては通報すべきじゃねえか？」

「だよねえ。やっちゃおう？」

ハーレムの危機は彼らの知らない所から接近していた。

「一応、クラスメイトもいるからなあ。恥を忍んでここはぐっと堪えよう」

「お、優しいお言葉。ボクはしたいんだけど、本来の目的はりゅう君の追跡だしね。ここで見失うのは面倒臭いし。後で注意しておくだけにしよう」

「だな」

こうして仲間の好意により、人知れずハーレムの危機は去ったのである。

雑談の末に到着した所は案の定、コイツの自宅であった。突然の呼び出しと呼び出された時期から言って、こうなる事はほぼ想定内とは言え、私としては乗り気ではない。自分から好き好んで虎穴に入る馬鹿はそうそう居ないと考えられる。もし居るとすれば、それは特殊な性癖の持ち主に違いない。

白い塀と重厚感のある門に閉ざされて今は垣間見る事は出来ないが、この門を潜れば『立派』という言葉が非常にしっくりとくる武家屋敷が其処には存在している。

私をココまで連れて来た幼馴染の開けた門を潜り、記憶の中の武家屋敷と何ら変わりが無い事を確認し、少し安堵する。とは言え、ほんの数ヶ月前にも訪れているので、変わりがある事の方が稀ではあるのだが。

「……睦美。^{むつみ}ここまで連れて来たという事はまたか」

「流石たっちゃん。良く分かったな。阿吽^{あうん}の呼吸って奴？」

「馬鹿も大概にしろ。お前が私をココに連れて来る用件と言ったらそれしかないだろう？」

「いや、分からんよ？ ほら、私が両親にたっちゃんを紹介するとか」

「既知の間柄だろう？」

「例えばの話だよ。祖父ちゃんは未だに私とたっちゃんの縁談話を諦めてないからねえ。ま、私としても大学卒業までに『良い人』が見つからなかった時には、たっちゃんを婿に貰う事は決定事項なんだけど」

非常に不穏当な話を聞いた気がする。何時の間に私はそんな後戻りの出来ないルートを選択してしまっていたのだろうか。コイツと幼馴染と言う時点である『食えない爺さん』の頭の中では、そのような構想が練られていたのか。

「ちょっと待て。あの爺さん未だそんな事言ってるのか。そして何時の間に、私がお前を娶る事が決定事項になっている？」

「ホラホラ。時間は有限なんだから、さっさと仕度してくれないかなっ！」

「話を逸らすなよ、ムサシ」

「そうやって呼ぶなー！」

「家の中に入っちゃったよ」

「そうだな。これ以上は無理かな」

「お家の中に入って、な、何するんですかね！　もしかして結婚の相談とか『お父さん、娘さんを私に下さい』とかやってるんですかね！」

「『お前に義父さんと呼ばれる筋合いは無い！』」

「夏木、夏木、夏木……」

「『お義父さん!』」

「『何処の馬の骨とも知れない奴に娘を任せられるか!』」

「夏木……む、む、む……」

「『お義父さん! 僕は真剣に娘さんの事を愛しているのです!』」

「『だから、お前にお義父さんと呼ばれる筋合いは』」

「そこら辺にしておこう。無限ループになってるじゃないか」

「というか、そもそもそういう集団ボケは他人ん家の前でやるなっ
!」

鋭いツツコミが居ない、只それだけの為に無残にも散って逝くギャグ達。面識の無い方の邸宅の前でギャグの屍を綿々と連ねるボケボケの集団に、救世主の如く後ろからツツコミが入ってきた。

「おお、映子。こんな所で何やってんだ? それと後藤」

「おまけみたいに付け加えるなよ。俺と映子はさ」

「偶々この近くに來たら、不審人物が電柱にへばり付いていたから尾行してただけ」

無論、ツツコミ役は追跡別働隊の後藤と朝霧である。後藤の弁を遮る様に朝霧は言葉を被せ、稲川に返答する。

「で、何やってたの？ 何時通報されてもおかしくない不審振りだったんだけど」

「そうだな、簡単に説明するとだな。道端で偶々りゅうの姿を見て、しかもアイツが美人と待ち合わせしてたもんで、日頃の仕返しを籠めて尾行してた訳だ。イキナリ家に向かうとは思っても無かったけど」

「そうです。でも、凄い美人でしたよね！」

「へえ。ボクはりゅう君の姿もその女の子の姿も見えないけど」

その時、今迄沈黙を貫いていた榊が突如として声を発する。

「夏木睦美。高校生チャンピオンだ……」

「へっ？」

Phase 16： 災厄の逆襲？ 中（後書き）

修羅場から帰還しましたので、Phase 16 投稿致しました。続きを待たれていた方は本当にお待たせ致しました。とはいえ、それ程いらっしやらないとは思いますが：

次回は少し短めに。

感想等御座いましたら、遠慮無く書き込み・連絡してくれればと思います。宜しくお願い致しますね。

Phase 17: 災厄の逆襲? 後

榊の発した言葉に喰いつきを見せる面々。このままスムーズに話が繋がるかと思いきや、そうは問屋が卸さなかった。ツッコミの比重が少ない所為だろうか。

「チャンピオンって言うと、あれか。某人外格闘漫画とか某人外店員格闘漫画とか某人外野球漫画とかが掲載されてた雑誌の事か」

「それは週刊少年チャンピオンだ。それにそういう言い方をするとあの雑誌には人外モノとか戦闘モノしか掲載されてない様に聞こえるな」

「……Championは闘士って意味だから問題無い」

「じゃあ、あれか。ビールと日本酒とかを交互に飲む」

「それはチャンポン」

「鶏からスープに、野菜等々の具を炒めて加えて、それに中華麺と一緒に煮た料理」

「……分からない」

「それもチャンポンだろ? 後藤?」

「そうそう。んじゃ、フーコーが振子の実験した霊廟は?」

「……無念」

「わからねえ……くそっ、後藤に負けるなんてっ！ 誰かこの中に解答を知っている方は居ませんかっ！」

「わ、分からないです」

「うーむ。分からないなあ。後藤ちゃん、腕を上げたね？」

「はっはっは。どーもどーも」

「えーとえーっと……パンテオン！」

「おっ、正解！ 流石」

「ってややこしい問題をこんな時に言わないでよっ！ そして誰か突っ込もうよっ！」

「だから、映子は突っ込まれるほ、あたっ！」

「下品な事言わないのっ！ 昭君^{ほか}っ！ りゅう君にも言われてたでしょ！ あーもう、ボクだけじゃなくて、皆も少しは突っ込む努力をしてよ！ そうじゃなきゃ、何時まで経っても話が先に進まないじゃない！」

為すがままに流れる話を食い止める役が、此処には朝霧しか居ない事がこの状態の決定的な要因である。何時もであれば、それと無くさり気無く、りゅうが話の流れをコントロールするのだが、生憎現在は観察対象であって会話の中には居ない。こんな些細な事でりゅうの重要性を目の当たりにしてしまった朝霧である。

何とか軌道修正を行おうと、柄にも無く積極的にこちらから話を振

る事を、彼女はそつと心に誓った。

「で、何のチャンピオンなのかな？ 榊さん」

「剣道。私も一度対戦した事あるけど、あの人の^{はや}さは驚異的。疾風迅雷」

「あー、もしかして『疾風^{はやて}の夏木』か？」

合槌を入れる後藤。苗字と榊が話した特徴で自身もその名を思い出した様である。

「あれ？ 昭君も知ってるのか、って剣道部だもんね」

「そうでした。確かに後藤は剣道部だったなあ、忘れてたけど」

「おいおい……何だか俺の扱いが酷い様に思うんだけど」

「……その程度」

言葉数少ない榊の一言が後藤の胸に深々と刺さる。

「さーかーきー。そんな言い方するなよっ、仮にも同じ部活の仲間だろうが！ それと皆も少しぐらい否定してくれても良いんじゃないかねの？」

「って言ってもなあ」

「ねえ？」

「鬼だな、お前ら！」

自身の扱いの酷さに耐え切れず、叫ぶ。住宅と塀で敷き詰められた閑静な住宅地に、男の嘆きが木霊した。その声に反応したのか、何処からか犬の遠吠えが聞こえて来て、その声が無性に自分を慰めている様で、余計に後藤の胸を締め付ける。

そんな後藤の胸中を無視して、朝霧は話を続ける。

「で、その夏木さんとりゅう君って何か関係があるのかな？」

「知らない。只、接点があるとして、私達が知る限りでは剣道の大会ぐらいしか無い」

「あれ？ 何で執事さんが剣道の大会と関係あるの？」

多村は小首を傾けて横槍を入れる。りゅうに興味の無い彼女が質問をするのも無理は無い。彼は決して剣道部員ではないのだから。

その横槍には、沈んでいた後藤が復活がてらに答える。

「助っ人だよ、助っ人。元々俺らが一年の時は男子の部員が少なくな、団体戦に出場出来そうに無かったんだ。そこで、師匠に引分でいいから出場して貰える様に頼み込んだんだよ。それが切欠で今迄の大会も全て出場してもらってる訳だ」

「へえ。でも、今は剣道部員多い筈じゃなかったっけ？」

彼女の『正しい』疑問に、後藤は苦笑を隠せない。

門を眼力で透視して中の状況を見ようと、門を睨み付けている朝霧を横目でちらと見、多村の疑問に応じる。

「それはそうなんだけどな。師匠よりも確実な選手が居ないのが事実。本気で勝ちたい試合には出場してもらってる。情けない話だったのは承知の上だけだよ」

「ふーん。執事さん強いんだ」

「強いと言っか、確実なんだよ」

「違いが分からないんだけどなあ、まあいいや」

ところでさ、と話を繋げる。横槍を入れたにも関わらず、淡泊な反応を示した多村に、後藤は内心苛立ちを覚えたが、これ以上話を複雑にする事も無いだろうと口を噤くんでおく。

「これからどうする？ 家に入った以上、短時間で出てくるとも考え難いし？」

「じゃ、ここらで解散だ。俺は先に失礼する。映子はどうする？」

「えーと、じゃボクも一緒に帰る」

「と言う訳で、お疲れさん」

「またね、皆」

「おう、お疲れ」

各々が別れの挨拶を済ます。後藤朝霧二人組の迅速な撤収に多少驚きがあった。

去っていく二人を目で追う稲川。ハーレム住人達は二人に既に興味

は無く、これからの予定の話題に華を咲かせていた。

「昭君。どしたのさ？ 苛々してるの？」

後藤の顔を下から覗き込む朝霧。無表情を装っている後藤だが、中学時代からの長い付き合いには、その程度の装いは意味を成さないようだ。

「多少。多村の奴の身勝手さでーか、話を聞かない態度が気に食わないだけだ。後、そんな些細な事に苛々してる自分の器の小ささとか、その他もろもろに情けなくなっているだけだわ。ホント師匠みたいになりてーよ」

「多村さんはああいう娘だから、気にしない方が良いと思うよ。」

後さ、ボクが思うに、昭君は昭君、りゅう君はりゅう君であって、比較出来るモノじゃないんじゃないかな？ 憧れたり、目標にしたりするのも良いけど、それよりも自分の良い所をアピールすべきじゃない？ あくまでもボクの意見だけどさ」

「何か似た事を師匠にも言われた気がする」

「あ、そうなんだ」

りゅうと同意見だという事に嬉しそうな表情を見せる朝霧。そんな彼女から目を離し、空に鎮座する、傾きかけた太陽を眩しそうに見ながら、ボソツと呟く。

「ホント、二人はお似合いだよ」

翌日の事。

教室に足を踏み入れた途端に、ハーレム住人他数人の女性とに質問攻めにされた。彼女らの目は、肉食動物が乾季に久々の獲物を発見したが如き血走った眼であり、正直な所、函館での一件よりも恐怖を感じていた。

彼女らの質問を要約すると、昨日一緒に居た女性は誰なのか、その女性と私の関係は何なのか、そして昨日は何をしていたのかの三点。不覚にも、睦美と一緒に居る所を嗜好きの誰かに目撃されたようだ。馬鹿正直に答える事も無いだろうと、誤魔化して答えていたが、どうやら彼女達は睦美の事を知っていて、更に私が彼女の家に入った事も周知の事実らしい。これで、尾行されていた事と剣道部関係の人間が絡んでいる事が知れた。とは言え、誰に見られた所で差し障りのある話ではないので、それ以上の追求は徒労だろう。

質問を誤魔化す事も面倒だと思い、ある程度の情報を渡しておいた。少量の情報でも彼らにとっては格好の餌であろう。渋々ながら、とは言え情報を得られた事に嬉々として、私の許から離れていってくれた。

「悟史。見ていたなら少しは助け舟を出してくれても良からう?」

傍でニヤケ顔で私が囲まれている姿を眺めていた悟史に、一言文句を言っておく。

「うん? だってよ、何時もお前だって俺の事見捨ててるじゃないか」

「成程、復讐という訳か。だがな、悟史。君の場合はハーレム間のじゃれ合いだ。傍観者が手出しを許されるモノではない」

「五月蠅え」

「見当違いな報復は止めて欲しいな」

私の言葉に喧しく反論する悟史は放って置き、窓の外に目を向ける。間も無く、体育祭で校庭も騒がしくなるだろう。こうして静かな校庭の風景を見られるのも暫しの間お預けとなる。出来る事なら、あまり目立たずに体育祭をやり過したいものだが、果たしてそれは叶うのだろうか。

「おい、聞いているのか!」

「聞こえてはいる」

「うがー!」

Phase 17 : 災厄の逆襲？ 後（後書き）

逆襲編終了です。

夏木邸で何があったのかは皆様の想像にお任せ致します。その内、正解？でも出てくるかもしれません。

さて、次回からは体育祭編をお送り致します。

GWとは関係の無い身分ですが、近い内に脱稿する予定です。感想等々宜しくお願い致します。

太陽は燦々（さんさん）と大地を照らしている。

六月とは思えないこの陽気と乾燥した空気。運動に適した天候と言
うには少々気温が高い様に感じられるが、この程度は許容範囲だろ
う。湿度が高いよりは幾分過ごし易く、纏わり付く大気と戯れる事
が無い分、マシである。

この炎天下に手が届きそうな陽気の中、私は数百の瞳から向けられ
る視線に晒され、しかも無表情を貫く事を強要されている。しかも
普段着慣れない格好、それもコート、幅広の帽子及び手袋着用で
ある。更には服装が全身漆黒に包まれているのもただけない。心
頭滅却により、見つとも無く汗を垂れ流す事は無いが、これでは生
徒達の前に現われるまでに脱水症状を起こしかねない。適度に補給
物資として手渡されている水で喉を潤し、体調管理に努めておく。
私その他、数人は校庭に設置された小さなテントの中に犇^{ひし}めき合い、
生徒、観覧者達の視線から逃れている。しかし、テントの中からで
も感じる事が出来る視線の重圧。恐らく、学園内に居る人間の多く
がこのテントから出場する人間を観察しようと凝視しているに違
い。何故ならば、

「では、各色の団長の入場です」

団長^{リーダー}は一際目立つ格好で出場しなければならないというふざけた慣
習があるからだ。

我が学園は各学年に四つのクラスを持ち、さらに一クラス三十人と

いう構造になっている。この人数を多いと見るか少ないと見るかは、評価者の基準により区々（まちまち）だとは思うが、割合少数の部類に入るのではなからうか。

学園の一大イベントである体育祭では、生徒数が四分割され、四つのグループを形成し、覇を争う事になる。分割方法は至って簡単なもので、学年ごとにクラス単位で分割し、これを学年別に同じクラスナンバーで統合するだけである。便宜的に纏めた集団を数字ではなく、色で呼び分けているのは、近隣の男子校の影響だろう。色は一組に青、二組に赤、三組に黒、四組に白を割り当てている。

体育祭を運営するのは勿論生徒会であり、体育祭実行委員会ではあるが、体育祭の成功を握るのは運営側だけではなく、競技等を行う生徒全員であり、その為には学年を超えて結成された纏まりの無い集団を、意思疎通の取れた集団に統制しなければならぬ。

それを積極的に行う役割を担うのが最高学年である三年生である。そして、集団を統制する為に必要とされるのが、全員の意志を勝利へと向けさせる外部からの後押しであり、そして集団の象徴であり旗印たる人物である。前者は体育祭の成績により、秋に開催される文化祭での様々なアドバンテージが受けられる事で解消されるが、問題は後者だ。毎年、この『団長』の選別に四苦八苦していたようだ。生徒会長等の有名人が居れば、それを掲げるだけで良いという安易な話ではない。しかし、全く無名であっても宜しくない。また、オルレ안의少女の如く、皆に掲げられ、愛される偶像型アイドルなのか、それとも黙して語らず、背中で語る英雄型ヒーローなのか、はたまた圧制を敷き、捻じ伏せる暴君型タイラントなのか。難解な問題と言えよう。

だがしかし。我がクラスは一瞬にして決議と相成った。相成ってしまった。

全員が全員、指を私に向け、私の名前を宣言した。担任教師も素知らぬ顔して、私を指差していた事は一生忘れないだろう。

団長が私と決まった後もクラス会議の進行はスムーズに行われ、その後の下級生への指導も滞りなく行われていた。私が出る幕も殆ど

無く、ただ下級生の前では寡黙を貫き通すだけで良いと助言された。どうやら、私の団長としての型は暴君型と判断される。^{タイプ}こうして、周囲の喧騒に巻き込まれるままに、体育祭当日へと相成ったのだが。

「ありやあ、えらく気合入ってるな。十中八九、アーチャーだべ？」

黒の団長の視線の先には、赤の団長が最近の流行歌だろう曲に乗って、颯爽と躍り出ていた。両手には色違いの短剣もどきを持ち、剣舞を以ってアピールしている。観覧者達からの大喝采がテントの布越しにも伝わって来る。流石、拳法部の主将だと、隣にいる神父の格好をした黒の団長が呟いているが、拳法部とあの剣舞に相関はあるのかと若干の疑問も生まれる。同時に、『アーチャー』の呼称とあの剣舞に齟齬があるのではないかとも感じたが、疑問は胸の内に仕舞っておいた。

一変して校庭には重苦しい曲が放送される。聞いている者の精神を掻き乱す様な、禍々しさを伴った曲と言っても過言ではない。

「じゃ、お先に居くべ」

そう言って、黒の団長は聖書を片手に肅々と、それでいて堂々と歩を進めていく。正に尊大不遜。現実にああいう態度をした神父には遇った事が無いが、彼は何をモデルにして、あの格好をしているのだろうか。

テントには私と四条しか残っていなかった。

あの日以来、二人きりで話す機会も無く、否そもそも顔を合わす機会すら殆ど無かった。唯一、この体育祭に新しく仕掛けた、ある規律レールに関する事後通達が人材派遣委員会に伝達された時のみ、彼女と言葉を交わす事はあった。それ以外に、コミュニケーションらしいコミュニケーションをしていない。

彼女があの時した行為の意味する所を今更尋ねても、それこそ意味が無い事である。行為はその場に於いて、意味が変化すると私は考察している。古くなった情報に価値が無い様に、過去の行為を今探る事に重要性は無い。

唯、話は色々としておきたかったというのは事実。変化する物を止められはしないが、望まない流れに向わせない事は出来るかも知れない。

「四条」

「何か？」

こちらを見ない四条。話を聞く耳を持っているのであれば、問題は無い。

「色々と話したい事がある」

「そうですね。私はありません」

にべも無い。それでも、話を繋げておく。

「相応に大事な話だ。下らない話も多少あるとは思うが」

「そうですね」

「明後日の放課後」

「明日の昼、私の邸へいらして下さい。話はそこで」

「了解した」

それきり何も語らなかった。彼女の背中は確かに私を拒絶していた。それでも、成果は得られた。状況は進展したのだ。

重々しい曲が終わり、今度は耳に馴染みのある校内放送が流れる。だが、流される内容が常軌を逸している。それは正しく、現生徒会長である四条の声であり、

『白を纏いし私の兵に命令します。勝ちなさい。勝たなければ意味はありません。差し出しなさい。私の為に貴方達の全てを差し出しなさい。私が貴方に命令します。私に優勝を齎しなさい。勝利を掴んだ者には祝福を。無残に負けた者には叱責を。裏切り者には死を。以上』

その声と共に、私の目の前に居た制服姿の四条が優雅に歩いていった。そこに待つのは静寂。

そして、定位置に着き、彼女が片手を挙げた時、白の生徒達が一斉にこう叫ぶ。Your Highnessと。一週間で随分と仕込んだものである。

これだけ、他の団長が魅せたのだ。私としても、乗り気ではないが、

魅せない事には申し訳が立たない。精々、精一杯なものを見せるとしよう。

今迄燦々と差していた日が、ぼつかりと空に浮かぶ雲に隠れてしまい、校庭は何処か薄暗くなる。心無し、校庭に沈滞する大気の温度も下がり、生徒達観覧者達の間にも多少の動揺が見られた。

その心の間隙に滑り込む様に、鐘の音が大きく一度、二度と響き渡る。

三度。

四度。

それと共に流れ始める旋律は葬送行進曲。

何処からか、白煙が紛れ込み、突如吹き始めた突風による砂煙と共に辺りを霧もやに包む。

そして、入場するは漆黒に身を包みし男。

鳴り止まぬ鐘とその男が放つ圧迫感に誰も声を発する事が出来ない。太陽が雲に隠れる、突風が吹く、砂埃が舞う等、自然現象として別段不思議でもない事象が、この男の登場に際して不可思議に起きたのではないかと思わせる程の圧倒的な迫力。

目深に被った幅広の帽子と重厚感を漂わせるコートに身を包んだ男が一步一步生徒達へと近付いてくる。演出だと分かっている生徒達も、男が踏み出す度に鳴る砂の音に敏感に反応してしまう。

校庭に響く足音。

そして、足音が止み、鐘の音が止み、霧が消え去って初めて。観客達は一斉にその姿に声を上げる。それは青だけに留まらず、全校生徒の叫びと相成った。

「テイカーー！」

「あんだあああていかああ！」

「りゅうー！抱いてくれー！」

「りゅう先輩ー！俺の事好きにしてくれー！」

「渋いぞー！青の団長ー！」

声援に応える様に帽子に手を掛け、飛ばす様に脱ぎ捨てる。帽子の下から現われたのは、りゅうに間違えは無かったが、白目を剥き、威嚇する様に周囲を睨み回す。その演出に更に沸き上がる一同。こうして、四人の団長が公の舞台に一堂に会する事になった。

私の演出もそこそこ上手く決まったのだろう、未だ興奮冷めやらぬ中、白の団長でもある四条がマイクを体育祭実行委員から受け取り、開会の宣言をする。

「ここに、聖上高校第三十八回体育祭の開催を宣言致します」

こうして、一日限りの熾烈な争いが幕を切って落とされた。

Phase 18 : 災厄燃ゆ - 開幕 - (後書き)

ネタが分かり難い、そんなPhase 18投稿です。
感想、疑問、その他要望等ありましたら、お気軽に連絡下さいませ。
宜しくお願い致します。

すり鉢状の校庭の四隅に設置された各色の陣営。

同色の生徒を応援し、はたまた異色の生徒を牽制し詰り、若しくは勝利の為の作戦を練る為のその場所で、私は同色の生徒達から文字通り吊るし上げにされていた。こういう状態に陥るだろつとは予測していた為、驚愕も憤怒も無く、ただ諦観するのみ。

私に対する非難を受け止め、容赦無く加えられる暴力　女生徒達からのみ　を片手であしらいながら、事の発端である四条の発言を回想する。

宣言を終えた四条は何かを確認するかのようにな生徒を見回していた。あの行為に特別な意味は無いと思うが、もしかすると生徒の興奮具合でも再確認していたのかもしれない。マイクを下げようと手を差し伸べる実行委員を手で制し、彼女はマイクを再び自分の口へと持っていった。一瞬垣間見えた微笑は何に対するものなのか。陽気に合わせぬ重装備に多少気を取られ、その笑みの意味を捉え切れなかった事は失敗だった。とは言え、あの段階で気付いた所で私に出来る事等無かつたに等しい。

「言い忘れておりましたが」

すつと透き通る声スピーカを通して伝播される。気合を入れる雄叫びや関係の無いざわめきもその一言で校庭から一蹴される。日頃から生徒会長の冷徹さを教え込まれている生徒達はまだしも、教師陣や直接の接点の無いだろつ観覧者達までもが押し黙ってしまう。

彼女の声には、動物本能に訴えかける強制力でもあるのだろうか。沈黙が支配するこの場に満足したのだろう、四条は言葉を続ける。

「今回の体育祭では、新たなルールを加えたいと思います」

ざわめきが舞い戻る。

各色の参謀役が慌てふためくか、頭を抱える様子が私の方からも確認出来た。青の参謀役である北条寺と玉城も同様なリアクションを取っていた。前者は優雅に、後者は大きなジャスチャでという差異はあったが。

「皆様。ご承知だとは思いますが、聖上高校には他の高校には無い独自の委員会が存在します。風紀実行委員、防衛委員等がそれに当たります。中でも、最も特殊と自負しているのが人材派遣委員です。彼らの、我が高への貢献は言うまでも無い事だと思います」

ちらと、私の方に目を向ける四条。

「ご丁寧にも、青の団長がその委員長です、という要らぬ説明まで付け加えて話は進む。」

「彼らは二代前の生徒会長であります、四条初音が設立した当初から数々の運動部に助力をしてきました。その類稀な運動能力と汎用性は紛れも無く、超高校級だと私は信じております。」

ですが、その貢献した彼らの実力を目の当たりにした生徒はどれだけ居るのでしょうか。又、今日ここにいらっしやったご父兄の皆様、観客の皆様の中には、彼らの実力に疑問をもたれる方もいらっしやるかもしれません。そこで、私は考えました。皆様に彼らの実力を知って貰える良い方法は無いかと」

大きなお世話だ。そもそも私の場合は強制的に組み込まれただけな

のだ。

積極的に助力をするつもりは無かった上に、特に自分の能力をひけらかしたい等という、顕示欲も持っていない。個人的な意見ではあるが、今からでも新たに付け加えるルールを破棄して欲しい。同時に、この背中が痒くなるような四条の演説も止めて欲しい。

「そこで、今体育祭では新たに一つルールを付け加えたいと思います。それは」

勿体を付けて四条は言葉を切る。否が応にも、その新ルールに対する期待が高まる。

ざわめきも一切聞こえず、唾を飲む音すらも聞えそうな程の静寂。

「特定の得点と引換に、人材派遣委員を代わりに出場させる事を認めます」

反応は三種類。ルールを把握出来ていない者と、歓喜の奇声を上げる者、そしてピシリという擬音が適当な硬直する者。嗚呼、一つ忘れていた。私の様に諦めの表情を浮かべる者が数人。どれも人材派遣委員の者だ。

「つまり」

あからさまな笑みを私に向ける。

「どうしても勝ちたい場合や接戦の時に彼らを切り札として使える訳です。指名が被った場合には犠牲にする点数に、さらに上乘せとして点数を支払って貰い、その上乘せ量を多くした方に指名の委員を出場させます。又、勿論指名された委員が連戦している場合や救護の方からストップが掛かった場合には出場は認めさせませんので、

「ご注意下さい」

人材派遣委員を擁している青と白の組員は頭を抱えたり不満を漏らす一方、他の二色は歓喜の声をあげていた。若しも四条率いる白が我ら委員会の人員を擁していなかったのなら、横暴だとの声が聞えたかもしれないが、生憎と彼女は白の大將である。委員会のメンバを二人擁しているのだ。ちなみに我が人材派遣委員は私を含めて三人しか在籍していない。

「ちなみに」

貼り付けた笑みを未だにこちらに向けて

「彼らにも委員会の名誉がある事ブライドと 생각합니다。ですから、態と自分の色が勝つ様に仕向けるといった姑息な手段は使いませんでしょうし、使用した段階で即委員会からの退会という処分が待ち受けていますので、あしからず」

不正の芽をしっかりと摘み取っていた。

とは言え、頼まれた仕事を自身の都合の為に、投げ出す等という事を私がする訳が無く、又後輩達もする筈が無いと私は確信している。そういう事にはシビアにならなければならぬ。

「では、第一種目に向けて各員用意をお願いします」

言いたい事は全て言い終えたとはかりに、マイクを他人に預け、颯爽と白の陣地へと去っていく四条。突然のルール変更を生徒達が混乱しているのを全く気にせず、堂々と歩いていく。あれが四条家のスタイルなのだろうか、と頭の片隅で現実逃避をしていた。

「りゅう君！ どういう事かな、さっきの話は！」

「執事さん！ さあ、キリキリ白状して貰いましょうか」

「ひつじ……話す」

「会長が独自に決定された事だ。私にも分からない」

青の陣営に到着するなり、私は質問攻め、あるいは吊るし上げにあう羽目になる。声を荒げて質問攻めにはしないものの、玉城や後藤はドサクサに紛れて私を棒状の何かで小突き回してくれた。後で倍返しにしておく事を胸に刻んでおく。

「嘘言わないっ！ ボクだってりゅう君と付き合い長いんだ！ こうなる事が分かってたから、少しも驚いたりしないで諦めた表情してたんだったっ！」

鋭い。そして、私の表情が読まれていた事に驚きを隠せない。精進が足りないという事だろう。喝。

「確かに事前に会長からお達しはあった。だから、だ」

「なら、早く教えてくれても」

「会長命令だ」

「……………」

黙る朝霧。四条の生徒会長面しか見ていない人達の評価は間違い無く冷酷冷徹冷血の『冷やし系』人間であり、当然朝霧もそういう風に四条を捉えているのであるから、彼女の命令が絶対的なものである事は承知しているだろう。

追及役を担っていた朝霧が黙った事で私に対する非難は収まり、続いて参謀役の北条寺が空気を切り替える様に口を開いた。

「そういう事ならば仕方ありませんわ。これで私達に『執事さん』というアドバンテージが無くなったのは変わり様の無い事実。また作戦を練らなければなりませんわね。玉城さん！」

「はいっす」

「新ルールを踏まえた上での作戦を考えるわよ」

「了解っす」

陣営の奥へと向う二人。

二人の軽快な遣り取りの後、盛り上げ役の後藤が馬鹿な演説を行い、それを朝霧に突っ込ませる夫婦漫才を切欠に、青の陣営は盛り上がりを見せた。

第一種目が用意出来る迄の僅かな時間。

私は重苦しい装備を外す為、一人教室へと戻ってきている。窓から校庭を眺めれば、一週間前の静寂が嘘のようなドンチャカ騒ぎ振りが見て取れる。このドンチャカ振りに太陽も自身を前面に押し出し

ているかのよう。

私が教室に来ているのを知って、計ったかの様に鳴る携帯電話からの呼び出し。画面に表示される名前を見て、文字通り計って連絡を寄越したのだろうと判断。二、三分かり切った遣り取りを行い、電話を切る。

重装備は思いの外、私の体に疲労を与えたらしい。筋肉に感じる疲労感をストレッチで除いておき、用意しておいたTシャツとハーフパンツに着替える。これで何時でも出場可能な状態へと変わった訳だ。

「さてと」

誰も聞いていないが、聞いていないからこそ、自身への発破がけに声を出す。

「獅子奮迅に一網打尽と参りますか」

Phase 19 : 災厄燃ゆ - 開幕直後 - (後書き)

のべ読者数が15000人を突破した模様です。

今迄読まれてきた方々、そして感想を下さった方々、本当に有難う御座います。

きっかりラストまで持っていく予定ですので、今後とも宜しくお願い致します。

短距離、短距離障害、中距離、中距離障害、長距離という一般的陸上個人戦競技が終わり、祭は漸く学年別団体戦へと舞台を移す事になる。個人戦は一つ一つの勝利に対する得点が低い為、私達人材派遣委員会の出番は無く、比較的平和な時を過ごしている。このまま、徒に前線へと引っ張り出される事無く、平穩無事に体育祭が終了へと至る事を切に祈るが、夢想到にしか過ぎないだろう。

陣営の雰囲気こそ語っている。

また先程から、我が色の陣営に草が紛れ込み、私が出場する競技を然り気無く聞き出そうとしているのも懸念事項だ。先刻、各陣営に配布された新規律の正式版によれば、『人材派遣委員が所属する陣営の代表選手としてエントリーしている競技に関しては、得点の上乗せ量に関わらず、所属陣営の選手として出場する。但し、該当委員がその競技に参加しているか否かの情報は事前に他の陣営に伝達される事は無い。また、一度提出された点数は、選手交替の成功失敗に関わらず、返却される事は無い』と銘記されている。つまり、祭開始時に危惧された委員所属陣営のアドヴァンテージの喪失は撤回され、他の陣営は私達がどの競技に参加するのかという情報をいち早く取得する必要に迫られている。水面下での情報戦は水面上で観測出来る程度に激しさを増している。

一言口を挟むのなら、無駄にこういう事に力を割くのでは無く、自分達が持ち得る戦力で以ってして最高の戦果を齎すべきだと思っただが。また、そうして得られた結果の方が得難い物なのではないだろうか。

「それはね、強者の意見よ」

肩に掛かった金色の尻尾を手で後に流し、こちらを見遣る北条寺。

歳不相応の色気と艶を感じさせ、数多くの生徒が彼女に信奉しているのも無理は無いかと再認識させられた。しかし、私が口に出していない事に突っ込みを入れるとは。

「それは君の能力テレパシか私の能力サトラレか？」

「どちらかというと、貴方の落ち度よ、執事さん？ 私はESPなんて持ってないし、貴方もそんな漫画チックな露悪趣味も無い筈よ。只、貴方の表情から感じ取っただけ」

「冗談だ」

「へえ。貴方も冗談言うのね」

冗談のつもりだったが、比較的まともな反論を返されてしまった。どうやら、私は相当固い人間で、冗談を言わない様な人物だというテンプレートでも出来ているのか。そんな物は早々に破壊して貰いたい。

「貴方の事ですから、貴方みたいな反則手を使用しないで勝利を目指した方が良いか思ってるのでしょうけど」

「反則手なのか、私は」

「勝負つてのは勝たないと面白くないのよ？ あのクールなお嬢様が勝利しか意味が無いと言ってるのも最もな話だわ」

「無視か」

「そうそう。どんな手段を使っても勝利を目指したくなるもんっ

す」

「玉城、お前も無視か」

脇から言葉を掛けてきた玉城は私の言葉に笑顔のみで答える。言葉は無い。この笑顔の意味する所が理解出来るのだが、出来れば理解したくなかった。私は確かに一般の高校生よりも体力方面では優れている部類に属するだろうが、反則と呼ばれる程に卓越した能力を有している訳ではない。巨大化した昆虫と格闘する自分を意識する事すら出来やしない。

身に余る過大評価は単なる枷でしかない事を理解して欲しい。そんな私の懊惱あうのう等微塵も気付かない我が陣営の参謀チームは話を進める。

「体育祭は確かに参加するだけでも楽しいですし、負けたら負けたでそれは青春の一段落として心に刻まれる事でしょう。若しくは正面から強敵に挑んだ場合も、『正攻法で戦ったけど、矢張り力及ばなかった。でも私達精一杯頑張ったよね、汚い技を使わなかったし』と自分達の負けに意義を見付ける事も出来るかもしれませぬわ。」

でも結局の所、それは負けに対する言い訳を作っただけ。折角勝利を握る鍵を発見したのにも関わらず、使用しなかっただけの臆病者の話ですわ。やるからには全力で。そうは思いませんか？」

「……否、反論する気は無い。価値観の相異だろう」

畢竟、その一言に集約される。何処に己が信念を据えるのか。この類の話は間違い無く時間大泥棒となり、また討論後の疲労は絶大なものとなる事も明白だ。敢えて、肉体的に疲労する今日この日に精神的にも疲労を負う必要等かけらも無い。

私個人の意見としては、『青春の一段落』の所にツツコミをいれた

かった。お前の青春はそんなに濃厚なのかと。若しくは文庫版サイズではなくて、新書版サイズなのかと。だがしかし、話の腰をさば折り返してしまうので泣く泣く無視するに至った。

北条寺は、貴方はそういう人ですものね、と何処か諦めた風に言葉を漏らし、私にちよっかいをかけようとす玉城を引き摺って、立ち去っていった。『そういう』人というのはどういう意味だろうか。少なくとも彼女とは相容れない者なのだろう、と脳の片隅で考えていた。

学年男女別の競技も着実にこなされ、プログラムは坦々と進行していく。未だどの陣営も動かず、睨み合い鏝迫り合いの状態が続いていると見て取れる。私の予想では、午前一杯はこの調子で進行していくのだろう。一発逆転を狙うのであれば、プログラム最後に仕掛けられた大型競技であろうが、当然ながら我が陣営は私を起用予定だと言う事。他陣営も容易にこの事態を考慮している筈であり、以上の事から仕掛けるタイミングは午後の部開始後の学年競技だろうか。

「後藤、他陣営は本当に新ルールを行使すると思うか」

隣で一年生女子の競技を凝視している後藤に尋ねる。視線は一向にこちらを向く気配は無いが、私の声はしかと聞き入れているようであり、淡々とした声が返って来た。

「するんじゃないっすかね。使い所が難しいでしょうが、師匠を召喚すれば戦力増強ですし……お、あの子の胸でっかいなあ」

「……程々にしておけよ」

邪な視線を後輩達に注ぐ事に専念している後藤を捨て置き、午前最後の出番に備え、出場者集会所へと向かう。背を向け去る私に後藤が返事を寄越した。

「師匠。次の競技は派手に蹴散らしましょうね」

「当然だ」

片手を挙げて、それに応えた。

カウアリバトル
騎馬戦。

三人を騎馬に見立て、その上に騎乗する者を騎士とする模擬戦である。その安全面から巷では廃止される傾向にあるようだが、我が学園は当然の如くこの競技をプログラムに組み込んでいる。驚愕すべきは更に危険な競技が午後一番にあると言う事。これは特定の人間にしか関係の無い競技ではあるが、男子限定の競技であり四人一組であるが故、一学年から三組ずつ、学年混合で一組の合わせて十組のみの参加である。

また、我が高校独自の騎馬戦として、騎馬から落下後も騎士だけは攻撃可能である点、騎士失格条件が頭上の紙風船、結構頑丈である、を破られる事である点、武器として何重にもウレタンで覆われた棍棒を使用する点や四色同時に戦闘が始められる点が挙げられる。実際に参加すれば理解出来るが、この追加事項の為に思い通りに動けない事が多い。

そして、何より個性的なのは、其々の陣営の団長が戦闘開始時に決

戦開始の声を上げなければならぬ点。マイクによりこの声は増幅され、観客その他全員に伝播されてしまう。非常に恥ずかしいのではあるが、これも役割であるが故逃避は許されない。自身の陣営の騎馬が横一列に並び、騎士を受け入れる準備をしているのを横目に、我が陣営の盛り上がり振りを観察する。ここから察するに、あの参謀二人組が先頭に立って声を出させているようだ。他の陣営も鳴り物を用いるなりメガホンで地面を叩くなりで、声援を送っているようである。場の雰囲気は上々と言えよう。

「りゅう。開始の口上は決まってるのか」

左隣の騎士である悟史が得物の調子を確かめるように振りつつ、私に問い掛ける。得物を振る度に頭上の紙風船が揺れるのが不釣合いなチャーミングさを放っているのだが、他人から見れば私もそうなのだろう。演説の際は外しておこう、と脳に刻む。

「当然だ。その点は抜かりは無い」

「まっ、師匠なら何言っても問題無いっす。無言じゃ困るけど」

右隣から後藤が声を出してくる。頭上の風船の間抜けさが非常にマツチしているのは印象的だ。

「戦乙女ワルキューレが存在するなら悟史に役を譲るべきだが、生憎彼女達は不在なのでな」

「それは確かにそうっすね」

「りゅうも後藤もいい加減にしてくれよ……俺ってそんなにたらしか？」

「肯定だ」

「ですよね」

「……あー畜生！ この鬱憤はここで晴らそう！」

凹んだ悟史が一瞬にして元に戻る。これが体育祭効果か。アドレナリンが過剰分泌でもされているのか。兎も角、原因なぞ問わないが、その溢れんばかりの闘志は好都合である。

騎馬の受け入れ準備が整った為、体育祭実行委員会本部から騎乗の合図が鳴る。其々の騎馬に向かう二人を引き止め、騎馬戦の最終的な確認を行った。

「で、まあそれでいいけどよ。りゅう本気でやるつもりか？」

「当然」

「師匠なら何とかって思いたいですけど、流石に厳しいんじゃない」

「少なくとも我々の陣営で最初に袋叩きにされる可能性が高いのは私だ。ならば、こうした方が良かったらう」

「とは言え……」

「なあ？」

「安心しろ」

口角を上げて二人に応える。私の言葉を聴いた二人は意味が分から

なかったのか、頭を捻っていたが。

「私は騎馬戦をするつもりは微塵も無い」

棍棒を両手に持ち 初期状態からの武器複数所持は禁止されている為、単なるパフォーマンスである 自騎を数歩前に歩かせ、決して後を振り返らず、敵を己が前面に捉え、背後の味方へと語り掛ける。

「陣を構えるのは良いが……別に独りでやってしまっても構わんのだらう？」

瞬間、赤の陣営から湧き上がる喚声と赤の騎馬隊の咆哮。

体育祭開始時の陰鬱とした雰囲気は消え去り、此度はフルフェイスの仮面を被り、自陣営に対峙する一人の男。右手を振り上げ、左手を払い、陣営を指揮するように声を張り上げる。

「我らこそが正義！ 我らこそが精髓！」

だが、見よ！ 我らが前に蔓延る、力に溺れた悪しき者達を！
奴らを裁くのは誰だ！ 奴らに正義を見せるのは誰だ！」

刹那の静寂。

「……そう。我々、黒の騎士隊だ！ 今こそ、奴らに正義の鉄槌を！」

黒の陣営は正義のコールに酔いしれる。自分達が正義であると叫び続ける。

眼光は鋭く、他の陣営を貫き通す。

その眼に捕らえられた者は無意識に身を竦ませる。今迄興奮状態にあった者も一瞬にして冷や水を掛けられた感覚に陥る。心臓が鷲掴みされる錯覚を覚える。彼女の両目は既に『魔眼』に昇華されているのか。

眼光はなおも鋭く、自身の陣営にも向けられる。

だが、誰一人として、身の危険を感じる者は居ない。それは攻撃される視線ではなく、直接脳髄へと伝達される視線だ。それを古代の人間は『魅了』と称していた。

彼女はそつと空気を振動させる。マイクによる増幅等必要無い。若干の空気の振動だけで良い。

ただ一言

「勝ちなさい」

と呟いた。

彼女の声は白の騎士隊の応答に掻き消えた。

滔々と声が響く。それは重さを伴った真の騎士の声。

「If you find yourself alone, riding in green fields with the sun on your face, do not be troubled for you are in heaven, and you're already dead」

魂に語り掛ける様に

「Brothers, what we do in life echoes in eternity……」

静かに同胞へと響き渡る。

意識せずともその意は脳へと染み渡り、男の同胞達の胸に沸々と沸き起こる戦いへの歓喜。

突如、男は得物を振り上げ、切っ先を天へと向け、咆哮する。

それは静から動への、静寂から動乱への合図であった。

「Hold the line!」

くるりと得物を手首で一回転させ、切っ先は敵の元へ

「Stay with me!!」

独りの咆哮は青陣営全員の絶叫を導き出す。

絶叫が止まないうまま、銅鑼の音が響き渡る。

終に騎馬戦の火蓋が切って落とされたのだ。

Phase 20 : 災厄燃ゆ - 午前熱狂へ - (後書き)

……遅くなって申し訳御座いませんでした。
次回こそはもっと短期間で掲載したいと思えます。

銅鑼の音が観衆の腹を穿ち、一斉に騎馬が動く。四隅から出立する騎馬隊はどの陣営も当然の様に逆V字隊形、偃月の陣を敷く。数的不利を生み出さない為の陣形は長年の歴史の中で代々受け継がれ、洗練されていった結果だ。

例年通りであれば、牛歩で進攻するこの決戦は、開始一分程度で全軍が衝突する。決戦時の混沌を頭に浮かべていた北条寺に、朝霧が尋ねる。

「ねえ、北条寺さん。騎馬戦には特に策を巡らせたりしてないの？」

動き始めた騎馬隊にちらりと一瞥を投げ、北条寺は質問者に顔を向け答える。何処か不満げな表情を浮べて、だがそれでも優雅さを纏わせているのは彼女にしか出来ない芸当だろう。

「本当なら私が奇策を使っても勝利させようとしたのですけどね。あの執事さんがどうしても、というからこの競技には手を加えていませんわ」

「じゃさ、あれってりゅう君の策なの？」

「はい？」

朝霧が指差した先に広がる戦場は

「ぼ、暴走？」

学園の体育祭騎馬戦史上、最も早い混沌を、又同時に硬直状態を生

み出していた。

開始十秒。

銅鑼の音と共に飛び出し、校庭の中心へと躍り出るまでに要した時間である。

ここまで全速力で刹那の騎士たる私を運んでくれた騎馬に感謝の言葉を告げる。息も絶え絶えに返答する騎馬。格闘能力は無いが、脚力の優れたメンバで組んだ我が騎馬にとっては、私という荷は多少重量過多だったかも知れない。だが、彼らの最も重要な役回りは終了したと言っても良い。私はもう少々の助力をと彼らに伝え、じわじわと迫り来る他陣営に目を向ける。

他の騎馬隊は硬直していた。

整然と進められていたその歩みは微動だにしていない。瞳に映る感情は驚愕。

この戦闘での我らの勝利の障害となるであろう源平コンビも我が後輩も、私の行動に驚愕という感情を前面に出している様で、少々物足りなさを感じている。私の見込みでは、硬直する事無く、見方を叱咤し進軍を再開すると予想していたのだが。見込み違いという所か。

仕方なく私はどこぞの悪役の如く、手招きし彼らを挑発する。

「来い逆賊共」

私の声は届いたのだろうか、私に向って突っ込んでくる騎馬隊。そう、それで良い。

悪役染みだ表情を自覚する。だが、戦闘に昂揚するこの精神だけは抑えようが無かった。

「うわ、一斉に襲い掛かれるよ、あれじゃ！」

朝霧が素っ頓狂な声をあげる。それも無理からぬ事。自らそついう状況に持っていったとは言え、今のりゅうの立場は袋の中の鼠ねずみと大差が無い。況ましてや、窮地に陥っている自身も正面切って戦おうとしているのだ。益々状況としては宜しくない。

北条寺も眉間みけんに皺を寄せ、彼の行動の真意を掴もうと熟考する。敵の戦力を一挙に集中させ、周囲から味方に攻撃させようと言うのか。

「……だけど、それって執事さんの戦力を台無しにしているのよね」
自分の出した結論に今一納得がいかない。

北条寺は首を振り、戦場へと再び眼を向ける。正直な所、自分の愛する稲川の雄姿を舐める様に観察しておきたいのだが、りゅうの異常行動に対する好奇心の方が勝ってしまったている。どうせ後で撮影しているビデオで何度も再生出来るし、と自分の心に決着をつける。学園の者は誰一人として、りゅうの真意を掴めぬまま、戦局は変化していく。

ふざけるな。

りゅうの後輩であり、人材派遣委員である古森勇氣は頭に血が上るのを自覚しながらも、抑え切れない憤りに身を任していた。

常に冷静な判断を心掛け、実行し、驚異の身体能力で以って依頼を

こなしていく先輩は尊敬と畏怖の対象であつた。自分よりも上背が無く、また一見して鬪争心の無い図書館の司書に似た佇まいの彼の初めての邂逅は険悪なものであつたが、りゅうの肉体精神両面での強さに惹かれ、人材派遣委員　　当時は部であつたが　　の一員に加えさせてもらった。

その頃より精進を重ね、りゅうとの差はかなり縮められたと古森は勝手に考えていた。だが、先程の挑発はどうだ。自身を他の凡庸な一兵と同等の扱いをした。区別も特別に警戒もしていない。ふざけるな。

まるで相手にされていない。実力はかなり詰め寄つたと思つていたのは勘違いとでも言うのか。ならば、否が応でも自身の事を意識させてやる。

古森は逸早くりゅうの許へと騎馬を走らせる。強く握り締めた棍棒からは悲鳴があがつていた。

餌に群がる肉食獣が獲物を飲み込もうと襲い掛かる。それでも獲物は逃げる気配を見せない。まるで喰われる事を達観してしまつた様に。

りゅう目掛けて騎馬群が群がる瞬間を観客は観る事が出来なかつた。無論観客だけではない。応援に徹している陣営側からも戦場の密集度故、何が起こつているのかを正確に観る事は不可能だつた。だが、りゅうの敗北だけは誰もが容易に想像出来た。戦場中央の密集から這う這うの体で逃げ出す彼の騎馬役を見るに、正に火を見るよりも明らかと言つてよい。そしてこれから、戦場中央では大乱戦が起こるだろう。殆どの者がそう予測していた。

しかし。
戦場はそんな生易しい状況ではなかつた。

大乱戦が起こると思われた密集地帯では、次々に頭上の風船が割られるという怪現象が発生していた。何時の間に割られている自分の風船に啞然とする者、未だ壊されては居ないが密集ゆえに身動きが取れない者、そして混沌に拍車を掛ける様に戦闘を再開する者。青の騎馬隊以外は統制のつかない状況に陥っている。

こういう事態になる事を予見していたのだらう青の騎馬隊が偃月の陣から、密集を包囲するV字隊形、鶴翼の陣に移行し突撃を開始する。中央に気を取られていた密集外周の騎馬は次々と青の騎馬隊に討ち取られていく。鎧袖一触がいにしゆいしゆくするその姿に、特に稻川が討ち取る度に大歓声が挙がる。

そして内と外の圧力が拮抗し、己の風船かふねを刈り取られた騎士・騎馬達が早々に退場していく事で初めて観客と応援の人間は気付く。未だ中央に佇む一人の騎士、否戦士に。

「嗚呼、そういう事ね。なんて無茶苦茶。エレガントさの欠片もないわ」

「え、どういう事？」

その一人の姿に頭を抱え、呆れる様に溜息を漏らす北条寺。その姿に首を傾げる朝霧であるが、意識は既に戦場へと向けられていた。正確に言えば、中央の一人にはあるが。

「ねえ、朝霧さん。如何して騎馬隊は歩兵よりも強いのだと思う？」

「えーと、馬の機動力が主な所かな。後は攻撃が高位置から加えられる事だとボクは思うけど」

視線を離さず答える。視線の先の件の人物は何時の間にか両手に棍棒を持ち、同様に騎馬から降り構えを取っている源平コンビと古森を相手にしていた。

「私も詳しくないから正解は分からないけど、同意見ね。でも、この騎馬戦って所詮騎馬役は人間だから機動力は無いの。だから落馬した騎士に対してのアドヴァンテージって高さなのね」

「そだね。あの高さは中々届かないし、届いたとしても簡単に受け止められるよね……って若しかして、りゅう君がああ密集の中で風船潰してたって事？」

一足飛びに話の先読みを行い、その結論に朝霧は驚く。無理も無い。怒涛の初撃をかわし、あの密集の中を移動し、そしてあろう事が気付かれる事無く跳び上がり、頭上の風船を潰す等、机上の空論としか考えられない。

「でも、どうやって」

「そればかりは本人に聞かないと……聞いても納得には程遠そうね。只、これだけは言えるかしら。あの馬鹿執事、最初から騎馬戦なんてヤル気は無かったようね」

北条寺の声に陰が混じる。

「え、と？」

「……初っ端から白兵戦思考。初撃を受ける前に既に下馬してた」

「由紀の言う通りよ。そうでなければ、あんなに素早く騎馬役も避難出来なかったでしょうし」

気配無く二人に接近した榊が解答を示す。女性としては長身の榊には襲撃される直前の様子が視認出来たのか、それとも『剣士』の感がそう結論付けたのかは不明である。

「それよりここから見所。ひつじ対鬼軍曹コンビ対後輩」

じつと戦場を見つめる榊。

「後輩って、古森君可哀想じゃないかな？ ほら、下の子達がよく『貴公子』とか『破壊者』とか呼ぶくらいに人気あるし、強いんじゃないの？」

榊の古森の扱いに朝霧は多少フォオを入れる。部活の後輩が事ある毎に古森の格好良さと強さを説いてくるからである。源と平にはフォオが無いのは仕様なのだろう。

榊は朝霧のフォオに関心の無い眼を向け、また戦場へと視線を戻し、咳く様に言う。

「……………観てれば分かる。ひつじは強い……………ムカつくぐらい」

己の風船を狙いに来る三つの軌跡の内、二つを受け止め、一つを体の位置をずらす事でやり過ぎず。

先程から同様の遣り取りを幾度と無く繰り返している。拮抗状態とでも言えよう。

三方向からの攻撃は避け続けるには大した労力ではないが、それでも決して容易とは言えない。特に頭上の風船だけではなく、私の身体への攻撃を意図的に、しかもコンビネーションを駆使して襲い掛かる源平コンビは厄介だ。どちらかが死角から攻める様にしかも上下左右に攻撃を振り分け、タイミングを微妙にずらしている。やり辛い。

後輩に関しては、未だ逆上している様で剣筋が非常に分かり易い。とは言え、この男も優れた臂力ひりょくや体捌きを持っているので油断は出来ない。勿論、油断等しないのだが。

「そろそろ仕舞いでしょうか」

誰にとも無く宣言する。言うなれば、自身への叱咤か。

意図的に定められたパターンで行ってきた剣捌きのタイミングをずらし、間合を微妙に調整する。この動きに反応する源は流石と言えよう。

「平！ 来るぞっ！」

「合点承知！」

だが、僅かに遅い。一気に二人へと間合を詰める。この際、背後の後輩は捨て置く。

袈裟・逆袈裟に襲い掛かる二つの凶器を自身の二刀で受け止め。そして、手を離れた。

「「なっ」「」

この時までユニゾンする二人。非常に良いコンビであるが馬鹿正直するのだらう。

私は両の手で二人の風船ふうせんを刈り取った。

背中を見せ、源平コンビに突っ込みりゅうに古森の憤りの念は一層加速する。
ふざけるな。

鞭の様にしなる両手で二つの風船を刈り取ったりゅうに肉薄し、古森は自身の最速で腕を振り、横薙ぎにりゅうの風船を狙う。避けられる筈が無いタイミングとスピード。古森は自身の勝利を確信する。
だが、当たる寸前。
りゅうは古森に笑みを見せた。

「後輩」

りゅうの風船は呆気無く割れる。青の陣営から聞える悲鳴。
古森はりゅうを仕留めた事に嬉しさを感じるが、目の前の先輩の笑みに分からなかった。しかし、それも至近距離で聞えた破裂音で理解する。

「大局的に物事は見た方が良い。そして相手の戦力を頭に入れておけ。我が陣営には学園最速の突きを持った剣士が居る」

「一丁上がりつてな。師匠」

射程距離外からの後藤の突き。りゅうに気を取られていた古森に、この突きは避けられる筈も無い。
周囲では青の騎馬隊が殲滅作業を終えていた。

銅鑼が鳴り響く。

こうして騎馬戦は青陣営の圧倒的勝利で幕を閉じたのである。

Phase 21 : 災厄燃ゆ - 騎馬のロンド - (後書き)

O r z

……感想・評価宜しくお願い致します。

陣営へと帰還すれば、熱烈な歓迎が私達騎馬隊の面々を待ち受けていた。

拍手歓声だけでは彼女らの興奮度合いを表現するには至らず、手を握り抱き付いて来る娘も居る様だ。あくまでも客観的立場でこの喧騒を見守れるのは、私が女子生徒に怖れられている為である。私に劣いの言葉を掛けようという努力は感じるのだが、如何せん私を目の前にすると怯えた様子で、お疲れ様でした、と口にするのが精一杯。私は猛獣か何かの類に分類されているのだろうか。

とは言え、声を掛けてくれる努力をしてくれるだけ幸せだ。

そう、女子生徒達の大群にもみくちゃにされている悟史を見て心底感じる。幾ら畏怖の対象では無く人気の的だと言われても、あの様に積極的に絡みつかれても対処に困ろう。

戦場を共にしていた戦友達クラスメートと互いの健闘を称え合い、二、三言葉を交わしていた後藤が私の傍へと来る。視線の先の惨状を何時もの様に呆れた目で、何時もの様に少し嫌悪を交えて後藤は言う。

「なんつーか、なんて言うか……駄目っす、言葉にならねえ」

「態々言葉にしなくても良い。口にしない方が賢明と言えよう?」

魚の骨が喉につかえたとも言うように、喉を押さえてしか顎め面を見せる。嫉妬とも愚痴ともつかない後藤の非難もとうに聞き飽きていたので、自主的に口をく噤んでくれたのは僥倖だ。

「……それもそうっすね」

と前向きな意見を述べる後藤。少しは私の考えが通じたと見てもい

いのだろうか。

未だ固まっている悟史と愉快的な女子生徒達から視線を外し、話題もアレから離す事にする。精神的にも健全だろう。

「しかし、後藤。先程の突きは見事だったな。あれ程鮮やかに決まるとは私も想像していなかったよ」

「師匠にそう言われると嬉しいねえ。もうあと少し左右どちらかにずれるかなあとは思ってましたけど、全然動かなかったっすね。何というか、師匠を倒して脱力した感がありありと」

「では、剣士の目からすると」

私の言葉に後から割って入る声。

「リーダ、後藤お疲れっ！」

「りゅう、ナイス暴れっぷり。昭、ごつつあんオツ」

「ごつつあん言うな！ あれも綿密な打ち合わせの末のだなあ」

「兩人とも指示通りの行動で助かった。礼を言う。午後もこの調子で頑張ろう」

応、と親指を立てて去っていく戦友二人。クラスメート微妙に話を遮られた後藤から、陰湿な視線を送られている気がするが意識の外に置いておこう。話を遮らなければ延々と反論をしていたに違いない。それを回避する為に必要だった処置だ。私に非は無い。

「さて、先程の続きだが。後藤の眼から見て後輩の動きは如何であ

つた？」

後藤の機嫌を直す為にも話を性急に元に戻そう。

少々わざとらしくかったかも知れないが、後藤は特に指摘する事も無く私の問に答えてくれた。人間素直が一番だ、とは断言しないが、今回はかりはこの言葉に賛成の意を示したい。

「武道やつてる人間なら一番……とは言わないまでも、十分に気を付けないといけない残心が抜けてましたねえ。師匠を打ち倒すって事に集中し過ぎて、体も思考も止まってしまいましたし」

「……相手への打突に全身全霊を掛けるのは決して間違いでは無いと思うが」

「え」

「否、何でも無い」

残心。或いは残身。

精神鍛錬も兼ねる武道に於いて、打突、払い又は射の後に次への動きへと備える心構え、或いは身構えの事を指し示す。

率直に言えば、私は武道を嗜たしなんでいると言い難い者であり、武道の根本にあるう精神論の機微を理解している訳では無い。武道を己の基盤に据えてはならず、ただその技術を、表層に見得る上澄だけを掠め取っている不届き者である。

そついう部類の者ではあるが、『残心』『残身』の教えの重要性は身に染みて理解している。そして、その重要性を知っているからこそ、その前の攻めに全身全霊を籠めなければならぬ。『残心』に気を取られ、攻めの行動に曇りがあれば、それは本末転倒と言える。無意識の流水の如き『残心』が理想なのかもしれない。

些末な考えが口に出てしまったのは失敗だったか。思考にも残心を忘れる事勿れ、か。

「えーと、師匠。これから昼飯解散つすけど、どうします？」

如何やら、雑談をしている内に解散指令が発動したらしく、陣営からは徐々に人が居なくなっていく。

特に当ても無く、予定も無い私はこの際、後藤と共に行動しようとして決断。

「私は何処かで済ましてしまおうが。後藤は如何する？」

「俺は一応弁当持ってますけど、師匠持って来てないでしょう？
なら、食堂で食べましょうや」

却下する要素も無い。首肯し、私達は一旦教室へと戻る事にした。

「あれ？ りゅう君知らない？」

朝霧は応援に来ていた家族と話し、他の生徒よりも多少遅く教室に帰還してみれば、探し人の姿を見つけた事が出来なかった。しかし、その探し人の机で黄昏ている友人を発見、行方を尋ねてみる。

「……映子、師匠は星になった」

青褪めた顔を此方こちらに向け、震える声で意味不明な事をのたまう友人
こと後藤。

何時も何処かおかしいとは思っていたが、これは本格的に故障かと思ひ、周囲に眼を向けてみれば。

「そうだ、リーダーは星になった」

「りゅうは空から俺達を見守ってくれているのさ」

「また一人、英雄が地上から消え去ったか……」

と、負けず劣らず不審な発言を繰り返すクラスメート。特に男子生徒達は血涙を流さんばかりの力の入れ様。中には、りゅうの事ばかりではなく、稲川に関する発言も　こちらは呪詛じゅそに近いが　聞こえてくる。

有用な情報を求め、壊れ気味の連中を放っておいて、冷静に事態を見極めているだろう相手、青陣営の参謀の片割れである玉城に近づく。何処か不満気に、頬を膨らましている様だが、壊れた連中よりかはずっとずっとマシだろうと朝霧はこの事態の元凶を尋ねる。

「稲川ハーレムに攫ひらわれたっす。稲川君が道連れにしたっす！」

「えー！　それホント？」

「嘘じゃないっす！　クソー、あの無表情娘とロリっ子さえ邪魔しなかつたらっ」

地団駄を踏む玉城。

玉城の言葉にハーレム員の顔が浮かんだが、それよりもりゅうを救出する事が先決と朝霧は両の手の拳を握って、脳裏に浮かぶりゅうに誓う。

「待っててね、りゅう君」

「わ、私も協力するっす」

使命に燃える二人に、

「ちょっと待て。二人とも」

壊れかけの後藤が水を差した。途端に睨みつける二人。

二人の視線の圧力に心が挫けそうになりながらも、己に課せられた使命を真っ当するという強い意志が彼を支える。

「し、師匠から伝言があるから落つちけ」

「昭君が落ち着いたら？」

鋭いツツコミが彼の心を抉る。それでも猶、彼は耐える。これは師匠に頼まれた弟子の仕事だと自分を奮い立たせる。師匠、俺頑張ってるよ、とココには居ないりゅうに報告する。

「えーと」

「早く言わないかなっ！ ポツキー鼻から突っ込むよ！」

「は、はいっ！」

玉城はポツキーの箱をちらつかせ、先を急がせる。後藤の精神は既にボロボロになっていた。

「し、午後も競技は多数あり、君達の力が無ければ優勝出来ない。」

なので、私の事は気にせず英気を養って欲しいってよお」

「……………りゅう君なら言いそうだね」

朝霧は納得する。何かと一人で重荷を抱え込む彼らしい言伝だと。

しかし、彼をこのまま見殺しにするのも心苦しい。如何したものでしょうかと、朝霧玉城両名は考え込む。しかし、一向に良い考えが浮かばないのが現実である。

そうして昼休の時間は刻一刻と過ぎて行くのだった。

Phase 22 : 災厄燃ゆ - 災厄への助走 - (後書き)

随分ご無沙汰な癖に短文で申し訳無いです。

区切りが良いので、今回は此処までです。

次回、昼食編で愈々ハーレム大集合かと。

ハーレム人員募集にコメントを下さった方々に感謝致します。
有難う御座いました。

関節という関節の潤滑油が抜け落ち、錆付いたそれは動かそうという意思にすら反応する。その度に奇怪な産声をキィキィと上げる廃棄物同然の自律型発条式絡繰り人形。キィキィと五月蠅い自身の体を残された力を使用して動かし、自身でその動力となる発条を巻き又再び動き出す事は出来るが、今は動く意志すら持ち得ていない。そんな人形がぽんと、魅せる顔は華やかで優雅で、だけどその下には猛毒の棘をびっしりと纏った花畑に投げ込まれた。等と自身が置かれていた現状を比喻し描写してみる。勿論、私は理解している。今己がしている事は単なる現実逃避で、少しの影響もこの状況に与える物では無い。しかし、せすにはいられない、そんな修羅場。

「ねえ、悟史君。私のお弁当美味しい？」

「うん」

「先輩。私のは？」

「うんと、美味しいよ。特にこのハンバーグ」

「……私のは？」

「うん、こっちも……」

悟史に群がるハーレム員美女五人。この学校の綺麗所を厳選して抽出した様な一団が我先にと、悟史の口へ自身の弁当の中身を押し込もうとしている。対する悟史はそれに多少引き攣った笑みを浮かべ

ながらも、決して拒む事無く彼女達を受け入れている。そして、私はと言うと、この華やかな一団の近傍にぼつんと座らされている。客観的に見ても主観的に見ても、侘しいという感が拭えないこの状況。何も好き好んで隅の位置に陣取っている訳ではないが、かといってあの修羅場に身を据える気もさらさらなく、私はこの位置が最適だと判断し今に至る。

真上に聳える太陽は燦燦と照らし付けてはいるものの、吹き抜ける風は何処かひんやりとしていて、屋上で食事を摂っている生徒達

大規模なハーレム空間が展開された為、屋上には我らの他に生徒の姿は見えないが には大変有り難い気候と言える。屋上から校庭を望めば、そこには多数の観戦客が犇つめいていた。あの群衆の中はさぞ蒸し暑い事だろう。

持参していた握り飯を頬張りながら、密集で窮屈ながら精神的に開放感溢れる昼食と開放的な場での精神的な窮屈さを感じるそれとは、果たしてどちらが支持されるだろうか、と再び思考に浸る。

このまま、私に干渉もせずハーレムの昼食会が終わって欲しいと切に願う。

「……もう、俺お腹一杯だからさ、有難う皆」

フォアドア育成中の駝鳥さながらに弁当の中身を詰め込まれていた悟史にも、どうやら限界というものが訪れたらしい。悟史はハーレム構成員一人一人に弁当の感想を述べ、頭を撫でるなりして感謝の意を示していた。なんともマメな男である。あの混沌とした餌付け状態に陥りながら、今口の中に取り込まれたのが誰の弁当で、そしてその味付けが如何であるかを評価し記憶していたというのだから恐れ入る。

悟史の行動に各々が様々な反応を見せていたが、如何やらこれで私が此処に居る理由も無くなったという事だ。そもそもがハーレムの中で自分だけが男だという状況が嫌だったらしい悟史が、私を道連

れにする事を条件にこの食事会を承諾したという経緯があった。食事会が終了した今、私が好き好んでこの居心地の悪いハーレム空間に腰を落ち着けている必要も無い。

そう思い、腰を浮かして階下への出口に足を向ければ

「にやにしてるのかにや、りゅう先輩？」

「そうです！ 何勝手に抜け出そうとしているんですか？」

進行方向に回り込む者が二人。背丈の小さい二人組であった。言わずもがなハーレム構成員である。

余談だが、私の後方に榊が控えている気配もする。

「これは異な事を言う。私は悟史の食事が終了する迄は付き合つと言っただろう？ 今し方、奴は自身が満腹であると宣言しただろうか？ 私がここに居る義理は無い」

「言い訳はそれだけかにや？」

「ぬ？」

ニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべるちびっ子。

私の前方に回りこんだ二人組の内背丈のより小さい方である彼女は名を千川^{せんかわ}牡丹^{ぼたん}と言う。同年男子と比較して上背の無い私の肩までも至らないその小ささと幼児体型、そして特徴的な話し方で一部の男子には熱狂的な人気がある。しかし、彼女の『特徴』の本質はその外見的な特徴では無く、権謀術数を巡らすその頭脳にあると私は思う。相手にしたくない人間の一人と言って良い。

「先程、先輩は悟史ちゃんに対してこう言ったのよ。食事が終わる

迄は居てやるうって。その会話はこの」

すつと胸元から小型の機械を取り出す。

「ICレコーダにバツチリシツカリ録音してあるんだにや。言質はシツカリ取れているんだにや」

「私としてはそのICレコーダが何処に入れてあったのかが非常に気になる所なのだが」

「えっち」

「はっ！ 貴様の様な幼児体型に欲情する程落ちぶれてもいない」

「にや、にやにおー！」

思わず本音が口から飛び出てしまった。最近、精神が緩んできているような気がする。ここらで一つきちりと締めておかないと後々大事故に繋がる可能性もある。精進せねば。喝。

「ふしゃーっ！」

「落ち着いて、牡丹。冷静にならなきゃ意地悪な先輩には勝てないよっ！」

聞き捨てなら無い言葉で千川を励ますのは我が委員会の『後輩』である。

小柄ゆえの敏捷さで委員会の運営に大いに貢献している逸材である。ボーイツシュな外見の為、同性の先輩には玩具の様に可愛がられ、後輩には男性的な役割を求められているそうだ。彼女の愚痴から得

られた情報であり、その真偽は定かではないが概ね間違い無いだろう。

「『後輩』。私が何時意地悪と称される様な態度を取った？ 誇る事ではないが、私は常に紳士的な振舞で接していると思うのだが」

「そーやってですね、私の名前を一向に憶えてくれない所とかですよっ！ 一年間も一緒に部活と言うか委員会をやって来て、如何して私の名前ぐらい憶えてくれないんですかっ」

「何、所詮名前等、名札程度の役割しか持ち得ていない。重要なのは名前等ではなく、その個人の本質を捉え、銘記し、他と区別する事にあると私は考えている。因みに君の事は確りと『後輩』という呼称で他と区別しているし、『後輩』と言えば君と私の中でカテゴライズされているのだが、それだけでは不満か？」

不満があれば後でゆっくり聞いてやると嘯うなき、回り込んでいた後輩二人組の間を通り抜ける。悟史の真似をして擦れ違すれちがう際に二人の肩を二回程軽く叩いて置く事も忘れない。私にはこの行為に如何なる意味があるのか理解出来ないが。

こうして、私は上手く屋上から避難する事が出来た、と思ったのだが。

「ちょっと待つ」

『**はにげだした。しかしまわりこまれた』という幼少時代に経験した某テレビゲームのモノローグが脳裏に浮かぶ。背後に控えていた榊の事を失念していた。またも残心を忘れていたと言うのか。日に二度も同じ間違いをするとは阿呆ではないか。

榊の言葉が届かなかったと装い、更に歩を進めると

「ちょっと待つと言ってる」

榊の指が私の左腕に食い込んで来る。刹那、既に消えかかっている創きずが疼いたが顔に出すほどではない。ここまでされては振り向かざるをえず、

「今度は何だ？」

と僅かに眉を寄せ榊に正対する。私の若干不機嫌そうな表情にも反応を示さない彼女。余程無表情を崩さない練習でもしているんじゃないか、と常々思うのは致し方なかるう。

「ひつじが話逸らせただけで、彼女達の話は終わってない。ひつじは逃げたいだろうけど、話は最後まで聞くべき。人として」

「……了解。手短かに頼む」

限りある時間をつまらない折衝で潰すのは本望ではない。素直に聞く姿勢を見せ、話を進める様目の前のハーレム員に促す。

千川は私の急変した態度に多少戸惑いと疑いの目らしきものを投げ掛けていたが、取り敢えず巡って来た好機チャンスを見過ごす訳も無く。

「でにや。確かに悟史ちゃん食べ終わったと言ってるけど、未だ私達は食事終了して無いんだにや。それにデザートだって多分由宇ちゃん辺りが作って来てる筈よ。だよねえ、由宇ちゃん？」

「えっ？ うん。良く分かったね」

「へえ。楽しみだなあ」

悟史君、後で競技のドサクサに紛れて潰してあげよう。私は拳に銘記する。

悟史の発言を耳にして、先程よりももつとにやけた顔で私を見る千川。コイツの勝ち誇った顔と、それを嬉しそうに見ている『後輩』の笑顔が妙に私の神経を逆撫でする。

此の儘、場の流れに身を任せれば、確実に昼食時間の全てをこの甘ったるい空気の中過ごさねばならず、精神的にも体力的にも疲労を背負ったまま午後の競技に挑まねばならない。それだけは避けたいのだが、この場を切り抜けるだけの切札カードが無い。そして、その私の苦悩を読み切っているコイツが一番の障害と言えよう。

「と言う訳で、食事が終わってにやいのよ。りゅう先輩は約束を違えるなんて事はしないのよ?」

「……当然だ」

「なら、ここに居なきゃ駄目にやのよ。それに外部からの協力は先輩自身が潰しちゃったし。にやはははっ!」

この似非猫娘め。作為的な話し方が非常に癩かんに障る。人目が無ければ、ここで先輩に対する敬い方でも躡けてやる所なのだが、自重しなければならぬ。

悪足掻きとは分かっていても、私は悟史に言わざるを得ない。

「悟史。本当に私がここに居る必要があるのか?」

「えーと、居て欲しいかな、はは……」

悟史の目が口よりも雄弁に語っている。俺を一人にしないでくれと。結局の所、悟史は修学旅行以前から何も進歩していないという事になる。確かに人間という者は即新たな環境に適応出来る生物ではないのだが。

「……さあ来る」

「そうそう。大人しく私達と過ごすのじゃ」

「そうですよー」

三者三様に私の身体の一部を握り、悟史達の居る一角へと私を引き摺って行く。

抵抗するのも馬鹿らしく

半ば、諦めていた私に救いの手が舞い降りる。

『お昼時に失礼致します。緊急連絡です。午後競技の作戦会議を始めますので、青の幹部はすぐさま青陣営に集合して下さい。繰り返し返します。作戦会議を始めますので、青の幹部はすぐさま青陣営に集合して下さい。以上です』

正に起死回生の一発。否、既に死に体であったのだから、不死鳥の尾や大樹の葉といった表現の方が正しいかもしれない。どちらにしろ、私は生還の蜘蛛の糸を掴んだといって良い。

逆に千川は苦虫を奥歯で磨り潰してしまったかのように渋面を見せ、追撃に舌打をする。

「……諸君、非常に遺憾だが、私は作戦会議があるのでこれにて失

礼する。悟史は幹部ではないからゆっくりして居て欲しい」

「や、ちょっと待てりゅう！」

「失礼するっ！」

緩んだ拘束を振り切る様に私は出口へと疾走する。

後から悟史の悲痛な叫びが聞こえた気がしたが、幻聴であろう。

こうして、私はハーレムの束縛から逃れる事が出来たのである。

Phase 23 : 災厄燃ゆ - 狭間に災厄 - (後書き)

…… やつと執筆時間が取れました。

待たれていた方々は本当に申し訳御座いませんでした。

7月はあと3、4作くらい計画中です。(予定は未定ですが

多少、登場人物が飽和状態になつてきています……

まあ、主要キャラさえ憶えていただければと。モブキャラが多いだけですので。

夏ホラー2007に参加しております。宜しくです。

熱気渦巻くグラウンドへと歩を進め、押し合い^へ押し合いしている群集を掻き分け、自らを將とする青陣営に辿り着く。なるほど、これはあのハーレム空間に居た時と同等の疲労感を体力面に味合わせる物である事を身を以って理解した。但し、精神的に疲労しない分回復は早く、速攻性且つ持続性且つ苛烈な毒を持つアレよりかは幾分も良いものと言える。

己が体力の消耗を可能な限り客観的に評価しつつ、陣営上重要な会議が行われるであろう場所に顔を出すと、そこには確かに青の幹部が勢揃いしていた。当たり前ではあるが。

私は軽く謝罪の言葉を投げ掛け、比較的空いているスペースに腰を下ろす。同時に話を進めてくれと言うジェスチャを行ったのだが、如何やら雰囲気^が異様である。一人は不機嫌さを濃縮した様な態度で私を睨み、他数人は物言いたげにこちらに眼を向ける。

私は何かをしたのだらうか。それとも、余りにも此処に至るのが遅かったのか。

「何だ？」

取り敢えず、相互理解をしなければ話は円滑に進まない。コミュニケーションはその為の重要な手段である。

私から歩み寄る形で話を切り出す事にしよう^と声を掛けたのだが、彼らはこの言葉が気に入らなかつたらしい。私に対して一斉に言葉を吐き掛けてきた。

「貴方のせいで、貴方のせいで！ 私と悟史君との優雅で甘美な昼食時間が露と消えてしまったじゃありませんかっ！ 如何してくれるんですか！」

「何だじゃないっすよ！ ハーレム達に連れて行かれて結構パニッ
クだったんですから！」

「何だ、じゃないよ！ こっちは心配したんだからねっ！」

「ししよー！ もちっと俺らの事を頼って下さいよー」

「ぶーぶー！ こっちは昼飯の時間が取られてるんだぞ。後で奢れ
よ！」

と各々が勝手に口喧しく喋るお陰で何を言っているのだから一向に
掴めない。

際限無く高騰していく場を収斂させる為にパンと柏手を打ち収める。
ぴたと囀^{こえす}りを止める一同。場に久方振りの静寂が訪れ、グランドの
喧騒が流れ込んで来た。

「私は聖徳太子でも三面六臂の阿修羅でも無い。一度で聞き取れる
のは三人までだ」

「嘘っ？ 三人も聞き取れるの？」

「冗談だ」

無言で手や足が飛来してくる。それらを甘んじて受ける程、御人好
しでも極端な性癖持ちでも芸人気質でも無い。出来得る限り最小限
な動作で捌いては避け、捌いては避ける。省エネ志向は己に優しい。

「当たれっ。当たれよ。くそったれ」

「……いい加減に止めて欲しいのだが。私達が一同此処に会しているのは斯様な戯れに興じる為ではなかるうに。午後の決戦に向けての最終確認や調整の為にそれぞれの時間を割いてまで集合したと私は愚考していたのだが、それは浅慮だったか？」

私は私限定に暴徒化する面子の中でも比較的素面と見受けられる玉城に問い掛ける。問うている間にも連中、特に北条寺と後藤辺りが拳や膝を繰り出してくるが、一切合財無効化していく。

玉城は聖人君子と言わないまでも、流石に礼儀を弁えている人物であり、やり場の無い拳をぶらぶらさせて私の問に答えてくれる。

「そういう意味合いで集合したのも一要因っすけど、それ以上にこの時間に集合を掛けたのはハーレムに連行されたりゆう君を救出するってのが主な理由なんです。皆心配してたんですから」

「……そうか。それは申し訳無かったな」

ハーレム関連で周囲に心配されるとは終ぞ想像していなかった。本人達はその気が無いのだろうが、多少高みの見物を決め込んでいる節があり、誰も彼も障らない様忌避し眼を背けているとばかり思っていた。

認識を改めざるを得ない。私は迫ってくる拳や肘、果ては丸めた紙の束を叩きつつ、皆に向けて謝罪の言葉と感謝の念を送る。最低限の礼儀であろう。

私の言動に暴徒化した面々の暴走が沈静化し、私に掛かる負担が一気に消え去った。そう思った矢先。

「私としては」

次なる武器として妙に鋭利な文房具コンパスを握り締めていた北条寺が剣呑な雰囲気を瞳に宿し、ぼそぼそと、だがしかし彼女らしい明瞭な声で愚痴を漏らす。

「大事な大事な悟史君との濃厚な愛の昼食会ランチタイムを自軍の戦略会議の為に潰されて」

キチキチキチと彼女の左手から彼女の心境を語るかの様に異音がする。

実は彼女は大企業役員の娘であると同時に稀代の魔術師であり、あの様に体の各部位から動物を出現させたりする事を大の得意としており、今回は左手から百舌モツを出現させたに相違無い、隠し場所はあるの発育した胸か金色の髪の中から　という法螺ほらが真であれば良いのだが。

僅かに覗く鋭利さが目に痛い。

「そのランチには貴方が紛れ込んでいるって話があった」

ゆらりと体躯が揺れる。

今し方迄暴徒だった一行が後退りを始める。更に拳こぶって私の背後へと移動してゆく。

「あの悟史君と一緒に居られる素晴らしい一時を貴方が必死に逃げ出そうとして、そんな貴方を救出する為に又作戦会議が行われる事になって」

キチキチキチキチ

ゆらりゆらりと左右に体を揺らしながら、私の方に接近してくる北条時。先程までこちらをじっと睨め付けていた瞳は顔を伏せている為覗く事が出来ない。

青幹部一同は私を盾に、視線を床に、誰一人北条寺と相對する意思を見せない。

「必死に作戦を練り上げて少しでも早く彼の元に行こうと思ったのですのに」

ゆらゆらと金色の美髪も揺れる。

両手に備えた文房具がキチキチと声を上げ、妖しく輝いている。

「貴方のせいで貴方のせいで」

彼女の歩みは止まり、揺れはぴたりと治まる。

彼女の両の手が私の顔へと近付いてくる。

背後に隠れる一同は小刻みに私に振動を与える。

「コノウラミハラサデオクベキカ」

髪の下から金色に輝く瞳が私を射抜いていた。

私の脳裏に浮かんだ事は二つ。

何時から彼女は日本の文化マシガに造詣が深くなったのか

尾崎紅葉先生、金色夜叉が降臨しましたよ

何事も無かったかのように会議は踊る。

「そういう訳で午後一発目の競技に関しては特に意見が分裂しています」

何事も無かったかの様に北条寺は優秀な戦略担当へと戻っている。乱れていた金髪は尻尾ポニテールに調髪されている。髪型が変化している事を除けば、常日頃の彼女と変わり無い。ただ誰一人として彼女を直視出来ていない。皆一様に心に創を負ってしまったのかもしれない。

「つまり、要点を簡潔に言ってしまうえば」

過ぎ去ってしまった時間を取り戻す事は出来ないが、挽回する事は可能である。私は会議を円滑に進める為に多少でしゃばりであると自覚しながらも口を挟む。

私に向けられる一同の視線は感謝の意に満ち溢れている、そういう幻想を感じた。一様に『発言してくれて有難う』であるとか『ぐっじょぶ』であるとか、そういうこの場には出せない言葉を視線が内包している気がする。これがここ最近頻繁に後藤が口にする『電波』という物だろうか。

「姫役を朝霧から北条寺へ、近衛役を私から悟史へと変更する意見がある」と

「ええ。そういう事です。勿論、貴方にはバックアップとして尖兵役に回ってもらいますが」

コンバット
総力戦。

午後最初の競技であり、男女が同時に戦場に立つ唯一の肉弾戦の事である。男女が共に立つ競技は他にも二人三脚等が該当するが、戦闘を伴う競技となると之の他無い。

参加人数は総勢十二人。ある例外を除き、特にメンバに規定は無く、十二人居れば男子生徒であろうが女子生徒であろうが、一年生であろうが違反ではない。構成員は尖兵と呼ばれる十人と近衛、姫と呼

ばれる役が一人ずつ必要となる。そして、勝利条件は至って単純である。相手側の姫と呼ばれる人物を自軍の陣地の最奥へと引つ張つて来れば良い。

だが、実の所それ程単純に事が進む事は無い。色々と行動を阻むルールが存在する為である。先ず最も困難である点は相手を攻撃する際に打撃は一切禁じられている事である。必然的に戦場では相撲染みた純粋な力勝負かサブミッションを狙った技勝負が主流になる。次に問題となるのは、尖兵役は一度背中を地面に付けてしまつか関節技で降参した時点で行動不能となり、行動続行する為には自軍の最奥まで戻り、其処に居る審判にチェックを受けなければならぬ事である。一方で近衛役にはそういった制限は無い。

そして、ルールには明確に記されていないが、姫役は勿論抵抗する事が認められている。その為、姫役に護身の心得がある女子「姫は女子である事」が前述の例外である。であれば、容易に相手方へと連行される事は無い。

ちなみに競技には時間制限が設けられ、どちらの軍も勝利条件を満たさなかった場合、更に5分間の延長戦を行う事になる。それでも決着の付かない場合には、尖兵の「死亡数」^{チェック}が少ない方を勝利とする。また、この競技はトーナメント方式である事も述べておく。

「私は別に構わない」

近衛であろうが尖兵であろうがやる事に変わりはない。我が前に立ちほだかる者を蹴散らし、相手の姫を篡奪^{さんたつ}、或いは味方の為に道を拓き我が軍に勝利を齎す。目的も思考も洗練^{シャープに}されている。だがしかし、私の同意に驚嘆を示す者が一人。

「えっ」

朝霧だ。

『姫』役という名に未練でもあるのか、それともこの肉弾戦に参加したいのか。

「別に良からう？ 私が思うに近衛役として悟史を、姫役として北条寺の方が都合が良い。私は知つての通り、それなりに体に自信がある。私の『命』を無限にするよりも、他の人にその権利を与えた方が効率が良い。姫役に関しては、朝霧と比較して北条寺の方が上背があるろう？ 人を抱えるなり引つ張つるなりの際に上背があった方が抵抗し易からう。こういった事を踏まえて意見させて貰っているのだが、どうだらう？」

「う、うん……」

渋々という表情で朝霧は首肯する。それを苦笑して見ている玉城と後藤。

私の意見に異を唱える者が出なかった為、結局近衛・姫役はハーレム員達に譲る事に決まった。尖兵の方が危険リスクと隣り合わせに居る分、楽しめそうな気はする。交戦開始が待ち遠しい。

会議は終了し、其々午後の準備へと散らばって行く。

りゅうも同様に何処かへ去って行くのを尻目に、青の幹部三人は溜息を付いていた。

「残念だったな、映子」

「そ、そんな事無いけどさ。ほら、あの雰囲気を身近で味わいたかっただけだから。近くで応援してればそんなに大差無いと思うし」

後藤の慰めに誤魔化す様に朝霧は笑って応える。
そんな朝霧を何とも言えない表情で眺めている玉城がぼそりと言葉を吐く。

「北条寺さんも思い切ったらGOGOっすねえ……」

幾ら『近衛』『姫』の体育祭後カップリング率が七割越えとは言え」

「……うん」

「はあ、映子が『姫』だったらヤル気が違っただけだな。ま、なっちまったもんは仕方が無いか。精々、あの我が儘お姫様をガードするとしますか」

「うん。昭君頑張ってるね」

「頑張るっす。応援してるっす」

「おっよ」

夜の私はガードが固いの、と歌いながら会議跡地から去っていく後藤と、それを笑いながら応援している朝霧と玉城であった。

Phase 24 : 災厄燃ゆ - 回避の代価 - (後書き)

脱稿です。

多少、コンバットのルールが理解し難いかもしれませんがご容赦を。
まあ、アメフトを想像してみると少しは理解の足しになるかもしれません。

説明不足でしたら申し訳御座いません。

昼食時間を挟んだ事で、既に抑え切れていない観客の熱気が我々選手の手元にも届いている。それに触発され私達の闘志も鰻登りで天井知らずに膨れ上がっている。

気力体力共に十全。

早く己の闘志を立ち塞がる敵に魅せ付けてやりたい。

目の前で円陣を組む仲間達の顔には克明にそう刻まれている。実に頼もしい。

「……北条寺。最終確認は戦場^{グラウンド}でやるが、その前に此処でも大まかに説明するべきではないか」

「分かってますわ」

こちらをじろりと軽く睨み、北条寺は咳払いをする。

競技開始直前に数分の作戦会議時間が設けられているとは言え、ここでの指示は必要最低限のモノにしておきたい。直前に大量の指示を行い、行動が鈍る等本末転倒もいい所である。北条寺も理解していただろうが、一応確認と言う事で口を挟ませて貰った。

「先ず隊形ですが、特に変な事が無い限り十・一・一のスタイルを取りたいと思います。前線の並び方に拘りはありませんが、真ん中が執事さんで良いのではありませんか？」

「異存は無い。進攻は如何に？」

「そうねえ。初戦は赤でしょう？ ならば、特に策無しでもいけるわよ」

「……」

「何か脅威でもあつて？」

彼女は参謀だ。それはそれは優秀な参謀である。だからこそ、私は何も進言する事無く、彼女の作戦サクナシに従う意を見せた。但し、如何にもすんなりと事が運ぶとは思えない。

それでも、彼女から指揮を取り上げ、隊の士気を下げる訳にもいかず、

「諸君。立ち塞がる敵を蹴散らせ。それが我らの使命だ。往くぞ」

「応っ！」

隊に発破を掛け戦場へと繰り出していく。

「それでは、午後の競技を開始致します。午後最初の競技は『総力コンバ戦』^トです。第一回戦は青対赤。各陣営の選手はグラウンドへ集合して下さい」

戦場へと降り立つ両陣営の選手達。

観客のテンションはそのまま戦場の騒々しさへと直結している。飛び交う声は応援が罵倒か。鳴り物が轟轟ゴウゴウと鳴り響き、足踏みが轟轟ゴウゴウと大地を揺らす。

切り裂く様にアナウンスが入る。

「それでは、主要選手の紹介……の前にっ」

その放送委員アナウンサーに横合いから急に手渡される紙。そこに書かれた内容に驚きを隠せず、声色にもその驚愕が聞いて取れる。

「選手の交代をお知らせ致します！ 赤陣営『姫』役、佐貫萩に変わりました。『人材派遣委員会』委員赤坂智恵！ 繰り返します。赤陣営『姫』役、佐貫萩に変わりました。『人材派遣委員会』委員赤坂智恵っ！」

驚愕、奇声、嬉声。

招集をかけられた本人は目を丸くしながら、グラウンドへと駆けて行く。

全てを置き去りにし、放送委員は原稿を読み進める。

「それでは、改めまして主要選手の紹介を致します。尚、其々の二つ名は放送委員会及び広報委員会認可による生徒アンケートの結果による物です。

先ず、赤陣営から。『近衛』役、『武芸百般』『器用貧乏』拳法部部长、石堂知樹。『尖兵』役、『ミスタータックル』『変態と言う名の戦士』ラグビー部所属、鵜飼翼うかい。そして、『姫』役、『高速起動戦士小粒ちゃん』『ミニ切札』人材派遣委員会所属、赤坂智恵以上、三名が注目選手です。

次に、青陣営。『近衛』役、『全自動フラゲッタ』『ハーレム野郎』若しくは『全男子の敵』サッカー部部长、稲川悟史。『姫』役、『カウntaxクフルボディ』『ミス・パーフェクト』、えーこれでもいいんですか？ 失礼しました。稲川ハーレム所属、北条寺麗華。『尖兵』役、『突き一筋十七年』『ハーレム被害者の会会長』ルルブレイカ剣道部部长、後藤昭一郎。そして同じく『尖兵』役、『規格外』『切札』『一騎当千』人材派遣委員会委員長、柳竜次やなぎつぐ。以上、青の注

目選手です。

それでは、三分後の銅鑼の合図で競技開始です。作戦タイム、どうぞっ！」

アナウンスに対し、観衆だけでなく、戦場へ向かう緊張を保っている選手も、その内容に一喜一憂、悲喜交々の様子を見せている。特に、二つ名を流されるに当たって、自分の扱いの酷さに嘆く選手もいた。

そして、一様に頭を傾げたのが『柳竜次』という名。誰しもが辺りを見回し、互いに確認し合い、そして暫く経った後に漸く、『柳竜次』という人物が自分達が常日頃呼び慣れている『りゅう』と同一人物だということに気が付く。

その周囲の反応に、何処か諦念を隠し切れないうりゅうであった。

「そう言えば、りゅうの名前ってそんな感じだったなあ」

早速円陣を組んだ途端に、そう呟く悟史。その呟きに首肯する反応を見せる選手。確かに己の名は呼び難い上、常の呼称が呼び易く憶え易いという点もあり、仕方が無い事であるとは思うが、誰一人として私の本名を覚えていなかったのは驚愕に値する。同時にあの『後輩』の氏名が『赤坂智恵』であった事を今更ながら思い出した。私も他人の事をとやかく言えない。

「……その話は後だ、『全男子の敵』。しかし、『姫』がああ『後輩』である以上、無策で行くのはいただけないのではないか、北条寺？」

多少、悟史に毒を吐いておく。奴の苦い表情のお陰で、少しばかり気が晴れる。

北条寺は北条寺で適当な作戦が閃かず、こちらも異なる理由で苦難の表情を浮かべていた。致し方無い。私は彼女が嫌うであろう正攻法による作戦を提案する。

「北条寺、時間が無い。強引な上、正攻法なのだが私の意見を聞いて欲しい」

「ええ。このまま考え込んで、全面衝突するだけですし、どうぞそうして、地面で図を描きつつ大まかな説明を行う。全員の顔を見渡せば、一応誰もがこの作戦を理解し、其々の持つ役割を理解していると思受けられた。

途中で口を挟む事無く、最後まで私の話を聞き続けた北条寺は一言、それをお願いと言って、自分の配置場所へと去っていった。許可は出た。ならば後は執行するのみ。

「初戦から総力戦になってしまったが、各員全力を以って役割を果たして欲しい」

「応っ！」

グラウンドの中心で向かい合う両陣営。

一方はこの競技では一般的な十・一・一の隊形を布^しき、他方は九・一・一・一の変則的な且つ随分と前線が密着した隊形を布いていた。前者は赤陣営、後者は青陣営であり、前線の直後で相手陣営を見据

えているのはりゆうである。
赤陣営は青のタイトな陣形に応じる様に、自身の隊形も互いの距離を狭める様に移動していく。

そして、律儀に時間通り銅鑼の音が響き渡った。

即座に飛び出す両陣営の尖兵達。開始時には数十メートル在った互いの距離は瞬く間に縮まってゆく。赤陣営は警戒していたりゆうの姿が捉えられない事に幾許かの戸惑いを覚えるが、さりとて目の前の障壁を如何にかする方が先決であるとりゆうの存在を優先事項から外し、全力で疾駆する。そうして、互いの距離があと数メートルとなったその時

「MOOOOOVE！」

耳朶^{じだ}を震わす雄叫びが戦場を駆け巡り、青陣営はその雄叫びに即呼応し密集隊形の一枚板が二つに分裂する。即ち、分裂する事で垣間見えた隙間から前線へと牙を向ける獣が躍り出る。その分裂劇に対応出来ない赤之尖兵だが、己の疾駆を止められる訳が無いと駆けるスピードを落とす事無く青の壁へと突き進む。正に全面衝突。

観客席にまで響き渡る肉同士の衝突音に沸き上がる観客。選手の無事を祈る者あれば、その原始的な闘いに手に汗握り絶叫する者あり。

「つつしやあああああ」

低空タツクル一閃で青の壁を粉碎する『戦士^{ヘンタイ}』。

「……」

面で攻める尖兵を己の爆発的な推進力で引き千切る『一騎当千』。
粉碎された自陣の壁を一睨みし、目前の隊形の綻びから姫を狙いに

再び疾走する。

戦況はどちらにも傾いてはいなかった。

Phase 25 : 災厄燃ゆ - 総力戦・壱 - (後書き)

七月は時間が取れると、そんな風に想っていた時もありました……
御免なさい御免なさい御免なさい*十(一秒間)
出来る限り、細々と更新していきたいと思えます……

夏ホラー関連

こんな調子ですが、一応着々と夏ホラーの方の準備は整っております。
予定では二作ありますが、シリーズモノ仕立てです。
好評でしたら、その後連載になるかもしれません……

赤の壁を食い千切った『一騎当千』が近衛、姫役に襲い掛かる。十中八九近衛は叩き伏せられ、姫は抵抗空しく連行されてしまうだろう。りゅうの強靭さを身に染みて理解している生徒は勿論の事、観客も午前の競技での彼の姿から、疑い様も無くそうなるだろうと確信していた。

しかし、考えてみて欲しい。

放置しては明らかに危険な人物をそう簡単にフリーにするだろうか。自分達の手に負えないからと、猛獣を放置するだろうか。

答は否。

赤き尖兵達が己の身を犠牲にしながらも、唯一人の為に仕掛けた作戦が発動する。

赤の壁と接触する直前に体を沈み込ませ、そして接触する刹那自身の体のばねを解放し激突する。狙った通りの衝突点^{インパクトポイント}。私のシヨルダツクルは尖兵役二人を巻き込み、壁に穴が開く。そのまま慣性に従い、決壊した部分から姫役へと特攻を掛ける。そう行動する予定だった。

行動予定に異常が起こったのは衝突する瞬間。目前に開けた隊列の間隙を高速で潜り抜け、速度と質量を相乗した一撃を見舞わせる。相手の重心に近い腰辺りへの正確無比な一撃は容易く壁を吹き飛ばしたが、私は違和感を感じる。衝撃が相手に伝わりきれていない。自身に還る手応え、反作用が予想よりも小さい。思わず足を止めてしまう。

また違和感はそれだけではない。吹き飛ばしたと思えた相手が私の服の掴み、倒れながらも私の行動を阻害している。とは言え、この

程度であれば加速すれば振り切れるだろうと判断。多少の違和感を感じていたが、自軍の壁が決壊しているのを一瞬見遣り、早々に決着を付ける必要ありと考える。ならば、迅速に相手の本丸へ往かんと止まっていた足に力を込めた瞬間。背後から強烈な一発を浴びた。浴びてしまった。

正に地を這う超低空タツクル。

一瞬にして相手の動きを止めるラグビー部長『ミスタータツクル』の十八番。それが完璧に、しかも背後からりゅうへと咬み付いた。きつくバインドされる両脚。膝裏に掛かる衝撃。そして、死に体でありながら掴み取り、りゅうの動きを制限していた服にかかる拘束。それら全ての要素が噛み合い、青の要であるりゅうは為す術も無く、宙へ舞う。

そして ずどん と音が響く。

一瞬、観客の音が途切れる。目の前の事態に舌が動かなくなる。受身を取る事も出来ず、左腕から地へ叩き付けられるりゅう。彼の背に土が付く。

「よっしやああああ」

値千金の一撃を見舞った『戦士』^{ヘンタイ}が咆哮と共に拳を振り上げた。事此処に至って始めて、観客は喚声を挙げる。青の陣営は悲鳴を挙げ、赤の陣営は奇声を撒き散らす。被害はほぼ同程度にも関わらず、対照的な両陣営。それは倒れ伏せた彼らに対する期待度の差か。自分達に掛けられる声援に押される様に更に加熱する総力戦。^{コンバット}

『戦士』^{ヘンタイ}は青の姫へ向け疾走する。

『会長』^{コトウ}は罅迫り合いの状態から抜け出そうと四苦八苦。

『武芸百般』^{キヨウヒンボウ}は隙あらば前線へ向かわんと目を光らせ、『ハーレム

野郎』は真の騎士の如く姫に襲い掛かる敵に対して身構えていた。だが、唯一人、りゆうだけが沈黙していた。

これは致命的だな、と脚を持たれた瞬間他人事の様思った。

絡み付いていた服への拘束もジャストタイミングで外され、脚に加えられたモーメントで私は後方へと宙で回転する。間もなく体を貫くだろう衝撃に耐える余裕も無く、只頭部への衝撃を避ける様に体を丸めるのが関の山であった。

刹那、左体側から衝撃が体を貫く。堪らず、肺の空気を外へと吐き出す。

嗚呼、矢張り致命的だった、と胸の内に零す。

只の衝撃であれば、否、如何なる類の衝撃でもよいが、これが左腕以外に加わる力であれば、今この瞬間にもバネ人形の如く飛び起きれる。己の背に土を付ける等という愚は起こさないだろう。だがしかし、不運にも左腕から落下してしまった。アノ傷が開いてしまった。

「……………笑止」

日常では中々味あわない痛烈な痛みに気を取られてしまった。只それだけの事で味方を危機に追い遣ってしまった。また、何処かで油断していたらしい。否、若しかしたら油断だけではなく、自分の運動能力を過信してもいたのだろう。忌々しい己の精神の拙さ。それにしても、上手く嵌められたものだと言えざるを得ない。

彼らは自己犠牲の精神を以って私を潰そうと構えていた。玉砕を覚悟の上で私の前に立ち塞がり、私の錘おもむになる事だけに専念していた。そしてそれは、味方を信頼した上での作戦。必ずやあのタックルのスペシャリストが止めを刺しに来るだろうという確信。私は彼の十シエネラ及びキャリスト

「あ、りゅう君復活した」

「うーん。旦那にしては随分時間掛かったっすね」

慣れない絶叫の所為で微妙に痛い喉を手で押さえている朝霧と玉城。最も正しいかろう陣営の応援とはかけ離れて、この二人はりゅうの様子だけを見守っている。実際にはこの数十倍の女子生徒が、色の差異すら超越して、悟史の一挙一動を凝視している訳で、咎められる事も無い。

通常であれば、タツクル程度の攻撃ではビクともしないりゅうが、十秒近くも身動きしなかったという異常。一般生徒でも気付くこの異常性に、りゅうの事を気に掛けていた二人が気付かない訳も無く、口にこそしなかったが内心心配で仕方が無かった二人である。

「うわっ速っ！ 何すかあの加速力！ 見たっすか今の動き！ 一歩でトップスピードに乗せたっすよっ！ 信じられないっす！ 流石旦那！ あーもー格好良いなっ！ もーほんとう惚れるっす！」

「ちょっと玉城ちゃん、落ち着こうよ。というか如何してポッキーを口に啜えたまま、そんなに早口で喋れるのかボクには理解出来ないっただけどっ！ ねえ、ほら落ち着いてよ」

「そうですっ！ 速さです、速さなんですよ、映子さんっ！ この世の理は何よりも速さ。SO！ 如何にして行う時間を縮めるのかという事だけに価値があるのですっ！ 連載小説なんて時間をかければ誰にでも書ける。数十万のアクセスなんて時間を惜しみなくかければ誰にでも達成出来る。だからっ！ だからこそっ！ 如何に時間をかけずに其処に至れるのがっ！ 唯一の評価なんですっ！」

「ねえっ！ 落ち着いてっ！ ……つてりゆう君本当に速いっ！
ボクの見えない内にもうちエックを終えてるうううう！」

「ああああもうううういつけえええええ！ りゆうううう君！」

「ボ、ボクも負けずにっ。いつけええええええ！」

「……馬鹿ばっか」

先程の心配は何処吹く風とばかりに、りゆうの姿に混乱し発狂する二人とそれを後方から見つめる榊。

この青陣営で繰り広げられた小コント劇場は絶叫する生徒達に見届けられる事は無く、ひっそりと幕を閉じるのである。

赤組の作戦は、りゆうを地に倒すという点までは確実に上手く機能していた。更にりゆうが暫く動かないという嬉しい誤算もあった。ならば後はハーレム野郎を倒すのみ、この勝負は頂いたと、赤の選手も参謀もそう思っていた。だが、そう甘くは行かなかった。

仮にもりゆうが指揮を取り、短期間の鍛錬を重ねてきた猛者達。そして、参謀役の北条寺がタックルを武器に持つ赤の尖兵に対して、何の策も立てなかった程信頼を寄せている尖兵なのである。簡単に敵に道を開ける筈も無い。況してや、急先鋒であり自分達が崇める大将がえげつない罫に嵌り、その背を地へと叩き付けられたのだ。益々闘争心に火が付き、いつも以上の力を発揮させている。

さらに、近衛役として悟史が完璧に機能していた事。猛攻を見せる『戦士』^{ヘンタイ}に対し、常に背で姫を庇う様に、且つ重心を低くして構え

る事で攻撃を凌いでいる。幾ら『ハーレム野郎』と罵られ様が、彼が高校生として一流と評価されているFWである事は変わりない。そのシユートの正確性と体の安定感は超高校級と噂されるほどの逸材でもある。真っ向勝負であれば、肉体勝負で早々負ける事はない。

「くう、この男の大敵がああ！」

「俺は悪くないだろおお！」

「お前一人だけが良い思いしやがつてえええ！　うちの部にも可愛いマネージャを入れるおお！」

「それが本音かあ！」

魂の叫び声と肉のぶつかり合う音の応酬。この二人だけではなく、そこらで似たような応酬が繰り広げられており、事態は硬直し始める。

一気に勝負をかけるつもりであった赤陣営は思いも寄らぬ状況に焦り、近衛までもが突撃を開始する。尖兵の数的有利から後藤が姫アカサカへと攻撃を仕掛けていたが、『ミニ切札』赤坂の高機動性に翻弄され捉える事が出来ていなかった。その為、近衛の前線参加が可能なのである。

尖兵の壁の隙間をぬい、『武芸百般』が稲川へと迫る。それを確認し、別の方向から攻撃を仕掛けようとする『戦士シクタイ』。二対一の状況で悟史は惑う。この状況では防げるのはどちらか一方。どちらを優先的に防御すればいいのか。

二者択一。

どちらを通せば北条寺が生き残る可能性が高いのか。

惑う悟史に攻める二人。迷う彼に選択を熟考する時は無く。

「おりやつてええええええ！？」

選択する選択肢も無くなってしまふ。突然の乱入者に弾き飛ばされる『戦士』^{ヘンタイ}。彼のタツクルよりもなお低い軌道から突き上げる当身。しかも彼の死角から急加速で迫り一撃を加えたその姿は。

「りゅう！」

「惹きつけ役御苦労。御蔭で綺麗に当身が決まった」

復活したりゅうその人である。

颯爽と登場したのは良いものの、左腕をぶらぶらとさせ、気だるそうに悟史を見遣り指示する。

「悪いがうちの後輩を捕まえに行ってくれ。後藤とお前なら挟撃で何とか捕まえられるだろう。最初の作戦通り、選手交替と行こうか」

「了解！ りゅう、後は頼んだっ！」

「当然だ。……それでは、北条寺。申し訳無いが、私が護衛役を勤めさせてもらおう」

「分かってるわよ。任せましたわ、執事さん」

「……了解」

その後の展開は呆気無い物だった。

赤の猛攻はりゅうの復帰を以って終了し、赤の近衛はりゅうの守備

を抜ける事は出来ず、敵の前線で足止めされたまま。赤坂はその高機動性を以ってグラウンドを逃げ回っていたが、悟史の執拗な追い込みと後藤の詰めめ速さに追い詰められ、悟史に捕まる事になる。救出せんと『戦士^{ヘンタイ}』が猛追を見せるが、後藤の度重なる邪魔にあり、結局追いつく事が出来なかった。

一回戦は青の勝利と相成った訳である。

現在、実生活で修羅場を迎えている瀬戸です……
連載更新が滞っていて申し訳御座いません。来月辺りにはこの忙しさも半減しているのでは？ と。

夏ホラー

自身の小噺は不評ではありませんが、『ホラーコメディ賞』なるものを頂きました。有り難く頂戴しております。

この探偵事務所シリーズ。1作目が『幻話』で2作目が『ひまわり館』となっておりますが、どうやら皆様後者を先に読まれているみたいで……

予告通り、好評とは行きませんでしたのでシリーズにはいたしません。シリーズを読みたいという奇特な方がいらしたら、メッセージでも下さいます。

「俺には良く分からん」

顰め面をこちらに向けて、大仰に語り始める男が一人。その顔は納得がいかないという彼の感情を如実に表していて、何とも滑稽だ。

「男なんだか女なんだか良く分からねえ顔した野郎がちやほやされるんだ？ ああ言う顔を何ていうんだっけか。あーと、ホモセクシヤルじゃなくて、なよっぱいというか」

「中性的か？」

「そうそれだそれ、ぴったんこかんかん」

ずびしつと音が聞えてきそうな程、鋭くこちらに人差し指を突きつける。

「そういう中性的な顔した奴がイケメンとか言われてよう、おまけに背もすらつと高い。しかも周囲には優しいと評判で、いざと言う時には颯爽と王子様然と駆けつける。で、部活は当然の様にむさ苦しい部ではなく、サッカー部に所属。勿論、部活じゃエースで大黒柱。はいはい、それ何処のエロゲの主人公って言いたくもなるぜ？」

「……お前はエロゲとやらを嗜むのか？」

「突っ込む所はそこかい！ えーと、一応な、もう年齢制限の枠を脱出した訳だし、何作か楽しませてもらっているよ。意外にストーリがしっかりしたものがあって吃驚したかな」

踏破したゲームを思い出したのか、少々薄気味悪い笑みを浮べる男。そういう表情が女子生徒に敬遠される原因なのではないだろうか。指摘するのは簡単だが、こういう事は自己で解決策を探すのが吉と考える。指摘するのは止めておこう。

「エロゲ談義は置いておいて。俺が話してえのはそこじゃない。どこの主人公みたいに、周りには美人女子生徒で囲まれているあの状況。お前はどっと思ってるんだ？ ハーレム騒動の被害を一番傍で受けている身としては」

「……どうもこうも無い。少々喧しいとは思うが」

「そいつぁ嘘つてもんだろよ。あんな可愛いかったり美人だったりな女達がよ、拳つて自分の友人の傍に集まるんだ。しかも誰もが色目を使ってよ、普段見せない姿をそいつに見せてるんだぜ？ 傍に居て嫌になんないのかよ？ ありゃ、目に毒を通り越して、空気とか雰囲気にも毒だぜ。毒よりも災厄って言った方があってつか」

「……災厄。なるほど、言い得て妙だ。毒ならばまだ避け様がある。だがしかし、災厄となれば避け様が無く、只其処にいるというだけで害を被る、という訳か」

彼らを『災厄』と自身の胸の内で揶揄した事もあったが、まさか他者からそう指摘されるとは思いもしなかった。自身と似た言葉のセンスを持っている人が居た事に嬉しさを感じる反面、目の前の『戦士』と同じという事に若干戸惑いがある。

私が思考の海に揺蕩っていると、申し訳無さそうな声音で鵜飼が話し掛けてきた。恐らく、私が彼の言葉に気を悪くしたとも思っているのだろう。気を使う必要の無い相手に気を使うのが何とも鵜飼

らしいが、そういう良い所は彼の通常の言動で台無しになっている。

「済まない、言い過ぎた。親友の悪口なんて聞いて、気分が良い筈なんて無いもんな。申し訳無い」

「……否、気にしなくて良い。陰口を叩かれる原因は奴にもある。多少は目を瞑ろう。序でだが、私は鵜飼のそういう素直に謝罪出来る姿勢を好ましいと思う」

「そうかいそうかい。男に好かれても嬉かねえがよ」

「然り^{しか}。では鵜飼の質問に答えるでしょうか。聖教諭が戻るまでの暇潰しに」

なるべく左腕を動かさない様注意し、腰の座りが良い所に座り直す。野外に敷かれているシートは座り心地が悪く、何とも落ち着かない気分到我々を誘う。鵜飼も度々腰の位置を変えていた。

今現在、私と鵜飼は救護班用テントに出向いている。無論、怪我の治療の為である。

しかし、肝心の治療を行う保健医は私達の怪我を見るや否や、テント内での装備では対処し切れないと自分の職場へと駆けて行ってしまった。応急処置を忘れて。仕方なく片手で処置をし、手持ち無沙汰の現状である。

先程まで私達を貫いていた陽光は、居座っている救護班用テントの中までは差して来ない。生徒達と観客達が醸し出す熱気と歓声だけは十分に届いていた。

唯耐えるだけが許される状況だった。

体育祭準備期間中、充てられた練習時間を目一杯費やして完成させた尖兵の動きだが、既に綻びが修復不可能の域に達していた。初戦での堅実な仕事振りは影を潜めてしまっている。原因は明らかだ。

本来であれば、近衛役であつたりゆうを前線に押し上げ、代わりに尖兵役の稲川を姫役の護衛に充てるという基本戦術。競技前に二人の役名を交替させたが、本質的な役割の変換はなかった。だがしかし、その前線の要たるりゆうが負傷退場をしてしまった。壁役の力の象徴であると共に、精神的支柱でもあつた彼の抜けた穴は途方もなく大きい。

そして、それだけでも傾いてしまった勝負の行方に、拍車を掛ける人物が居る。

「持ち応えろ！ チエツクから味方が戻るまで穴は塞げ！」

稲川は味方を鼓舞する様、檄を飛ばす。焼け石に水だと理解してはいるが、それでも声を出し続ける。りゆうの抜けた穴を精神的な面だけでも補おうと尽力する。

だが、相手の猛攻に綻びた壁はあまりにも脆過ぎた。次々と倒され、そして我が軍の姫の下へと、稲川の下へと迫り来る。

「うぜえうぜえうぜええええ！ 這い蹲れってんだっ！」

壁から漏れ出す尖兵に組み付き、跳ね飛ばし、北条寺から遠ざける。少々腕に覚えのある一般生徒程度では稲川の運動能力に対抗する事など出来ない。雑魚だけならば、姫役に護衛を付けない総攻撃フルアタックと見えど、簡単に陥落等しない。

それ故に舞台を盛り上げ、拮抗を破るのは

「先輩如きじゃ役不足なんだよっ！」

りゆうに執念を燃やす人材派遣委員会委員の古森勇気である。その恵まれたがかいを存分に生かし、稲川と正面切つてぶつかり合う。余談ではあるが、この美男同士の正面衝突に黄色い声援が倍増したり、イケナイ趣味を持つ女子生徒達の創作意欲を大いに湧かせていたりもする。

どちらも長身、且つ優れた運動能力をもちながら、されど力においては古森に分がある。だが一方で、稲川には優れた体裁きと負けられないという熱い思いがある。りゆう無き今、青を支えるのは、そして後に控える北条寺を護るのは自分しか居ないと。

「っしゃああ！」

「どけえええ！」

二度三度と衝突するも、力と技、思いが拮抗する。肉が軋む、汗が飛び散る、腐女子が恍惚とする。

決着がつくには今しばらく時間が掛かりそうだ。

「私が軽々しく言えるのはそんな所か」

「へえ。面白そうな事になってんのな。稲川の奴、一線を引いて付き合ってるって事は、欲に駆られた猿野郎じゃなかったんか。それはそれは。現代の、理性に驚くほどブレーキ能力の無い『若者』と比べると、しっかりした貞操観念ってか、倫理観を持つてるだな。感心感心」

「お前に言われる筋合いは無い、と吼えそうだがな」

「失敬失敬。だがよ、俺は猿野郎じゃないぜ？ 一応、言わせて貰うがよ」

「そつだな。お前が常日頃破廉恥な発言をしている事が、逆説的にそういう事を致していないと語っている。一々ああいう発言をする度に、微かに動揺を見せるのはどうかと思うのだが。それにだ。お前が変態と呼ばれる評価の割りに、女子生徒から本格的に嫌われない事で信憑性は更に」

「ああつ！ もうそれ以上言うなつ！」

好き勝手言いやがって、と目線を逸らせて愚痴を零こぼしている。微笑ましい程、如実に照れが表情、言動に表れている。悟史以上にかいかい甲斐がある男である。

自分の表情を読まれている事に気が付いたらしく、顰め面をして先程までの話の続きをしようとする。何とも微笑ましい。

「んでよつ！ まあこつから先は俺の想像なんだが。稲川つてハーレム内の娘とは所謂『付き合ってます』って関係を持っていないんだろ？ という事はだ、ハーレム住人では無い子に恋愛感情持つてゐるって事にはならないか？ だけでも、あの容姿を以って、告白もしていない。とすれば、その相手と付き合うには障害があると予測が立つ。例えば、相手の子には既に相手が居るとか、片思いの相手のことを知っているとか、実は既に稲川が振られているとか。いやいや、若しかするとロミジュリ状態？ すわ、同性だったり」

「男色は断じて無いと、奴の尊厳の為に証言しておく」

しかし中々に鋭い思考をしている。ここに本人が居れば、さぞや楽

しい状況になっていたものだろう。日頃無意識に溜め込んでしまっているストレスも一気に解消、溜飲も下がるといふものだ。

「あー、例えば朝霧ちゃん辺りだったりしてな」

「さあな。奴の恋事情に興味がある訳ではないからな」

「そうだな、そうだな。男の恋事情など、聞いてても何の足しにもならん。……そういや、聖ちゃん遅いな。俺らの応急処置すら忘れて医務室に飛んでいったのによ。若しかして俺らって嫌われてるのか？」

未だ聖教諭は来ず。傷口がぱっくりと開いているのは、見ていても気持ちの良い物ではない。早々に来て処置してもらいたいものだ。

Phase 27 : 災厄燃ゆ - 幕僚対談 - (後書き)

……今だ以って修羅場です。

息抜きの為に書き上げましたPhase 27です。短いですが、もしかすると、一週間後にまたUP出来るかも知れません。その時はどうぞ宜しくお願い致します。

0083辺りの熱さを出せる物書きになりたいものです。勝負の部分を書いている時に常々そう思います。

「こりやまずいつすね」

思わず噛み締める力が強くなる。ぱきりと啞えていた物が半ばで折れてしまう。折れたソレにはもう啞えて振る価値が無いと、口の中へと消えて行った。

玉城の視線は確かに目の前の試合に向いてはいるが、実の所その肉弾戦を目に収めてはいない。ただ視線を向け、意識は他の所へと向っている。思い描くは体育祭勝利の青写真だが、彼女には既にそれが不明瞭になっっている様に感じられた。目前の試合の行方で云々と言う訳ではない。この試合を落とそうが、青写真がそのまま現実のものへとなる可能性は十二分に高いものだったのだが。

視線を少しずらして、自分の隣のスペースを窺う。先程まで朝霧が声を張り上げていた所だ。既に彼女は其処にはいない。無意識に溜息を一つ吐いていた。

「私だっで行きたかつたつすよ?」

誰にも聞えない小声で独り言つ。

青写真が霞む理由は他でもない。青陣営の旗手であり、精神的支柱であるりゅうの長期離脱の可能性が高い事だ。勿論未だ確定と言う訳ではない。彼の着ていたシャツに血が滲んでいる様に見えたのは錯覚かもしれない。

だが、玉城は考えてしまう。彼があ程度の衝撃で怪我する程、華奢なボディとは到底思えないという事。だからこそ、あの傷は体育祭前に負ったものだろうし、高い確率である時のものであると。

そうであるのなら、彼は決してこの場に戻る事は無い。否、彼自身は戻ってこようとするだろうが、自分達が彼を担ぎ上げ、戦場に

再び出す事は避けねばならない。無茶をする人間を止めるには周囲の力が必要となる。

目前の試合が自陣營の敗北で終焉を迎えるだろうという事がほぼ確定的になったのを確認し、玉城は次の戦場の準備の為自分の手帳を引つ張り出す。多少御菓子ごかしの匂いと欠片がへばり付いたシンプルな手帳。ソコには今体育祭の戦術等々がびっしりと刻まれている。その細かな記述から次の競技に関するものを探し出し、作戦実行に必要な人物を探そうと駆け出して行く。何しろ参謀役の片割れは未だ敗戦濃厚の戦場に佇んでいるのだ。玉城にのみ与えられた仕事と言える。

抱える荷物から新たな相棒ホッキを取り出し、次々と命令を渡していく。今はただ自分に任せられた役割を忠実にこなしていく。

「そうそう。そこで君が練習通り先に……」

描いていた青写真は霞がかっていたとしても、先に進まない限り霞が晴れる事は無い。

その事を玉城は確りと理解していた。

「と言う様に『R・U・R』で初めてその言葉が出てきたんだよ。とすると、アレの発祥はチエコという事にならないのか？」

「残念ながら、その理屈で言えば古代ギリシャが発祥という事になるだろう。二千八百年も前の叙事詩に掲載されている。二十四段中の十八段、通称『武器もの製の段』、鍛冶の神へパイストスの館に居た筈だ。黄金の少女のソレがへパイストスの傍に仕えていたという件くだりがある。恐らくはアレが最初の記述だろうよ」

「そうなのか。それは知らなかったな。しかも黄金の少女タイプとはなあ。つくづく神つてのは良い趣味してるよ。どうせなら、某万能文化云々に登場する美少女タイプとか、ベクトルは違う方向を向いてるけど電磁力とか日輪の力で稼動しちゃう巨大メカタイプとかが登場してくれると、俺としては大満足だなあ」

「お前を満足させる為に科学技術は発展している訳ではないからな。だがしかし、そういう夢想が科学技術を大きく飛躍させるトリガになる事は充分に考えられる」

「だろ？ 妄想力は偉大なんだぜ？ そうすると……メイドロボが出来るのは何時頃だろうな？」

「大方お前が妄想しているメイドロボというのは、タスク統合型とも言えるヒューマノイドだろう？ もしそのメイドロボに任せたいタスクの結果だけを求めるのならば、タスク分散型とも言える個々のタスクに適したロボを複数使用すればよい。これならば、炊事以外は早晚達成されるのではないか」

「それじゃ駄目なんだよっ！ お前には『男の夢』つてのが理解出来るんのか？」

「『男の夢』とあたかも男の総意の様に語らないで欲しいのだが…… 鶉飼が何を求めているのか知りたくもないが、お前が望むヒューマノイドの様にタスクを一つの作業因子エージェントに集中させるのは工学的に危険な設計だ。分散させて管理させた方がリスク回避の面でも望ましい。それにその妄想に聞きたいのだが、例えばそのヒューマノイドが掃除する時、どんな道具を利用していると考える？」

「そりや当然、掃除機でも使ってー」

「それはエネルギー面から見ても非効率的だ。それならば、掃除機なリタスクに特化したロボをインテリジェント化させて、タスクをこなした方が矢張り望ましい」

「くっ……だからだなあ！ 『男の夢』 ってもんがあるだろっ！」

「知らん」

「ぬう！ お前には愛でたり萌えたり愛したりしているモノがないのかっ！」

「……如何してそういう話になる。しかし、愛しているモノか……」

「そう愛しているものだっ！」

「……愛しているモノ、愛して止まないモノ」

「さあ、吐け！ 正直に吐けっ！ 思いの丈をぶちまけてしまえ。俺はお前がどんな趣味嗜好を持っていたとしても気にしない。例えば、金髪ロリ幼女が堪らないとか眼鏡のお姉さん系美人OLがイイツとかのほほんとした若未亡人しか眼に入らないだとか言っても全然構わない。ポニーテールが良いとかちよっとした髪留めが堪らないとか着物姿に溢れるリビドが止まらないといった部分的嗜好でも勿論大歓迎だ。さあ、誰に憚る事も無い。君は君の思いに正直になればいい。さあさあさあ！」

「そう！ さっさと吐いた方がボクも良いと思うんだよっ！」

「……突然現れて最初の一言がそれか、朝霧」

外の騒がしさと青春の匂いから切り離された救護用テント。

未だ帰還しない聖教諭を待つ間、鶉飼と実に下らないマニアックな談義を行っていたのだが、今迄姿すら見せなかつた朝霧が突如話に割り込んできた。一体何がコイツの心の琴線に触れたのだろう。質問の答を話せと脅迫染みた視線が実に痛々しい。

男の嗜好を知って何をするというのか。そういう嗜好を理解して、そうある様に自身の姿を漸近させていくというのだろうか。それでは駄目なのではないか、と私は個人的に考えている。言葉にするのは困難だが、その嗜好対象というのは作り上げて達成されるというよりも、初めからそうあったからこそ、そういう存在であるからこそ嗜好対象足り得るのではないか。漠然とそう捉えている。

「……確かに髪を結い上げた和服姿の女性には眼が行く事もあるが」
「それだ。それが俺の求めていた回答だ」

「りゅ、りゅくんってそういうのが好みだったんだ……」

「ちなみに悟史の好みだが、髪はセミロングからショートボブの黒髪で、活発な明るい女性だったはずだ。具体的過ぎず、抽象的過ぎず。模範解答の一種とも言える」

「否、それって今の時代結構……あ」

私の言葉の意味する所を悟ったのだろう、意味有り気に嘆息する鶉飼。その分かっていますという顔に何故か苛立ちを感じる。奴の顔から、人を不快にさせる因子でも放出されているのだろうか。

一方の朝霧は特に気にする事も無い。私としては、つい口を滑らし

てしまった事に反応して欲しくは無かったのでこれ幸いである。話の流れに切れ目が生じたので、ここで話題転換をしておく。これ以上、今の失言を取り上げられ、話を続けられても厄介である。早々に会話のディフェンスラインを上げる事にする。

「朝霧。斯様な場所に如何して来たのだ？ 私の状況ならば救護委員辺りに聞けば事足りると思うが」

「む！ ボクが心配して来てあげたのに、その言い草はないんじゃない？」

朝霧に対するディフェンスはどうも対処を間違えた様である。頬を膨らませる様はリスを彷彿とさせる。そこに威厳や突き刺す敵意は感じられない。ただ、何とか睨みつけてる事は理解出来る。これ程、怒りの表情が様にならない奴もそうはいまい。

私と朝霧との小競り合いに苦笑を浮かべ、鶺鴒が横合いから朝霧に質問する。曰く、聖教諭の姿を見ていないか、と。こちらに緩い睨みを向けつつ、彼女はその問に答える。

「むう……うん。さっき、グラウンドで試合に見入ってたよ」

「……」

呆れて物も言えない。確かに彼の教諭は悟史に対して、憎からぬ思いを抱いている事は十分に承知ではあったのだが。

「マジかよ。聖ちゃん天然にも程があるぜえ。それだからハーレム住人の一人に……ってなあ、朝霧ちゃん。若しかして若しかすると、りゅうの逆鱗に触れちゃったか」

「うん……こりゃ一波乱ありそうだね、はは」

胡坐をかき、片方の掌を顔に当て顔を伏せる生徒と立ち竦み、小刻みに震える教師。

怯え怯えさせる立場が逆であれば、その態度もまた然り。生徒たる彼が体の一部を微妙に動かすだけで、教師たる彼女はびくりと体全体で大きく反応してしまう。またそういう反応を彼は逐一理解しているのだろう、彼女がそういう反応を見せる毎に彼の纏う雰囲気が重くなっていく。

彼女は彼が何をしようとしているのかを知っている。

何もこういう状況になったのはこれが初めてではない。今迄も何度かあったことではある。その度に自身に戒めてはいるのだが、彼を目にするとその誓約も薄くなってしまうのである。

生徒　りゅう　が掌をずらし、半眼を教師　聖　へと向け、
気だるげに口を開く。その視線の鋭さに聖は小刻みな振動すら無意識に止めてしまう。正に蛇に睨まれた蛙である。

「聖先生」

「は、はい！」

「私は何度も教師である貴方にこうして諫めているのですが、若しかして今迄の私の説明では納得されていないものだったのでしょうか」

「い、いいえ。そういう訳では」

「理解はしているのだけれども、衝動的にとでも？ 私には理解出

来ない所ですが、恋愛というモノはそういう理性の範疇に収まるものではないという認識が実しやかに囁かれている様ですので、ご他聞に漏れず聖先生もそうなのかもしれません」

「れ、恋愛とかじゃなくて」

「いえ。何度も私の見解をご説明したと思いますが、別に教師が恋愛してはいけない等と大それた事を言うつもりではありません。何せ、このご時勢、恋愛礼賛主義とでも言うべき風潮です。どのような恋の形も受け入れられる様な時代です。教師と生徒等別段珍しくも無い」

「だ、だから」

「ただ……だからといって、仕事を放棄なさるのはよろしくない。教師とは身分であり、役職だ。身分としての高校生とは訳が違う。職場は学校であり、学校側から給料を渡されているのです。ならば、プロフェッショナルとしての自覚を持って頂きたい。恋を御旗の印に立てる、欲に駆られる前に、そのプロフェッショナルの意地を以ってプロフェッショナルの仕事を行って頂きたい」

「……あ、あつ」

「そして、仕事を全うした上で、プロフェッショナルの矜持と照らし合わせても、恋愛というモノをする余地があるのです。それはもうご自由に為さって下さい。詰まる所、周囲の迷惑を考えなければ、恋愛というのは当人同士の問題ですから、私がどうこう言える話では無いのです」

「……」

「宜しいですか、聖先生」

「……」

「先生？」

「……う、ううっ！」

突如としてテントから逃げ出していく聖。りゅうの言葉に思い当たる節でもあったのか、涙を湛えて、否、振り零しながら走り去ってしまった。

テントに残された三人は啞然としながらも、一つの事に気が付く。それはこの場所に男二人が永い事居座っていた理由であり、聖を待ち続けていた理由でもある。

「で、どうするの？ そのキズ」

「ああ。俺のは安静にしてれば、数日で治るだろうけどよ。お前はどうかんだ？」

「……致し方あるまい。朝霧、その簡易デスクの上にある私の携帯電話を渡してくれないか」

りゅうは受け取った携帯電話を片手で扱い、電話帳から或る人物を呼び出す事になる。

その人と彼らとでまたひと悶着あるのだけれども、それはまた別の話である。

難産でしたorz

一週間後と言いつつ、少しオーバーしてしましまして……申し訳ございません。

さて、今回話を読まれて『それは違うんじゃないか』と思われた方も当然いらつしやると思います。

私も皆様全てに分かってもらえるとは思っておりません。ただ、こういう考えもあるんだ程度には思っていただければ幸いです。

(最近の教師不祥事事件には、プロフェSSIONナルの意識が足りないんじゃないかと思つたものでして。

四人の走者が互いに牽制しあい駆けている。肘と肘がぶつかり合うばかりではなく、拳と拳、拳と顔すら衝突する。

ストレートから纏れ合う様にコーナへ。

体に掛かっているであろう遠心力など忘れたと言わんばかりに、走者全員が全員全力疾走を続行。其々の腕は振り切れる限界まで

実際振り切れるというよりも、目標に向かって振り抜いているのだが 稼働している。

その光景をぼうつと眺める男達がいる。コース上に引かれた白線に並んだ四人の男達。

「赤が先頭だべか？」

「あんな団子状態じゃわかんねーよ。りゅうは分かる？」

「否」

「だべなあ。って事はアンカの俺らもコレ使わないかねえ。折角あるのに勿体無いべなあ」

そう言う黒の長である『田舎っぽ大将』 明らかに可笑しな二つ

名であり、又「ペ」では無く「ぽ」である辺りに胡散臭さを感じる

は手をにぎにぎとさせる。その手にある物はこの場に居る私達全員に配られている。

剣ではない。

棒でもない。

況してや、バールの様な物でもない。

小さな、されど重量が確かに感じられる布袋二つとそれらを繋ぐ太

く頑丈な紐。振り回して用いれば、鈍器として役に立つだろう。紐の部分に首に巻けば、立派な絞殺道具と変身するとも言える。だが、狩猟時の主な、そして本競技での用途はより穏健で、狩られる側にして見ればより厄介な物である。

「……ボークか」

ボーク。ケラウイタウティン。またはソマイ。

遠距離から投擲し、逃げる相手の足や首に絡み付かせ、文字通り足を止めさせる。原始的な武器であり、シンプルな武器である。だが逃げる者にとっては、それでも脅威だ。

「使わなければそれはそれで良しじゃないか？ 俺、りゅうや古森から投げられたコレが頭に当たったら一発KOの自信が大有りだ」

「だべなあ」

当たった時の事を心配する悟史、悟史の言葉に首肯する黒の『大将』と、話題に上がっているにも関わらず微塵も興味を示さない我が委員長の後輩である古森。彼ら三人と私がこの競技のアンカを務める。それもただのアンカではない。体育祭最後の競技のアンカである。私達の働きで今年の体育祭の結果が決まると言っても過言ではない。絶対に負けられない勝負がここにある、とでも言えようか。

喋っている間に、現在の走者達はコーナを抜け、バックストレートを爆走している。勿論、拳の応酬、飛び蹴りの遣り取りも継続どころか、過熱している。誰もそれを止めようとはしない。ただただ自軍の代表選手に熱い声援を送り続ける。

走者達はそのままコーナへと入り込むが、どうやらここで『私の色の選手が出遅れた様である。私は自分の立ち位置を外レーンに変更。悟史らも微妙に立ち位置を調整している。』

「しかしよお、若し稲川が怪我したら、俺らハーレムに殺されるんじゃないねえべか？」

「……然り」

流石に日に二度もあの金色夜叉には出遭いたくは無い。切実にそう思う。

「ハーレム言うなよ。彼女達とは別にさあ……それに、彼女達が怖いから手加減して負けましたってのは無しだぜ？ 序でに言つと、どちらにしてもりゅうは麗華ちゃん達に怒られると思うよ。覚悟しといった方が良いんじゃない？」

「……神は死んだ」

その可能性は否定出来ない。寧ろ、高確率でそういう事態になるだろうと予測はしている。そして予測はしているのだが、その予測を受け入れたくないと言うのが本音である。

何時だって現実はそのものだ。青臭い愚痴が容易に頭に浮かぶ。コーナを抜けた走者達が我らアンカに向けて殺到する。数秒後には悟史達と殴り合っている事だろう。

「先輩。今度は負けませんよ」

沈黙を守っていた古森がこちらを向きもせず、そう宣言した。

宣言された以上、私も何かを言わなければならぬ。幾つか脳裡に浮かんだ言葉から最も挑戦的な物を意図的に選択して、彼の挑戦に熨斗を付けてお返しする事にする。

「……その意気や良しっ」

口端が微妙に上がってしまったが、致し方なかるう。

それは青の参謀二人にとって、否青の組員全員にとって最悪なシナリオだった。

りゆうが腕の怪我の為戦力外となった、と言うのは実際には真実ではない。確かに負傷はしているのだが、既に傷口は塞がれており余程の外力が加わらない限り再び開く事は無い。それ故、保健委員もGoサインを出しており、彼は戦力として数に数えられる筈であった。

だがしかし、青の参謀達は彼を再び戦場に送る事を躊躇^{ためら}った。使える手は使い勝利をもぎ取るとりゆうに宣言していた参謀達ではあったが、彼の怪我のそもその原因が自分達にある事を知っているが為に、どうしても彼を使う気にはなれなかった。如何にシビアに物事を捉えられるとは言え、彼女達は一般の高校生に過ぎない。首尾一貫して突抜けられる程、覚悟が定まっていなのである。更に言えば、体育祭という高校のイベントにその様な覚悟は本来必要無いものであろう。

そうして、りゆうは遊兵となっていた。内心、何故自分を使わないのか、切り札たる自分を使わずに勝ちを得られる程楽な勝負なのか、と憤慨やるかたない状態だった……訳ではない。寧ろ、逆方向にベクトルは向いており、傍観者でいられる事にほくそえんでいたのである。

その相貌、雰囲気や言動で要らぬ誤解を生んでいるのだが、りゆうは文武両道の真面目一徹、聖人君子な優等生等では決して無い。確かに文武共に優れてはいるが、基本的に面倒を嫌う日和見主義をス

タンスとしている。度々そういう態度を取ってはいるのだが、誰一人として気付いていないのが現状だ。

とは言え、りゆうを放置しているだけでは軍団の中に紛れ込んでいる他色の草に勘付スバイかれる恐れがある。むざむざと切り札を渡すのでは本末転倒だった。

そこで青の参謀二人はりゆうの腕を包帯でぐるぐる巻きにし、さらに首から吊り下げる格好で彼の『無力化』を大々的にアピールしたのである。これを見た、りゆうの動きに注目していた草達も彼の『使用』は無理であると判断。次々と所属する色へと帰還して行った。だが、しつこい様だが、物事には例外がある。

今回の例外は赤の草の一人。愛らしい姿で一部の男子に熱狂的な支持を得ている女子生徒。頭の回転の速さと腹黒い性格により、りゆうが最も苦手としている彼女。稲川ハーレムの一員にして、赤の参謀を務める彼女こと千川牡丹である。

「これは怪しいにゃあ」

と青の動きを睨み、保健委員会の所へと直行。御得意の練手管で情報を引き摺りだし、りゆうが実際には『使用』可能である事を確認する。それからの彼女の動きは速かった。赤の陣営へと駆け戻り、予想される最終競技までの得点の開きを概算。りゆうが最後の闘いに投入される危険性と自身の陣営で『使用』出来た場合の利点リターンを天秤に掛け熟考。そうして、最終競技のメンバ提出書にメンバを記入していくのであった。

「それでは、最終種目『疾走戦』ラストランのメンバを発表致します」

淡々と読み上げられていくメンバ達。メンバ構成に各色から喚声や歓声が沸くが、誰しもが最終走者の名に注意を示していた。徐々に高まる興奮と期待。今年は誰が有終の美を飾るのだろうか。誰もが

脳裡に予想されるメンバを浮かべていく。

ラストラン
疾走戦。

その名が示す通り、最終競技であり又走る事で決着を付ける競技である。

何も難しいことは無い。各色から選ばれた六人で定められた距離を走り抜け、一番早いタイムを叩き出した色が勝利するという巷のリレーと殆ど変わりが無い競技である。

だがしかし、それはこの高校。ただのリレーではない。変更点は三つ。一つはバトンで次の走者に交替するのではなく、タッチで交替する点。一つは走者同士のとつき合いを認めている点。そしてもう一つは、全員に捕獲道具であるボースが渡されている点である。

「……以上、第五走者でした。それではお待たせ致しました。各色のアンカの紹介をさせていただきます」

一際大きく上がる喚声。

意識しているのかいないのか、アナウンスしている放送委員の声にも力が入っている。

「青アンカ。『全自動フラグゲッタ』 『ハーレム野郎』 『全男子の敵』 サッカー部部长、稲川悟史」

湧く喚声。黄色い声が大多数を占めているのと低い怨嗟の声が混じっているのが悟史の学内での評価を表しているのだろう。

「白アンカ。『貴公子』 『破壊者』^{クラッシュヤ} 人材派遣委員会所属、古森勇氣」

悟史に負けず劣らずの声援。そして彼同様に黄色い声が多かったりもする。

「黒アンカ。『田舎っぽ大将』『ノリは良いけど付き合っにはちよつと……』陸上部部長、瀧口純平」

「それ絶対お前の感想だべ、小原あー！ 後でおしおきだべえ！」

「事実です。黙れ、純平」

放送委員 小原法子と言い、瀧口の彼女と言われている と瀧口の遣り取りに観客は沸く。

「おほん……失礼致しました。それでは最後に赤アンカ、ですがっ！ ここで選交代をお知らせ致します！ 赤団長、石堂知樹に代わりまして……『規格外』^{ルルブレイカ}『切札』『一騎当千』人材派遣委員会委員長、柳竜次！ 以上、疾走戦全メンバの紹介でした」^{ラストラン}

そのアナウンスに場は混乱する。あの『切札』であるりゆうは総力戦で負傷退場したのではないか。その為に青は彼を欠いた陣営で戦っていたのではないか。だが、救護の教員、保健委員達からは何も言ってこないという事は有効なのだろうか。

観客、生徒達も含めて、この混乱は暫しの間続くのであった。

「やられたわね」

北条寺はそう言葉を吐き、赤の陣営を憎憎しげに見詰める。

自分達が招いてしまった事態ではあるが、そう言わざるを得ない。確かに他の色陣営からして見れば、G Oサインが出ているのにも拘らず遊兵化していたりゆうを使わない手は無い。だからこそ、怪我をしている様に包帯で偽装していたのだが。

「そうっすね……赤陣営っていうと、若しかしたらあのロリっ子かっ！ またあのロリっ子にしてやられたっすか！」

「ロリっ子って……ああ、牡丹さんね。彼女なら遣りかねないか」
千川の顔を思い浮かべる。何時も何時もチエシヤ猫の様に、にまにまとかを狙っている印象。恋敵ではあるが、何故か彼女には色々勝てそうに無い感じがする。何故だろう、とは言え負けるつもりは無いが、と北条寺は思う。

「何はともあれ、ここは悟史君に頑張ってもらおう他ないわ。もう奇策も何も使い様が無いのだし」

「うん。あとは旦那に加減してもらおうくらいっすかねえ。うーん……しないっすよねえ」

「しないわね」

そうっすよねえ、と玉城は飴玉を口に入れる。この飴くらい旦那が甘ければいいんですけど、と口には出せず、溜息だけが外に出た。

……ご無沙汰しております。

実生活が修羅場の連続な瀬戸です。今迄根気良く待ち続けていた読者の方々には大変申し訳無い気持ちで一杯です。

最終章までの道筋は出来てはいるのですが、如何せん文字にする時間が無い。推敲する暇が無い。

そんなこんなで2ヶ月も開いてしまいました……

次回はなるべく早く出したいと思えます。(でも1月が一番の修羅場なんですけど)

今後とも宜しくお願い致します。

観客は息を呑み、走者の姿を凝視する。

観客達の脳裡には共通した思いがある。先程までの走者達が見せたあの狂騒は何であったのだろうか。今の彼らの姿との圧倒的なまでの違いは何であろうと。これでは全く違う競争ではないか。

掴みあい、殴り合い、蹴り合いして先を急いでいた泥仕合を誰もが予想していた。しかも面子が面子である。壮絶で苛烈な鮮血模様が容易に描けた。

しかし、その予想を大きく裏切り だが誰一人失望させる事無く 競走は展開される。他者を貶める為に拳や脚を振り切るのではない。一刻も早く、一足でも前に進む為に筋肉を躍動させる。華々しい祭の最後に相応しい真向勝負ガチンコがそこにはあった。

「……………なんすかね、これ？」

「見ての通りですわね。がっぷり四つの真剣勝負。Lastにc1imaxとは憎い演出ですけど」

「ええっと、そういう事を言いたいんじゃないやなくてっすね。何であんなに速いのかなあと。今までのランナが可哀相になるくらい、競走の質が変わってしまったっていうか」

「それは悟史君達が本当に速いからでなくて？」

北条寺は心底不思議そうに、小首を傾げて玉城に応える。それは欲しい回答ではないのだけれども、微妙な差異を口にしても分からないだろうと玉城は口を噤むくく。確かに彼らは速い、速いのだがこれはあくまでも疾走戦ラストランという競技なのである。『走り』以外の要素を

もつと入れ込んで勝利を目指すべきなのではないか。そういう考えが頭の中を駆け巡る。

悶々と思考に耽る玉城の心情を知ってか知らずか、

「……結局、最後は真向勝負でしたわね。それを言った執事さんが敵役なのは皮肉が過ぎると思うのだけれど」

と北条寺が漏らす。俯き加減で自嘲気味な表情を浮かべるも、その数瞬間にはいつもの自信に溢れる特有のスマイルで目の前の激戦に目を走らせる。そうした様子は直傍にいた玉城にしか分からないものであつて、

「……やっぱ昼間に殺ツトクべきだったか」

「ええっ！」

漏れ出した金色夜叉の殺意が周囲に危険を撒き散らすものではなかったのは幸運であつたと言えよう。

バックストレートに競走の場が移つても、戦局は変わらず静かな熱戦が繰り広げられていた。

ただ全力で走れば良いと言つ訳ではない。未だ誰も仕掛けてはいないが、いつ何時手や脚、若しくはポラが飛んでくるかもしれない状況の中で、競争者は全力を賭してゴールへと駆けねばならない。厳しい駆け引きは競争者の精神を容赦無く削る。

高がトラック一周。

されどトラック一周。

四百メートルという短いレースの中で、その距離を走る事だけでは被らない量の疲労が彼らを襲っている。象徴するかのように尋常ではない汗が吹き出ている。

それは最後尾の位置で追い駆けるりゆうであつても同じ事。

己が力を発揮しても縮まらない差。嘲笑うかのように少なくなつていく残された距離。何を何処のタイミングで仕掛けるにしても、少しの失敗も、刹那のタイムラグも許されない。だからこそ、焦燥に駆られるのを只管に噛み殺し、前方を駆る三人を追う。

黙々と淡々とゴールまでの距離は無くなつていく。

掛けられる声援は彼らには届かない。

意識にあるのは競争者の気配、足音と襲い掛かる可能性のあるボーンラへの警戒。声援に掻き消えてもおかしくは無い競争者の息遣いさえ聴こえる程に、四者の感覚は鋭くなっている。迂闊うかつに動けば悟られる。完全なる拮抗状態。

このまま、順位の変動無く競走は終了する。

誰が言うでもなく、だが自然と観客の中にそういう思いが伝播してゆく。もう大勢は決まつたと、変化に乏しかったが最高のレースだったと観客の視線が物語る中、走者四人は最終コーナへと入つていった。

自然と体の重心がイン側へと傾くの足を足の裏で感じながら、地面を力強く蹴り上げる。ストレートを走るのは多少異なる感触があり、先頭走者は否応にもそちらに意識を向ける事になる。目で見てそれと分かるほどには変化していないが、走るスピードが若干緩んだのは事実であつた。

だがそれも一瞬の事。隙とも言えない些細な、極々些細な変化。

その意識が地面へと移つた一瞬、シュツと風きり音がして

「ぐっ！」

先頭走者の目の前に舞い落ちる何か。突然の飛来物に無意識に頭が

仰け反り、足がブレーキを掛ける。何が飛んできたのかを確認し避ける事も出来ず、急ブレーキを掛けざるをえなかった先頭走者に、彼の急激な速度変化に対応出来なかった第二走者の足が止まる。

刹那、二人をアウトから追い抜く影二つ。

足を止めた二人も慌てて追走を始めるが、速度を零にまで落とし、た彼らが、速度を維持したまま駆け抜けていった二人に追いつく事など出来はしない。

「ちつくしよおおお」

胸の内に急速に溜まる悔しさが口から叫びとなって溢れ出す。叫ばなかった方もその表情に悔しさと自分の情けなさを浮かべていた。何故、一瞬でも気を逸らしてしまったのか。何故、警戒を緩めてしまったのか。

彼らが足を止めてしまった地点にぽつんと一つ。

ポーラが転がっていた。

「負けて、くれねえかつ！」

「……断るっ」

コーナを駆け抜けた走者二人は並走し、ゴールへと向かう。あと五十メートルも無い。ゴールを示す中空に掲げられたテープが燦然さんぜんと陽の光に反射し輝いていた。

「だがっ」

限界まで足を振り、手を振る。歯を食い縛り、奥歯がぎしぎしと悲鳴をあげる。

「俺のっ」

並走していた片方のスピードが更に上がる。

「勝ちだっ」

白いテープが宙を舞った。

自軍の陣地から雪崩れ込んできた生徒達。一着で駆け抜けてきた走者を揉み苦茶にしている。既にその人の群れに飲み込まれてしまった走者の姿は見えていない。歓喜の叫びが校庭中に響き渡り、今直ぐにでも胴上げが始まるうという状態。

私はゴールしたその足で、自分を代理に出場させた赤色の陣へと出向いた。派遣した私がこの様だったのだ、さぞかし怒っているのだろうと覚悟はしていた。

しかし、私を出迎えた千川は意外にも機嫌が良いである。正直不気味な印象。

「りゅう先輩、御苦労だったのね」

「……否。期待に応える事が出来なかった。面目無い」

僅かに頭を下げ謝罪する。代理の形であったにしろ、最下位で襷たすきを受け取ったにしろ、最終コーナ過ぎでトップに躍り出る機会があ

つたにもかかわらず、首位を奪取出来なかったのは私の失敗であった。

そんな私の肩を、誰かの手がポンと叩く。顔を起こせば、赤団長の石堂の顔があった。

「いやいやいや、充分だと思うぜ？ 俺じゃあ、あんなスピードで四百も走りきれないって。タイムどれくらいだったか聞いたか？

四百を四十八、九だったらしいじゃなかったか。お前達だけ陸上競技やってんじゃねえよって感じ」

げげらと豪快に笑いながら、早口で捲くし立てる石堂。笑いながら私の肩を幾度も叩くのは微妙に傷に障るので止めて欲しいのだが。

「団長はちよつと黙ってるのじゃ」

そんな私を見かねたのか、千川が割り込み石堂の喋りを止めてくれた。止められた石堂は不服そうに千川を睨みつけ、口先の標的を千川へと変更する。

「あ？ なんだ、ちびっ子。お前こそ黙ってるよ。正直お前の語尾は癪に障るん」

「聞き捨てならないのにゃー。あたしのこのちんまい容姿はそれはそれで十分に可愛らしい一つのステータスなのね。それにこの語尾だって重要なステータスにゃの。馬鹿にししないで欲しいのねー！」

「ああ？ 誰がそんな作りきったステータスに惹かれるってんだ？ 稲川の色ボケか？」

「い、色ボケって酷いにゃー！」

「んにゃ、間違った認識じゃないと思うぜ？　少なくとも女達に囲まれて宜しくやってる様には見えるだろ？」

「……肯定だ」

「そ、それはそうだけど。ってりゅう先輩も少しぐらい否定する努力を見せるにゃー」

「いやいやいや。それがこの学校に居る男子生徒の基本的な共通認識な訳だ。たとえばそれがアイツに振り回されているりゅうだって同じさ。だがそれはこの際置いておいて、お前のその語尾が気に食わない。頭が沸いてる稲川相手ならありかもしれないが、普通の俺らには普通の語尾で話しやがれ！」

「む、むきーー」

突如として始まり、ぐだぐだと長引いている団長と参謀の口喧嘩に、二人の後ろに控えていた団員達はオロオロするばかり。彼らの中には私の方へ『お助けを』という視線を向けている者もいたが、私には如何する事も出来ない。私が発端で始まってしまった口喧嘩ではあるが、生憎と止める術が無い。

無力な者はただ立ち去るのみ。

目の前で喧騒を繰り広げる二人に背を向け、赤の団員達に別れを告げる。私を引き止めようとする声がちらほらと聞こえたが、意図的に無視を決め、青の陣へと歩を進める。

「……これから仕置きが待ち受けている故、これにて御免」

聴こえていないだろうが赤の団員へと言葉を遺しておく。

本当に申し訳無い。だが私もこれから苦難が待ち受けているのだよ。

Phase 30 : 災厄燃ゆ - 最終戦・弐 - (後書き)

……お久振りです。瀬戸です。

掲載が遅れに遅れ、本当に申し訳御座いませんでしたあ……此処まで修羅場が長引くとは思いませんでしたよ……

本当なら既に文化祭ぐらいまで書き上げているつもりだったのに。公募用の方も書き上げているつもりだったのに。

予定はいつも儘ならないものです。

今後の予定ですが、一旦この連載に集中的に力を注いで何話かは週刊でお送りしたいと思っております。

不定期な連載ですが、宜しくお願い致します。

自陣に戻れば、情け容赦の無い仕置きが待ち受けている。特にあの金色夜叉と化した北条寺辺りからのソレは想像も付かない、描写の仕様の無いものになるかもしれない。万が一の事もあるだろう、今から遺書を認めておくのは賢明かもしれない。

仕置きの壮絶さを概算し、その桁外れに被るだろうダメージに思いを馳せ、戦慄していた私である。自陣へと向ける一步一步が絞首台へと続く階段を想起させていた。俯き加減で歩を進めていた為、夕日に引き伸ばされた自身の影が見える。心無し影の肩も下がっていた。

だがしかし、絞首台への階段は昇りきって初めて、そこに縄が無い事に気付かされる。

待ち受けていたのは男達の熱烈な歓迎だった。

「お勤め、御疲れ様でしたっ！」

「団長ー、良かったよー」

「ナイスラン！ りゅう！」

びしつと親指を立てこちらに爽やかな笑顔を向ける男、拍手で迎える男、私の肩を遠慮無く力強く叩く男、アメリカンスタイルで肩を竦める男、男、男、男、男、男、男、男、男、男……不快な臭気はないが視覚的に汗臭い気がする。

彼らの歓迎を喜んでいない訳ではない。敵方に力を貸してしまった私に対して、これだけの歓声を挙げてくれているのだ。何も不快に思う事無く、ただ純粹に彼らと優勝を喜べばいいのだ。

しかし、しかしだ。

私とて一応男の端くれだ。多少は女性からの良い評価を頂きたいという気持ちもある。ただ間違つても、ちやほやされたい訳ではない。普通に 何を基準として『普通』とするのがいいのかは各自の尺度で異なるとは言え 否、極々些細でもいいから労いの言葉くらいは掛けて欲しい。

又同時に、私の周囲に群がる男どもにも不満が在る。確かに彼らは私の事を歓迎する為に今か今かと私を待ちわびていたのだろう。それは素直に嬉しい。团长冥利に尽きるというものだ。だが、今真つ先に歓声を浴びせるべき相手に声を掛けず、目を逸らし、背を向けるのは如何なものだろうか。

そして、その両性への不満の原因にあるのが

「かつこいー」

「ちよつとーっ！ 何先輩に抱きついてるのよっ！ あんた、早く退きなさいよっ」

「お、押さないで、きゃっ！」

「おつと、大丈夫？ って、ちよつと後から抱き着かないでっ！ そんなに上着をきつく引つ張るなっ！ ちよ、それはズボンだろ？ お、おい、脱がすなこらっ！ って、麗華ちゃんも何やってんのっ！ おいおいおいおい！ あ、りゅー！ ちよつと助けてくれ！ お願いだー」

青の女性陣に何重にも囲まれて、その中心でもがき苦しんでいる悟史である。

アイツが何か言っている様で、私の鼓膜も何かしらの音波を捕らえているのだが、生憎と私の言語野がそれを理解出来ないらしい。きつと置かれている環境が正反対の私に対して、自分の環境が如何

に素晴らしいのかを力説しているのだろう。

聞こえているのに返事をしないのは礼儀に反する。こういう時にはどういふ言葉を掛ければいいのか。嗚呼、そう言えば、かの『田舎っぼ大将』がこのシチュエーションで最適な言葉はこれだと言った覚えがある。今こそ使用する時が。

「……悟史っ！」

「おーっ！ りゅう！ 助けてくれっ！ 色々とセクハラっぽいんだよっ！ ちよっと三人ともマジで勘弁だっつて、おいっ！」

「……女に抱かれて溺死しろ」

「りゅーーー！ 裏切ったなっ！ っつて、うわーー！」

文章に起こせば大量のエクスクラメーションマークを吐き出しながら、悟史は女性の大海原の藻屑となった。あの海の荒波には矮小な私達男達では太刀打ち出来ない。私は彼の冥福を祈り、海に向かつて敬礼をする。同様に私の姿を見て、男達は其々に其々の敬礼の仕方、何故か、第三指を立てたり、第一指を下に突き出したり、第一指を首に突き立てて横に引いたり、唾を吐いたりと過激ではあったが、悟史に別れを告げていた。

一頻り場が落ち着いたのを見計らって、傍に寄ってきた後藤が言う。

「それじゃ、改めてまして、師匠。勝ち鬨とどろをひとつ、お願いします」

確かに最後の締めを未だ行っていなかった。もう間も無く、閉会式も執り行われる事になる。その前に全員で、恐らく一人を除いた、男のみ全員で、だろうが、雄叫びを上げるのもいいだろう。

私は囲んでいる男達をぐるっと見回して、言葉を紡ぐ。其々の顔にはやり遂げた充実感が溢れ出ていた。

「……諸君。本日は実に素晴らしい出来だったと思う。一人一人が偽る事無く全力を出した結果だ。最後にその事を誇って勝ち鬨を挙げようではないか」

深呼吸をし、肺一杯に空気を溜め込む。空を見上げれば、そこには雲ひとつ無く、空は紅一色に美しく染まっている。我々の勝利に相応しい晴れ渡った空だ。その空を突き出す様に拳を振るい、私は久々に吼えた。

「我々の勝利だっ！」

「うおおおおおおおお」

そうした後、私は二度三度と宙を舞う事になった。

無事に閉会式を終え、生徒達は今日の勝利を祝う為、互いの健闘を称え合う為、はたまた愚痴を零す為、打ち上げへと校外に散っていく。りゅうのクラスも例外ではなく、幾つかのグループに分けて打ち上げを行う事になっている。

打ち上げに誰それが行く、アイツを連れて来い等々の誘いの言葉が飛び交う中、是非とも来て欲しい人物ナンバーワンのりゅうを探して玉城はウロウロとしていた。

校庭には既に彼の姿は無く、クラスにも姿が無かった。無論、彼が催して花を摘みに行った可能性もあると、男子便所にまで潜入し

てみたが姿を確認する事は出来なかった。

おかしいなあと首を傾げながら、自分のクラスに帰還し、偶々目が合った後藤に尋ねてみる。一番りゅうの傍に居る機会が多い彼ならば、行方を知っているかもしれないと。

「というわけなんすけど?」

「悪いが知らないな。知っていたら、うちの打ち上げに引っ張っていくしよう。まあ、大方師匠の事だから、何処かで校庭でも眺めて、今日の余韻を楽しんでんじゃないかね」

「それは……渋いつすね」

「ああ、渋いよな」

さもありませんと互いに頷く二人。後藤が知らない以上、りゅうの行方は今しばらく分からないだろうなと思ひ、気になっていたもう一つの事を尋ねてみる。

「りゅう君の怪我ってどうなったか知ってる? 青陣あおじんに還ってきた時に怪我の事聞いても、問題無いっていうだけっすし。遠目で見ただけでは出血があった様に思えるんすけど」

「あー、まあ俺も人伝に聞いたただけだよ。聞いた相手ってのは『ヘンタイ』な?」

「『ヘンタイ』? うーんと、おお! 男子の悪の親玉の鵜飼君っすか」

「悪の親玉って酷い言い草だな。別にアイツはそんな評価を貰うよ

うな事してないだろ。ただちよつと思考と嗜好がほんの少しだけ……否、それなりにずれているだけで、さ。まあ、昔はリコーダを口に含んだとか、全裸で校内を駆け抜けたとかいった武勇伝があるらしいが」

「……それを聞いて益々風紀委員としては警戒を強めるっすよ。でも今回は見逃すっす。ささ、話を先に」

「おう。聞く所によるとな、確かに出血してたし、傷が開いたらしいんだわ。で、本来なら聖ちゃんに治療してもらっ予定だったらしいんだけどよ、師匠が説教始めたらしくてさ」

りゆうが説教したと聞いて、玉城は頭を抱える。彼女は一度、聖教諭がりゆうに説教を加えられている場に居合わせたことがあった。逃げ道を潰して正論を叩きつけるりゆうの饒舌さに対する聖教諭の怯えっぷりに驚いた事を鮮明に憶えている。

「案の定、聖ちゃん泣きながら逃亡したらしくてよ。それじゃ、傷塞がないからって、師匠が電話で呼び出したらしいんだわ」

「誰を？」

ああ、と少々勿体ぶつた調子で後藤は声を潜めて言う。

ちなみに彼らは気付いていないが、傍から見れば密談している怪しい二人組みしか見えない。中には新カップル誕生かと、スケッチブックを片手に妄想している輩も居る。言うまでも無く、腐女子の一味であるが、誰もそれを止めようとしなない事から色々と末期なのだろうと想像可能だ。

「師匠の兄貴」

「えっ？ お兄さん居たのっ？」

「いやあ、恥ずかしながら今日初めて知った。師匠もあんまり自分の事を話そうとしないしよ、聞かなくても別に関係がどうこうなるわけじゃないし」

「うーん、私だったら、なるべく相手の事を知りたいっすけど」

「まあ、それは男女差つてのもあるし、人それぞれじゃねーか？

まあ、将来若しかして義兄さんと言う事になるってんなら話は違っかもな」

「お、義兄さんって……そんな」

「……本気で照れるな。とは言え、師匠は難攻不落だしねえ。当分先だろっけど。まあ、その兄貴が来てよ、どうやら医者やってるらしいから、ホッチキスで応急手当してもらってたそうな」

「ホ、ホッチキス……痛そうっす。その状態でよくもまあ、あんな速さで走れるもんすねえ。しかも、ボーラをピンポイントで落としましたし」

「まあ、流石師匠ってことで」

ぼりぼりと後頭部を搔く。丁度、話に間隙が生じた所に外野から後藤を呼ぶ声がした。後藤は軽く玉城に手を上げ、これで話は終了と外野の方へ向かっていく。

玉城自身もその後すぐにクラスの一つの集団に呼ばれ、打ち上げへと行く事になる。

そうして、騒がしかった校内から次々と生徒は去っていき、夕日に照らされた校舎はひっそりと佇むのである。

「……兄貴。首尾は如何に？」

後藤の予想通り、屋上の貯水槽の上に胡坐をかいてりゅうは居た。落ち着きを暫く振りに取り返した校庭を眼下に、携帯電話で会話していた。

「……そうか。了解した。流石に今回は警戒したと言う事か」

電話越しの相手の返答が満足のいく物だったのだらう、何処か表情も満足そうであった。

「後は文化祭と……卒業式もある。まだまだ、と言う事か。……ふう。詳しい話は家に帰ってからにしよう。……ああ、確かに何処かの打ち上げに寄ってから帰宅する。日が変わる前には帰ると思う。……ああ、宜しく」

パチツと携帯電話を閉じ、再びぼうつと校庭を眺める。その姿は何処か縁側に腰掛け日向ぼっこをする老人の様な老成さを感じさせる。

それから暫く、太陽がさらに地平線へと傾いていった頃に、りゅうは自分の携帯が震えているのに気付く。着信は後藤。同時にメールも受信した模様で、其処には悟史、源、朝霧や玉城の名前が表示されていた。

「……さて、私は何処に行けば良いのだろうか」

ふむ、と一瞬考える仕草をし、だが考えるよりも先ず動くのが先かとひらりと貯水槽から降りる。音も無く着地し、りゅうが扉から出て行くのを沈みいく太陽だけが見ていた。

週刊と言いつつ、風邪で寝込んでしまった瀬戸です。
遅れて申し訳御座いませんー

これにて体育祭編は終了です。

この後に繰り広げられる打ち上げの話を書くかどうかは皆様の反応
を見てから……と言いたい所ですが

そんなに反応が来ないというのが事実だったりします。

うーん、どうなんだろう。

一応、ストックには貯めておきますが。

小山駅は聖上学園から徒歩十分程に位置する駅である。この駅を最寄り駅とした学校は聖上学園の他にも数校存在しており、朝や夕方登下校時には駅は様々な制服の学生達で溢れかえっている。

そうした駅の周辺には、当然の事ながら学生を主ターゲットにした飲食店や装飾品店が犇き合い、活気に満ちた様相を見て取れる。

中高生の若いエネルギーを吸収する様に 実際、金銭を彼らから得ている訳だが 小山駅周辺の商店街の規模は益々大きくなっているのである。

さて、学園から体育祭の打ち上げへと繰り出した生徒達は常日頃と変わらず、まるでそれが当たり前だと言わんばかりに、この商店街の飲食店のいずれかに散っては集まっている。無論、カラオケ店に突入するのも居れば、カップルで何処かへとしげこむ輩も居るが、その数は決して多くは無かった。

日が沈み、夜の帳が下りてきてはいるが、一向に繁華街の喧騒が止む事は無い。寧ろ、これからの時間こそが勝負だと、賑やかさは右肩上がりです昇中だ。

その忙しない商店街の道を独り、りゆうが携帯電話片手に歩いている。彼にしては珍しく、携帯電話の液晶に目をやりながら、である。思案顔で携帯を注視し、然れどもすると人の間を縫う様に移動出来るのは彼だからと言えよう。

彼が凝視している液晶には、着信履歴が表示されていた。そこにずらりと並ぶクラスメイト、同級生の名前。後藤、鵜飼、悟史、悟史、悟史、悟史、後藤、朝霧、源、岩田、平、後藤、悟史、悟史、玉城、朝霧、玉城……似た様な履歴はメールの方でも見られた。特に何度も連続してコールしていた悟史の必死さが液晶越しにも伝わってくる。さぞや、窮地に追い込まれているのだろう。

とは言え、彼の所に急行するのも如何なものか、とりゆうは考え

る。彼女達と何かの拍子に『お楽しみ』方面に行ってしまうかも知れない。そんな親友の『お楽しみ』最中に踏み込んでしまう事程惨めな、或いは居た堪れない気分になる事もあるまい。

だからこそ、りゅうは熟考するのである。

送信されてきたメールの内容や留守番電話に残っていたメッセージから、今現在何処の誰が何処の飲食店やカラオケ店で打ち上げをしているかは推測可能だ。そうして、推測出来たグループの内、自分自身が行っても差し支えの無い所は何処だろうか。

「……ふむ」

例えば、後藤辺りは如何だろうか。開催場所はごく一般的なファミレストランであり、面子はクラスメイトの男の大部分である。確かに青の優勝打ち上げとしては最も相応しい環境であろう。本来ならばこの面子と共に勝利の美酒を味わうのが妥当なのだ。だが、多少危惧すべき事もある。それは参加している面子全員が全員、学園史上最強の呪術集団とも噂される『ハーレム被害者の会』のメンバーだという点だ。打ち上げがそのまま、悟史を呪うサバトと化してしまう可能性も無いと言い切れない。

以上の考察から、精神の安寧を望むのならば、後藤という選択肢は選んではならないだろう。

では、朝霧に誘われた打ち上げはどうだろう。開催場所は矢張り近くのファミレスであり、面子もクラスメイトの女子達との事。後藤同様、青の優勝打ち上げとしては相応しいのだろうが、流石に男一人というのは避けるべきだろう。

では、と選択肢を並べ一つ一つを吟味し優先順位を付けていた所、後から袖を引っ張られている事に気付く。

熟考の余り、何か落としてしまったのだろうか。それを親切にも教えて下さったのだろうか、それならば十分に御礼を申し上げねばならないと思い、後へ振り返れば

「ども、りゅう君。ここで遇えるなんてラッキー！」

「玉城……か？」

「む。なんで疑問形なんすかねえ？」

私服姿の玉城であった。

どうやら私はこれから玉城の打ち上げへと行かなければならない運命らしい。何と言うことでしょう。

地下にある小洒落たパブスタイルの飲食店。照明は適度に薄暗く、BGMとして洋楽が常に流れ続け、其処彼処そこかしこで聞こえる若者達の談笑が店の雰囲気を作り良くしている。

店の客層は恐らく大学生から社会人という所であろう、若くはあるが落ち着いた雰囲気が見て取れる。そのような客の中で一際若い年齢層で構成されていると思われる団体があった。

勿論、りゅうや玉城を含む打ち上げ面子である。

「……しかし」

りゅうが自分の正面に座っているスーツ姿の男に話し掛ける。

「規律を厳守し管理する側の筆頭が斯様な場所、斯様な姿で打ち上げを行うとは夢にも思わなかった、源よ」

「偶にはいいじゃないですか、りゅう委員長、いえ、りゅうさんと

言った方が今は適切ですか。私は結構この姿が気に入っていますよ。スーッつてのは気が締まりますから。それにですね、貴方も気合が入ってるじゃないですか、その格好。偶には髪型だけでもそのままにして学校に行かれたら如何です？ 女性の人気が高まりますよ」

源はりゅうの言葉をにこやかに受け流し、逆にりゅうの容姿について言葉を返す。源に指摘されている通り、現在のりゅうの格好は黒のワイシャツにスラックスのシンプルなスタイルではあるが、いつもは適当にしている短髪をワックスによってきちりと立たせている。また、ワイシャツの襟周りのボタンを開けており、常日頃のりゅうよりも幾分もスタイリッシュになっている。

「……戯言を。それに高々この程度で評価が変わる筈も無い」

苦笑いを見せるりゅうに、少々驚いた様子で源は返す。

「本当にそう思われているんですか？ 女性の評価というのは案外容易く、外見に左右されると思うのですが」

「否、それは否定しない。男の女性に対する評価でも同様だろう。だがな、私のこの程度の変化で……」

「隣見て下さいね」

「ぬ？」

りゅうの隣に座っているのは、玉城である。何時もはポニーテールに縛っている髪を下ろし化粧をしている為、彼女も矢張り常日頃とは変わっている。

りゅうが先程彼女の様子を伺った時には、料理として出されてい

た野菜スティックをぱりぱりと齧っていた。姿を幾ら変えても、そういう仕草は何時もと変わらないものだとりゆうは密かに思ったものである。

だが今は。

「……何故固まっている？」

「りゆうさんが遅れて入ってきて、そこに座った時からその状態ですよ。かれこれ3分ぐらい。それに玉城だけではありませんよ？今はまた飲み喰いに集中してますが、さつき貴方がそこに座った時の全員のぎよつとした姿を見ませんでしたか？ それぐらい印象が違うということでしょう」

「なるほど。先程の話を断絶は左様か。私がこの打ち上げに来たのが場違いだったのかと思っていたが。何せ、防衛・風紀委員会の極秘打ち上げだからな」

「元々は私と平の二人でやるつもりだったんですよ。それが委員会の連中にはばれてたらしくてですね。学園の近くに自宅のある連中がこぞって私服に着替えて参加しているんです。こいつらも物好きですよね」

にやりと源は笑い、飲み食いしている連中を見遣る。源の珍しい快心の笑みにりゆうは思う。物好きだなんだと言ってはいるが、こうして自身の組の打ち上げに出ずに、委員会の　しかも長二人の極秘打ち上げにきてくれた事は大層嬉しい事なんだろう、と。

源とりゆうの話が一段落した丁度この時に、店員がりゆうの頼んだジントニックを運んでくる。置かれたそれに早速口を付けようとしたりゆうを源が声を掛け制止させる。そして、飲み喰いに集中している連中に対して言うのである。

「皆、ちよつと手を止めてくれないか。……ああ、ありがとう。これまで勝手に飲み食いしていたが、りゅうさんという素敵なゲストも来てくれたんだ。ここらで一ツ乾杯しよう」

「おうよ！ で、誰が音頭とんねん？」

源の隣に陣取りながら今迄一言も話さず、目の前の料理を凄まじい勢いで消化していた平が源の言葉に反応する。

「それは」

「そりゃあ」

「そりゃもう」

「だわな」

「ですよねえ」

視線が一斉にりゅうの方へと向く。

りゅうとしては源か平が音頭を取るべきものだと考えていたが、自分に集中する7つの視線を無視する事も出来ず、反論する事もせずグラスを持ち上げる。それに呼応する様に、全員が自分のグラスを持ち上げる。

「……先ずは体育祭の其々の健闘に労いを。そして、こうして何事も無く体育祭を開催し閉会出来た事。これは裏方の尽力があつてこそ。貴方達の御蔭だ」

一呼吸を置く。同時に先程まで食べ続けていた平にりゅうは視線を向ける。

「……長々と話すと平に齧られかねない」

「いやいや、んな事せんわっ！ 何言つてま」

「乾杯！」

「」「」「」「乾杯っ！」「」「」

「おまえらー！ー！ー！」

こうして、打ち上げの夜は始まったのである。

だがしかし、この時点ではまだこの後に起こる狂乱を予想出来る筈も無く、誰もが一時の平穩を味わっていた。

「ちょっとりゅう君、こっち向いてほしいっす」

「……どうした？」

グラスに口を付けたまま、りゅうは玉城の方へと視線を向ける。

刹那、耳に入る電子音。そして、目に入る玉城の手にある電子機器。

「ツンツンりゅう君、ゲットっす！ レアっす！ 超レアっす！」

「……源、平。如何すべきだろうか、この阿呆」

「ちあ？」

「好きにさせねばいいんじゃないでしょうかねえ？」

どうも。瀬戸です。

多少文章量少少な目で投稿しております。

前回投稿直後より皆様から異例の反応を頂きまして
急遽『打ち上げ話』を投稿する事に致しました。

多分、2・3話で終了する小断ですのであしからず。

ところで、皆様はもしりゆうに彼女が出来るとしたら
誰だと思えますか？

りゆうが乾杯の音頭を取り、玉城に携帯付属のカメラで激写された丁度その頃、小山駅至近にある全国チエーン展開をしているファミリレストラン『ジョン・ドウ』の一面に男子高校生の集団が陣取っていた。無論、彼らも体育祭の打ち上げ目的でこのレストランに足を運び、一時の歓喜を味わっていたのである。

だが、彼らは単なる打ち上げ集団ではなかった。一時の喜びも何処へやら、今は各々が厳しい表情で何かを語り合っている。その異様な光景にレストランのスタッフも客も恐れ戦き、彼らとの距離がある程度置こうとしている為、レストラン内部には奇妙な空白地帯が生まれているのだった。

高校生でありながら、異様なオーラを身に纏い、鷹の様に鋭い視線を持ち、圧倒的な威圧感を齎すこの集団。彼らは学園の内外で恐怖と共にこう呼ばれている。

至高と究極の呪術集団。

不条理さに喘いだ男達の汗の結晶。

ソレが天命だというならば、我らは神をも呪い殺すと豪語した秘密結社。

彼らの名は『ハーレム被害者の会』。

「皆、この辺りで一つ原点に戻ろうじゃないか」

周りの男達に『会長』と呼ばれている男が周囲の雑談を止めさせる。彼のその一言でぴたりと雑談が止まる辺りに、この集団の統制が取れている事が伺える。

『会長』は静まった一同を見渡し、重々しく口を開く。これから紡ぐ言葉の重要性を自身の姿勢で解らせる様に。『会員』達もそれを理解しているのだらう。各々が鋭い視線で会長を見据え、彼の言

葉を固唾を呑んで待っているのだ。

「我々が今迄嘗めていた苦汁。時、年にして二年強、日にして八百日余り。来る日も来る日も暑き日も寒き日も晴れの日も雨の日も、容赦無く我々を苦しめ続けていた怨敵。今一度脳裏に思い浮かべて欲しい」

自身の吐く言葉一つ一つが剣となり身に突き刺さる思いがする。

『会長』はその痛みに言葉を失し、歯を食い縛る。だが苦しんでいるのは『会長』だけではない。『会員』の誰もが目を瞑り、或いは此処ではない遠くを見据え、彼の言葉に想起された記憶に呻き声をあげる。

彼らの呻きはうねりとなり、不思議な事に騒がしい筈の店内にも響き渡っていた。その怨嗟の声は店内に居た客や店員達の動きを止めてしまう程のモノ。『至高と究極の呪術集団』の面目躍如たる呪力と言えよう。

一頻り齒軋りをし終えた『会長』は、だが、と言葉を続ける。

「その苦渋を嘗めるだけの、遠巻きに怨敵を見るだけの、ただただ効きもしない呪詛を撒き散らすだけの存在だったのだらうか、我々は。取るに足らない、十把一絡げのカスミソウだったのか。いいや、違う。我々はそのようなモノではない。仮令我々がカスミソウであったのだとしても、その身は天にも伸び、月を穿つカスミソウだ！」

『会長』の言葉は加速度的に熱を帯びてゆく。それに当てられる会員も然り。

「我々の師である準竜師はこう仰られた。怨敵を妬み、嫉む暇があるのであれば、自己研鑽に励めと。また、彼の有名な至言はこう言っている。敵を知り、己を知れば、百戦危うからずと。彼の名将は

言った。ID野球だと。ならばこそ、我々は！ 敵が何故、斯様に女子にモテ、そしてその要因を追求しなければならないのではないか！」

『会長』の熱き演説に、ある者は酔いしれ、ある者は涙する。

だが誰一人として気付いてはいない。店内からは客も店員も全員居なくなってしまう事。また、彼の話している内容が至極当たり前のことである事を。

彼らの宴は一つの店の売上げを犠牲にして、粛々と進められていくのである。

一方、矢張り小山駅至近のファミリレストラン『メアリ・スー』でも数組の高校生団体客が打ち上げを行っていた。その中の一つに朝霧映子を筆頭とする、三年一組女子の運動会系メンバ数人の姿があった。

本日の体育祭の感想やら何やらが一通り話し終えられ、注文した料理も粗方消化し終え、デザートを突付き出す頃合。奇しくも『ジョン・ドウ』でクラスメイトの男達が話し合っている内容と同じ様な話が繰り広げられていた。

「でさあ。ふと思ったのは稲川君って如何してあんなにもてるんだろって？」

「さーねえ？ ー、このアイス美味しいなあ」

「ほんと？ ちょっと食べさせてよ、これも少し齧っていいからさ。……んー、ほんとだ。えっと、それで何だっけ。ああ、稲川君か。」

イケメンだし、運動出来るし、勉強も出来るし、優しいし、気が利くしって非の打ち所の無い男の子だよねー。朴念仁って訳でも無さそうだし、完璧過ぎる気もするっちゃするかな。でもまあ、こういった事って身近な人にしかわからないことってあるし、自分的には幼馴染と評判なエーコの意見を聞きたいんだけどお？」

話はデザートに若干引き寄せられつつも、稲川に関する事が続いている。いきなり話を振られた朝霧はモンブランから視線もフォークも外し、質問した相手に向き直る。

「ボク？ うー、でもあんまり悟史君の事、そういう対象として見てないし。昔から優しかったのは印象にあるけど」

「あらあら、エーコさん。じゃあ、誰ならそういう対象として見るのかしら？」

「え？ や、うん、えっと、まあ、いーじゃない！ ねっ！」

「ほっほっ？ 若しかして、若しかなくてもりゆう君ですかなあ？」

「そんな事一言も言ってないでしょー！」

顔を赤く染めながら反論する朝霧ではあるが、誰一人としてその反論を聞き入れる様子は無い。朝霧が反論のしようが無くなり、唸るだけのモノに成り下がった辺りで、話は若干シフトする事になる。

「でも不思議だよねえ」

「何、突然？」

「エーコが御執心のりゅう君の事。稲川君並にスポーツも勉強も出来る訳じゃない？ なのに、女子にはモテナイよね？」

空になったパフエグラスの隅を弄くりながら言う女生徒。彼女の言葉に、確かにと頷く友人達。ちなみに朝霧はまだ再起動を果たしていない。

「うーん、何だろう。そりゃまあ、稲川君みたいにイケメンじゃないからってのもあるだろうけど」

「でも、不細工じゃないじゃん？ 男子達が言うみたいに『男前』って感じ？ ま、確かに甘いマスクのイケメンじゃないけどさ」

「ああ、解る解る。でもなあ、それだけじゃなくてさ、無愛想なのも良くないんじゃない？ や、無愛想って言うかー」

「クール？ 孤高？ って言うより、近寄りがたいオーラがあるよ
うな」

「オーラ？ あんた、靈感商法にでもはまってんの？ 最近、その手のものが流行ってるしさー。そんなに今迄亡くなった人の魂がそこらに居たら、息苦しいっての。そもそもオーラって何だよ、科学的根拠をぷりーず」

「体育会系のおバカな君にそんな頭よさげな台詞は似合わんよ。ま、オーラはどうでもいいけど、近寄りがたいってのはあるね。なんか、近寄らば斬る！ みたいな」

「おお、侍か。確かに侍っぽい！ うん、これから侍君と呼ぶ事に

しよし」

「そうだ、そうと決まれば、エーコに彼に電話してもらってその事を。ちよつと、エーコ。そろそろ現世にカムバック！ おお！ エーコよ、死んでしまつとは情けない」

「あんだ、牧師かよ！」

「え、何？ ボク、死？ ボクが何かした？ え、電話？ 誰に？ りゆう君？ え？ 何で？ 侍君？ は？」

朝霧が疑問符のオンパレードから抜け出し、周囲の頼みでりゆうに電話しようとした丁度その時、彼女の携帯電話に一通のメールが飛び込んでくる。

反射的にそれを開く朝霧。

「侍君って似合ってるよね、ははは。……あれ、エーコ、どしたの？」

「ごめん、ちよつと先に出るね。ちよーーと、済まさないといけない用事がボク出来ちゃったから」

「あ、うん。いってらっしゃい」

友人達は後に語る。

あの時の朝霧の目は人を殺しにいく目だと。

同時刻、別々の場所で打ち上げを行っていた或る二人に、朝霧から連絡が入る。

その二人も朝霧同様、或る場所を目指し急進する事になる。こうして、狂乱の宴が本格的に幕を開けたのだ。

その頃のイングリッシュスタイルPUB『ペンドラゴン』での一幕。

「ほら、ほら」

「……源。斯様に玉城の酒癖が悪い事を承知してたのか」

「……誠に申し訳ありません。流石に此处まで張り切るとは私も思いも寄りませんでした。どうやら先程の写真も何処かに送信してしまったようですし」

「……真か」

「えらくマジです。というか私には信じられないのですが、膝の上に年頃の女性に座られて良くそんなにも平然としていられるものですね」

「あんさん、そないな状況を常日頃から味わってらっしゃ……うぐっ」

「飯でも口に詰めておけ、平」

開いていた口に皿に載っていた食べ物を詰め込まれ、目を白黒させている平。その鬼の様な所業を行った本人は、何時の間にかに膝の上に玉城を載せているのだが、それを微塵も気にせず平然とした様子。否、よくよく表情を見ると諦観の念が窺えるのだが。

「……源。玉城が寝てしまったのだが」

「……ですね。しかもりゅうさんにしがみ付いていますし」

「……私に如何しろと言うのだ」

短く嘆息し、既に何杯目になるか解らないジン系のカクテルを飲み干す。グラスを机に戻した時に聞こえる氷のカラリという音が何故か空しく感じられた。

「……アースクウェイクーっ」

「りゅうさんって蟒蛇みょうだだったんですか」

「否。それ程でもない」

また期間が開いてしまい申し訳無いです。瀬戸です。
先週は後輩の指導と出張?とで時間が取れず、
週刊に出来ませんでした……無念。

さて、前回の後書で皆様に要らぬ誤解を
与えてしまった感がありますが、
別に『りゅう』に彼女が出来る事は確定ではないです。
ネタばれになるのでこれ以上は申しませんが、
それだけ解って頂ければと。

この話はあくまで『学園』ジャンルで御座います。

嗚呼、誰か絵でも描いてくれんもんか……

それを飲めば、あまりに強い酒精に意識が立ち行かなくなる。前後不覚、強度の酩酊状態に陥り、自身の踏みしめている大地が揺れている様に感じるという。それ故、そのカクテルは地震アースクエイクという名で親しまれている。『252』等と共に度数の高いカクテルとしても有名であろう。

久し振りにこのカクテルを飲んだ気がする。

元々、私はジン、特にドライ・ジンをベースにしたカクテルが好きだ。この嗜好は今亡き祖父の影響だろう。祖父は無類のカクテル好きであり、また同時に推理小説フリークでもあった。この二つの趣味を持っている人間なら誰しもが好んで口にするモノがある。

それはかの名探偵フィリップ・マローウが愛したドライ・マティーニだ。英国の大政治家チャーチルの考案した『ドライ・マティーニ』

ベルモット抜きのマティーニを飲む傍ら、執事にフレンチ・ベルモットを口に含ませ、『ベルモット』と囁かせるというおよそ信じられない愉しみ方である。程ではないが、極度にベルモットを減らしたドライ風が祖父の飲み方であった。無論、マティーニだけではなく、ベルモットやヘミングウェイが愛したジン・トニックも好んで口にし、しばしば私にも作っては飲み方を教えてくれた。

その祖父が常々口にしていた事があった。曰く、アースクエイクを飲む時は現実逃避したい時に限る、と。

そう、今正に私は現実逃避したいのであった。

「……玉城は何時起きるのだろうか」

慣れぬ酒に悪酔いしたのか、私の膝の上に乗っかり筆舌に尽くしがたい振舞を散々行った拳句、眠りこけている玉城。かれこれ十分ほどこの状態なのであるが、何時になったら覚醒して私の上から立

ち退いてくれるのだろうか。

何度目か数えるのも面倒臭くなった溜息を吐き、アースクエイクを喉に流す。それなりに高い度数のアルコールが喉を、胸を焼いていく。その感覚が今の自分にとっては優しいものなのだ。

己の内に埋没していた私に、こちらも静かに飲んでいた源が話しかけてきた。

「今更な事だとは思いますが、別にりゅうさんと玉城は付き合っている訳ではないんですよね？」

源の口から他人の恋模様の話題が出るとは珍しいと、私はグラスから視線を源の顔に向ける。何故かは解らないが、苦笑を浮かべている。果たして、今の現状に対しての苦笑なのか、答がわかっている問を質した事に対しての苦笑なのか。今一、判然としない。

「……これは異な事を。源は私と玉城が蜜月を送っている事を存じてない？」

「あー、その言い方で良く解りました。いえ、別段聞かなくとも分かった事なのですが、白黒はつきり付けておいた方が何かと良いですよ。何しろ、玉城も結構委員会の間では人気な奴でしてね、幾度か告白されているそうなんですよ」

「ほう。ならば、この状況は拙いかな？」

私の胸に頬を押し付けて、警戒する事も無く眠りこけている玉城を見る。強いて言えば、美少女の部類に入るだろう彼女ではあるが、この姿を見れば百年の恋も冷めてしまうのではなからうか。若しくはこの姿を見て、私の方にとぼっちりが来るかもしれないが、それは本当に勘弁して貰いたい。そういう修羅場は害の無い所で眺めて

いるのが一番であり、決して近付きたいものではない。

しかし、この女一向に起きる気配が無い。大丈夫だろうか。

「まあ、大丈夫じゃないですか？ 別段、特定の彼が居る様でもないですし。告白も何度も断っているそうですので、りゅうさんが心配するような事はないでしょう」

ですが、と源は続ける。

源の話を聞きつつ、玉城の生存確認の為、机の上に設置されていたナフキンを紙縊りにして、玉城の鼻孔にインサートする。ふなあという奇声とむずがるような動作をしたので、これにて生存確認を終了。むずがる動作の後、一層強くしがみ付いてきたのは頭痛の種類ではある。

「りゅうさんの方で何かしらアクションがあるかもしれませんが、ね」

「……私の方とは？」

「例えば、後藤を筆頭とした『被害者の会』辺りとか、ですかね。ああ、或いは」

源はにいつと口の端を上げる。それは私の得意技なのだが、独占したいものでも出来るものでもないのと言及せず。ニヤニヤとした源も珍しいとふと頭の何処かで思った。

「りゅうさんの彼女に、とか。一度お聞きしたかったですよね、りゅうさんの彼女の事とか、好みとかそういった事を。今日は無礼講、酒の席と言う事で一つ暴露して頂けると嬉しいのですがね」

「……どうやら、源の本質を読み違えていたようだ」

「いえ。私もほら、酒が入っていますし。酔っ払いついでということ」

白々しい。

そして、一つ思い出した事は、源があのだの四条の信者だと言う事。表向きでも、私と四条は良く会談・会合・呼出の類で顔を付き合わせている。接点が多いという事は即ち、関係が密だと読み取る事も出来よう。源はそれを気にしているのかも知れない。真相は奴が私を昔の飼い犬の代わりに見ていると言う事だが、それを語る必要は無い。

答えるのは面倒ではあるが、誤解されては堪らない。法螺を吹く所と真実とをない交ぜにして語っておこう。

「……致し方無い。斯様な席に招待されたにも関わらず、私からは提供する事が無いというのも無礼だろう。少々の話題は提供しよう」

「ええ、是非に。まあ、オーディエンス聴衆は私ぐらいですけどね。他は意識混濁状態ですし」

源は目を横に遣る。そこに居るは委員会委員の死屍累々。

先程から私と源との会話に誰も茶々を入れないのは、神妙に話に聞き耳を立てているからではなく、唯単に口が利ける状態に無いだけである。飲み慣れない酒をかなりのハイペースで飲み続けていた結果だろう。

未成年は飲酒してはならないという法律は、この際眼を瞑るうではないか。

「……後処理が面倒だが、今は意識の外に置こう。さて、先ずは何

から語れば良いか」

「そうですね……かなり抽象的になりますが、りゅうさんの恋愛観なんてどうでしょう？ 或いは、彼女に何を望むか、とかでも大歓迎です。もつと根源的な話でも良いですよ？ ……女性には余り聞かれたくない事でも勿論。都合の良い事に私以外には聞いていませんから」

真に珍しい話題を求めてくるものだ、と私は苦笑する。こうした個人個人の感覚や価値観というものは共感出来るものではない。

個は別の個の状態を理解する事は出来ないというのが私の持論だ。それは個が持つ感覚器の個体差故であり、また感覚とはその瞬間の入力のみ依るのではなく、過去の蓄積による個の記憶・状態に依るものである故。遺伝子が同一である一卵性双生児 例えるならば、設計図が全く同じ二つの建築物が が同様な生育環境にて成長したのにも拘らず 同様な立地条件、建築技術を用いたのにも拘らず 、異なる感性を持っている 同一な建築物にはならない のはそれを示唆しているのではないか。とは言え、双生児の場合は外界にもう一人の『自分』 双生児の片割れ が居る為、互いに互いの環境に作用してしまい、全く同一の生育環境とは言えない事は注意するべきか。

思考が反れたか。

恋愛を語るのと恋愛観を語るのでは、ロマンスとロジック程に印象が違うと思うのだが、私はどちらを語れば良いのだろうか。語り易い方で良いだろうか。

「……然らば、私の論理ロジックに沿って恋愛というものを語るるか」

グラスに残ったアースクエイクを飲み干し、喉の通りを円滑にする。何に憚る事も無く、今日は今日だけはロジカルにラディカルに

シニカルに私の馬鹿げた想いを語ろうか。

「さて」

「いや、悪いけど」

不意に私の肩に手を置く輩。

只の不埒な輩であれば、すぐにでも手を捻り関節を外すのであるが、何せその声その雰囲気には馴染みがある。嗚呼、何という事か。今の今まですっかり気にせずこの場の雰囲気を楽しんでしまっていた。

「その話の続きは後にしてくれないかな」

決して忘却してはならない。

忘却すれば報いが来ると自覚していたではないか。
なんとという体たらく。

この雰囲気、この声は

「よう、りゆう。親友の危機をあっさりで見逃してこんな所でいちやついているとはな！ 見つけたからには付き合ってもらおうぜ」

我が学園が誇るハーレムの主。

稲川悟史が私の背後に仁王立ちしていた。

どうも、瀬戸です。

体育祭・宴編もあと1or2話の予定ですが、恐らく連休中に出せるのではなかるうか、と思います。とは言え、これは予定でして…
…遵守しようとは思っています。

もうちょっと恋愛観他の論理を全面に出したかったのですが、出したらあまりにも……な内容になりそうで控え目です。あのまま書いていたら、自称脳科学者 木氏の話よりも脳科学ぽい話になる所で……。

次回も宜しくお願い致します。それでは。

「……悟史。何故私の居場所が解った？」

私は苦心しながらも表情をコントロールし、背後に居る悟史へと振り返る。恐らくは直前の私の表情を見られる事はなかったであろう。日頃の精神鍛錬の成果が少しは発揮出来たと思う。

振り返り見た悟史の顔は常には見られない表情であった。機嫌の良し悪しを表示するメータがあつたとして、そのメータが悪の方へと振り切れ馬鹿になり、何故か良を示している。例えればそういう状態に今悟史はある。

そう、笑顔の擬態とでも言うべきか。顔と目の『表情』が一致していない。

「りゅうの居場所が解つたのは偶々俺がこの場所を知ってたから、つてのが答え」

「……回答になっていない。私の居場所と悟史が此処を知っている事とは何の関連性も無い」

私は頭を振り、悟史へと再度質問する。

悟史がこの様に答をはぐらかすのは珍しい。中学時代には幾度かこうした物言いをしたことはあつた。だがここ最近にはぐらかされた覚えは無い。最後に聞いたのは恐らく、悟史の告白が失敗し、断られた理由を聞くとした時だろう。些細な事だが、私は今もって悟史が振られた理由を聞かされていない。

私の問い掛けに対する答なのだろう、悟史は無言で 顔には作り笑顔を貼り付けて 彼の携帯電話の画面を私に見せる。そこには

「……微塵も残さず削除してくれないか？」

「すると思うか？」

果たして私と玉城が抱きついている画像が、より詳細に述べるのなら、玉城が私に抱きつき、口に啜えた野菜バーを私に食べさせようとしている画像があった。

確かにこの画像から店を特定する事は可能だろう。特徴的なバースタイルが私達の背後に写り込んでいるのである。若しくは、玉城が同行していた連中が判れば、その伝を辿り行き先も自ずと知れる事になるだろう。此処に辿り着いた事も不可思議ではない。

「……悟史にその写真を送るとは、玉城の考えている事は私には理解出来ない」

真に聞きたい事を後回しにしておき、悟史に牽制をかける。特に警戒すべき相手でも無いのだが、ちょっとしたコミュニケーションに付き合っ頂こう。

また、今口に出した言葉も本音ではある。一体全体、何の意図があつて悟史にあのような醜態を曝した写真を送りつけたのか。想像に任せてしまえば、理由として幾通りにも考えられよう。例えば、噂にはなっていないが実は玉城はハーレムの一員 隠れハーレム員とも言えようか であり、他の男と睦まじく絡まっている写真を送りつける事で悟史の嫉妬心を煽ろうとした。この妄想が真実ならば、今後の自身の立ち位置を調整しなければならぬだろう。あまりに近付きすぎれば、件のハーレムが発する瘴気くたんに侵されてしまう。しかし、高い確率でこの妄想は間違いだと思われる。根拠は薄弱ではあるが、私は確信している。何せ、奴の思い人は

「俺のここに来たんじゃねーよ。この写真は転送されてきたもんだ

「からな」

「……………何？」

悟史の返答に思考の渦から舞い戻る。

玉城が無様な写真を送るような相手であり、且つその写真を悟史へと転送する人物は誰だ。該当しそうな人物をざっと思い浮かべる。否、そもそもその前提条件が妥当とは限らない。そう、何もその人物が直接悟史へと送らなくても良いのだ。チェインメールの如く、ネットワークの流れに載せてしまえば事足りてしまう。嗚呼、しかしそれだけは止めて欲しい。要らぬ誤解ほど蔓延るモノは無い。後始末が非常に面倒になってしまう。

「これさ。アイツから来たんだよ。映子から」

「……………そうか」

「ああ。メールだから何とも言えないけどさ、こりゃ相当キレてるぜ？ 文面の所々からよ、何か殺気が漂ってる感じ。まだ高校生にも関わらず、こんなキャバクラみたいなことしているりゆうを更正させましようって意味なんだろうが……………何故か捕縛とか拷問とかいう字が入ってたりするんだぜ」

「……………ふむ」

なるほど、これは拙い。私の想像以上に拙い状況らしい。

私は悟史から視線を外し、背後を見る為に捻っていた体を元に戻す。目の端に写ったグラスを手に取り、喉を潤す。甘い。只管に甘い。こんな甘い酒を飲んでよく舌をおかしくないものだ。そうして、その甘い酒で酔い私にしがみ付いている玉城を引っぺがし、元

々こいつが座っていた隣の椅子に座らせる。

その時、ふわっと玉城から漂った匂いも、口に入れた酒同様、甘ったるい印象を受けた。日頃から甘味を大量に摂取して、甘い酒を飲んでいいるから、体臭も甘ったるい感じがするのかもしれない、そのよくな馬鹿げた考えをしている己も相当に酔っているのかと自覚する。

「まー、と言う訳で。りゅうにはちょっと付き合ってもらおうかと。りゅうだって映子にちくちくやられるよりか、俺の方に付き合ってくれた方がいいだろ？俺の方に付き合ってくれたらよ、別に映子に居場所を教えねーし」

「……場所は」

「俺んち」

私は渋々という様に悟史に付き合う事を了解し、先に店を出ておけと伝えておく。まるで悟史の静かな怒りが私にそうさせたかの如く。その様に少しは機嫌が良くなったのか、悟史はあっさりと店の外へと出て行くのであった。

「りゅうさん。良いのですか」

悟史の姿が完全に店から消えていったのと同時に、悟史の前では沈黙していた源が声を掛ける。彼の表情からは私への気遣いを感じ取れる気がした。

「……友人の連絡を取って無視していた報いだろっ」

「しかし、大方彼の家には……」

「百も承知だ。だが、それでも付き合っるのが男の友情ではないか」

「ええ」

「……だが、馬には蹴られたくないがな」

そう言った私に源は苦笑を隠さない。馬には蹴られないが、猫には引つ掛かれそうですね等と余計な事も付け加える辺り、良い性格をしている。

「……ああ、源に頼みたい事があるのだが」

持参していた鞆を持ち、席を立つ。私が席を立った事に、源以外の同席連中は気が付かない。気が付かないだけではなく、一人として微動だにしない。これは後始末が大変だろう。

「何でしょう?」

「……まずはこの酔っ払い連中の始末を。特に玉城にはきついお灸を据えておいて欲しい。そして、もうひとつは此処に乱入してくるだろう痴れ者^し供の始末を。悟史の言い方からして、朝霧と後藤が来るだろう。その阿呆に説明して欲しい。頼まれてくれるか?」

「了解しました。では、りゅうさん、お気をつけて」

「……ああ。また職場で会おう」

そう言って店の出口へと向かう。本音を言えば、酒場で飽きるまで酒を飲んでいた所ではあるが、友人の不手際の尻拭いをするのは親友の仕事だろう。日和見は私のスタンスだが、男の道義を反し

てまで守るものでもない。

そして、ふと思い出す。まだ源に言わなければならぬ事があったのだ。

「……源。私の分はグラスの下にある」

「え？ 何がですか？」

りゅうはその間に答えず片手を挙げ、店の外へと出て行ってしまった。

源は首を傾げるも、りゅうの言葉にあったグラスを探す。確かに彼の席の前にあったグラス達のひとつが不自然に浮いていた。そのグラスをひよいと上げてその下を見れば

「おお。……いやいや、これは出しすぎですよ、りゅう委員長」

綺麗に畳まれた一万円札がそこにはあった。

小山駅と二つ離れた駅より歩いて十分近く的位置にある閑静な住宅街。未だそれ程夜も更けていない為、家々からの灯りは十分に夜道を照らしている。その道を黙々と歩く男二人。勿論、りゅうと悟史である。酒場を出た時とは違い、住宅街に至る道すがら購入した酒類やつまみの類を手にはぶら下げている。深夜の宴会準備は万端と

でも言えよ。」

「……さて、悟史。今、お前の家には何人の女性が居る？」

「え、えーっと……ってやっぱり分かったのか、家に麗華ちゃん達が居る事」

「……当然だろう。言葉の端々から幾らでも想定出来る。事実、源も気が付いていたが」

「うわー、マジか」

悟史はこれ以上無いと言うほど、しかめ面をする。ついでとばかりに、うへー、という奇声も発している。これに対するりゅうの反応は無い。ただ、黙々と悟史の家へと歩を進めるだけだ。

りゅうの言葉に相当のショックを受けた悟史がぶつくさと独り言を洩らしている間に、ある一軒家の前へと辿り着く。周りの住宅とさほど変わらない、悪く言えば没個性な、普通に言えば極一般的な一軒家である。その表札には稲川と彫ってある。そう、言うまでも無く悟史の実家だ。

「……で、先程の答えは」

「……っていつか、俺ってやっぱりそう見られて……って、何だっけ。あーえーっと、今家に居る人の数だっけか。四人だけだ」

「……そうか。ついでに、もうひとつ良いか」

「ん、何だよ」

「ご両親は次に何時頃帰国なされるんだ？」

「えーっと、今月末に一回帰ってくるらしい」

「……そうか」

そう玄関前で言葉を交わして家の中へと入っていく二人。

玄関を開けた瞬間に北条寺が悟史へとフライングボディアタックをかますという、悟史家での宴会ゴングが鳴る前からの先制攻撃を筆頭に、悟史家での宴は時間を追う毎に激しいものになっていくのだった。勿論、それに比例するようにりゅうと悟史達との物理的距離も広がっていくのである。

「んっふー、ほらーさとーしーくーん」

「た、助けてくれ、りゅううう……ってそんな部屋の隅っこにいるなって、ほら、今度こそ助けてくれえ！ ああ、抱きつかないでって！ やめ、ってー」

悟史のSOSを生暖かい目とともに無視し、りゅうは自らシェイクして作ったドライマティーニを啜る。りゅうの思考は目の前の光景から遠く離れ、自作のカクテルの反省点を洗い出し、それを解決する事に専念している。

そのりゅうに近付く者が一人。榊である。

「……ひっじ」

「……何用だ、榊」

「ちょっと、話がある。付き合って欲しい」

Phase 35 : 災厄燃ゆ - 宴 - (後書き)

瀬戸です。

連休等、私には無かった！書類々切と出張？でここ三週間潰れたんだっ……という事でお察し下さい。

いや、本当に申し訳御座いません。

何かご要望があれば気軽にどうぞ。それではまた。

「……して、話とは」

りゅうはソファに座った榊と自身の前にカップを置き、彼女と向かい合う様に腰掛ける。途切れていた話を促しながら、りゅうは自分が淹れた珈琲コヒを顔に近付け、香りと味を楽しむ。無論、飲み方はブラックだ。正確に言えば香り付けにブランデーも入れてしまっているが、一応ブラックの類と言えるだろう。

一方で榊は目の前に置かれたカップを凝視するだけで一向に飲みも話もする気配が無い。微動だにせず、自分の考えに籠ってしまっている。常日頃から口数が少ない部類に入る彼女ではあるが、こうした様子は珍しい。

「……榊。こうして場所を変え、しかしだんまりとはあまり褒められたものではないと思うのだが」

りゅうの珈琲の半分ほどが消え去っても、未だ榊は口を開こうとしない。

りゅうの言葉通り、彼ら二人が座っているのは先程までの『狂乱の宴会場』ではなく、稲川家のリビングルームである。『宴会場』である悟史の部屋では依然としてハーレム員達と悟史が、酒をかつ喰らい混沌とした場を生み出している。そのような場では落ち着いて話も出来ないだろう、また悟史が居ると本音を聞けなくなる可能性が高いだろうと、リビングに移動してきたのだ。

こうしたりゅうの配慮にも関わらず、一向に話し出さない榊。

りゅうのカップが空になり、榊のカップから湯気が立たなくなっても彼女は変わらず、俯き加減でカップを凝視するのみ。否、カップを見てすらいないのかも知れない。ただただ、沈黙がリビングを

支配していた。

「……………温くなっちゃったか」

榊のカップから湯気が完全に消えてしまったのを確認し、温め直す為に腰を浮かせる。そうして、彼女のカップへと腕を伸ばした時、漸く榊が動きを見せた。りゅうの伸ばした腕を掴んだのである。

りゅうはひとつ息を吐き、浮かしていた腰を再びソファへと着陸させる。掴まれた腕は無理に引く事無く、榊の好きな様にさせたまま。

「……………どうかしたか？」

「ひつじはさ、ひつじは……………」

常よりも幾分か軟らかい口調の彼の問い掛けに、常よりも幾分か焦った口調で返す彼女。伏せられていた眼はりゅうへと向けられているが、その眼には惑いの色が隠しきれていない。

「ひつじは……………」

「……………私がどうかしたか？」

「ひつじは何でも知ってる？」

「……………否。私が知っている事等、精々が微塵程度。私の手が届き、目が捉え、耳が察し、そうして脳が刻み込める範囲の事のみが私の知り得る事だ。……………榊が今如何様な答を望んでいるのかは知る由も無い。だが、聞かぬよりかは聞いた方が良いと私は愚考するが？」

「……ん」

その一言を呟き、また目を伏せてしまう。これはまた話が再開するのに時間が掛かるだろうと、りゅうが腰を浮かしかける。しかし、未だにりゅうの腕を掴んでいる手がより一層力を入れて掴んだ為、りゅうは再度腰を下ろす事になる。

再び訪れる沈黙。そして、低く漏れる溜息。

りゅうは軽く目を瞑る。榊は矢張り微動だにせず。

まだまだ榊が話し始めるには時間と彼女の決心が必要のようだった。

榊由紀という人間に初めて接したのは何時だったろうか。

私は少々錆びれた記憶を掘り返し、彼女との邂逅を思い出す。

実の所、榊との初対面は悟史とは何の関係の無い状況で達成されている。歴代の稲川ハーレムの中では非常に稀有な存在だ。他の面子は悟史に頼まれて私が救出した女性か、悟史が手を差し伸べ私がそのサポートをした女性かの二択だと言ってしまうても過言ではない。

初顔合わせは放課後の、更に言えば部活後の剣道場。

互いの名も知らない状態で向かい合った私と榊。それが初対面であった。向かい合った榊の第一印象は『ファーストインプレッション』う正義漢』。恐らくは何食わぬ顔で男子剣道部に混じり練習を行う私を、彼女は礼儀知らずの門外漢だと認識し灸を据えようと思ったのだろう。放つ雰囲気。彼女は『剣気』だと主張しているがを意図的に居丈高にし、私を威圧する様に構えていた。

記憶は掠れているが、大体この様な会話をした覚えがある。

「……お前、礼儀知らず」

「……ほう。しかし、部活後にこうして喧嘩を吹っ掛けて来る貴様の方が礼儀知らずではないか？」

練習終了直後、榊に剣道場に残る様伝えられ、律儀に坐して待っていた私におもむろに竹刀を突きつけて言った言葉だ。こういった物言いに素直に反論していた自分が酷く懐かしい。今であれば、懐柔する様お茶を濁していただろう。

こうした私の若気の至りに、榊も当然ながら牙を剥き

「そんな事無い。お前の方が礼儀知らず。だから、お前に礼儀を教えてやる。構えて」

「……是非も無い。私も貴様に礼節という言葉から指導せねばならない」

「……くたばれ」

そのまま試合に雪崩れ込んでしまったという経緯である。無論、勝敗については私の圧勝となった。私と榊の身長差は今も昔も然程無く、腕の長さという意味での間合いの優劣は無いのだが、跳びを考慮した本来の間合いでは一尺弱私の方が長い。加えて、私は正確な数を覚えられぬ程度、あの剣道娘に文字通り突き合っていた経験もあった。当然の結果と言えは言えるかもしれない。今であればどうであろう。榊の弛たゆまぬ修練が私の実践経験と身体的優位を覆すかもしれない。

だがしかし、あの場で榊を打ち崩した歴史は覆される事は無い。それ以後も私が依頼されて練習に参加した際には、必ず試合を挑まれ競い合い、そして打ち負かしてきた。そうした接点があった為、

普段の高校生活においても日常的な会話を 私に怯える事無く

交わせる貴重な女友達だったのだ。

だからこそ、彼女が稲川ハーレムに所属する事になった事は私にとって十分に衝撃を与えるものだった。

ああ、そう言えば、彼女が私の事を「ひつじ」と呼び始めたのはその辺りだったか。そうであるならば、私の事をそれまで何と呼んでいたのだったか

「……ひつじはさ、どうしても勝てない相手っていうのに当たった事は無い？」

堅く閉ざした貝の口から漸く吐き出されたのは、何とも歪曲的な、常の柗を知るものであれば首を傾げる様な変化球染みた質問であった。ちなみに未だに彼女はりゅうの袖先を掴んで離さない。

突然の質問に、りゅうはゆっくりと目を開き反応する。じつと柗の目に視線を遣り、幾分時間をとって口を開く。

「……生憎、勝機零に相對する事は経験に無い。如何なる相手であろうと、勝ちの目は潰れる事は無かった。それがその問に対する答えだ」

りゅうの答を聞き、幾分落胆する柗。はっきりと顔に出さないのは彼女のりゅうに対する気遣いか。

「……そ」

「だがな、柗。それは柗自身にも当てはまる事だ、と私は思う」

そう、と答える榊を遮る様に、常よりも幾分語調を強くりゅうは語りだす。その様に驚いたのだろう、榊は眼を見開いてりゅうを見る。俯いていた顔はすっかりりゅうの方へと向けられていた。

「確かに、勝ち目の全く無い勝負も存在する事だろう。魚と人間が潜水勝負した所で人間が勝てる訳が無い。しかし、榊の言っている勝負はそうした単純な能力の比較ではなからう？ 否、率直に言おう。恋愛関係だろう？」

「……ん」

「これ以外の選択肢は非常に限定されるからな。大体見当はつく。だが、この際恋愛勝負かどうかは置いておこう。至極一般的な話だ。勝負に勝ち目が無い状況は、より正確には、そう思い込む状況は、大抵幾つかの類型パターンに分類出来よう。ひとつは相手が此方の思考を限定する場合、そしてもうひとつが此方が自ら思考の幅を狭めてしまう場合だ。更に言えば、実際にはどちらのケースも内包する場合も挙げられるが、この際これは無視しておく」

「それはどちらも同じ？」

「無論、包含関係になる場合もあるう。だが、決定的な差異がある。例えば、二つの信号源が無相関であるが独立ではないという具合に」

「……全く分からない」

「……すまない。様は積極的アクティブか受動的パッシブか。そう思わされたのか、思ったのかの違いだ。結果としては同じであるが、その過程が真逆で

ある。また、その対処法も全く以って異なる。さて、そこで質問だ、
榊。君は……否、貴様はどっちだ？」

「あつ……」

「答は既に己の内に」

そう言い放ち、カップを口元に運びりゆう。しかし、中身が空で
ある事を思い出し、若干眉間に皺を寄せる。他の飲み物を取りに行
こうにも、榊の手が邪魔であつた。

一方の榊はりゆうの言葉に惑いの表情を見せる。りゆうの比較的
珍しい長口上に目を廻したというよりも、言われた事の鋭さと毒に
やられたのだろう。それでも、先程までとは異なり、必死に反論し
ようと試みる。

「で、でもっ」

「……私に竹刀を突きつけた榊は浅慮で礼儀知らずだつたがな」

「……や、やなぎ……」

昔話を穿り返され、りゆうの呼称も昔のものになる。自分の奇行
を思い出したのか、榊の顔面も多少赤くなるのだが、それを振り払
う勢いで榊はソファから立ち上がり、

「部屋に戻る。麗華達の事が心配だから」

と言って部屋へと戻ってしまった。

こうして、短いながらも異例の『りゆう恋愛相談室』は幕を閉じ
たのである。

要らぬお節介をしたものだ、と自嘲してしまふ。これでは益々ハ
ーレム連中の瘴気に晒される危険性が増すだけではないか。視覚的
にも聴覚的にも触覚的にも苛まれる生活が続くだけではないか、と
だがしかし、希少な女友達が近い将来後悔すると予測し得る状況
は回避したかったのである。勇気を示さず、敵前逃亡する寸前の友
人の肩を後方より押したかった。勿論、これが私のエゴである事は
十二分に承知である。だがそれでも、という想いを無碍には出来な
かった。

今頃は部屋に戻り、何時も通りの姿を悟史に見せていることだろ
う。それで良い。若しかすると、より積極的に働きかけているかも
しれない。それでも良い。兎に角、後悔だけはして欲しくは無い。
ふと、先程まで榊が座っていたソファを見遣れば、そこには対面
に置かれたカップ、そして一口も飲まれていない、冷めてきってし
まった珈琲が鎮座していた。

「……そう言えば、確かに榊には『やなぎ』と呼ばれていたな」

残ってしまった珈琲を飲み干し、カップを両手にキッチンへと赴
き、流し台へカップを置いておく。恐らく、夜が進行するにつれ、
流し台の陳列物は多くなっていくだろう。また、夜明け頃に私が片
付ける可能性が非常に高く、今の内にカップを洗う気にはならない。
棚から新たなグラスを取り出し、冷蔵庫より群青の瓶を取りそれ
に注ぐ。キャップを開けた刹那に香る涼やかさ。水よりも粘性が高
く、とろりとグラスの中に納まった。くいと口に含み、喉に通せば、
癖になる味が私の中を駆け巡る。

「……ふむ。ジン様様だ」

聴覚に意識を置くと、離れた位置に居る筈のハーレム狂想曲が響いてくる。十中八九、北条寺が絡み、多村が対抗して襲い掛かり、悟史が悲鳴をあげているのだらう。榊も無言で突っ込んでいるに違いない。

だが、何時までもこのままではいられないだらう。

終曲が何時になるかは作曲家ならぬ、そして神ならぬ私には想像に頼るしかない。想像は想像でしかない。真実を捉えているとは言い難い。それでも、確信している。このハーレムは軋み始めているのだ。

「……要は悟史の意思次第なのだが」

せめて束の間の幸せを。

誰に祈るでもなく、私はグラスを上げ飲み干した。

蛇足。

とある店に集合してしまった修羅と呪術師と酔っ払いと執行者と屍達 背景担当であるが の、どうでもよい話である。

「ねえ……さっさと話せば良いと思うよ?」

「ちよっ、コブラツイストは痛いつて!」

修羅は話を聞き出す為に、己の腕力に訴える。しかも、聞き出した相手ではなく、敢えて関係の無い呪術師に技をかける事によっ

て。無関係の人間を痛めつけられて平然としていられる者は少ないという人の慈悲を見越した、立派な 人道的に褒められるものは無いが 交渉術のひとつである。

「ほらっ！ 早くしないと昭君の腕が」

「いえ、私は痛くも痒くもないので」

「うん？ まーごとー君っすし、どーでもいーっす」

「あんたら、酷いな！」

惜しむらくは執行者と酔っ払いには全く効果が無かったという所だろう。

渋々、修羅は呪術師から手を引き、さり気無くオシボリで手を拭くのである。多分に彼女はその行為を無意識に行っているのだろう、だからこそ呪術師は自身の胸を押さえ、只では転ばぬと明日への呪いの糧とする。

「で、りゅう君は何処に行ったのかな。あと、この写真は何なのかな、かな。悪いんだけど、ボクに教えて欲しいなっ」

修羅は己の携帯画面を執行者と酔っ払いに見せ問い質す。彼女の手にある携帯電話からはミシミシという音が断続的に聞こえ、彼女の堪忍袋の緒とどちらが先に事切れるか、という機器としての危機に陥っている。

執行者はちらと酔っ払いを見、修羅と呪術師を人道へと還す道を模索する。

「りゅうさんは転校しまし」

「嘘だっ!」

「冗談です。りゅう委員長は急な用事という事で帰られました。その用事に至っては我々の与り知らぬ所ですが」

「むっ」

「だがよ、源。常識的に考えて、この時間から用事ってのもおかしくないか」

「いえ、おかしいおかしくないという判断は我々ができるものではありませんよ。当事者間にしか分かり合えない部分というものはあるでしょう? 従ってですね、私は委員長が何処に居るかという質問には解答出来ません」

「そう……なんだ」

「ええ、そうなんです」

修羅は幾らか修羅道より人道に歩みかけている。これは良い傾向だと執行者はほくそえむ。

だが、何時だって世界は混沌を望んでいる。エントロピは増大するのだ。

「ですから、もう今日はお帰り頂いた方が」

「んー、あとちょっとだったすよー。あとちょっとでりゅうくんおもちかえりだったのにー」

酔っ払いがへらへらと笑いながら独り言つ。嗚呼、何をくつちやべってるのだこの馬鹿は、と執行者は顔色を変えず、だが冷や汗がだらだらと背中を流れていくのを感じている。

ぶちり。

ごん。

荒縄が切れる様な音と木が何かに打ち据えられた音が響く。

「な、なにを言ってるのかな。ボクには良く分からないよっ」

「し、ししよー。師匠だけはそうじゃないと俺は願ってたのに。裏切ったな、僕を裏切ったんだっ！」

「落ち着きましよう、二人とも。これは酔っ払いの戯言です。ですから、その握り拳と藁人形は仕舞って下さい」

前者の音はどうやら修羅の堪忍袋の緒が切れたもの、後者は藁人形が床に固定されてしまった音であつたらしい。執行者は思う。これはもう私の力では如何しようも出来ない、阿修羅王に対峙出来るのは帝釈天しかないのに、と。

「んーもーすこーしでキスできたのになー」

「……ボ、ボクはもう人間をやめたヤルウウウ！ コロース、コイツブツチKILL！」

「し、ししよー……っで、痛え！ こっち殴るな、映子！ 痛え痛えっで！」

「あははーつきこそぜええったい、ぜええええっつっつたいやつてやるっすー」

「ムキイイイイイイイイ」

「……はあ」

執行者は無言で会計計算を進める。実際の会計と無論迷惑料も込めて。幸いにしりゅうが置いていった万札がある。後はこの喧騒の中でも一向に目を覚まさない屍共から徴収すれば良いだろう。

執行者は何となくグラスを持ち上げ、同じ様な喧騒に塗^まれているりゅうに捧げる。そっちも頑張つて下さい、私ももう少しだけ頑張つてみます。

阿修羅王対稀代の呪術師・セコンド酔っ払いの異種格闘戦時間無制限一本勝負を横目で見つつ、執行者は溜息を吐くのだった。

静かに、または騒々しく体育祭の宴の夜は過ぎていく。

望む望まないに関わらず、高校生活の残り時間は刻々と無くなつていくのであった。

……遅くなりました、瀬戸です。

恐らく最も難産であっただろう、今回のお話どうだったでしょうか。「蛇足」以下は15分程度でばつと書いてしまったのですが……それまでが長かったです。主人公の長台詞は書き手にとっても珍しく、それ故難しい。

そして、やっと体育祭編が終わりました。これまた長かった！一年くらいかけてるのかと思うと、自分の遅筆が至極情けないです。精進します。

さて皆様、常日頃より様々な感想有難う御座います。(感想返しにつきましては、今後徐々に行っていく予定です)

皆様の御蔭でやっとこ60万PVを達成した模様です。有難う御座います。今後とも『ハーレムな隣人』を宜しくお願い致します。

と言う訳で、今後数話は皆様のご要望をなるべく反映した小噺にしようと思つのですが……1学期期末〜夏休み〜9月〜文化祭開始までの間、お望みのシチュエーションが御座いました是非ご一報を。(但し、彼らは受験生ですのであしからず)

それでは長くなりましたが、また次話にお会い致しましょう。

何処にでもありそうな学校。

何処にでもありそうな教室。

誰にでも思い描けそうな夕暮れ時。

『主人公』とヒロインは二人きり。赤茶けた教室で、其処には強敵も五月蠅いクラスメートもむつつりな教師も存在せず、唯二人だけがその閉ざされた空間で互いを見合っていた。

「どうしたの？ 君？」

と彼女は彼に問い掛ける。意識しては居ないのだろう、小首を傾げて問う仕草は彼の恋心を大いに揺さぶり、心拍数が上がるのを押さえる事が出来ない。このまま彼の心拍数を上げていけば、恐らく彼の心臓は引き付けを起こす事請け負いである。

『主人公』ははつと息を一つ吐き、邪念を振り払おうと頭を猛烈に振り、昨夜遅くまで考えに考え抜いた言葉を言おうと口を形作る。だがしかし、声が出ない。後少し、ほんの少しだけ空気がそこを通り抜ければ、振動する空気は声となって彼女に伝わるだろう。

それでも、出ないものは出ないのだ。

何とかなれ、と心の中で念じても事態は一向に良くならず。今迄生きてきた中で最も真剣に急速に現在の事態の解決策を考えても答えは出ない。ただ、固まるだけしか出来なかった。

一方で、奇妙な口の形を象ったまま固まってしまった『主人公』を、さらに首を傾げる角度を急にして興味深そうに見る彼女。何を思ったのか、ぽんとひとつ手を打ち、

「もしかして、パントマイムの練習かな？ じゃなかったら、福笑いの練習とか？」

彼の思惑とはかけ離れたことを言い出す始末。『主人公』は必死に、そうじゃない、ついでにそれを言うならば福笑いではなく、腹話術だと伝えようと腹に力をいれ、身振り手振りも交える。だが、伝わらない。

彼の様子に益々彼女の疑問符は増加して行き、悲しいかな彼が必死になればなるほど、彼女の理解は真実から程遠くなっていく。

「もっつ！ 分からないよっ！ だってそんなに頭良くないけど、君が何か言ってくれないと分かるものも分かんない！」

もう家で遣る事あるから行くね？」

「……ま、まった！」

漸く掛けるべき言葉が口から出てくれた。

この些細な偉業に歓喜したい自分を無理矢理押さえ込み、本当に伝えたかった事、態々（わざわざ）このシチュエーションを選んでまで彼女に知らせたかった自身の想いを伝える。

「お、俺は の事が好きなんだ！ その、なんというか、お前の笑顔が俺好きなんだよっ」

つかえながらも、かみながらも、彼は必死になってストレートに自身の感情を吐露する。青春小説のテンプレートと言える青臭い台詞を硬軟織り交せるのではなく、ただただ愚直に相手にぶつける。

その台詞を送られた相手は間違えなく赤面ものであり、そのストレートな気持ちに如何対応していいか分からず慌てふためいて、赤面した顔を見られない様にと俯き加減で彼の告白に答える と言うのであれば、その夕暮れ時の教室と言う舞台設定もあいまって青春ストーリー的一幕で終始しただろう。

だがそうはならなかった。

彼女はきよとした表情で、彼を見据えるのみ。バベルの塔に神の鉄槌が落つこちた直後の労働者達の如く、彼の言葉が通じていないかの様な表情だった。

「だからっ……何か返事しろよ、」

「……あー、ゴメンね。ちょっとびっくりしちゃって。……そういうのされた事無くて……」

「や、こっちも急でわりいけどよ」

やおら、訪れる沈黙。

「で、。へ、返事は」

「えっと……ゴメン。、君の事好きだけど、でもね。その、こ、恋人って関係では見れないかなって」

嗚呼、駄目だったのか。

膝を地面に着き、項垂^{うなだ}れたい欲求に抗い、彼は健気にも自分を振った彼女の目を見据え、そうして決して諦めないという姿勢を見せる。ただ、この意気が彼女に伝わっているかどうかは甚だ疑問ではあるが。

「じゃ、じゃあよ。如何したらに認められるんだ？　はど
ういう奴なら恋人にしたいってんだ？　っーか、若しかして、好きな奴居るのか？」

「そ、そんな一辺に聞かないで欲しいかな！　えっと、認められる

認められないってのじゃなくてえ。う、うーん。難しいなあ。その、君は確かにカッコいいし、運動出来るし、勉強も出来るし、凄いいと思うよ。すっごく尊敬してる。でもね、えっと」

「な、なんだよ？」

「は……そう、優しい人かな。優しい人がタイプなんだ。これみよがしな優しさよりも、誰も見ていない所でも変わらない優しさ。それに、ただ優しいだけじゃなくて、間違っている時には間違ってるって言ってくれる、叱ってくれる優しさ」

「……そういう奴であればいいんだな？」

「え、あ、うん」

「で、具体的には誰だよ」

彼と彼女の問答。その最後の問い掛け。

彼はこの問い掛けをした事を以後悔やむ事になる。何故ならば。その時の彼女はあたかも、相手のストレートな告白に如何対応していいか分からず慌てふためいて、赤面した顔を見られない様にと俯き加減で彼の告白にYESと答える、その寸前の女の子の様で。

「君」

照れながら、彼に見せた笑顔は間違い無く、彼が知る限り最も綺麗に、可憐に見えた笑顔だったのだから。

「……なんちゅー嫌な夢だ」

夢見の悪さで綺麗さっぱりと覚醒する。目を開ければそこにはお馴染みの天井が当然存在しており、カーテンからこぼれる光が朝の到来を知らせてくれる。何時もと変わらない朝一番の風景。

だがしかし、爽やかな朝の筈が、夢の所為で薄ぼんやりとしたものに変わってしまった。知らず、溜息が出る。

折角目が覚めたのに、このまま無為にベットの所で過ごすのも味気無いと身を起こし、そこで漸く気付く。

そう。自分の周りにへばり付く三つの人型に。

一人は彼の太ももに。

一人は彼のわき腹に。

一人は彼の胸板に。

三人が三人ともきつく締まるまで体に腕を回している。恐らくは軽く力を入れただけでは到底引き剥がせない程度のへばり付き様。

蛸の吸着というより、蜘蛛の糸に引っ掛かった哀れな昆虫の末路だ。どちらが蜘蛛でどちらが昆虫であるかは議論の分かれる所だろうが。

「おーシット……なんてこってー」

それら三体を起こさない様、こっそりと小声で呻く。視線は天井に。自身の行いであるにしろ、こうなってしまった経緯に対して神に愚痴を吐く。一通りぐちぐちと愚痴と呪詛を撒き散らした所で、この状況に至ったまでを正確に思い出そうと冷静に思考する。

俺は何もしていない、俺は何もしていないと小声で自分に言い聞かせながら。

彼、稲川悟史の休日はどうして始まったのである。

悟史の自業自得な悲鳴が細々と部屋に響き渡っていた丁度同時刻、りゅうは一軒の大邸宅　悟史家、つまり比較的一般家庭の一軒家の数倍はあるとかという程の物件　に訪問していた。周囲の住宅街に違和感無く溶け込む瀟洒な洋館の姿から、設計した建築士とその委託者のセンスの良さが解るといふものだ。

その控え目ながらも優雅さが溢れ出る洋館を前に、一般人ならばインターフォンを押すのを躊躇ためらってしまうものだが、りゅうは微塵も躊躇ためらせず自身の訪問を伝える。直後、インターフォンから聞こえる声　当然の様に目前の洋館に勤務している家政婦である　に従い、りゅうは洋館への潜入に無事成功した。

「お久し振りね、竜次君たつづく。益々男前になつてるわあ」

「お久し振りです。臯月さんも益々お美しくなられて」

「あら、やだ！」

出迎えてくれたのは先程のインターフォンの声の主。『家政婦は見た！』を地で行くにこやかな笑顔の持ち主。大邸宅を一人で切り盛りする女傑である。交わされる挨拶に見られる様に、彼らは既知の間柄だ。以前にも幾度か、りゅうはこの屋敷に訪れているのである。

「それで、今日は美代お嬢様に逢いに来たのかしら？　それとも亜つ実お嬢様くみ？　若しかして、初音お嬢様なんて事も？　そうねえ、最近ツンドラだか天テレだかサンテレビだか、そういう強気な女の子が人気なのでしょう？　私としては、初音お嬢様がお薦めよ。お嬢様あまのじゃくだったら意地つ張りなのか天邪鬼あまのじゃくなのか、昔から好きな子には散々

付きまとして苛めてたもの。貴方も散々な目にあつてたでしょう？
きつと、お嬢様のお気に入りだったのね」

「いえ、初音さんは随分と私の親友にご執心だったかと記憶しております。亜実さんもそうだったかと」

家政婦の波状攻撃をきつちりと受け止める。

ばっさりと切つて捨てられた家政婦は、あらそうなのと残念そうに相槌を打つ。残念と思つているのは果たして、滑らかに回る舌を止められた事に対してなのか、それとも仕える家のお嬢様方の恋路を見逃したからなのか。それは本人にしか分からない。

家政婦の饒舌が途絶えた隙に、りゅうは訪問理由を伝え、美代の在宅を確認する。

美代の名前が出た時に家政婦の目が妖しく光つたのは偶然だろう。

「それではまた」

「ええ。後で御茶を届けに、ね。そうそう。美代お嬢様だったら、最近どうも機嫌がよろしくないなので、宜しく頼みますよ」

「……微力ながら努めさせて頂きます」

そう言つて、りゅうは美代の部屋へと屋敷の中を進んでいった。

お久しぶりです、瀬戸です。

最近自分の時間が中々取れない事が多い日々です。

今回の話から数話は体育祭明けの休日話がメインです。

楽しんで頂ければ幸いです。

追伸。

今年も夏ホラーに参加致します。

皆様も是非夏ホラーに参加していただければ、と思います。

四条家は東西に長く延びた構造をしている。俯瞰すれば巨大なIの字が望めるだろう。また、館の周囲には当然の様にそれなりに広大な庭が存在している為、四条家の敷地だけ見れば草の海に浮かぶ箱舟と見紛う事も出来なくは無い。

その箱舟の中をりゅうは躊躇う事無く、惑う事無く突き進む。勝手知ったる他人の家、という言葉を実現する彼ではあるが、前述の通りそれ程多くこの館を訪れたわけではない。彼の卓越した空間把握能力と記憶力、そして物怖じしない胆力の賜物と言える。

突き進む廊下には柔らかな陽光が差し込み、廊下の端々に見受けられる些細ながら繊細な装飾を益々映えさせている。その光景は一枚の美しい絵画に等しい。りゅうはそれらの様に目を遣り、微笑に笑む。恐らくはこれから訪れる精神的^{ストレス}心労を中和する為だろう。滅多に見せない微笑の裏には諦観が伺えた。

「遅いわ。ハリーハリーハリー」

突如、その美しい絵画がぱつぱつと叩き壊される。叩き壊した主は廊下の先のドアからひよっこり顔を突き出して、りゅうを急かす様に声を掛けていた。四条家三女、四条美代である。

恐らくは無表情を装ってりゅうへ圧力をかけていたかったのだろう。何せ、修学旅行終了から今迄まともに面をつき合わせて話す機会は殆ど無かった上に、修学旅行でのりゅうの態度 任務で怪我を負った事を水臭くも自分^{みづ}に話さなかった件 に未だ怒りが燻り続けているのだ。りゅうからの謝罪もまだ聞いていない。

しかし、矢張りりゅうと永らく 彼女の基準ではあるが 触れ合えなかったのは美代にしてみれば苦痛でしかなく。装った仏頂面は口元のにやけで台無しであった。ただ、口元のにやけがドアの

玄関にて靴は脱がれている。

りゆうが振り向いた先には、当然美代が居てりゆうをきつと睨んでいた。

「ねえ、柳君やなぎ。どうして私が怒いかっているのか、解とりまして？」

硬化した声音と仰々しい口調。生徒会長然とした態度で、『氷の女』に相応しい仕草でりゆうへと問う。微妙に握った拳が震え、呼吸も若干荒いのは気にしてはいけないのだろう。

「……四条生徒会長。その件に関しては、私は謝罪するつもりは無い。ああする事が最良とは言えないが、最適だったと判断している」

「そう……なら出て」だが「」

「だが、四条。私の怪我で君に余計な心配を掛けてしまった事は謝罪しなければならない」

「……」

「心配を掛けてすまなかった」

きっかり六十度に腰を折り、深々とお辞儀する。

言葉少ないが、誠意を込めたりゆうの謝罪に、四条は内心満足していた。元々、それ程怒りに染まっていた訳ではない。ただ、自身を犠牲にして黙々と任務を実行していたりゆうに、弱みを微塵も見せてくれなかつたりゆうに、少し腹が立つただけなのだ。それ以降は只単に元の鞘に戻るきつかけを失っていた事と若干の意地があっただけの事。

だが、と四条は考える。これで許してしまうのはどうだろう、も

う少し粘ってみるのはどうだろうか。若しかしたら、とてつもない譲歩が得られるかも知れない。若しかしたら、デートとかデートとかデートとかデートとかのチャンスが巡ってくるかも知れない。若しかしたら、その後『若しかしたら』な出来事が待っているかも知れない。ぐるぐるぐるぐるぐると思いは巡る。巡れば巡るほど、手の震えと呼吸の荒さは激しくなる。

一方で一向に四条から反応が返ってこない事をいぶかしみ、りゅうは下げていた頭を元に戻す。目の前に居る四条は顔を俯かせてしまっている為、表情を見る事は出来ない。

「……四条？」

「……ふ、うふふふ」

声を掛けるが反応は薄い。何やら、目に見えない怪しげな雰囲気、所謂邪気が溜まっていく様に感じる。一瞬、四条の身体を持ち上げて『邪気アップ！』というギャグをやってみたくはなるが、りゅうは自制し一二歩四条から距離を取る。

目の前の彼女の手の震えは身体の震えとなり、呼吸は更に荒くなる。邪気もどんと右肩上がり上昇しているのだらう。ふるふるぶると震えが最大瞬間振幅を記録し、俯いていた顔が上を向いた瞬間

「りゅう、りゅうちゃああああああん！！」

と銃弾もかくやと、四条がりゅうへと飛び掛っていく。恐らくは何かが四条内で極まってしまったのか、りゅうと触れ合ってなかったことによる禁断症状か。どちらにせよ、りゅうへとぶっ飛んで行き

「犬バリアッ！」

「ぬがぁあ！」

敢え無く、ジャンボ犬の決死の防御により墜落した。南無三。

修羅場のベットから無事抜け出した稲川は、三人を起こさぬ様にこっそりと部屋を這い出る。自分の部屋から出る為に盗人同然の抜き足差し足、そのこそそとした自身の振舞が内心情けなくて思わず目頭が熱くなる。もつと堂々とした態度は取れないものかと頭を抱え、その場に蹲すくまってしまうも、してしまった行いはどうしようもないと踏ん切り朝食を作る為に階下のキッチンへと向かった。

キッチンにはひとつとして洗い物が無かった。

シンクは舌で嘗め回せるほどに綺麗とまではいかないものの、目立つ汚れも無く三角コーナには新しいシートが被せてあった。

脇に置かれた水切り用トレイには堆うすたかく皿やコップ等の食器類が積まれている。

考えるまでも無く、これら全てがりゅうの行いである事は稲川にも分かっていった。深夜にまで及んだ四人での宴会は少し食べて大量に飲んではしゃいで、そのまま自覚無く終わってしまったのだ。自分の近くに居た三人が途中で起き出して片付け始めたとも思えないりゅうが稲川達の寝静まった後に黙々と後片付けしている姿が容易に想像出来る。今まで寝ていた自分の部屋にもゴミが見当たらなかつた事から、自分達の痴態が見られていたのかと思うと稲川はまた蹲りたくなつた。

『優しい人かな。優しい人がタイプなんだ。これみよがしな優しさよりも、誰も見ていない所でも変わらない優しさ』

夕日に照らされた少女の幻影が稲川を責める。
ずきりと自身の体が傷付いた気がした。

「あー、ったく。折角の休みだつてのに稲川さんは憂鬱ですよー」

がしがしと頭を掻き、戸棚に入れてあったシリアルを取り出し、冷蔵庫から牛乳を引っこ抜き、食器類の山からボールとスプーンをほじくり出す。それらをひよいひよいと食卓に並べて、いただきますと一言、朝食を開始する。偶然にも机の下に転がり込んでいたサッカーボールを足でまさぐりながら、稲川は今日一日を如何過ごすかをぼうつと考えるのであった。

「でもねえ、りゆうちゃん。私はここはおかしいと思うのよ。だって、こんなチャンスなんだよ？ おかしいでしょ、おかしいよね、おかしいに決まってる！ あにおかしからずや！」

「げに美しき奥ゆかしく忍ぶ恋ではないか？ 互いが互いを思うが故にかくも哀しき恋物語。かくありたいとは思えないが、しかし見習うべきは多々あるだろう」

「違う違う！ ここは男がかつと女性をかき抱いだいて、包容力で女性を安心させるべき所だと思うんだよ。だって、出奔した男を追い掛けて追い掛けて、タライを引つ繰り返した様な豪雨の中で視界が遮られてるにも拘らず、必死に駆け抜けていつてさ。やっと居場所を突き止めたと思ったのに置手紙だけなんて。しかも、この内容！ この短歌！ 貴方を思つてーの下りなんて、女に気を持たせてるだけじゃない！ 潔く身を引くなら男らしくすっぱりと切りなさい

よね！」

「……昔語りにそう癩癩かんしゃくを起こすな。付け加えて言うならば、斯様かような男に対する期待はしておいても損するだけだと思考するが」

「だって、だってさ、だってだってなんだもん」

「せめて解る様に反論してくれ」

一通り謝罪と乱痴気騒ぎを終えた四条とりゅうは如何なる流れか、古文の勉強を始めていた。無論、彼らは受験生であるから、こうして自然と勉強をする習慣がついているのは優秀と言えよう。

だが、休日の朝から部屋で二人きりの状況。何か進展があってもおかしくないのに、寧ろ何か起きてくれと受験生の鑑な彼らに変な期待をしている人が一人。ドアの隙間から、器用にハンカチの角を啜えながら、二人を観察している家政婦が居たが気にしてはいけないのだろう。現に、りゅうは気付きながらも放置していた。

「でもさあ。実際問題、この昔語りみたいに、複数の女性から懸想されたらどうなるんだろうね？」

古文をすらすらと読みながら、四条はりゅうに尋ねる。視線は文章を追いかけ、手で辞書を繰っている姿勢から、その質問は本腰を入れて聞いているものではないと分かる。

りゅうも四条を一瞥するのみ。目を再び文章に向け、口を開いた。

「……如何にもならないだろう。畢竟ひじつ、その男の器量ひりょうに依る。幾ら思われていたとしても、男が真剣に愛せるのはその器の中だけだ。無理に通せば、歪みが出るといふもの」

「でもさ、想いを懸けられたら返すくらいに度量があるから、複数人から想いを寄せられてるんじゃないかしら？ 汝隣人を愛せよって言葉を体現出来る位に、ね」

「それは『鶏と卵』の問題ではないか？ 後者については、愛するという言葉の拡大解釈と言えるかもしれない」

「『鶏と卵』ね。広い度量と複数人との交際が表裏一体ねえ……まあ、そうかもね。うーんでもなあ」

ぱらぱらと辞書を捲りながら、うんうんと四条は唸る。
ぺらぺらと紙が擦れる音だけが暫し四条の部屋を独占していた。

本当に遅くなりました。御免なさい。

と謝罪しながら挨拶します、瀬戸です。今もって修羅場の真つ最中ですが 3連休はずっと職場？に居りました 前回の投稿(『蟲食い』)から一ヶ月過ぎてしまったので見切り発車な投稿です。

唐突ですが、私も多少は凹む事もあります。

このシリーズ結構ダラダラと続けている所為かとも思いますが……ちよつとした酷評を頂く事もあります。

その度に直そうと思っっているのですが、中々直らない現状でして、指摘して頂いた方には申し訳無い気で一杯だったりします。

……で、何が言いたいかというと。
「中々格好良いハーレム野郎を書けなくて済みません」と言う事です……精進します。

次回更新は修羅場にも拘らず、今週末を予定。死亡フラグが乱立している状態ですが、頑張ります。

追伸：時代劇小説とラノベの違いが解りません。かの高名な佐伯先生や鈴木英治先生ってラノベと大差無い様な気が。教えて下さい、偉い人。

あれから既に一ヶ月以上が過ぎたのか。時が経つのは随分と早いな。

稲川は誰に言うでもなく、ぼんやりと考える。考えながらも、足元ではボールを弄くつていられるのは流石と言えるだろう。ボールが彼の足の間を行っては帰り、時には宙に浮かび、音も無く足の甲に落下する。その様を見た女子生徒達が目を輝かせていた。

場所は体育館。

時は一学期終業式。

稲川の頭にあった「あれ」とは体育祭の事であり、即ちあの休日の狂騒から一月以上が経過していた。梅雨の気配を感じさせていたあの時期とは一変して、外は太陽が過剰なまでに自己主張。夏真っ盛りという言葉が適当だ。

そうして暑く茹だる体育館の中を生徒達は忍耐の文字を背中に背負って、直立の姿勢を保っている。ただそうしているだけでも十分に辛い。現に汗っかきな生徒のシャツは汗に塗れ、絞ればコップ一杯ほどの汗が見れるぐらいだろう。それに加え、あのお騒がせ校長の長口上が降り注ぐのだ。失神する生徒が出てもおかしくは無い。

しかし、そうした厳しい環境下にも関わらず、一人として脱落者が出ないのは何故か。

理由は簡単だ。

「いいですか、皆さん。明日から夏休みではありますが！ 火遊びには十二分に気を付けなさい。火は一度着いたら、なっかなか止まらないのでーすよっ！ 私もね、一度火遊びが過ぎて、家を失った経験がありますからね。よくわかります。ついでにお金も取られてしまいました。さらに、娘も車も取られてしまいましたからね。とてもよくわかります。そして、火は消えたと思ってても燻くすぶっている事

がありますからね。いきなり、家にこられて認知しろっていわれてもねえ……って、先生達！ まだ私が喋ってるんです！ 何故、マイクをつ！ あっ！ ちょっ！ い、いーですかっ！ 皆さん！ じゅ、純愛はいーですよおおおおっ」

そう、夏休みである。この甘美な響に生徒達は支えられていると行って過言ではない。未だにアフロな、そして始業式の時と変わらず教師達に抱えられて退場する校長の演説に耐えられる程の性能を持っているのだ。

校長の演説から解放された生徒達は背伸びをしたり、その場に座り込んだり、雑談を始めたりと、自身の自由を満喫していた。会話の内容は勿論、この夏期休暇を利用して何処かに遊びに行こうといったものが過半数を占めている。彼らの顔は一樣に明るい。そして、明るさの影には暗さがある訳で。

「うおー、明日からヨビコーだぜ！ まじ、だりい」

「え、何処で？ 俺、カワイ。オマエ、ヨゼミー？」

「あー、スンダイだぜ」

「そーなのかー」

「そーなんだぜ、ぜ、ぜぜぜ！」

「なんだその無意味なラップー。ちょー意味わかんねーよ」

「エロい人には分かんのですのーと」

最高学年の生徒達の顔は一樣に暗い。会話自体は明るい、心の

中は墨汁の様に真っ暗だ。何しろ、高校最後の夏である。部活動の最後という事に加え、世間では「天王山」と言われるほど、この夏の勉強は重視されているからだ。迫りくる部活最終試合と受験までのカウントダウン。暗い顔をした生徒達の胸中の大方はこれで占められていた。

そして、稲川のクラスも暗い雰囲気にもまれていた。最後の試合に向けて如何練習のスケジュールを組めばいいのか、受験合格の為に今なすべき事は何か、確かに彼らの胸の中にはそうした思いはある。だが、それだけではない。彼らの暗さは他のクラスと比較してもさらに暗い。さらに厳密に言えば、女子は他のクラス同様と云っていいが、男子の暗さが異常であった。

いつも陽気に、偶に呪詛を吐いてる後藤も例外ではなかった。

「じゃ、教室に戻るかあ、西原、東」

「そうだなあ。とっころでよ、お前ら志望大学もう提出したか？」

「ああ、そりや当然出しただろ、提出期限先週までじゃなかったか？俺は一応、第一志望はT大にしておいて、第二にW大とTR大にしておいたわ。まあ、千沙子と一緒に大学行けるなら何処でもいいかなとか思ったりもするけど」

「惚気んなよ、馬鹿東。まあ、俺も都子と一緒にならいいかなあとは思うが」

「この色ボケさん達があ。地獄に落ちろ、東西コンビめっ」

力無く叫び、首を掻く切るジェスチャーをする後藤。惚気ていた東、西原もその返しに力無く笑う。

「で、後藤ちゃんよ。お前さんはどうするべ？」

「俺も一応は下大第一志望。そつから先は……本来なら師匠と相談でもして色々と相談に乗ってもらうかって思ってたからな。そつから先は未定って事で一つ宜しく」

「あー……りゅうかー」

「りゅうなあ……」

「早く師匠には帰還してもらいたいけどなあ……」

そうして三人はちらと後ろを振り向く。そこにいるのは、何時も様に群れるハーレム員達と稲川。そして、彼らの周囲の人間はその甘ったるい雰囲気によられてバタバタと倒れていつている。

「ホント、早く戻ってきて欲しいよなあ」

りゅうの不在。それが一組男子達の暗さの原因であった。

りゅうが突然姿を消したのは終業式より数週間前。

下の学年よりも早めに始まった一学期期末考査を終了した直後の週。休日に猛烈な勢いで採点を済ました教師陣の頑張りにより、始業時間前には成績順位が貼り出され、生徒達が一喜一憂していた。

当然、稲川や後藤、朝霧もその中の一人であった。一通り、自分の順位を確認した後に、示し合わせなくとも自然と集まってしまうのは気心知れたメンバだからか。

「ういつす。今回はどーだったよ、二人とも」

「ボクは総合十七位だったよ」

「俺は九位だった。昭の方はどうだったんだよ？」

「ちつ。俺は二十八位だ！ くそつ、また負けた」

「昭君がボクに勝とうだなんて、十年早いよっ！」

「なら、俺には二十年だな」

「くそおおお！ どちくしょおおおお！」

二人の口撃に吼える後藤。だんだんと地面を片足で叩き、むきいと鼻を鳴らせる姿に、周りからも笑いが起きる。後藤がお笑い担当だという事は周知の事実である。

「おおおお……とまあそれは置いておいて。師匠は見かけなかったん？ まだ始業時間じゃねーから、別に居なくてもおかしくないんだけどよ？」

「や、まだ見てねーけど」

「でも、ちょっと遅いかなって思うかな。りゅう君、この時間ならいつもいるでしょ？ ボク、電話してみようか」

「そこまでのことはないだろ。師匠だって、偶には腹壊して下痢ピーだってするわ……ぐふっ」

「下品だよ、昭君」

にっこり笑って水月にエルボーを加える女、朝霧。周囲で後藤の愚行に笑っていた生徒達も一斉に顔を蒼くする。その思いは一つ。朝霧映子、なんて恐ろしい子！

朝霧の視覚的にも恐ろしい攻撃から立ち直った生徒達はそそくさと移動する。誰だってあのような目には会いたくは無い。距離を取る事が最善の対応策だった。

「んじゃ、まあ。教室に帰るとするか」

「そーだな。あ、そういや、お前の取り巻きは何処いったんよ？」

後藤は稲川を訝しげに見る。今の今まで気にしていなかったが、何時も何時でも稲川に纏わり付いているハーレム員達が今日に限っては誰一人として付いていない。

そこに違和感を感じ、後藤は問うてみるが。稲川はその間に曖昧な笑みを浮かべるのみ。

「先行くよー」

「ああ」

後藤が稲川の傍を通り過ぎるその刹那、

「お前には負けない」

という言葉が交わされる。果たして、どちらの言葉だったのか、どちらの言葉でもあったのか。真相は喧騒にまぎれてしまっていた。

何時もの様に始まるだろう朝のシヨートホームルーム。

担任のアイザワが何時もの様にやる気無く諸連絡を伝え、出欠を確認するだろう。それが済めば、皆が皆自分の勉強の準備を始め、ある者は図書館に、ある者は授業へと向かうのだろう。高校三年ともなれば、授業は選択制になり、生徒の好きな様に授業が選べるからだ。

その朝だつて、そうなる筈だつた。

りゆうの欠席と少し慌てた表情で駆けて来た担任の姿を見るまでは。

「席に着けー！ 全員居るなー！ 今日連絡は無い以上だ！」

早口に捲くし立てて、担任はすぐさま駆けて行くこととする。その姿に生徒達は啞然として動きが止まってしまった。そして、教室から出て行くときに爆弾を落としていくのだった。

「あ、言い忘れたが。今日から柳は公欠だからな」

「は？」

教室内の生徒全員、無意識でのユニゾンだった。

社会の窓からコンニチハ、瀬戸です。

予定よりも一日程遅れてしまいました。ネットワーク環境にトラブルがあった為です。期待されていた方には申し訳御座いませんでした。

えー、ここまで見ていただいた方はもうご承知でしょうが、今回より『りゆう』は不在となります。『りゆう』だけが楽しみだったのに、という方には申し訳ありませんが、今後をお楽しみいただければと思います。

以下蛇足

スピノフとして、校長その他の話を書きたくて仕方が無かったりします。

その名も『シームレスな変人』(しかも短編集予定で)

時間があつたら、掲載するかもしれませぬ。「その前に完結しろよ」という突っ込みは尤もです。精進します。

居場所が分からない、連絡が取れない、どういった状況に置かれているのかも分からない。普段、りゅうとどれだけ親しく接しているともこの「ないない」尽くしは変わらない。唯一教師陣はそれらの答を持っているのだが、りゅうの状況がかなり切迫している様で、こちらからせつつく様に連絡を取るのには頂けないとの事。その為、生徒側には先の解答を教えられないのだと言う。

そんな大人の事情は知った事ではないと朝霧、後藤を筆頭に職員室へと押しかけ、殴り込み、りゅうの状況説明を要求した。

だが、そこに立ち塞がるは彼らの担任。若く見える癖にご隠居の様にのほほんとした姿が標準の教師アイザワが、その時に限っては職員室の扉で鉄壁の防御ガードを披露。のりりくらりと政治家の答弁染みだ「口防」に加え、暴徒と化した生徒を合気道で地に伏せる所作に「防御に定評のある教師」という称号を得た程だ。

無論、一度や二度の失敗で挫けるクラスメート達ではないが、少人数で攻めようが大挙して攻めようがその度に彼らの担任が立ち塞がり、結局の所りゅうの状況を知る事は無かった。

それではと、公式な伝つてを使つての状況把握が出来ないのであれば、私的な伝を使えばいいじゃないかとりゅうの携帯電話に直接連絡を試みる。勿論、友人が一斉に連絡しては迷惑であろうと、後藤が代表として連絡を行った。だが、それも機械的な女性の声で連絡不能である事を教えられるのみ。連絡したその場に居合わせた者の中には、連絡したのが後藤だから出なかったのではと疑問を持つ者が居たが、朝霧が再度掛けてみても同様の結果であった。公的にも私的にもりゅうの安否を確認する術を失った彼らには、この事実を只認めることしか出来なかった。

そんなこんなで日々は過ぎ去る。光陰矢の如し。

期末試験の結果発表後のどたばたから、進路指導や部活最終スパ

ートと後ろを振り返りつつも前進しか許されない高校三年生の彼らは何時の間にやら終業式を迎えてしまう。

そんな忙しい毎日と校長の長口舌にクラスの大半はダウン。終業式直後の教室には机にだれる生徒達が殆どだった。例外は何時もの様に集っているハーレム集団くらいなものだ。

「あっちー。だりい。そして、ハーレムうぜえ」

「随分とだらけてるんだね、昭君。りゅう君が居ないからって、そんなに生活態度が変わっちゃ駄目だと思っただけど？」

上半身を机の上にべたりと預け、身体の冷却を行う後藤。そしてその物体を呆れた目で見据え、後藤の横に仁王立ちしている朝霧はあと溜息を吐き、頭を左右に振って、私は呆れていますと全身で表現しているが、後藤はそんな朝霧に目を向けようとせず。

「いやいや。こんな状況だったら師匠だっただらけるべ？」

「うーん。りゅう君だったら……」

そう言っつて朝霧は眉をきりりと上げ、眉間に皺しわを寄せ腕を組む。ついでとばかりに、ふんと鼻息一つ。

「……安禅必ずしも山水を須もちいず、心頭滅却すれば火も自ずから涼しと言っただろう。暑さ涼しさ等気の持ち様で如何とでもなる……とか言いそうじゃない？」

「微妙に上手いな」

「び、微妙ってあんまり嬉しくないかな。結構ボクとしては上手く

決まったと思っただけだなあ」

「まあ言いそうだけどな。そんなに眉間に皺寄せ無いしよ、鼻で笑うってのは無いだろうよ。もっと無表情によ、こつやって」

後藤は上半身を起こし、朝霧に向き直る。軽く顰め面を作り、声を低くし語る。

「……耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ。そうした忍耐が後藤の為になるのだと思うが……という感じじゃないか」

「うーん、そうだなあ。そうかもしれないけど。あ、そうそう。話それちゃうけど、その耐え難きを耐えーってフレーズ、何処から来たんだっけ？」

「玉音放送だろ？ あー、ついでにさっきの心頭滅却だけど、あれって心頭滅却すれば火もまた涼し、じゃなかったか？」

「えーとね。ちょっと待って」

後藤に手の平をびしっと向け、朝霧は自分の机へと跳ねて行く。その姿をぼーっと彼が眺めている間に、鞆からファイルを取り出し駆け戻って来る。彼女の機敏な動作に、内心ときめいてしまったのは彼だけの秘密である。

「これこれ。天目山の戦いで敗北した六角家当主らを匿^{かくま}った恵林寺^{えりんじ}の僧が居てね。そんな敗残の将を匿^{かくま}うなーって乗り込んできた織田軍が居ただけど、それを拒否しちゃってさ。結局焼き討ちにあつて、最期詠んだ辞世の偈^げ。それが昭君の言つた火もまた涼しの方なんだよね。で、その元ねたになっているのが……唐の詩人である

杜荀鶴としゆんかくの詩で、こつちだと火も自ずから涼しなんだよ」

「へー……なあ、げってなんだ？」

「うーんと、僧の悟りの境地を韻文スタイルで詠んでみたって所かな」

「なるほどなあ。映子も勉強してんのな」

「失敬な！ ボクだって受験生だし、それに日本史は必須なんだよ！ 昭君も理系だからって、社会を疎おろそかにしているとセンターで痛い目に遭うよ？」

「うへ。了解っす」

何処と無く受験生らしい会話をする二人。それ自体は特に珍しくも無く、クラスメート達の会話でもその傾向は見られるのだ。しかし、そんな至って普通な二人を凝視していた目があったのを、誰も気づく事は無かった。

相も変わらずやる気の無さそうにSHRを進める教師アイザワが、やはり何時も通りにやる気なく成績表と先日の模試の結果を配る。受け取った生徒達は各々、その成績に見合った声音で周囲と話を咲かせていた。

雑談のカクテルパーティ状態な生徒達をやる気無き声で静まらせ、アイザワは早々にSHRの終わりを告げる。手を振り逃げる様に去っていくアイザワを尻目に、三年一組の生徒達も各々の活動を再開。

或る者は部活へ、或る者は予備校へ、或る者は図書館へ、そして或る者は 今日一日だけは遊びに使おうと価値の薄い誓約を己にしつつ 遊戯場へと出掛けて行く。

ハーレムの主と他称されている稲川はその他称に相応しく、ハーレム員から同級生から下級生からと『お誘い』を受けていたが、それらを丁重に断り一人教室の外へと出て行った。断られた彼女達の視線を背に受けている事を自覚はしていた。

廊下へと出た稲川は足早に購買部へ歩を向ける。

彼女達の『お誘い』の中には食事を共にどうかといったものもあり、それを断っておいて食事に行くのも誠意に欠ける行いではある。だが、午後から行われる部活練習に不備があつてはいけない。人で溢れかえる購買部を器用に掻き分け無事物資を購入。物資を持ったまま、誰にも見つからぬ様にそそくさと屋上に逃げ込んだ。

「太陽が眩しいなあ、おい」

空から隙間無く降り注ぐ熱光線。稲川はその発生源を苦々しく睨み、ばたりと屋上に寝転んだ。

風が生温い。

生温い風に導かれて、稲川の溜息もどろりと這い出てくる。

これでは部活に行けないと、購入したメロンパンで溜息に蓋をし、無理矢理栄養補給を行う。パサパサした食感が自身の胸の内を表している様で、慌てて牛乳で流し込み不快な食感を消し去る。

稲川悟史は絶賛不機嫌中であつた。

「あれあれ。どうしたんすか、稲川君。こんな所に一人でなんて」

そんな彼に不意に掛けられた声。驚愕に心臓の拍動が急激に上がる。同時に誰も居ないと寝転び独り言を呟いていたのが今更に恥ずかしく、声の主を探して視線を左右に送った。

「上つすよ、上」

声に導かれて上を見上げれば、そこに天使や天狗はいなかった。変わりによく見知ったクラスメートが稲川を見ていた。貯水槽の上から。

「よう、風神少女」

「どうもっす。稲川君。……ふうじんしょうじょって何すか？」

「鵜飼とかがこの間言ってたんだ。玉城に似たキャラがゲームに出てるっすよ」

「それがふうじんしょうじょっすか？」

「天狗らしい」

「天狗っすか。私、そんなに鼻高くないっすけど……うーん。何だか私のアイデンティティが汚されている気がするっす」

それにしても暑いつすね、と手で扇を作ってパタパタと扇あおぎ、片手で御菓子ごかしを 恐らく傍らに置いていたのだろう 摘あんで口に入れる。風紀少女ふうきいせい、玉城である。

「で、どうしてこんな寂れた屋上にいらっしやっただんです？ 北条寺さん以下略な子達が稲川君を放っておいたりはしないでしょうに」

「うるせー」

「あ、あれっすか。ハードボイルドな固ゆで卵気分を味わおうとか」

「それ、同じ意味だからな。別にそんな気取って来た訳じゃねーよ」

「うーんと、じゃあお金が無いから日焼けサロン代わりに？」

「もう、十分日焼けしてるだろ！ 部活やってたら否でも応でも日焼けするわ！ 第一、日焼けしていいことってあるか？」

「うーん、ないっすね。じゃあ」

少女はにっこり笑って毒を吐く。

「誰かに嫉妬でもしましたか？ 教室に居られなくなるぐらいに」

「なっ……」

「私、稲川君のクラスメイトで、風紀委員なんです。風紀の乱れを察知して動くのが私達の役目っす。そういう監視ってコツがありまして。主要ポイントを抑えておくんすよ。うちのクラスの場合は稲川君ハーレムと後藤君の被害者の会っすね」

そう言っつて、玉城は傍らの紙パックを手に取り喉を潤す。自重しない太陽の御蔭でジュースの水温が上がっていたのだろう、僅かに眉を顰めパックを置いた。

「で、まあ毎日毎日見させて頂くとっすね、それなりに目も肥えて分かる様になるんですよね。人がどう話して、どのタイミングで視線を向けて、その視線にどういった感情が乗せられてるのがかって、そもそも風紀って風俗を律する事っすけど、男女の交際でのきまり

って意味もあるっすから。男女の機微には相当敏感っすよ、私」

そこで言葉を区切って、くりくりの目をくるりと回す。何のジエスチャか稲川には理解出来ない上に、それに思考を割く余裕も無かった。

「最近はりゅう君が居ない所為か、後藤君も結構積極的っすよね。大体あの二人で会話している事も多いですし。ま、そういう事で稲川君が焦るのもしようがないとは思っすが」

「何言っつてやがる！」

「もう一度言いましょうか？ 私、稲川君のクラスメートで」

御菓子を口に放り込んで、指についたかすを嘗めながらにっこりと

「風紀委員なんですよ」

Phase 40 : 災厄の夏 - 冷然な炎 - (後書き)

お久しぶりです、瀬戸です。

すっかり月間or隔月が標準になってしまった本作ですが……次回からはまた隔週に戻りたいなあとか思っております。気合で。

さて内容ですが、漸く稲川周辺の話になりました。

話の展開がここから異常に早くなるかもしれません。なるべく読者様に理解してもらええるスピードで話が転がると思います。ご注意を。

何時の間にかPV110万を突破していたようです。

毎度毎度話を読みに来て下さる皆様には感謝感謝で御座います。今後とも宜しくお願い致します。

「ファー！」

「オツケー！ ドンピシャ！」

右サイド、左サイドから中央へと次から次へとボールが飛来する。ゴール周辺に陣取ったフォワード役がそのボールに合わせてゴールへと頭でねじ込む。または、トラップでディフェンダの密着をずらし、守備の間を縫う様に蹴り込む。或いは、自身は囷に楔になり、後方より上がってきた第二線の選手へと球を預ける。

言うまでも無く、サッカーの練習だ。

サッカーの部長たる稲川は、声を張り上げるなり身振り手振りで指示するなりと忙しい。自身がプレイしていない時の方がエネルギーを消費しているのではないかと思う程、周囲に対するフォロウを徹底している。

「坂井っ！そこはダイレクトで押し込めっ！」

「りょーかいだ！」

「三井の方は大方それで良いが、今のスピードで上げると前線の奴が外に流れちまうっ！ファーに上げるならもうちつと低めに上げるか、スピード抑えて上げた方が前は押し込み易いっ！出来るかっ？」

「あー、いけると思っす！いけるっすが、それならグラウンダで上げた方がいいすかねっ？」

「相手ディフェンス陣の間を抜けるならやれっ！」

「無理っす！」生”言つてすみませんっしたっ！”

そうしてメンバに指摘し、キビキビと行動する姿は彼の類稀なる

所謂『イケメン』と名高い 容姿と相俟つて非常に凛々しい。

常日頃からハーレム員達に対して優柔不断な態度を見せ付けられているクラスメートが見れば、もれなく別人のようだという評価を貰えるだろう。現に彼の振舞を見て悶^{もた}えている女生徒がグラウンド周りの其処彼処に見受けられる。稲川が汗を拭うなり、髪をかき上げるなり、はたまたシユートを華麗に決めるなりする度に、鼻息を荒くし恍惚とした表情を見せる彼女達は一種の病人と言える。

重度の病人な観衆に凝視される一方で、稲川はその練習熱心な姿とは裏腹に、サッカーとは別の事に思考を割いていた。無論、彼の胸中にあるのは屋上であっけらかんと告げられた自身の秘事。

稲川は朝霧が好きだった。

りゅうと中学で初めて出逢うよりももっと以前から、稲川と朝霧は出逢い関係を築いてきた。世間一般でいう幼馴染の関係だ。一緒に広場を駆け抜け、共におはじきで遊び、時折いじめ泣かしてしまふ。二人の共通する思い出は数え切れないだろう。

そうして、幼稚園を過ぎ、小学校も低学年から高学年になるにつれ、自身と彼女が違うという事に気付かされる。男と女。思春期の階段を一步上り始めれば、彼女の中の『女の子』を意識し始める。活発に動く肢体。

彼女が跳ねる度にふわりと舞う黒髪。

何より、彼女の眩しい程に輝く笑顔。

彼女の何処も彼処もが自分の好きな場所だった。彼女を見ているだけで元気が出て、幸せな気分にもなれた。彼女ともしっかりと話したく

て、彼女にもつと自分を見てもらいたくて、サッカーと友人の誘い以外の時間はなるべく彼女と過ごす様になった。勿論、そんな彼を見て友人達は彼をからかったが、「そんなの俺の勝手だろ！」と一蹴。その頃には既に女子生徒から絶大な人気を誇っていた稲川を、男子連中がからかう以上の追求を許されなかつたのもあつただろう。二人だけという事は少なくなつたが、稲川と朝霧は多くの時間を共有していた。

そして、本格的に思春期に突入した中学時代。

それまでの時間と同じ様にとはいかないが、それでも朝霧と共に過ごす事は多いだろうと稲川は予想していた。結果的に見れば、それは大凡正^{おおよそ}しい予測ではあつた。持ち前の明るさを發揮した朝霧は現在の高校での立場と変わらず、男女共にそれなりの人気のある生徒だつた。とは言え、共に時間を多く過ごした人との付き合いの方^{かた}が矢張り心地の良いものなの^{もの}は言うまでも無い。朝霧もそれは例外ではない。稲川を筆頭とした旧友との交流が最も多かつたのは間違いない。

しかし、稲川の予想を覆した事が起きる。

それがりゅうの存在だ。

入学当初より、周囲とは大きく異なる雰囲気^{おんき}を醸し出す男子生徒。筋骨隆々としていたり、目付きが鋭い三白眼だつたり、女性と見間違^{まちが}うほどの美貌の持ち主だつたり、はたまた雲を突くような大男だつたりした訳ではない。確かに体格は良いのだけれども、寧ろ小柄な部類に入る男子。ただ、彼の持つ独特の雰囲気^{おんき}は周囲の男子生徒が持つ。その年頃の男子が必然的に持つ様な。浮ついた活発なモノではなく、人生の成熟が完了した大人の漢^{おとこ}が魅せる深いモノに近かつた。無論、彼ら彼女らが彼の雰囲気^{おんき}を『そうだ』と気付いた訳ではない。単純に自分達とは違つ、隔絶した差異を否応にも感じさせられたと言うのが正しい。

『自分達とは違つ』生徒が居る。こうした事態自体はそれ程珍しくも無く、大抵はその生徒が疎外されるという事に収束されるだろ

う。そして、稲川や朝霧の周辺は特に変化無く、彼らの日常は続いて行く筈だった。

だがしかし、略全ての生徒が『大抵』の対処方法を取る中で、朝霧だけは何故かりゆうに積極的に構う姿勢を見せた。何故彼女がそうしたのか、それは稲川には今以て分らない。だが、彼女がそういう行動を選択した事によつて、彼女と彼の関係は大きく軌道修正された。

そう、このままと時が過ぎれば『彼氏彼女の関係』となる。稲川は淡く期待していた。立場から、単なる『幼馴染』の立場へと。稲川自身、そういう事態の変化を指を啜えて見ていた訳ではない。流石に良く知らなかったりゆうの事を悪し様に言う様な真似はしないが、りゆうとの付き合いをそれとなく逡巡させる様に話を持っていく等対応はした。しかし、彼自身もサッカー部という本格的な体育会系の部活に身も時間も取られていた為、その対応も満足にはいかなかった。

そして、そういうしている内に起きたあの事件。

原因がりゆうにあり、結果として全てをりゆう自身で片付けてしまった事件。そして、その巻き添えを食らった朝霧。客観的に見れば、りゆうには朝霧と縁を切られても仕方の無い一件。だが、朝霧は彼から離れる事無く、寧ろより一層りゆうと親しく接する始末。稲川は何もりゆうが他人と仲良くなる事に批判的だった訳ではなく、クラスメートとは親密であるべきだとは思っていた。矛盾している様だがそれは真実で、ただ朝霧には彼女が危険に遭わされた事もあつて幾分慎重に接して欲しかった。

事実、そういうった思いをりゆうに伝えた事もある。「映子に普通に接していて、罪悪感は無いのか」と。真剣に問う稲川にりゆうは若干眉を八の字に傾ける。

「……私もそう思ってな。周囲の空気を読んで欲しいと指摘したんだが……一向に改善してくれない」

「もつと直接的に言わねーのかよ？ 柳の話し方がまどろこしいから、伝わらなかつたんじゃねーの？」

「幾度かは離れるとも言つたんだ。そしたら、な……彼女と親しい君なら分るだろう？」

りゅうは肩を竦めて自分の言葉に効果が無かつた事を伝える。

「……まあ。何かあれば、君らが割つて入るだろう？ それだけ彼女の事を見てるんだ。朝霧は幸せ者だな」

「み、見てねーよっ」

「別に照れなくとも……まあ良い。君の忠告は分つた。私ももう少し何とかしてみようと思うが。何とかならなくても、恨んでくれるなよ？ 私としては精一杯対応する事には変わらないのだからな」

「お。おう」

「……そう、だな。稲川。それだけ朝霧を見てる君に朗報だ。一つ、男の約束とやらを」

そういつた遣り取りがあつた事を稲川は憶えている。

りゅうは確かに稲川の要望通り、朝霧と距離を置こうとしたらしい。休み時間の際には、近くに寄つてこよつとする朝霧を撒く様に何時の間にかりゅうが消えていた事があつた。或いは、自分からクラスメートの輪に入り込んで、他の生徒と会話する事で近寄る朝霧を牽制する事もあつた。

しかし、結局の所、そうしたりゅうの努力は朝霧の攻勢の前に泡

と消え、朝霧はりゆうに構い続け、稲川は彼女の態度にヤキモキし、その感情に比例する様にサッカーへと傾倒していく。まるで複雑な胸中を吐き出すかの様に。

そして、そのヤキモキ感が堰を切った結果が、今でも夢に出るあの放課後の一幕だった。

「……まだ、俺の中じゃ終わってねーんだよなあ」

「え？ 悟史先輩？ 今さっき、練習終わりって言ったじゃないですかあ」

「んなっ！ あー、うん。終わりだ終わり」

「ははっ、変な先輩っ」

何時の間にやら、練習は終わっていたらしい事に気付く。タオルとドリンクボトルを配りに来た女子マネージャが稲川の独り言に怪訝な表情をしていた。

とりあえず誤魔化す意味も含めて、そそくさとタオルとボトルを受け取り礼を言う。聞かなかった事にしますねえと笑いながら去っていくマネージャを手で追い払い、練習後の整備と体調管理に関して指示を飛ばす。その折も朝霧の事を考えていた辺り、稲川の頭も重症になってきているのかもしれない。

既に陽は落ち、街道を街灯が照らしている。

該当が多く設置されている住宅街の道を稲川はずりずりと突き進んでいた。確かに体力的な疲労はあるのだが、それよりも精神的な

疲労の方が今の彼を襲っていた。

どうしたら、朝霧と付き合えるのか。

どうしたら、彼女の言った『優しさ』を持っていると思われるのか。

りゆうが居ない間に確かに積極的になっている後藤を如何すればいいのか。

「駄目だよなあ、こんなんじゃ」

知らず知らずに愚痴が口から転がり出てくる。愚痴が出て来れば出て来るほど、彼の胸の内が軽くなるなり疲労が抜ければいいのだが生憎とそんな事も無く、逆に良く分からないものが胸に堆積していき足取りは重くなる一方である。

重くなる足をずりずりと引き摺り、一步一步と自宅へと歩を進める。そう言えば飯も作らなくてはならないと今更ながらに思い出し、思わず道路へと五体倒地しかける。ああ、こんな時に飯を作ってくれる彼女か幼馴染が、と考えた所で朝霧の顔が浮かび、再度気分が落ち込むという負のスパイラル。

「もう、どうにでもなれってんだよ」

ふらりふらりと足を進めてようやく辿り着く我が家。さて、それでは入りますかとポケットの中から鍵を出し、ドアに近付こうとして漸く気付く。

「悟史先輩」

「えっ？」

自宅のドアの前に体育座りをする少女。小柄で活発そうな姿が印

象的な彼女は

「先輩。今日泊めてくれませんか？」

「え、あれ。智恵ちゃん？ マジ？」

あのりゆうが率いる『人材派遣委員会』の委員である赤坂智恵、
その人であった。

「はい、珈琲入ったよ、智恵ちゃん」

「あ、どうもです。悟史先輩」

稲川はソファに座った赤坂と自身の前にカップを置き、彼女と向かい合う様に腰掛ける。赤坂は稲川に礼を言い、差し出されたカップに砂糖とミルクをドパドパと注入する。稲川は彼女の行動に対して、何も言わない。彼もまた珈琲をブラックで飲む習慣が無い為だ。りゅうが居たのならば、顔を思いつきりしか輦めただろう。そして、こう叫ぶに違いない。その物体は最早珈琲ではなく、珈琲風味のホットミルクだと。

何はともあれ、二人は話し合う体勢を整える。奇しくも、二人の位置関係はりゅうが榊の相談に乗っていたのとほぼ同位置であった。

「すみません。こんな時間に、練習で疲れてるでしょうに、押しかけてしまって」

「いやまあ。別に良いって」

「すみません。……やっぱり悟史先輩って優しいですよね」

「いや、そんなことねーよ」

「ありますよー！」

「……そうかねー」

「ええ、あります」

「……」

「……」

黙りこくる二人。妙に緊迫している空気やら重苦しい雰囲気という訳ではない。青春の香り漂う、そこはかたなく甘酸っぱい雰囲気といった体だ。もし二人が恋人関係であるのならば、このまま密着体勢へと移行し、戦闘の場も寝室へと移り変わるであろうが、生憎とそうではない。

昨今稀に見る初々しさで場は停滞する。

かちこちと近くで時を刻む時計が自己主張し、珈琲から漂う湯気が存在感を放つ。辺りに広がる珈琲の香りに誘われるように、空いた沈黙を埋めるように、二人はカップを傾けた。

幾度目かのカップの上げ下げの後、流石にこれ以上の沈黙は心臓に悪かろうと、稲川は口を開く。赤坂もそれを期待していたのだろう、稲川が行動を起こしたときに合わせて、上目遣いに彼を見遣った。

「で、さ。えーと、智恵ちゃんはどうして家に？」

赤坂の眼球がぴたと硬直する。彼女が期待していた言葉とは異なり、稲川はストレートに彼女の訪問の理由を尋ねてくる。その真っ直ぐさが今の赤坂には少々鋭すぎた。稲川に本来の精神的な余裕があれば、或いは肉体的な余裕があれば、また違った話の展開だったであろう。ただ、今日、そして今にあっては、稲川にそこまでの余裕を求めるのは酷である。

果たして、彼女は

「その……あ、先輩、お腹が空いてるんですけどよな？ 私何か作れますよ。台所お借りしますね！」

台所へと転がるように走っていくのである。稲川はそれを眺めることしか出来ず、空きっ腹に珈琲を埋める作業を続けるのであった。

稲川の腹の虫が叫び声を挙げ、腹を食い破ろうとする前に、無事赤坂は夕飯を運んでくる。意外な程早く赤坂が夕飯を作り終えたことに稲川は賞賛すれば、赤坂はさも当たり前のような顔をして「簡単なものですから」と謙遜して答える。運ばれてきた料理は炒飯。量は増々、『オトコノコ』で存在感があるが、比較的簡単な料理だろう。

だが炒飯、されど炒飯。

数多に作り方はあれど、抑えておかねばならない点は無論存在する。早く、多くを求められようと、そうした要点を抑えねば満足してはもらえない。ましてや、ハーレム員と称される赤坂にとつては、『彼の心を掴むにはまず胃を抑える』という金言にもある通り、獲物が目の前にぶら下がっている大チャンスと言えた。下手な炒飯は出せやしない。

ふんわりこもり盛られた炒飯に、スプーンがざくりと突き立てられ、稲川の口へと運ばれていく。彼の口腔へ炒飯が入り、咀嚼され、飲み込まれる。その様をじっと固唾を飲んで見守る赤坂。そうして、下される審判。

「うーん……ウマイじゃないか。これだけ量多くて早く作れるなんてすげえよなあ。体育祭の時に弁当作ってもらってさ、まあ料理が得意なこと分かってたけど。いや、ホントすごいわ」

「そう言ってもらえて嬉しいですよ！ 毎日作ってるから慣れてるだけなんですけどね」

結果は合格。

食べ初めの評価以後、稲川は炒飯を消化することに専念し、会話は中断する。集中して自分の料理を食ってもらうのは嬉しいが、手持ち無沙汰になった赤坂は適当にTVのチャネルを回していた。

「痴漢の冤罪に失業率の悪化。何だか暗いニュースばかりですね。いやいやでも、有名旅館の女将が倒れたとか誰得ですか。他に流す大切なニュースあるでしょうに。えっと、こっこの番組は……あ、駄目首相の海外遊説ですかって、おお？」

「ん？ どおしばんば？」

「先輩、口の中キレイにしてから喋ってくださいよ。あのですね、あの首相の横に映ってる人見てください。あの車の後ろに立ってる人です、強面の」

「SPか？ 黒服のおっさんか……あれ？ 誰かに似ているような」

TV画面に映っていたのは国の首長たる 筈の 内閣総理大臣が国際会議会場に到着した中継映像である。中身はさておき、一国の首相という立場の人間は非常に大事な人物である為、厳重な警備が敷かれている。当然のように大量の警備員が表に裏に配置されていて、死角からの襲撃に備えて目を光らせていた。

その警備網の一人であるだろう黒服の人物。平和そうに周囲に手を振る首相の横で、緊張感を持ち周囲を警戒している人物が赤坂の指し示した人である。その人物は稲川の知る誰かに似ていて、彼の記憶に訴えかけているのだが。

「先輩、分かりませんか？」

「うん、喉あたりまで出かかっているんだけど」

「駄目じゃないですか、親友の顔を忘れちゃったら！ あの人の顔、りゆう先輩にそっくりなんですよ。体型とか髪型とか違いますけど、あの武士道か修羅道に片足ずぶずぶ入れてしまってるような、斬り捨て御免で人斬ってしまったってそんな顔や雰囲気はそっくりなんです！」

「……それ本人に言ったら、殴られるから言わないようにね」

後輩の遠慮のない発言に稲川の顔は引きつる。言われてみれば確かに、映像にあるSPの顔は彼の親友に似ていた。酷似とまではいかない。ただ、顔の各パーツに類似点が多く見られ、オーラが可視化出来るのであれば、纏っているオーラも似ているだろうと想像出来る程雰囲気に近いと感じられた。

「しかしね、智恵ちゃん？」

「なんです？」

「あのSPが実はりゆうが変装した姿で、この間からずっと行方をくらませてるのが首相の警備の為だったなんて、非現実的にも程がある話は無いですよね？ 無いよな、無いと言ってくれよ……」

「あの……その……私達人材派遣委員なので」

TVに映るSPが彼らの友の姿であるのか否か。それは単なる学

生にしか過ぎない彼らには知る術がないことだった。

赤坂の炒飯が稲川の飢えを癒し、信じられないハプニングが彼らを襲い、ようやくひと心地着いたところで、時計の針は既に深夜の域に入っていることを告げていた。

稲川にしてみれば、まだ赤坂が家に押し付けてきた理由を聞いてもないのだが、このような時間　　気を抜いてしまつと日付が変わりそうな時間帯　　に女の子、それも小さめで可愛い部類の女の子を外に放り出すのも気が引けた。なし崩しとは言え、彼女の目的は彼女の知らぬうちに達成されていたのである。

そんな事は露知らず、赤坂は気持ち緊張した面持ちで稲川に相對していた。心の中では稲川の優しさから、無碍にあしらわれることもないだろうと思いつつも、その思考の厚かましさに恥じている彼女である。既に食器は洗われ、相談する体勢は整われていた。

「随分と話を長引かせてしまつてすみません。本当ならすぐにでも先輩を頼つた訳を話さなくちゃいけなかつたんですけど……その、いざ話すとなると心の準備が必要で。ホントにごめんなさい」

「いいよ、智恵ちゃん。そりゃ俺だつて玄関先に智恵ちゃんが蹲つてた時はなんで？ とかどうしよう？ と悩んじまつたけどさ、考えりゃ誰だつて言いたくないことあるよな。俺だつて勿論あるから、もし智恵ちゃんが言いたくないんだつたら聞かないよ。あ、勿論追いつかないから安心してくれていい」

「先輩……有難うございます」

稲川の言葉に目を細め、頬を染める。

そうして彼女は一つ息を吐いて上気していた顔を改め、真剣な眼差しを送る。誰が見ても何かを覚悟した表情であり、稲川も彼女の決意の表れを汲んで、真面目な顔で応えた。

「でも、先輩の優しさに甘えて礼儀を忘れちゃ駄目ですよ。その、つまらない話ですし、短くてちっちゃい悩みですが聞いてくれますか？」

「ああ、勿論」

笑顔で応える稲川。この場に学校での彼の信者達がいれば、真つ先に腐った妄想に塗れるだろう微笑み。猛る男を自らの肉体で鎮めようとし、菩薩の笑みを浮かべる、そんなシチュエーションで使われそうな包容力溢れる笑みである。

彼の笑みに導かれて、赤坂は己の家庭状況を語り始めた。彼女は元々父親一人、娘一人の父子家庭であること。長年家事は彼女が担っていたこと。駄目な親父だけでも、加齢臭がちょっと気になり始めたけれど、自分には良い父親であること。へそくりや艶本の隠し場所がバレバレなこと。そんな巫山戯てて、でも良い所もある父親との二人暮らしには満足していたこと。そして……近々『新しい奥さん』が出来そうということ。

「私だつてそんな馬鹿じゃないですから、男の人がやもめで、その欲求不満とか、まあ色々苦労していることは分かります。何もソレが嫌で、潔癖に、奥さん作るとは何事だ、私のお母さんは一人で十分だつて訳ではないんです。理解していて、でもやっぱり今まで二人で頑張ってきて、そうやって築いてきた生活をいきなり壊せつてのは」

「そつだよな。今まで二人だったもんな」

「分かつてはいるんです、分かつてはいるんですよ。でも、やっぱり駄目なんです。こうやって、先輩に迷惑かけてるってイケナイのに、でもそれ以上に嫌なんです。駄目なんです。生理的拒否感って感じで……唯一一緒に暮らしてる父親の幸せも願えないなんて、親不孝な娘ですよね」

「そっか」

稲川にはこれ以上の語彙が浮かんでこなかった。

自分がそういう立場になったら、どのような気持ちになるだろう。そうして、その心情に対して、どのような言葉をかけるのが適切だろう。問題は浮かべど、答えは閃かず。経験が足りないのか、応える能力が足りないのか。

頭に親友の姿が霞む。

同時に浮かぶ夕暮れの

「いいよ。智恵ちゃんが收拾着くまで家にいていいから。まあ、夏休み中は部活や受験対策であんまり居ないけど、さ」

「先輩……本当に有難うございます」

そう言って深々と頭を下げる赤坂。彼女の姿を見て、稲川は安堵する。頭を下げる彼女に顔を起こすよう言って、そうして口早に自分が先に汗を流すことを了承させる。時間も遅くなり、明日の部活にも影響すると、足早に風呂場へと去っていき、赤坂はそれを潤んだ目で見送った。

手早く服を脱ぎ、シャワーを浴びる時に、ふと彼は考える。赤坂と初めて会った時はどうだったかと。

そうして、彼の記憶からは何の返答も無かった。

登場人物一覧

／／Phase 42時点での登場人物一覧です。
／／ネタバレも詳細な説明ありませんが
／／海外翻訳小説の登場人物表を見る気持ちで
／／ご覧頂ければ幸いです。
／／また、よく分からない分類がされていますが
／／透かしてみる程度の軽い気持ちで御覧下さいませ。

【中核】

りゅう：

柳竜次。一人称小説部分担当。主人公。聖上学園三年、人材派遣委員会委員長。

稲川：

稲川悟史。りゅうの友人であり、『稲川ハーレム』の主。学園三年、サッカー部部长。

後藤：

後藤昭一郎。りゅうの友人。学園三年、剣道部部长&『ハーレム被害者の会』会長。

鵜飼：

鵜飼翼。りゅうの友人。学園三年、ラグビー部部长。

朝霧：

朝霧映子。りゅうの友人。学園三年。スレンダーで元気少女。

アイザワ：

アイザワユウイチ。りゅう達の担任教師。教科担当は物理。

【外核】

四条：

四条美代。学園三年。聖上学園生徒会長。四条家三連続の生徒会長職。

玉城：

玉城千里。学園三年。聖上学園風紀実行委員会所属。お菓子好き知的少女

北条寺：

北条寺麗華。学園三年。稲川ハーレム所属。米人とのハーフで悩ましボデイ。

神：

神由紀。学園三年。女子剣道部部长&稲川ハーレム所属。すらつとボデイの無口剣豪少女。

多村：

多村由宇。学園三年。稲川ハーレム所属。ハーレム屈指の強か少女。

赤坂：

赤坂智恵。学園二年。人材派遣委員&稲川ハーレム所属。ちっこい元気澁刺少女。

千川：

千川牡丹。学園二年。稲川ハーレム所属。ちっこい腹黒参謀。

原：

原杏子。学園一年。稲川ハーレム所属。普通の美少女。

聖：

聖。学園保険医。稲川ハーレム所属と誤解されている。

夏木：

夏木睦美。りゅうの幼馴染み。他校女子剣道部部长・高校チャンピオン。

源：

源。学園二年。風紀実行委員会委員長。四条美代応援协会会长。

平：

平。学園二年。防衛委員会委員長。

西原：

西原。りゅうのクラスメイト。学園三年。バスケットボール部所属。彼女の名は都子。

東：

東。りゅうのクラスメイト。学園三年。バスケットボール部所属。彼女の名は千沙子。

校長：

マツダ。一応、聖上学園学園長／校長。アフロ。拙作『シームレスな変人』（未投稿）主人公。

沢田組：

沢田組。とある大企業により、大規模な損害を被った組織。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5658b/>

ハーレムな隣人

2011年6月3日03時33分発行